
蒼き神々の行方

指月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼き神々の行方

【Nコード】

N3641D

【作者名】

指月

【あらすじ】

観測史上最大の台風襲来之夜、神田龍一^{かみたりゆういち}が、神の島、宮島で出会った男は、日本の歴史を変えようとしていた。その謎の男に導かれるように、70年代に広島で青春を送った若者達は、時空を超えた運命を共にする。舞台は、宮島、富士山、バンコク、チェンマイ、ビルマ、台湾、中国、ネパールへと移り、ついに閉ざされた歴史の闇を掴みだす。日本歴史と現代アジア史を背景にした驚愕のピカレスクロマンミステリー。

序章（前書き）

ここに語られるのは、1970年代に青春を送った青年たちが遭遇した、時代と運命、そして、時空を越えた現実には題材をとった物語です。しかし、登場する人物、組織はすべて架空のものであり、近似する人物、組織が存在しても、それらは偶然であり、この物語とは何の関係もありません。

序章

瀬戸内海に浮かぶ周囲約30kmの小島は、歴史に登場する以前から、神の島として人々の信仰の対象であった。太古より深い森に覆われ、その頂は須弥山いただしゅみせんに喩えられ、弥山みせんと呼ばれ、静かな内海に浮かぶその小島は、女神の寝姿として、今もなお、島全体が神として崇めらあがれている。その、女神の横たわる裾すその尾根は博打尾ばくちおと呼ばれている。

2005年（平成17年）9月 広島県 宮島

その尾根を、霧雨の中、登っている男がいた。神田龍一かみたりゅういちがこの尾根を登るのは30年ぶりだ。こんな気持ちになったのは、学生時代の暴力団襲撃事件以来だ。それにしても、あの男の狙いはなんだったのか。

あれは、観測史上最大の大型台風の襲来に備えて、神社と回廊の見回りをしていた時だった。すでに、台風は九州に上陸し、九州各地に甚大な被害じんたいを与えながら山口県地方に向かっていることが報道されていた。

「タイミングが悪いな」と、神田かみたは思った。このままだと、台風上陸と大潮の満潮時間が重なってしまう。山口県に上陸したら、風向きは宮島にとって最悪となる。さらに、気圧が下がって、潮位も上がり、過去的大型台風被害どころの騒ぎではなくなる。

神社、市役所、観光推進協会、消防団、島民ら合わせて300人以上が台風襲来に備えていた。すでに、やるべきことはやった。回廊の床板ははずし、神社の屋根はロープで補強した。要所、要所は

板で補強をした。もう、神に祈りつつ、台風が過ぎ去ってくれるのを待つしかなかった。

風も強くなり始めた午後9時過ぎ、神田は合羽を着て回廊に向かった。これ以上風が強くなったら、外に出ることは出来ない。最後の見回りにするつもりであった。もう、外には誰もいないはずであった。先ほどまで、テレビの実況をしていた放送局のスタッフたちも、引き上げて、旅館、ホテルに待機している。

合羽のフードをつかみ、顔を伏せて進んでいる時、一緒に見回りに出た渡辺が叫んだ。

「神田さん、アレ」渡辺が、顎で指した先を大柄の男が足早に進んでいた。よこなぐりの雨と、波しぶきで、すぐに見えなくなった。

「島の人間ではない」と直感した。こんな状態の中を出歩くものなどいるはずがない。それに、「あの格好はなんだ」と、神田は思った。男は素っ裸であった。

「おーい！！」

神田は男の姿が消えたほうに向かって叫んだ。そして、顔を左下に向け、塩気を含んだ雨水を「ペッ！！」と吐き出した。

男に聞こえたかどうかは分からない。しかし、このままにしておくわけにはいかない。神田は、渡辺と共に後を追った。社社の裏を通り抜けた。このまま行くと宝物館に出る。雨と風がさらに強くなってきた。男の姿は見えない。

「どこ、行っただけでしょう？」渡辺は叫んだ。そして、「家に、何か取りに帰ったんじゃないでしょうか？」と続けた。

この通りの住民には避難勧告が出て、公民館に避難している。そのうちの誰かが、何かを取りに帰ったのではないかと言うのだ。

「いや」

「違う」と神田^{かみた}は確信していた。あの体つきは日本人ではない。背はゆうに190センチは越えていた。頭の大きさ、肩幅、それに手足の長さは日本人のものではない。

「何をしているんだろう？」

渡辺に、市役所に待機している警察に連絡をとるように指示をした。そのとき、宝物館^{ほうもつかん}の方向で、チラッと明かりが動くのが見えた。渡辺は、携帯電話を取り出したが、雨に濡れて使い物にならない。

「どうしますか？」

渡辺は神田^{かみた}に聞いた。

宝物館には国宝、重要文化財が所蔵されている。広島県の国宝の大多数はこの宝物館にあるといっても過言ではない。

「火事場泥棒ってやつでしょうか？」

渡辺は、合羽のフードを掴みながら、神田^{かみた}に体を押し付けるようにして言った。

「だとしたら、これは警察にまかせるしかない」

神田^{かみた}は、渡辺に、市役所に戻って警官を呼んでくるように言った。

「神田さんは？」

「俺はこのまま、ここで見張っている」

「分かりました。気をつけてくださいよ」

「ああ、そつちもな。それと、一人、二人の警官じゃダメだぞ」と、神田は付け加えた。

あの体つきだ。抵抗されたら、「相当でござるに違いない」と、神田は思った。

渡辺は、来た時とは違って、風に背中を押されるようにして市役所の方角に向かつて行つた。黄色の合羽は、あつという間に見えなくなつた。

神田は宝物館ほうもつかんの横が見えるほうへ移動した。

「あそこから入つたのか」

宝物館の側面の上部の明り取り窓が壊されていた。壁には丸太が立掛けられ、それを足場にしたようだ。すでに、警報装置は働いているはずだが、この台風ではそれもあてにできない。

神田かみたは念のため懐中電灯の明かりを消して、宝物館の向かいの民家の軒先のきさきに身を伏せた。

激突！！広島

1972年（昭和47年）10月 広島

神田龍一は高校を卒業し、広島市内の修道館大学へ進学した。その頃は、学生運動も下火になりつつあったが、それでも、神田の通う大学は学生運動の急進派の核となっていた。

神田は彼らとは、一線を描き、いわゆる「ノンポリ学生」であったが、ただひとつ、高校時代から熱心に取り組んでいたのが、日本拳法だ。神田は幼い頃から体が大きく、高校生の頃には185センチに達していた。大学に進学すると、教室よりも拳法部の道場にいる時間のほうが長く、大学の2年生になった頃には、その体を活かして繰り出す、頭部への横蹴りに敵う相手は西日本にはもういなかった。しかし、全国大会に出場する機会はやってこなかった。

修道館大学は、日本拳法西日本大会で団体優勝を勝ち取り、神田は個人優勝した。

「よし、次は、全国制覇だ」

部員の気持ちも高揚し、その打ち上げを終えて、市内の繁華街を部員と歩いていた時、部員の一人の体が駐車していた車のミラーに当たった。相手が悪かった。

その車に乗っていたのは、当時、広島市内を牛耳っていた暴力団「大木会」の会長の息子であった。「若」と呼ばれていた仁一郎は、父親である会長から溺愛され、当時は縄張りのひとつを与えられ、勝手に放題の、いわば、絶頂期であった。

「おい」後部座席のドアを少し開け仁一郎は言った。

「どういつつもりじゃ」

仁一郎は、部員を呼び止めた。

「あつ、すみません」

部員全員が、「まずい」と思った。

「もうしわけありません」

部長の山口大河が一步前に出て、頭を下げた。

しかし、それくらいで、引き下がる相手でないことは山口にも分かっていた。

車から降りるなり、仁一郎は左頬に薄ら笑いを浮かべ、

「指イ、詰めーや」と言い放った。

「郷戸、ドスを出せイ！！」目は山口に向けたまま、顔を後ろの用心棒たちに向けた。

そして、仁一郎は両手をポケットに突っ込んだまま、ポケットの中の小銭を「チャラチャラ」と揺らした。

仁一郎の後ろには、用心棒が3人立ち、そのうちの一人は、すでに、朱塗りの木刀を右手に垂らしていた。その男の額には赤いタオルが巻かれていた。郷戸と呼ばれたその男は、懷から白鞘のドスを出して仁一郎に渡した。通行人がいっせいに広がり、大きな輪を描いた。

その輪の中で、山口は、再び、

「もうしわけありませんでした」と頭を下げたまま言った。頭を下げ、仁一郎と用心棒の足元から自分との距離を測った。

さらに、膝をつき、土下座をした。神田を始め、部員全員が山口に倣って土下座をした。

仁一郎は、山口の頭を右足で押さえつけた。押さえつけながら、

「学生の分際でわしのシマを歩くのは十年早いんじゃない」と、さらに足に力をこめた。

押さえつけられながら、「どうやってこの場を納めるか」を山口は考えていた。部員は12名、相手は仁一郎を含めても4名。殴り合いになれば山口ひとりでも一瞬にして3人は倒せる。ただ、赤い木刀を持った男には、部員全員でかかっても「手間取るかもしれない」と、感じた。

神田も、山口の半身後で土下座をしながら、木刀を持った男の動きだけに注意を払っていた。

部長の山口は、
「ここは逃げるしかないか」と、思った。

押さえつけられたまま、後ろで土下座をしている部員に目配せをした。神田も山口の考えが分かった。

山口は、歩道についていた左手で仁一郎の右足を払い上げ、同時に、

「逃げる！」と叫んだ。

仁一郎は、右足を大きく空に上げ、両手をポケットに突っ込んだまま、仰向けにひっくり返り、背中から水溜りの中に倒れこみ、ポケットの小銭が車道にばらまかれた。

山口と神田は、土下座の姿勢から、倒れた仁一郎の横をすり抜け、姿勢を低くして野次馬たちの脇の下を通り抜けた。山口と神田の場合、土下座の姿勢から立ち上がり、体を反転させて、用心棒たちと逆方向へ走るよりも、彼らの脇を、仁一郎を楯にした形で走り抜けるほうが無難な方法であったのだ。

他の部員たちは、用心棒たちとは距離があつたので、いつせいに、逆方向へ走り、ばらばらに走り去つた。

用心棒の朱塗りの木刀は一瞬にして左手に移され、横へ払われたが、倒れた仁一郎が邪魔をして、山口の肩先をかすめただけであつた。

野次馬の脇を駆け抜けるときに、神田^{かみた}と用心棒の眼が一瞬合つた。

他の二人の用心棒は仁一郎のところへ駆け寄り、「若、若ア」と声をかけるのが最初の行動であつた。

仁一郎は、倒れたとき、頭を車のバンパーにしたたかに打ちつけ微動だにしなかつた。

用心棒は、

「馬鹿たれーっ、見せもんじゃないどお！」と、野次馬を手と足で払い散らし、仁一郎の体を抱え上げたが、仁一郎の顔から、すでに、血の気は失せようとしていた。

用心棒は、左手に持った木刀を、横に払った形のままで、姿のない、山口と神田の逃げた先を無表情のまま追つていた。

この夜の、学生と暴力団とのトラブルは、翌朝には誰も憶えていないほどの、ささいなことであつたが、5日後には、この夜のこと引き金となり、全国的に三面記事のトップを飾るニュースとなつた。

暴力団が大挙して、大学に乗り込んできたのだ。

仁一郎は、用心棒たちによつて、大木会の本部に運び込まれた。大木会の本部は、広島市内にある丘の頂上にそびえたち、まるで要

塞のような建物である。

すぐに、お抱えの医者が呼ばれたが、やがて救急車によって近くにある大学病院へと搬送された。

「郷戸、お前がついていながら、どういつことじゃ」

大木会の会長、大木鷹男は集中治療室の前で、痩せぎすで長身の男を睨み付けた。

「お前の木刀でもダメだったか」

太い眉の下を、再び、力なく横たわる息子の顔に落とした。

郷戸と呼ばれた男は、壁に背をもたれさせ、タオルを巻いた頭を壁につけ返事をしなかったが、二人の用心棒たちは、頭を下げて、小さくなっていた。

3日間こん睡状態は続き、医者は、回復には「時間がかかる」とだけを鷹男に告げた。

鷹男は医者言葉の意味することをすぐに理解したが、もし、仁一郎にも意識があるなら、これまで、父親の権力と金の力に守られ、育てられた自分の無力さを悟ったことであろう。

すでに、学生の身元は分かっていた。

「このままにしてはおけない」

たかが学生に転がされて、大木会の2代目が意識不明のまま、万一のことがあつては全国の暴力団の笑い種だ。もうじきこの一件は全国に広まるだろう。

乾いた竹刀の打ち合う音と、甲高い気合の合間から怒号と悲鳴が聞こえてきた。面をかぶったまま、木野花咲姫は道場の窓から覗くと、工事用の大型ダンプが大学正門から入り、何か月も前から「授業料値上げ阻止」と書かれた立て看板を突き破り、そのまま、看

板の一部を引きずりながら本館の裏へ向かっているのが見えた。同じ型のダンプが2台、後に続いた。荷台には、作業者風の男達がすし詰めに乗っている。最初は、事故だと思ったが、どこか違う。よく見ると男達は、手に手に木刀や、棍棒、鉄パイプ、竹ざお等を持っている。

何が起こっているのか分からなかった。すぐに裸足のまま駆け出したが、何かを感じ、すぐに引き返して、運動靴を履き、手にした竹刀を木刀に替えて再び飛び出た。途中、何人かの部員も道場へ引き返していた。

「何があつたの!？」

「わかんねー!!」男子部員は叫びながら道場へ引き返していった。

一般学生は授業が終わり、バイトか、デートで校内には多くは残っていない。熱心な学生は図書館で学習している時間だ。今いるのは、教授と職員、それに、木野花咲姫きののはなさきのようにクラブ活動に精を出しているものだけだ。

第一グラウンドへ行くと、ダンプは野球部員を蹴散らし、最初の一台が、ピッチャーマウンドに停車したところだった。最近の日照りで、埃ほいじが舞い上がっていた。气象台は、今日は雨になる予報を出していたが、咲姫さきは、前を走る男子部員達の袴はかまが巻き上げる砂埃を見て「今日もまた外れそうだ」と、思った。

続く二台も距離をおいて、グラウンドの周囲に向かって扇型に停まった。

グラウンドの周囲にはプレハブで作られた部室が並んでいる。

やがて荷台に乗っていた男達がばらばらと降りてきた。降りるたびに埃が舞い上がる。男達の風体は様々であった。アロハシャツに白ズボンにセッタ履きという、典型的なチンピラ風の男もいれば、黒のスーツにサングラスのやくざスタイル、タオルの鉢巻に上半身裸の男もいる。その男達の手にはそれぞれ、何らかの得物えものが握られていた。あるものは木刀を振り回し、あるものは、竹やりを突き出していた。はだけた腕や肩の刺青が汗で光っている。

「こういうのがヤクザの出入りというものなのかしら」咲姫さきは、ぼんやりと思いながら、大きく離れた学生達の円の中からそれを眺ながめていた。

一台目の運転席から二人の男が出てきた。
一人が叫んだ。

「拳法部の野郎共、出てきやがれッ!!」

「これで、分かった」咲姫さきは、何日か前の、日本拳法部と大木会のトラブルを噂で聞いていた。

「出てきやがれー」男は叫んだ。

遠巻きに見ていた学生の間から一人の学生が進み出た。学友会会長の神代陽平こうじろうだ。神代こうじろうは、新聞部の部長である。

神代こうじろうは、アジで鍛きたえた太い声で、

「あなた方の要求は、校外で聞く」と、叫び、そして、

「あなた方は今、学校の自治を犯している・・・」と続けたとき、「ビューッ」と石が飛んできて、避ける間もなく、神代こうじろうの額に当たった。

額からは血が流れ出た。

「何をする!!」

神代しんじだいの後ろから新聞部の一人が叫んだ。

「うるせーッ、警察がくるまでに話をつけよーぜ、拳法部！！」
「指一本ですむんだよー！！！」

日本拳法部の山口大河やまぐちたいがが神代の肩を引いて前に出た。

「おー、お前かー」

「お前の指一本で済むことじゃ」

山口は覚悟は決めていた。

「この場を収めるには俺の小指を落とすしかないか」
左小指の付け根にバンテージを巻きながら前へ進んだ。

本館から数名の職員が、背広の裾とネクタイを風になびかせながら駆けつけたが、

「いったい何事ですか？あなた方はなんですか？」と、遠くから叫ぶしかなかった。

男たちは、それには耳を貸さず、男はドスを山口の前に投げた。

山口は、投げられたドスの前にひざまずき、左手でこ鞘を握り、右手でつか柄を持ち、手前に引いた。ためらいはなかった。一瞬、夕陽でやいは刃が光った。時が止まったようであった。夕陽が本館の窓に大きく映っていたのを木野花咲姫きのはなさきは今でも覚えている。

風が吹き、砂塵が大きく舞った。

男達も学生達も、一瞬目を細めたその時、学生達の輪から風と共に走り出て、山口を跳び越した男がいた。「あつ」と、咲姫さきが思ったそのときには、ドスを投げた男は頭を右へ傾かしげたまま吹っ飛んでいた。神田龍一かみたりゅういちの横蹴りであった。

吹っ飛んだ男の体が地面に落ちる前に、神田かみたの左裏拳ひだりうつけんは左側の男の顎あごを砕くだき、右上げ蹴りうしあげけりで右の男をくの字にへし曲げた。一瞬の業わざに、男達は、ぱっと、輪を広げたが、神田が素手だと分かると、次々に、神田にかかっていった。

神田かみたは立ち上がった山口と共に、男達の竹ざおや、棍棒こんぼう、木刀などをかわしながら、一人、二人と、確実に倒していった。大柄の神田かと小矩しょうくながらもスピードのある連続技が持ち味の山口の二人は、他の大学の拳法部からは、「牛若と弁慶」と呼ばれている。今、その二人が、150人を超える荒くれ男どもを相手に戦いをはじめたのだ。

後に「暴力団と学生の大乱闘事件」として海外メディアも取り上げた事件の始まりである。

いくら、「牛若と弁慶」でも「限度がある」と、咲姫さきが思った時、男達は、学生達に向かって得物えものを振り上げながら、いつせいに向かって来た。そして、男達の一団が、剣道部員のいる方向にも近付いて来た。

咲姫さきに向かって、男の一人が棍棒こんぼうを振り下ろした。もう迷っている暇はない。咲姫は、木刀で、その棍棒を左へ払い、返して、胴を打ち込んだ。加減をしたつもりであったが、男は、あばらを押さえ、右膝みぎひざから崩れ落ちた。

学生達の一部は、新聞部の部室になだれ込んだ。新聞部の部室の床下には、鉄パイプと、角材けいざいが隠されていることは、学生達の間では、公然の秘密であった。さらに、新聞部の部室の裏には、学園祭にかこつけて入手した長尺、3、6 m物の角材の束が何束も立てかけてあった。

「輪を崩すな―ッ」 神代こうしろは、額からの血が首筋に流れ込むのを

感じながら叫んだ。3年前の「新宿駅騒乱事件」の記憶が一瞬よみがえった。

今の状況なら、「男達をつぶせる」と思っていた。

男達は、学生達の輪に取り囲まれた形になっている。これで、バラバラになつては学生達に不利だ。

「輪を崩すな―ッ!―」

再び、神代は、顎あごを上にして、首を回しながら、声を張り上げた。

最初に、突っ込んできた男達に、学生達は、棍棒こんぼう、竹竿たけざおで体被打たれながらも、後ろに下がらず、懐ふところに飛び込んで男達と組み合った。その学生達のほとんどは、柔道部、空手道部、少林寺拳法部、ボクシング部などの部員達である。様々な気合と共に、男達は投げ飛ばされ、打ち据えられていった。

新聞部の部室から運び出された角材や鉄パイプは手渡しで学生達に回されていき、学生達は、その、角材や、鉄パイプを、輪の内側に向け突き出したり、地面を叩いて、男達を威嚇いかくした。

大きな人間の輪の中からもうもうと砂塵さまが舞い上がり、まるで火山の噴火口の様となり、さらに、その輪の中には、小さな輪があり、その人間の輪が、右に左にと動いている。その中にいるのは、日本拳法部の「牛若と弁慶」の山口と神田かみたである。輪から、一人、二人と男がはじき出されている。輪の中のふたりが、男達を倒しているのだ。

「あのふたりを連れ戻さなければならぬ」神代しんしろが思った時、ビュン、ビュン、と硬球が中の男たちに向かって飛んで行った。野球部員が次々と硬球を投げつけ始めたのだ。

山口と、神田を囲んだ輪が一瞬ゆるんだ隙に、二人は全速で、外に向かって走り、外に向かっていった男達の頭上を跳び越した。

この間にも、木野花咲姫達きののはなさき、剣道部員は、男達と戦っていた。ここでは、女子長刀部員なぎなたの長刀なぎなたが男達の足を次々と碎くだき、男達をへたり込ませていた。

咲姫の小手、面の二段打ちも面白いように決まり、男達は棍棒や角材を投げ捨て、苦痛にゆがんだ表情を浮かべて、打たれた箇所を手を当てている。しかし、その男達を押しつけて、次から次へと新あらた手が押し寄せる。

男達の、振り下ろし、振り回す、棍棒や竹ざお、鉄パイプに木刀で対戦するのは不利だが、咲姫は、それらを、ひらり、ひらりと、難無くかわしながら、甲高い気合と共に、目にもとまらぬ早業はやわざで、踏み込んで、得意の面を打ちに行った。

この面で、咲姫は中四国女子学生チャンピオンになったばかりであつた。

これまでのところは、状況は、学生達が有利であつた。この時間には、一般学生は、授業も終わり、すでに校内に姿はない。校内に残っている学生達は、何らかの部に属しているものたちばかりである。そして、今、暴力団と戦っている学生達の大部分は運動部に所属している者達だつた。運動部に所属している学生達の連帯意識は高かつた。

そして、その学生達の指揮を執っているのが、新聞部の部長、神代陽平じろようへいである。神代は、学生達に一目おかれた存在であつた。

1968年（昭和43年）アメリカは50万人の兵隊をベトナムに送り込んでいた。1月には、アメリカ海軍空母エンタープライズが佐世保へ入港し、日本のベトナム戦争前線基地化は拍車をかけ、

アメリカ軍は、3月、南ベトナムのソンミ村で老人、婦女子ばかり500人以上を虐殺した。そうした状況の中で、日本政府は、ベトナムに向かうアメリカのジェット戦闘機の燃料を中央線を使って横田基地へ送ることを認めた。

学生達は、ジェット燃料輸送阻止のため、10月21日国際反戦デーのこの日、全国から、新宿駅に集まった。神代もその中にいた。神代は「革命前夜」になることを願っていた。あちらこちらで、火の手が上がり、催涙ガスと投石は「革命」の前兆に相応しいものだと思えた。

しかし、実態は、程遠いものであった。神代や学生達の思い込みは一般大衆からの支持を得ることはできず、大衆から非難の声さえ聞こえてきた。また、神代自身も、民衆の支持のない学生運動の限界を、このとき初めて感じた。

催涙ガスでうずくまる神代に機動隊員の警棒による打撃は容赦なく振り下ろされた。気を失いかけた時、背広姿の若い男にようやく助け出されて、その男の差し出した赤いタオルで額を押さえながら新宿駅構内に逃げ込んだ。新宿駅構内では、停車中の電車に火が放たれ、電車は、めらめらと燃え上がり、鼻をつく異臭が充満していた。

神代の眉間にはすでに、この時に機動隊から受けた警棒の傷があった。学生達には、神代の額の傷は輝いて見えた。今また、その傷口が、暴力団の投石によって広がったのだ。

ダンプカーの荷台が大きく揺れて、巨大な男が上半身むき出しで降り立った。跳び下りた足元からは、砂塵が舞い上がり、さらに、

その大男は荷台から、まだ、皮もはいでない、直径が、30cmほどの丸太を引きずり出し、肩に担いで、学生達の輪の一角に向かつていった。遠目にも、男の巨大さが分かり、学生達は動揺した。男の盛り上がった肩とはちきれんばかりの胸の筋肉には圧倒的な威圧感があった。

男は、4m近い丸太を振り回し始めた。振り回すたびに、ブン、ブンと音がし、木屑が飛び散った。大男が向かっている学生の輪が崩れ始めた。陸上部の槍投げ選手が角材を投げ、それに続いて、次々と、他の学生も、角材を大男に向かって投げ始めたが、大男は、体に当たる角材をもっともせずに学生達に向かっていき、ついにその、振り回す丸太は、学生達をなぎ倒し始めた。倒れた学生を足蹴にししながら、大男は前進している。

「戦場で、歩兵に向かう戦車だ」
そう思いながら、神代はその大男の向かう先へと走った。

学生達の崩れた輪の間から日本拳法部部长、山口と神田が現れ、大男の前に立ちはだかった。山口と神田は、はだけた胴着を合わせ、帯を締めなおし、お互いの距離を4m開け、大男から5mの距離を空けて大男に対峙した。

大男は、丸太をブンブンと振り回しながら、右と左に分かれて立つ山口と神田をギリギリと見やり、小柄な山口の方へと足を踏み出した。神田はそれを待っていた。バツ、と胴着を風に鳴らし、地を蹴り、大男の首筋に横蹴りを見舞った。大男の首筋から汗が飛び、一瞬ぐらついた。その隙を狙って、山口は連続直突と横打ちをわき腹に打ち込んだ。そして、横に回転しながら、脇を抜けて、男の後ろ

に逃げ込もうとした。しかし、大男の丸太が、一瞬早く、回転する山口の背中をとらえ、山口を弾き飛ばした。神田は大男が丸太を山口に向かって振り上げた隙を狙って、わき腹の同じ箇所^{はし}に左横突き蹴りを放ったが、大男が振り向きざまに振った丸太が神田の肩を殴打し、神田も地面に向かって倒れこんだ。

山口と神田^{かみた}は、倒れながらも回転し、大男から離れ、態勢を取り直し、再び、大男に向かおうとしたとき、

「神田さん！！」と、後ろから声がした。

相撲部主将の南幸吉^{みなみしんきち}である。

胸に修道館大学のマークの刺繍されたジャージを着て、まわし姿で南は立っていた。

南は、角材を、束のまま両方の脇の下に一束ずつ挟み、その角材の一方の端は大砲のように大男に向けられている。

「神田^{かみた}さん、ここは俺に任せて、あんた達は他へ・・・」

「すまん」

「この場は南に任せるしかないだろ」ふたりは、そう思いながら戦いの不利になっているところへと向かった。

すでにあちらこちらで、学生達の輪は崩れて、個人戦の形になっている。

南は、抱えていた角材の束を下へ落とし、着ていたジャージを「バツ！！」と脱ぎ捨てた。大男も、南の意図を察し、抱えていた丸太を軽々と投げ捨てた。そして、やっと己^{おのれ}にふさわしい対戦相手を見つけた喜びで、にやりと笑い、額から流れ落ちる汗をペロリとなめ、口の渴きを潤した。

南も190cm、160kgの巨漢であるが、大男は、さらに一回りは大きい。その大男が、闘牛のごとく南めがけて突進してきた。南も、腰を落として、前のめりで大男めがけて突進した。お互いの距離は10m。あつという間に距離は縮まり、「ガッ！」と、岩と岩がぶつかる音がし、汗と砂塵が舞い上がった。飛び散った汗が夕陽で光った。ぶつかった反動で、南は上体を起こし、大男の分厚い胸に速射砲のようにツツパリを放った。「バ、バ、バ、バンツ！」大男の氣勢が弱まった隙に、右手で大男のズボンわじつを驚掴みにし、左に身を回して投げを打とうとした。しかし、大男は、上から南を押しつぶすように被かぶさってきた。大男の左手は南の右上腕を掴み、ぎりぎりと指を喰いこませ、右手は南の肩越しに後ろまわしを「ガッ！」と掴んだ。南の頭は、大男の胸の下に入り込んだ。

夕陽が映る本館の5階の窓から、眼下で繰り広げられている闘いを眺めている男がいた。修道館大学学長、小森喜楽こもりよしもとである。学校職員達は警察に連絡する許可を学長に求めたが、小森は頑がんとして拒否した。

「学問の自由と、学校の自治独立は、官憲の介入で守られるべきものではない」

それが、明治生まれの漢物、小森の信念であった。つい2ヶ月前には、ミュンヘンオリンピック、水泳種目へ出場する多口、本田、両水泳部員の壮行会で、赤ふんどし姿になって、ふたりに檄文げきぶんを読み上げたばかりである。小森は学生達の圧倒的な支持を得、また、小森自身も、学生達を全面的に応援、信賴していた。

木野花咲姫きののはなさきは、ただ、ひたすら、男たちの振り下ろし、振り回す棍棒や木刀をかわしながら、面を打ち続けていた。その、咲姫の耳

に「ドン、ドン」と大太鼓の音が聞こえてきた。

「あの音は・・・」

紛れもなく、修道館大学応援部の大太鼓の音である。音のする方向を、中段に構えながら、対峙する男の頭越しに見ると、本館屋上で団旗を翻す部員のそばには、いつもの、大太鼓を叩く応援団団員の姿があつた。その前には、学生服姿に下駄履きの男が立っていた。修道館大学応援団団長の連山国男だ。

連山は両手に大根を持ち、「闘いの唄」を張り上げていた。壮行会で聴くいつもの歌だ。

日本拳法部の山口も得意の連続突きを入れながら、神田も蹴りを打ちながら、その太鼓の音を聞いていた。学友会会長、そして新聞部部長の神代も夕陽に浮かぶ本館屋上を見上げていた。

相撲部主将の南幸吉は大男の下になつたままだ。すでにこの体勢のまま5分はたっていた。最初の激突から、お互いの体勢は変わっていない。ふたりは、全身の力を出し続けていた。ふたりは、新たな技を出そうとはせず、ただ、力と力を出し切り、雌雄を決しようとしているのだ。相撲部員は、ふたりの闘いに邪魔が入らないように、ふたりを取り囲む輪を作り、固唾を呑んで両者の闘いを見守っている。南の全身の筋肉がぶるぶると震え始め、ついに、南は、「ガクッ」と左膝を落とした。無理もない、あの200kgはあるのかと思われる大男が全身の力を出して、南の上にのしかかっているのだ。

「あ、あーっ！！」相撲部員が悲痛の声を上げたとき、太鼓の音が響いてきた。

応援団長の連山国男は、のども裂けよとばかりに「闘いの唄」を歌い続け、太鼓を叩く部員も、バチよ折れ、皮も裂けよとばかりに太鼓を叩き続け、団旗は千切れんばかりに振られている。唄も太鼓も、そして応援団旗も、いまや、相撲部主将、南一人のために向けられているのだ。

「むおーっ!!」

巨大な背中から野獣の咆哮ほうこうとも思える声上がり、さらに、南を押さえつける。ふたりの闘いを見つめる者たちには、何トンという重さが、南の肩にのしかかっているかのように思えた。

大きな背中に大粒の雨が一粒落ちた。やがて、二粒、三粒と、雨粒が落ち始め、雷鳴と共に、大雨になった。2ヶ月ぶりの雨である。「ピカツ」と光った稲妻に、大男の背中が光った。

「むおーっ!!」

再び、大男が叫んだ時、大男の背中が、「ぐぐつ」と、わずかに持ち上がった。南が、その巨大な男を持ち上げようとしているのだ。雨は、ますます激しさを増し、海辺に近い修道館大学のグラウンドは、一面水浸しになってきた。

南に覆おおいかぶさる大男は眼を剥むいて全身に力をこめている。しかし、「ドン、ドン」という太鼓の音と共に、南の膝は徐々に伸び、全身の筋肉は、隆起し、血が噴き出さんばかりに赤くなっている。

「ドドン!!」

雷鳴と共に、南は、ついに、大男を肩で担ぎ上げた。

「おおーっ!!」という声が周りから起こった。

暴力団の男達も、学生達も、今や、このふたりの闘いを見守っている。

大男は、信じられないという顔で南を見つめながら、それでも、

地面に足をつけようとしてもがいている。

南の体は仁王のように膨れ上がり、足を一步踏み出した。雨は降り続き、グラウンドは田んぼのようになっていいる。南の足は、泥沼となったグラウンドに10cmは埋まり込んだ。

「ビシヤッ」一步、「ビシヤッ」また一步と、南は、大男を担いだまま、歩を進めた。その後ろには、穴となった足跡が残り、雨が流れ込み渦を作った。

再び、「ピカツ」と光った稲妻の中で、ついに南は、両手で男を持ち上げ、「ドカーン」という雷鳴と共に、大男を、ダンプめがけて投げつけた。大男は肩でダンプの前部を壊し、そのまま泥沼と化したグラウンドに頭から落ち、悶絶した。大きく開いた口に泥水が流れ込んだ。これが大男にとって最初の敗北であった。

「おおーっ！！」という驚嘆と歓喜の音が、学生達から沸きあがった。

学長の小森は、窓を開け、振り込む雨に打たれながらこの様子を満足げに眺めていた。木野花咲姫は、木刀を上段に構えたまま、感動で動けなかった。日本拳法部の山口は部員に肩を預け、右拳を天に突き出し、雨粒を打った。神田は乱れた胴着を正し、南に礼を尽くした。

「バーン！！」

雷鳴とは違う音が鳴り響いた。大男が投げつけられたダンプから、一人の男が降り立ち、雨の降る空に向かって拳銃を発射したのだ。

未だに意識の戻らない大木仁一郎の息子、隆伸である。

「もう、容赦はいらん！！」

「ぶっ殺してやる！！」

銃口は、南に向けられ、引き金に指がかかった。

「やめろ！！」

ダンプの屋根の上に立つ長身の男が、雨音を切り裂くような太い声で言った。

「俺たちの負けだ」

頭に赤いタオルを巻きつけ、右手に赤い木刀を持った男の顔が、稲妻の中で白く浮かび上がった。

「郷戸・・・!？」

剣道部の木野花咲姫、新聞部の神代、そして、日本拳法部の神田、三人は同時に郷戸の名前を口にした。

「なんでじゃア!？」

「ドカーンッ!」「ゴロゴロゴロ・・・」

隆伸の声は雷鳴に打ち消された。

「引き上げだっ!！」

郷戸の声に、男たちは体を引きずり、仲間を支えながらトラックの荷台に乗り込み始めた。倒れた大男は10人がかりで荷台に引きずり上げられた。

「ま、待てエ」

「お、お前ら!！」と、隆伸は顔を赤らめ男達に叫んだが、所詮、隆伸も一人では何も出来ない男であった。

ダンプは、後輪をスリップさせながらグラウンドを一周し、校門へと向かった。郷戸を屋根に乗せたダンプが、咲姫、神代、神田の前に来たとき、郷戸は、屋根を木刀で、「ゴンッ」と突き、停まるように合図した。

「勝負はお預けだな」神田に言った。

「腕を上げたな」木野花咲姫に言った。

「血を拭け」神代にこう言って、額に巻いた赤いタオルを神代に

投げた。

体力を使い果たして、雨の中に座り込んだ南は山岳部の多良千月^{つき}に背負われて相撲部部室に運ばれた。多良は、その脚力を買われて、2年前の1970年、日本山岳会のエベレスト登頂隊の一員として、植村直己^{うえむらなほみ}のエベレスト登頂をサポートした経歴がある。多良にとつて、南を背負うことなどわけはなかった。山岳部部員の間では、当時、騒がれた、中国山地の「ヒバゴン」は、この多良のことではないかと言う噂があった。多良はエベレスト遠征に備えて、広島県と島根県にまたがる比婆山中で、連日、荷揚訓練^{ぼうかくれん}をしていたのだ。多良は、毛皮のベストを着て、毛の帽子をかぶり、毛の尻皮を腰にぶら下げて山中を歩いていたので、住民が見間違えたのではないかというのだ。

郷戸^{ごうこ}は学生時代から天才剣士として全国に名をはせ、その、殺気を帯びた剣さばきにあこがれる者も多かった。木野花咲姫^{きののはなさき}もその一人であった。しかし、その太刀筋^{たちすじ}は日本剣道連盟からは邪道の剣として認めてはもらえず、全国大会に出場する権利は与えられなかった。郷戸の剣は、咲姫の、面を打ちに行く正統派の剣道とは違い、隙あらば、どこでも打ち、突き、反則と判定されることを恐れない「邪剣」であった。その頃の郷戸は自分が陰の道を歩んでいることを気付くには若すぎた。

その剣の素質を見抜き声をかけてきたのは、三島由紀夫であった。三島は、時代が急速に旋回するのを憂^{うれ}い、反革命の起爆剤となるべく「盾の会^{たてのかい}」を結成し、その会員として郷戸を誘ったのだ。郷戸は、自分を認めてくれた三島のためには眠る時間さえをも削って動いた。1968年（昭和43年）「楯の会」結成後間もなく「新宿駅騒

乱事件」が起き、三島は、会員と共に、この騒乱の視察をした。

郷戸^{いっぺい}は、三島の命を受け、銀座から新宿へと回り、新宿駅の近くで、機動隊員に囲まれて、めった打ちにされている学生を見つけた。機動隊員に「楯の会」の会員であることを告げ、そして、学生を解放させた。学生に名前を聞かれ「楯の会の郷戸だ」と名乗り、学生の割れた額を赤いタオルで巻いてやった。

「新宿駅騒乱事件」の視察の後、三島は、自衛隊の存在に危機感をつのらせ、2年後の1970年11月25日、「楯の会」会員4人と共に、自衛隊の決起を促すべく、自衛隊東部方面總監部へ乗り込み、割腹して果てた。

郷戸^{いっぺい}は、事前にこのことを知らされず、尊敬する三島と共に死ねなかったことに落胆した。その後、警察の取調べを何度か受け、翌年には三島の支援者の政治結社のひとつに身を寄せ、やがて、暴力団の用心棒へと身を落とした。

咲姫^{さき}は木刀を左手に移し、他の部員と共に、濡れたポニーテールを揺らしながら道場へと向かった。神代^{うづしろ}は郷戸^{いっぺい}が投げてよこした赤いタオルで割れた額を押さえたが、新宿の時と同じ様に血は流れ続けた。神田^{かみだ}は、拳法部の部室入り口に積まれたブロックの上に座り込み、天を仰いで、降り続ける雨を口に含んだ。雨はそのまま翌朝まで降り続いた。

山津波

2005年（平成17年）9月 広島・宮島

神田龍一は今、雨に打たれながら身をかがめて、この30年以上前の出来事を鮮やかに思い出していた。その後、修道館大学の運動部は、全ての公の活動には1年間参加できなかった。暴力団の大会は広島県警の頂上作戦により、壊滅に追いやられ、郷戸は大木会の刺客に追われ姿を消した、と言う噂を聞いた。あの時、一緒に闘った仲間とは卒業以来一度も会っていない。そして、10年前からは宮島観光推進協会の仕事も忙しくなり、拳法の練習からは自然と遠のいていた。

雨と風は一層激しさを増し、渡辺は、警察を呼びに行つたまま帰つてこない。神田は、合羽のズボンと上着を脱ぎ、着ていたシャツとズボンも脱ぎ捨て、体を動き易くし、肩を回し、拳を握り、広げ、屈伸運動を始めた。

「今の俺は、あの男に勝てるだろうか？」

宝物館の壊された窓から男が現れた。男は、「スルツ」と、頭から回転しながら飛び降りた。飛び降りたそのままの姿勢で、片膝をついて、あたりを見回し、警戒している。やがて、すっく、と立ち上がった。頭はスキンヘッドで、素っ裸だと思っていた腰の前部分は、黒い小さな革か布の様なもので覆っている。大胸筋は発達し、手足の長い格闘家の体だ。雨にうたれて体は光り、男の体は一層大きく見える。改めてこうして見ると、2m近い長身だ。男は黒い巻物のようなものを口にくわえ、こちらを獣のように凝視している。

「気付かれたか!？」

神田^{かみた}は、

「今の俺には、この男は倒せそうもない」そう思ったが、ゆっくりと立ち上がり、男のほうへ一歩進み出た。

「何をしている!!」

返事はない。もう一歩、前へ出た。男は動かない。男との距離は6 m。さらにもう一歩進んだ。男は動かない。

「どういうつもりだ・・・」

その時、宝物館の裏に黄色い合羽が見えた。渡辺が警官を連れて戻ってきたのだ。男はそれに気付いて「俺と警官達の距離を測っているのだ」と知った。神田^{かみた}はジリジリと間をつめた。

「何をしている!!」

警官が3人、警棒を伸ばして、後ろから声をかけた。男は、それには何も答えず、神田のほうを見たままだ。三人の警官はお互いの距離をあげ、男を、神田と共に囲む体勢を作ろうとしたが、「バツ!!」と、それより速く神田に向かって駆け出してきた。神田は、身構え、警官は、男を追って、男の背中へ向かって走った。

男は、神田^{かみた}の手前2 mで体を伏せ、「ビュン」と、体を伸ばしたかと思うと、後方へそのまま回転して、追って来た警官達の頭上を、背中を下にして飛び越した。警官達は、獣が頭上を飛び越えたかのように、思わず頭をかがめた。神田は、警官の間をすり抜け、着地した男に組み付いた・・・かのように思ったが、「スルツ」と、神田の腕は空をつかんだ。男は振り向きざまに左裏拳を放った。神田はかろうじて、左手で払い、体をかめながら、得意の右横蹴りを

放ったが、男はあっさりとそれをかわし、巻物のようなものをくわえたまま、左頬を、ゆるめ、「ニヤツ」と笑ったように思えた。男は、大聖院^{だいしょういん}方向へ走った。大聖院は、真言宗御室派の大本山であり、関西屈指の名刹^{めいさつ}で、^{いつくしま}厳島の総本坊である。このまま行くと、空海が修行した、^{れいかどう}靈火堂、^{みせんほんどう}弥山本堂を経由して^{みせん}弥山山頂へと続く。

「待てーっ！！」

警官達は叫んだが、男は、あつというまに、強い横殴りの雨と、弥山から吹き下ろす強風の中に入り込んだ。神田^{かみた}は、追わなかった。男の裏拳は間違いなく手加減されたものだった。得意の右横蹴りも難なくかわされてしまった。全く歯が立たなかった。

その時、遠くから「メリ、メリッ！！」「ガガッ！！」という地を揺さぶるような音と共に、あたり一面に土のにおいが漂ってきた。

大聖院と厳島神社をつなぐ通りは、小さな商店や民家が並ぶ、門前町のようになっており、その通りは、やがて、V字型の谷になり、谷に沿って、参道が^{みせん}弥山山頂へとつながっている。その谷の上部から、雨と風の音に乗って、生木^{なまき}を裂く音が聞こえてきた。地面は揺れ始め、腹に響く地鳴りが聞こえてきた。

「逃げるー！！」

「^{やまつなみ}山津波じゃー！！」

警官達が叫びながら、必至の形相で駆けてきた。

茶色の巨大な生き物が、うねるように迫ってきた。その巨大な生き物の頭には、松の木が何本も生え、背中には大きな石のこぶが何個もある。狭い道を、獣と化した泥が、商店のドアを飲み込み、民家の玄関を押し破り、そのまま、頭は^{かみた}厳島神社へと向かった。神田達は、間一髪で高台に逃れ、^{ぼうぜん}呆然とその巨大な獣の背中を四つんば

いになって見つめた。

神の島を襲った60年振りの山津波であった。

渡辺と警官達は、山津波がうねりながら白糸川しらいとがわに流れ込み、あふれ出した泥と岩が道を埋め尽くすのを眺めるばかりであった。渡辺は、その後当分の間、海の波を見てもめまいを感じるほどの後遺症に悩まされた。

神田かみたは山津波のやってくる暗闇を見つめていた。

「あの男は、何者だったんだ」

「あいつ、これに飲み込まれたかのう」警官の一人がつぶやいた。

「これに飲み込まれたら、助からんじやろう」もう一人の警官が、うねる泥を見ながらつぶやいた。

夜が明けて、被害の全貌が明らかになった。厳島神社は、前年2004年（平成16年）の台風18号では、重要文化財である厳島神社の回廊や左楽房が倒壊するなどかなりの被害に遭ったが、今回の台風14号では、幸いなことに、神社そのものへの被害は少なかった。しかし、神田達かみたが直接眼にしたように、雨による、土石流は、町に甚大な被害を与え、雨と風は、女神の肌に大きな傷跡を残した。

その夜、神田かみたは自宅へは帰ることが出来ず、警官達に派出所で事情聴取され、そのまま、派出所で仮眠を取った。夜が明けてからは、宮島観光推進協会の事務所で、マスコミ、旅行会社など、各方面から、台風被害についての問い合わせや、実際の復旧作業の陣頭指揮

に忙殺され、気がついたときには、日も暮れかけていた。事務所でやっと一息つき、コーヒーを飲んでいるとき、昨夜の警官の一人が、本署の刑事とやってきた。

「やあ、神田^{かみた}さん、お疲れさんです。こちらは、本署の高見さんです」

「高見です。よろしく願います」

「や、」と、高見と名乗った刑事は、既に、事務所内に陣取ってフェリーの改札口を見張っている二人の刑事に軽く手を上げて挨拶した。色黒で白髪交じりの短髪で、定年前の、いかにも叩き上げといった感じた。宮島観光推進協会の事務所はフェリー乗り場の建物の二階にあり、改札口を行き来する人間のチェックに好都合の場所にあるのだ。

「神田です。ま、どうぞ」と、椅子をすすめた。

「昨夜はどうも大変だったようですね。いや、大筋は、彼から聞いているんですが」と、警官のほうを持ち出した手帳で指した。

「高見さん、私はこれで・・・」警官は高見に敬礼し、神田にも軽く会釈をして去っていった。

「彼も、昨夜から動きどうしだろうが・・・」と、疲れきった警官の背中を見つめた。

「あ、ごくろうさん」刑事は、警官に言って、再び、神田のほうに向き直った。

「で、土石流の現場から何か？」神田は、コーヒーを飲みながら立ち上がり、刑事のためにコーヒーを淹れた。

「こりゃ、どーも」高見刑事は、カップを受け取りながら「男の遺体ってことですか？」と言った。

「いや、まー、手がかりになるようなものとかは？」神田は、言葉^{ことば}を濁した。

「今んところは、まだ何も。ただね、さっき、宝物館^{ほうもつかん}の館長に聞い

てみたんですが、よく分からん、って言うんですよ」

「よく分からん、とは？」神田は、椅子に腰掛けながら、尋ねた。「被害がですね。奴が忍び込むのに壊したガラス窓と、展示ケースのひとつが壊されていたということなんですが・・・」

「金庫室は？」言葉をさえぎって神田は聞いた。

金庫室には、国宝をはじめ、重要文化財が何百点も収納されている。「それが狙いのはずだ」と思っていた。

「異常がないんですよ」高見刑事は背中を椅子の背もたれに預けた。

「異常がない？あの男は、確かに、口に巻物のようなものをくわえていたけど、あれは、平家納経だへいけのうきやうと思ったんですけど」

展示場には、通常、国宝級のもものは、レプリカが展示されており、本物は、年一回の特別展にだけ展示される。「まさか、あの男、レプリカを盗み出したのでは？」だとすると、間抜けな話だ。

「いや、展示されている、レプリカもそのままなんですよ」

「え？　じゃ、何が？」

「それなんですがね」高見刑事は、腕を組んで、神田を見た。

「何でも、戦後、GHQの命令で紅葉谷じ・えいち・きゅー　もみじだにで工事が行われたそうじゃないですか」高見は手帳を繰りながら言った。

「ええ、終戦直後の1945年（昭和20年）の9月の枕崎台風まくらぎたいふうのとき、宮島も相当な被害をこうむりましたね」神田かみたはコーヒーを一口すすって続けた。

「あの時も、今回と同じようなコースでしたしねエ。土石流の被害も相当出ましてね。今の紅葉谷公園もみじだにこうえんは、その復旧工事でできたんですよ。確か、工事は、その3年後から始まったと・・・」

「そうらしいですね。館長さんもそういつてました。で、その工事の時、鉄の棒が土砂の下から出てきたとか。ちょうど、巻物のような」

「巻物？じゃあ、なくなったのは、その巻物だと？」

「そうらしいんですよ」

「それで、当時の工事関係者が、発見者ですがね、GHQには内緒で、こりゃ珍しいもんだと思ったんでしょね。長い間、自宅に保管していて、その後、民族資料館が開館された時、展示品のひとつにと、寄付したということらしいです」高見刑事は手帳のページを一枚めくって続けた。

「それが、昭和49年、つていいますから、1974年のことですね。それから、調査のために、いったん宝物館に仮展示されていたらしいんですよ」

「あの男が口にくわえていたのは、平家納経じゃなく、その鉄の棒だったのか？」神田は首をひねった。

「おっと、肝心なことを忘れるところだった。さつき、宝物館で防犯ビデオをチェックしたんですがね。ひとり、大男が写っていたんですよ。それも、その、鉄の棒を展示しているケースの前で。ちよつと、確認していただきたいんですが。このテープですが。ここには、デッキは？」

「あります」そう言って、高見刑事からテープを受け取り、デッキにセットした。

テープが再生されるまで、高見刑事は質問を続けた。

「大まかには聞きましたが、外人風で、大男で、と。他に何か思い出されたことはありませんか？」高見刑事は、ボールペンを取り

出し、カチャ、と芯を出した。

「いや、これと言っては別に。確かに、普通の男じゃありませんね、あれは。武術か何かの相当な使い手ですよ」と、ここまで言うて、

「そう言えば、一瞬手に触れた時、ヌルツ、とした感触で、スルツ、と手から滑り出しましたね。最初は雨で体が光っているのかと思いましたが、今思うと、あれは、油か何か体に塗っていたのかなア・・・」

「油を？」高見刑事は顔を上げた。

「ほら、よく、寒い時には油を体に塗って泳ぐって、聞くじゃないですか」

「なるほど。じゃ、奴は、泳いで上陸したと。もちろん、台風前でしょうがね」

「その可能性もありますね。何しろ、あの体だ。船だと目立つでしょうし」

「神田さん、この男ですか？」高見刑事は、画面を指差した。

確かにあの男だ。何人かの外国人観光客に混じって、頭二つ飛び出している。男は、背広姿で、顔を隠す様子もなく、展示されている鉄の棒を凝視している。「ということは、目立つ、目立たないは関係ないってことか」

「この男に間違いありません。これは・・・」

「3日前の記録です。つまり台風の前々日です。おかしいでしょう？最初から顔も隠さず、じっと見つめて。これじゃ、私が犯人ですって言うてるようなもんだ。それとも、最初はそんな気はなく、その現物を見て思いつき、いったん、引き上げて、再度、今度は、台風前日に泳いでやってきたのか？」高見刑事は自分自身につぶやいた。

「どうも、納得できる話じゃありませんね」神田は左手をテレビ

の上において画面を覗き込んだ。

「で、男の搜索のほうは？」神田^{かみた}は聞いた。

「山狩りとかは・・・？」

「いやー、今のところは、こそ泥一人つてとこですからねえ。被害状況もよく分かってないし、これが、国宝でも盗られたっていうんなら話は別ですがね。それに、この状況でしょ。人手の問題もありますからね」

「そうでしょうね。まあ、あの大男なら、目立ちますから隠れようもないし、第一、あの土石流に巻き込まれたんじゃないやあ・・・」

この日の夜明け前、弥山^{みせん}頂上から一羽の巨大な鳥^{からす}が飛び立った。

鳥（からす）

2005年（平成17年）9月 富士山

宮島に大きな傷跡を残して台風14号は日本海へ抜けた。しかし、この台風は、そのゆつくりとしたスピードもあって、秋雨前線を刺激し、九州に上陸する以前には、すでに激しい雷と共に記録的な豪雨を関東地方にもたらし、首都東京にも床上、床下浸水など大きな被害を与えていた。

そして、富士山頂では、自然が、神の怒りとなって、命の存在は微塵みじんも許さないかのように荒れ狂い、雨と風は人工の建物に襲いかかった。すでに登山シーズンも終わり、多くの山小屋は営業を終え無人となっている。そして、期間中は登山者でにぎわう郵便局や富士山本宮浅間大社奥宮ふじさんほんぐうせんげんたいしゃおくみやの扉も固く閉ざされている。

浅間神社奥宮のすぐそばにある富士山頂館あるじの主は、台風の接近によつて下山時期をいつもより遅らせ、この夜は山小屋の中で過ごした。そして、雨の上がった翌朝、下山する前に奥宮おくみやへ手を合わせるために、鳥居のところへ来て、奥宮の屋根の一部が陥没していることに気付き、携帯電話で富士宮市にある富士山本宮浅間大社ふじさんほんぐうせんげんたいしゃに連絡を取った。

2日後、浅間大社職員が富士山頂へ奥宮の整理と補修のためにやってきた。

本殿内は一部土砂で埋まっていた。

「なんでしょう。これは？」一番若い職員が、シャベルですくった土砂どじやの中に変なものを見つけた。

「なんだ？」もう一人の職員は、腰に手を当て、背伸びしながら、

すくい上げた職員が手にしたのを見つめた。

「なんだろう」他の職員たちも集まってきた。

「巻物かなア？」

「こんなものあつたかなア？」

「いや、記憶にないな」そういつて、職員たちは雲の見える天井を見上げた。

「とりあえず、先にここを片付けよう。ところで、写真は撮ったかい？」

年長の職員が言つと、

「いけね、忘れてた」そう言つて、ザックからデジカメを取り出し、作業前の状況を記録した。

富士山頂は、酸素濃度は平地の3分の2で、厳しい自然環境は北極圏なみである。雨は下から降り、夏でも雪が降る。強風が吹けば岩さえも転がる。台風14号はこの時日本海のほぼ真ん中あたりに達していたが、何しろ富士山は日本一の独立峰であるため、風の影響をもろに蒙る。自然の神に許しを請いながらの作業は時間がかかった。1日ばかりでようやく作業を終えた神社の職員たちは下山の準備にとりかかった。

「ちよつと、作業終了の記録を・・・」

そう言つて職員の一人はデジカメで社殿内の写真を撮り、最後に5人全員の写真を撮った。

「これ、どうしましょう？」最初に鉄の棒を発見した若い職員が、その棒を握つて、年長の職員に聞いた。

「宮司の指示を仰ごう」^{あお}そう言つと、携帯で写真を撮り、メールに添付して本宮のパソコンに送った。

「なんだろうな、この模様は？」職員の一人が鉄の棒を見ながら

つぶやいた。

「文字のようでもあるし、模様のようにもあるし。結構古い感じがするよね」

「けど、こんなもん、どこにあったんだろう？」

「土砂に混じってたってことは、土砂と一緒に流れ込んだってことかな？」

「さあー、祭壇の中にあつたのかも」

「どうなんだろうね」

そうこう言っているうちに、その鉄の棒は、「祭壇にお祀りまつしておくように」と宮司から電話があつた。

「祭壇に？」年長の職員はいぶかしげに首をひねったが、指示通り、祭壇に鉄の棒を供え、忘れ物はないか最終チェックをし神社の扉を閉じ、施錠して下山した。

2005年（平成17年） 広島・宮島

神田かみたは今、齒向かう老犬を見るような、あの男の獅子のような眼を思い出していた。そして、あの「暴力団襲撃事件」のときに抱いた闘争心が湧き上がってくるのを感じている。

「老犬になるにはまだ早いだろう、エエ？」濡れたシャツの下にある贅肉ぜいにくを触り、そう口にして、ゆっくりと走り始めた。この尾根を登りつめると宮島の東のピークにたどり着く。そこには宮島ロープウェイの終点駅「獅子岩ししいわ駅みせんぼんどう」があるが、ロープウェイはまだ動いていない。獅子岩から弥山本堂へは緩やかなアップダウン道でつながっており、そこから巨岩が折り重なる弥山頂上へはやや急な上りとなる。

神田には、今日は頂上へ登る体力は残っていないので、紅葉谷を下ることにした。1945年（昭和20年）の枕崎台風で土砂崩れをおこした谷だ。下り始めて10分ほどで、膝がガクガクと笑い始めた。登山道脇の石に腰を下ろしてスपोर्टドリンクで水分を補給しながら、宮島は豊かな原始林に包まれていることを実感した。さつきまで降っていた霧雨で一層深みを増している。その時、下から、弥山頂上のレストハウスの主が登ってきた。

「やあ神田さん。こんなところで何を？」

「いや、ちよつと、状況を見ておこうと思って・・・」

「そうですか。ご苦労さまです。私も、上のほうが気になって。

それにしても、大聖院の参道が、あんなことになって、大変ですね」

「そうですね。復旧までには相当時間がかかるでしょうね」

「それはそうと神田さん」

「エ？」

「何でも、外人の大男を捜してるとか聞いたんですが」

「そうです。こそ泥ですがね」

「私は、見たんですよ。台風の前日に」

「え？どこで」

「頂上ですよ。大きなザックをかついでね。ツルツル頭でしたよ。頂上の大岩に、こうやって、両手をあてて、ジツとしてたんですよ」そう言つて、主は頭を下げて両手をそばの大岩に当て、岩に体を預けるような格好をした。

「ちよつとこんな風に、なんか、こう、岩に祈りを込めるというか、岩から靈氣をもらうというか、そんな格好でしたよ」

「で、その後は？」

「さー、私が下山する時にはまだ展望台の上にいましたからね」

主はタオルで首筋の汗をぬぐいながら答えた。

「警察には？」

「いえ、まだ何も。さつき、下で聞いたもんですからね。後でいいか、と思つて」と、悪びれずにタオルを頭に巻きながら言った。「ビデオに写っていたのが、台風の3日前。と言うことは、その翌日、弥山頂上へ登つて・・・、その日は、夜まで頂上にいた・・・、ということになるな」神田は両膝に手をやり、立ち上がりながら思つた。

宮島観光推進協会の事務所に出勤する前に一度自宅へ帰つてシャワーを浴びた。着替える時、携帯の着信ランプが点滅しているのに気がつき、神田は事務所に電話を入れた。

「あ、神田さん。先ほど高見刑事さんから電話がありましたよ」

「へー、なんだろ？ありがとう。電話してみる」

「いえ、なんだか、もうこつちへ向かつてると言うことでしたから、そろそろお着きになるんじゃないですかね」

「あ、そう。じゃ、私も、すぐにそつちへ行くから」

神田の自宅は事務所から歩いて10分のところにある。今まではその距離をバイクで通勤していたが、今日からは軽いランニングで通勤することにした。

事務所で朝刊各紙をチェックした。各紙とも台風被害の記事と写真がトップを飾っている。今回の台風14号は典型的な雨台風で、各地に雨による大きな被害を残している。東京でも雷雨で首都機能が麻痺し、再び「危機管理」の重要性を訴える記事が目についた。社会面でも、宮島をはじめ各地の被害の状況が細かく伝えられている。

神田は、その中のひとつの写真に眼が釘付けになった。鉄の棒と同じものが写っているのだ。

「神田^{かみた}さん」

「神田さん！！」

何度か呼ばれて、顔を上げると、高見刑事が立っていた。今日は背広にネクタイ姿だ。

「え？あつ、これは失礼しました」そう言つて、新聞をたたみ、椅子の横に置いて立ち上がった。

「どうしました？ボーっとして」心配そうに顔を覗き込んで、「少しお疲れじゃないですか？」と言つた。

高見刑事の後ろにはキチツと背広を着こなした男が4人立っている。

「紹介させていただきます。こちら、警察庁、外事課の鈴木刑事。それと・・・」

「警察庁？外事課？」神田は「はあ？」という顔で高見を見た。事務所内にいた職員も全員、緊張の面持ちで男達と神田の顔を見た。高見刑事は、それには構わず、紹介を続けた。

「そして、こちらの方々は、中国大使館の・・・」そう言いながら、内ポケットから名刺を取り出してパラパラとめくつたが、「中国大使館の・・・」と紹介された男達は順に、

「カクといいます」

「サイといいます」

「シヨウといいます」

日本語で、それぞれが、例文通りといった感じで自己紹介した。

「中国？・・・大使館？・・・」

いづれも立派な体格をした40代くらいの男達だ。

「何事だ・・・？」神田は名刺を出しながら事態を理解しようとした。

「この男たちには見覚えがある。どこだったか？」そう考えていたとき、高見は、

「今回の一件は、こちらの鈴木刑事が引き継がれます」そう言つて、神田^{かみた}から目をそらした。

「それで、何か？」神田は鈴木刑事を見つめた。

「実は、例の鉄の棒ですがね」鈴木刑事は背広のうちポケットから書類を出しながら言った。

「はい」

「外交ルートを通じて協力要請が来ましてね」そう言つて、その書類を神田の方へ向けて渡した。

「協力要請？」そう言いながら、神田は書類に目を通した。

「ええ。ところが、正式に市のほうへ要請しようとした矢先、今回の件が起こったというわけです」神田から戻された書類を丁寧にたたんで封筒に入れながら、鈴木刑事は中国大使館の職員だと紹介された男たちのほうに向かつて言った。

「既に、こちらの方々は、その現物を確認されていて」

そう言われて思い出した。あの大男と一緒にビデオに写っていた男たちだ。

「あの棒は、我が国にとって重要な物なのです。あなたは、あの棒がどこにあると思いますか？」最初に名乗ったカクという男が直接的な言い方で聞いた。冷たい声だった。

神田は、この男の眼が不自然な動きをしているのに気がついた。

「そんなことは分かりません」神田^{かみた}は少しムツとしながら答えた。
「あの台風の晩に盗まれたきりですから」事務所の女の子が立ち上がって、コーヒーマーカーのところに行こうとしたのを目で制した。

「それに、私は観光推進協会の一職員にすぎませんから、捜査にご協力はさせていただきますが、私自身で捜査する権限も、またその気もありませんし」

高見刑事は、白髪頭しらがあたまに手をやり、上目遣いうわめづかで神田を見た。

鈴木刑事もネクタイの結び目に手をやりながら、天井を見上げている。

「言てること理解します。私、日本語、上手でないですから、気分害したら、謝ります」カクと名乗った大使館員はそう言いながら内ポケットに手をやり、プルプルと震えている携帯電話を取り出し、右目だけ動かしてボタンを押した。左目は義眼であった。

「あなたは、犯人と接触した一番の人です。ちょっと、失礼します」そう言つて携帯に出た。

カクは二言三言電話で話し、ふたことみこと

「鈴木さん、急用ができました。私達、これから東京に帰らなくてはいいけません」そう言いながら、連れの二人に顎あごをしゃくつて指示を出した。

「それはまた急な。たつた今、着いたばかりですよ。まだ、宝物館の館長にも話を聞いていないし、・・・」

カクは鈴木刑事の言葉を手で制し、

「高見さん、代わりにお願いします。後日、報告は鈴木さん宛てにメールでお願いします」

そう言いながら、もうドアのほうに向かっていた。鈴木刑事もあわてて後に続いた。

「ご協力感謝します。ではまた後日お会いしましょう」カクはドアの手前で振り向き、そう言つて出て行つた。

「お騒がせしました。何か進展がありましたら連絡お願いします」鈴木刑事は、やれやれ、といった顔をして、神田と高見にそう言つて、頭を下げ、ドアを閉めた。

「いったいどうなっているんですか？」神田はそう言うと、ドッカ、とソファ―に腰を下ろし、高見にも座るよう促した。^{うなが}

「さあ・・・」と、言いながら、高見も椅子に腰掛けた。

「私も、何も聞いていないので・・・。何だか、ややこしくなってきたなア」そう言いながら、また、白髪頭に手をやった。

「あつー！」神田は椅子から飛び上がった。

「何ですか！ービックリした」高見も、ビクツ、として背を伸ばした。

「これですよ」そう言つて、新聞をめくつて、台風被害の写真のひとつを指さした。それは「富士山頂にも被害が」という見出しで、^{ふじさんほんぐうせんげんたいしやあくみや}富士山本宮浅間大社奥宮の被害状況の写真が載っている所だ。社殿内の被害の様子が写っている。

「へー、今回の台風は大変だったなー」

「そうじゃないですよ。これ、これですよ」そういいながらル―ペを持ち出し、写真をジックリと見た。

「これだ。やっぱりこれだ」

「何なんですか」高見は新聞を覗き込んだ。^{のぞ}

「これですよ。宝物館にあったのは！ー」あの鉄の棒が写真の端のほうに写っている。

「ええ！？なんでまたこんなところに？」

「いいですか。富士山頂の被害は宝物館の一件よりも2日、3日前のことですよ」

「・・・ってことは、同じものが二つあったってことですか？」

「そうなります。今の大使館の連中の慌て方は、^{あわ}大使館もこの記事を目にしたんじゃないですか？」

「それで、帰って来い、って言う指示が出たってことか」

「いったん東京に帰って、どうするつもりだろう？」

「ここ、宮島と同じように外交ルートで、その鉄の棒を頂いちゃうんじゃないですか？もったも、ここ宮島では誰かに先を越されちゃいましたかね」

そう言ってふたりは顔を見合わせて黙った。

その頃、東京新宿のホテルの一室では、大男が新聞を食い入るように見つめていた。

天狗

その日の午後、かみたりゅういち神田龍一と高見刑事は新幹線に乗り込んだ。

「しかし、神田さん。神田さんは、捜査する権限も、する気もないと言ったばかりじゃないですか？」駅弁の包みを外しながら高見はチラツと横に座っている神田を見た。

「台風のおかげで、いろいろと業務もあるんですけど、警察と市から観光推進協会へ要請がくれば、私が動かないわけにはいけないですからね」と、言い訳のような返事をした。

「そう言う高見さんも、この件は警察庁へ移ったと言ってたじゃないですか」神田は弁当を頬張りながら言った。

「いやー、私は、もうじき定年でね、わりと自由にさせてもらってるんですよ。それに、民間人一人に危ない橋は渡らせられませんからね。言ってみれば、ボディガードみたいなものですよ。それに、この一件の担当はもと私ですから」そう言っただ登山ズボンのベルトをゆるめた。

「で、ふじさんほんぐうせんげんたいしや富士山本宮浅間大社さんへは連絡を？」神田は高見刑事に聞いた。

「ええ、本署が連絡をしてくれていると思います。窃盗事件の件で、お話を・・・と。しかし、富士山かあ。体力、大丈夫かなあ。学生時代に一度登りましたがね。もう登ることはないと思ってましたが」高見刑事はお茶を一口飲んだ。

「高見さんは山登りが好きなんですか？」神田もペットボトルのお茶に手を伸ばしながら聞いた。

「いや、昔の話ですよ。わたしの爺さんが山登りが好きでね。家

には爺さんや曾祖父^{ひいじい}さんが山で拾って来た石ところやら木の根っ子やら、何やらわけの分らない物がたくさんありましたよ」と、懐かしそうに答えた。そして、思いついたかのように「定年になったら日本百名山でも踏破してみるかな」と言つと「ははは」と、愉快そうに笑つた。

新大阪を過ぎた頃、

「ちよつと、ここまでの話をまとめておきませんか？」そう言つと神田は、きりつとした眼差しで高見を見た。

「そうですね」高見もそれに静かに応えた。

「まず、あの大男ですが。宝物館^{ほうもつかん}に忍び込む2日前にはビデオに写っていた。その時、たまたま、例の中国大使館の連中と一緒になつた。ここまではいいですね」

「ええ。そして、いったん引き上げ、台風がやつて来るのを知りながら、弥山^{みせん}頂上へ登つて、なにやら、怪しげな行動をして、そのまま、夜までどこかに身を隠していた」高見は箸を持った手を右、左へ動かした。

「展望台^{あるじ}の主の話だと、大きなザックを背負っていたらしいんです」

「しかし、神田さんが見た時は裸同然だったんですよ」神田のほうを見て高見は言つた。

「なぜ、台風の危険を冒^{おか}してまでもその日でなければならなかったのか？普通の日の夜でもいいじゃないですか」そう言いながら、高見を見て同意を待った。

「台風だと、万が一の時に、警察が駆けつけるのが遅くなるとか、逃げやすくなるとか、考えたんですかね？」

「それとも・・・」

「それとも、もう、時間がなかったのか」神田の言葉を次いで高見は言つた。

「中国大使館の連中に先を越される。時間がない。そう思って、

台風の日にやむを得ず侵入した。こう考えられませんか？」神田は再び高見の同意を待った。

「なるほど。それも、その男の国の外交ルートは使えない理由がある。こういうことですね」

「たぶん」

「しかし、たまたまにしても、よくも、あの日、宝物館でかち合ったもんですね」

「あの鉄の棒が展示されているという情報を、同時か、ほぼ同時に耳にしたということじゃないですかね」

「うーん・・・どこから？」高見は弁当から顔を上げ聞いた。

「さあ、それはまだ・・・」神田は、箸を置き、蓋をしながら小さな声で言った。

「シューマイ残すんですか？」神田の弁当を覗き込んで高見は言った。

「え？ええ。最近ちよつとダイエットを・・・」

「じゃ、いただきますよ」高見は箸でつまんで、ポイツ、と口に放り込んだ。

「のぞみ」を名古屋で「こだま」に乗り換え、新富士駅からはタクシーで富士山本宮浅間大社に向かった。
ふじさんほんぐうせんげんたいしや

「さすが、立派なものですねー」高見刑事は、ホーツ、という感じで言った。

富士山本宮浅間大社は全国1300社以上ある浅間神社の総本宮で、駿河の国の一の宮として全国的な崇敬を集める東海最古の名社である。
するが

「残念だなー。本来ならここから富士のお山が見えるんでしょうがねえ」と、高見刑事は本当に残念そうに言った。日も暮れかけ、おまけに上空は雲が流れている。また、雨でも降りそうな気配だ。

境内^{けいだい}に入ると、夕暮れ時にもかかわらず、散歩といった感じの人たちや、観光客の姿もまだ見える。参拝客も多いのであるう、境内の木はおみくじの白い花を咲かせている。砂利の敷き詰められた参道を進み、社務所で案内を請うた。

「はい、聞いています。こちらへどうぞ」巫女^{みこ}さんに案内されて奥の部屋に入った。しばらくして、宮司が現れた。

「お忙しいところ申し訳ございません」神田^{かみた}と高見は立ち上がった頭を下げた。

「いえ、いえ、ご苦勞^{くろう}様です。で、窃盗事件と当社と、どういう関係が？」宮司は少し怪訝^{けげん}な様子で椅子を勧めながら聞いた。高見刑事はこれまでのいきさつをかいつまんで話し、新聞の写真を見せた。

「さようでございますか。これが、宮島さんにも・・・」宮司は、考え込む様子で新聞をテーブルに置き、目を閉じた。

「その、鉄の棒について何かご存知のことがございましたらお教え願えませんでしょうか？」高見刑事は体を前に出しながらたずねた。

「私は、あれが何かは、全く存じていないのですよ。何度か目にした事はございますが。もともとは、あれは、奥宮^{おくみや}にあったものではございません」

「え？すると、どこからか移されたということですか？」

神田^{かみた}の問いかけに、宮司は

「はい、さようでございます。もともと、あれは、富士山頂にあったものでございまして・・・」

「え？山頂に？奥宮は富士山頂じゃないんですか？」

コツコツ、とノックがあつて、職員が入ってきた。宮司は、ドアのほうを振り返りながら、

「はっ、はっ。富士山頂は剣が峰でございますよ」そう言った。入ってきた職員は、

「あの、先ほどのお客様がお帰りになれますが・・・」と言うと、

「あ、そうですか」と、立ち上がりかけると、

「いえ、お見送りは結構です、ということでした」職員はそう言うて出て行った。その間、高見刑事は、自慢げに、

「そうですよ、神田さん。レーダードームがあつたところが富士山頂、剣が峰。日本一のてっぺんですよ」

「そうなんです。知らなかったなあ」神田は椅子に座りなおした。その時、社務所の壁にポスターが貼つてあるのに目がいった。そのポスターには「御鎮座ごちんざ1200年記念事業奉賛会」とあつた。

「これは？」神田は立ち上がり、ポスターのところへ行つて聞いた。

「はい、来年2006年（平成18年）が坂上田村麻呂さかのうえたむらもろ様が浅間あさまの大神様を当地に遷宮せんくうされて1200年の節目の年に当たりますので、その記念事業へのご協力をよびかけるポスターでございます」

「へー。実は、宮島も、空海さんが宮島に渡つて、弥山みせんで修行をし、開基したのが806年ですから、来年2006年が、弥山開基1200年の記念の年になるんですよ」

「はい。そういうお話は伺っています。奇遇でございますね」宮司は、ニコニコしながら応えた。

神田は椅子に戻ろうとして、ポスターの横のスケジュールボードにふと目をやった。その年間スケジュールの中に「厳島神社例祭」と書き込まれているのを目にしたのだ。

「ここにも、厳島神社が？」神田は何か因縁めいたものを感じ始めていた。

「それで、その鉄の棒が剣が峰から奥宮へと移ったいきさつは？」高見刑事が、神田が口を開く前に尋ねた。

「それは存じております」宮司は静かに答えた。

「先ほど刑事さんがおしゃっていらしたリーダードーム。あれが建てられるかなり前のことです。1895年といえますから明治28年のことでございますよ」宮司は引き締まった顔で軽くうなずきながら話を続けた。

「野中^{のなかいたる}至という方が、私財をはたいて、その富士山頂、剣が峰に気象観測所をお作りになられましたましてね。それはそれはご苦労をされ、なにしろ、今でさえ山頂での越冬は大変なことですのに、当時は、まだ、ましな装備もないことでしょうし、日本国のことを心底思つてのことでございますようねえ・・・」そう言つて、袂^{たもと}からハンカチを取り出し目に当てた。

「それで、その鉄の棒は？」高見刑事は質問を続けた。

「はいはい、それで、その観測所を作るために、剣が峰の大きな石を動かしたところ、鉄の箱が出てきたらしゅうございます、その中に、なにやら、御文書^{ごぶんしょ}と一緒に、その、鉄の棒が納められていたらしいのです」お茶を一口飲んで、落ち着きを取り戻し、話を続けた。

「これは、私が直接聞いたことではございませんで、先代の宮司から私は聞いたものですから、確かなことは分かりかねますが、なにやら、そういうことらしゅうございます。そして、野中様は、これは、富士山頂に丁寧^{ていねい}に納められていたところから察するに、富士

山と、よほどのいわく、因縁いんねんがあるものであるものに違いない、とまあ、こんな風に思われたのでございましょうね。先々代の宮司に頼んで、爾来じらい、浅間大社奥宮まつにお祀りさせて頂いていたのでございます」

「誠に恐縮ですが、その、鉄の棒を、捜査協力ということでは、ばらく、拝借はいしゃくできないものでしょうか？」高見刑事は、両手をテーブルに置いて宮司を見つめた。

「私といたしましても、あれが宮島さんと何かの関係があるということが分かりましたし、あの鉄の棒と私どもとの関係が解明できるのであればありがたいことでございます。それに、あれは、もともと、神社庁とはかかわりのあるものではございませんし、後日、返還いただける、ということをお貸しいたしましょう」宮司はニツコリと微笑ほほえんだ。

「ありがとうございます。ご協力感謝申し上げます」神田と高見はテーブルに両手を着けて頭を下げた。

「じゃあ、明日にでも、登ってみますか？神田かみたさん」高見刑事は神田を見て言うと、神田は、

「でも、もうシーズンも終わりましたし、鍵が掛けられているのでは？」そう言って宮司を見た。

「いえ、ちようどよろしゅうございました。明日は職員が、鍵を開けますので」

「と、言いますと？」

「新聞社の取材が急に入りましてね。何でも取材の皆さんは明後日にはお国に帰られるとかで、この台風でスケジュールが大狂いだと嘆いておられましたよ。本来ならば、丁重にお断りするのですが、何しろ、大使館からのたつてのお願いでございまして」

大使館と聞いて、神田と高見は緊張して尋ねた。

「大使館？どちらの？」

「中国でございます」

「先ほど、お車で五合目に向かわれました」宮司は、それが何か、と言う様な顔をした。

「じゃあ、先程の、お客様というのは・・・」神田^{かみた}と高見は顔を見合わせて立ち上がった。

「さようでございます。中国の新聞社の方々でございます」

「何人ですか？」高見刑事が聞いた。

「3名様でございます」

「私どもの職員が一人ご案内役として一緒にさせていただきますいますから、全部で4人でございます」宮司は、両手を膝に乗せて答えた。

「じゃあ、中国人は3人？」神田の顔がやや紅潮した。

「さようでございます」宮司もゆっくりと椅子から立ち上がった。

宮司は思いついたように、

「そうだ。その職員に電話をして、鉄の棒を持って帰るように申し伝えましょう」

そう言つて、懐^{ふところ}から携帯電話を取り出した。

「あ、ちよつとお待ち下さい。その新聞社の男達は何か言っていましたか？」

「いえ。ただ、天気が心配だとか何とか、と、おっしゃっていました。携^{ふく}帯電話を懐に納めながら宮司は言った。

「高見さん、どう思います？」神田は高見刑事の顔を見た。

「今までの流れから行くと、新聞社じゃないでしょう。それにし

ても速攻だな」高見は腕時計をチラツと見た。

「隙を見てその鉄の棒を奪い取る気ですよ、きつと」神田は床に置いたザックに手をかけて言った。

「どういうことでございましょうか？」宮司には事態は飲み込めていない。

「予備の鍵をお貸し願えませんでしょうか？」高見刑事は宮司の顔を見つめて言った。

「それはよろしゅうございますが・・・」

「職員の方には何もおっしゃらないで下さい。私達もこれから富士山に向かいます」高見刑事はザックを抱え、神田と共に、宮司に頭を下げた。

「ところで、先ほど、宮司さんは、あの鉄の棒は、御文書と一緒に、と、おっしゃいましたが、その御文書は今？」社務所から出て裏の駐車場へと歩きながら聞いた。日はもう落ちて、外灯の灯りが境内を照らしていた。

「それは、その鉄の棒が入っておりました箱と一緒に、野中様にご自宅にお持ち帰りになりました。私も聞いた話でございますので、定かではございませんが、なんでも、その御文書は大半が燃えて灰になっていたらしくうございます」宮司はいくぶん顔を傾け神田の顔を見ながら答えた。

「で？」

「はい。ご自分ではどうしようもないので、ある人に分析、解読を頼まれたとか聞いております」

「そのある人とは？」高見刑事は手帳を取り出しながらたずねた。

「いや、これは、定かではございませんので・・・」宮司は言葉を濁した。

「何か不都合なことでも？」

「これは、私どもとは関わりのないことでございますが……」

「？」神田かみたと高見は同時に宮司の顔を見た。

宮司は思い切ったように言った。

「富士文献ふじぶんけんというのをご存知でございましょうか？」

「富士文献ふじぶんけん？何だか聞いたことがあるような、ないような」高見刑事はボールペンで手帳をポン、ポン、と軽くたたきながらつぶやいた。宮司は、それでは、といった風な感じで説明を始めた。

「さようでございますか。富士文献と申しますのは、宮下文献みやしたぶんけん、
とも言われておりまして、日本の太古の歴史が書かれたました龐大ほうだい
な書物でございます」

「あーあ、なんでも、古事記よりも古いとか言われている」高見は、おぼろげながらに思い出した。

「さようでございます。それは、徐福文献じょふくぶんけんとも言われておりまして、そもそもは、古代文字で木片などに書かれていたのでございますが、それを、徐福さんが漢字に書き直されたと言われております」タクシーのやって来る車寄せの方向へ手を軽く伸ばし、神田と高見は宮司に続いてその方向へ曲がった。

「しかし、それは、伝説の類たぐいでは？」神田かみたは聞きにくそうに宮司に言った。

「さあ、それは、私には分かりかねますが、徐福さんが古代文字から漢字に書き直す、まあ、翻訳する、とでも申しましょうか。それを代々手伝っていた家系がございまして……」

「それはいつ頃の話なんですか？」神田は背負ったザックのベルトに手をやり、グイッ、と揺すって背負いなおした。

「いろいろと説はございますが、今から、少なくとも、2000年以上も前のことだといわれております」

「2000年!？」神田は、「そんなことはありえないな」と、思った。

「それで、その・・・エート・・・」

宮司は高見刑事の言葉を次いで、

「徐福^{じょふく}さん。その徐福さんの手伝いをした家系が代々この富士の裾野^{すその}におられました」

「今でも!？」高見刑事は驚いて宮司の顔を見た。

「はい」宮司は自信ありげに答えた。

「今でもですか!？」神田も幾分念を押すように宮司に尋ねた。

「はい。宮下家の遠縁に当たられますが、今は、富士吉田の小さな神社をお守りになっていらっしるお宅がございまして、そちらなら、その御文書の解読ができるのではと、野中様はお思いになられたのでございましょうね」

「で、結局、その御文書には何が書かれていたのですか？」高見刑事は車のライトが近づいてくるのに気がついた。

「あ、タクシーがまいりました」

高見刑事は、タクシーから警察庁の外事課の鈴木刑事に連絡を取った。鈴木刑事によると、東京駅までは確かに一緒だったということだった。

「すると、それからすぐに、やつこさんたち、支度を整えてこっちに向かったということか。よほどあせってるな、これは」

「ですね。だから、今回は警察庁抜きで動き始めたんでしょう」

神田はすれ違う車のライトをぼんやりと眺めながら、頭の中で今回の一件をもう一度整理した。

タクシーは市内を抜け、やがて富士山スカイラインに入った。

「どうも、話が見えてきませんね」神田は、腕を組んで前を見たまま言った。

「どうしてこの一件に中国大使館が絡んでくるんだか？」高見刑事も自分自身に問いかけるようにつぶやいた。

「高見さん。これは？」神田はそう言って、右手の人差し指と親指を立てた。

「ここに」高見刑事は胸のふくらみに手をやった。

「まさかね。まさか、これの出番はないでしょう！？」高見は、そのふくらみを軽く一回叩いた。

「と思いますが。念には念を、ですよ。今回の件は、どこに話が転がって行くか分かりませんからね」

日が落ちて、あたりはすっかり闇に包まれている。時折り対向車とすれ違うが、タクシーの運転手の話によると、六合目までは、観光客でも登れるらしく、まだ山小屋も営業しているらしい。神田たちは、新五合目の「表富士宮五合目レストハウス」に宿泊予約を入れていたが、休憩だけして今夜中に出発するつもりでいた。宮司から、浅間大社の職員は六合目の山小屋に宿泊して、夜中2時頃に出発の予定だと聞いたからだ。

「表富士宮五合目レストハウス」には二階の売店の奥に宿泊者のための部屋がある。神田^{かみた}たちは荷物を置いて一階の食堂へ向かった。腹が減っては戦^{いくさ}は出来ませんからね。それに、体を高度順応させる必要がありますし。高山病をなめたら、痛い目にあいますからね」高見刑事はそう言って蕎麦^{そば}をすすった。

「連中より先にあれを手に入れて、そもそもあれが何なのかを解明しないことには……」神田はそう言っ、窓の外を流れるガスに目をやった。

部屋で2時間ほど横になって、夜11時過ぎ神田と高見はレストハウスを出発した。合羽かつぱを着てガスに包まれている外に出、頂上方向を眺めたが、湿気を含んだガスに阻はばまれて何も見えない。

「あっちもこっちも見えないものばかりだな」高見刑事はストツクのバンドに手を通してながら小さく言った。懐中電灯で足元を照らしながら、一步を踏み出した。六合目までは歩き易い道が続く。じきに合羽の表面は濡れて水滴がつき始めた。六合目の手前で、懐中電灯の明かりをやや絞り気味にして、六合目山小屋「雲海荘うんかいそう」の前を通り過ぎ、左手に曲がり、本格的な登山道に入った。フードを被かぶった神田の耳には、足を踏み出すたびに「ハッ、ハッ」という自分の息と「ジャリッ、ジャリッ」という足音だけが聞こえてくる。

八合目を過ぎたあたりからガスが薄くなり、神田と高見刑事は合羽を脱いでザツクのバンドにくくりつけた。

「これどうですか？」高見刑事はチョコレートかみたの箱を開けて神田のほうに差し出した。

「あ、頂きます」神田は手刀を切るしぐさをして一粒つまんだ。

「あれ？ダイエツトは？」そう言っ、高見刑事は神田をからかった。

「ははっ、登って下りたらカロリーは十分消費してるでしょうから」そう言い、

「あとどれくらいですかね？」とザツクを背負いながら高見刑事に聞いた。

「この調子で行くと夜明け前じゃないですかね」高見刑事は帽子

を取って、上の方に見え隠れする赤茶色の砂礫されきを眺めた。

神田かみたと高見刑事は、最後の鳥居の手前で再び腰を下ろした。ガスは薄くはなつたものの、なかなか晴れない。

「高見さん、頭、大丈夫ですか？」神田はスポーツドリンクを一口飲んで聞いた。高見刑事もドリンクのキャップを外しながら、

「私は大丈夫ですよ。神田さんは？」と神田の顔を見た。

「最近の寝不足がたたって、がんがんします」神田は目を閉じて、頭をゆっくり回しながら言った。

「もう、ヘッドライトはいいでしょう。頭からベルトを外すとだいぶ楽ですよ」高見刑事は自分もヘッドライトを外しながらそう言った。

「そうですね」そう言って、ヘッドライトを外してザックに納め、大きく深呼吸を何度かした。しかし、空を見上げると、まだ、クラツと貧血になったような感じになる。

「さあ、もうじきです。でも、ここからが長いんですけどね」そう言って頂上の方角を見た。

「あ」高見刑事は一方向を凝視している。

「どうしました？」

「人影が。今一瞬ガスの切れ目に人影が見えました」その方向を見据えたまま答えた。

「ひよつとして、連中ですかね？」神田も、高見刑事の視線の先を見つめたが、再び薄くガスがかかってしまった。

「でも、まだ出発してないはずでしょ？」神田は、靴ひもを締めなおし、ザックを背負った。

「いや、いや、それは当てにできませんよ。ともかく、急ぎましよう」

ふたりはピッチを上げて歩き始めた。

頂上の山小屋が見えてきた。幸いなことに、「このガスで気付かれていないはずだ」神田^{かみた}と高見刑事はそう思いながら頂上直下の岩陰に身を隠した。ふたりはここでザックをおろし、身軽になった。

「高見さん、どうしますか？もし、連中が大使館員なら、身分を偽わってまであの鉄の棒を盗もうとしてるようになりますね？」岩に背を押し当てて小さな声で言った。

「新聞社の人間なら、何も問題はないわけですがね」高見刑事も岩に背をつけて神田に並んで座っている。

「こんにちはー、って出て行きますか？大使館員なら何か行動を起こすでしょうし、新聞記者なら、こんにちは、ですむでしょうし」神田は、両手の指と指を胸の前で組み合わせて手袋をギュツ、と締めめた。

「まず、顔を確認しましょう」高見刑事は岩陰から少し顔を覗かせ奥宮入り口付近に固まっている人影を見た。

「間違いないですね。大使館員です。でも、三人だけです。神田の職員はどうしたんでしょうね？」神田のほうを振り返って言った。今度は神田が、少し伸び上がって様子をうかがった。

「あれっ、なんだか、慌^{あわ}ててますよ。どうしたんだろう？」

三人は、ますます慌てた様子で、鳥居と奥宮の間に散らばって周辺をあちらこちらに目をやっている。

「どうしたんでしょう？」神田と高見刑事は再び岩陰に身を隠した。

男達の声が大きくなって、一か所に固まっているようだ。神田^{かみた}と高見刑事はゆつくりと覗いた。男達は奥宮の屋根の上を指差し、口々に何やら叫んでいる。ガスの流れが早くなってきた。屋根の上に何か黒いマットのようなものが置いてあるのが見えた。男達は、そのマットに向かって、必死に何か叫んでいる。風で、サーッとガスが流れ去った。黒光りしているマットは、奥宮^{おくみや}の屋根の上で、ムクムクと動き始め、風にあおられて大きく広がった。

「あつー！」

「どうしました？」

「あいつだ」

「えっ、宮島の大男？」

「そうです。奴だ」

マットだと思ったのは黒い男の体であった。その男は、富士宮浅間^{ふじのみやせんげん}大社奥宮の屋根の上に大きく立ち上がった。宮島の時と同じく裸だ。背中にはザックを背負っている。中国大使館の男達は、男の巨大さに圧倒されたかのように、一、二歩あとずさりした。男は鉄の棒を握り締めた右手をゆつくりと上げ、口にくわえた。かと思った瞬間、ポーン、と郵便局の屋根に飛び移り、そこから下に飛び降りて、剣が峰方向に走った。

神田と高見の視界からは山小屋の陰になって大男の姿はあつという間に見えなくなった。大使館員たちは、ザックを放り出して、後を追いかけ始めた。

「まるで猿か天狗だな」高見刑事はつぶやいた。

その時、

「パーン！！」という乾いた音が鳴り響いた。

「トカレフだ」高見刑事は目を光らせ、小さく言った。

「あの銃声はトカレフものだ」

男達の足は速かった。とても普通の大使館員とは思えない。しかし、大男はもつと速い。見る見る距離をあけている。神田と高見刑事も必死で後を追いかけた。神田は、ガスの合間から見える富士火口をチラと見やり、「まるで地獄の釜だ」と思いながら前方200mほど先の大使館員達を目で捉えた。そして、さらに先に行く大男が「馬の背」と呼ばれる急勾配の登山道を苦もなく駆け上がったのを見て、改めてこの男の尋常でない運動能力に驚嘆した。

大使館員たちもようやく「馬の背」の取っ掛かりに着き、登り始めたが、ザラ、ザラと崩れる火山岩の砂礫されきに足を滑らせている様子が見える。再び、「パーン」と音がした。

「高見さん、ハア、ハア、大男はどこへ行くつもりでしょう？ハア、ハア・・・」息を継ぎながら神田は高見に聞いた。高見刑事も「ハア、ハア、あの先は剣が峰ですけど、そこから先は、ハア、ハア、断崖絶壁ですよ。ハア、ハア・・・」

再びガスがかかってきた。時折り、空全体が、パパツ、と光る。

大男は、「馬の背」を登り切り、階段を駆け上がって、気象観測所の建物の上上がった。大使館員達もようやく「馬の背」を登り切って、気象観測所への階段に足を掛けた。大男はまるで大使館員たちを待ち受けていたかのように観測所の屋根の上に立っている。宮島でカクと名乗った男が右目だけを異様に大きく見開いて、右手に握ったトカレフを大男に向けて何か言った。大男は鉄の巻物をくわえた口の端を上げて嗤わらった。もう一度カクが何かを言って左手でトカレフを支え、腕に力が入った時、空が再び、ピカツ、と光った。

大男は空に向かって飛び降りた。

「パーン」「パーン」二発の銃声が響いた。

男達は、中国語特有の甲高い声で何やらわめきながら観測所の屋根に上がり、大男が飛び降りた方向を見た。

大男は雲に向かって落ちていく。

神田たちには剣が峰で何が起きているのか分からなかった。

男達の喚き声わめと銃声で、ただ事ではないことが起こっている、それしか分からなかった。「馬の背」をようやく登り終え、お鉢巡りと呼ばれる火口周遊ルート方向へ少し下ったところに身を隠した。このならガスで見えないはずだ。男達は、何やら叫びながら階段を駆け下り、ザーツ、ザーツと音を立てて「馬の背」を転がるように下っていた。

神田と高見刑事は「馬の背」を登りきったところまで戻って観測所の建物のある剣が峰頂上へ上がろうとした。その時、観測所の向こう側のガスがサーツと晴れて、巨大な鳥が風に乗って舞い上がって来た。それは、ゆっくりと大きく旋回し、雲に映ったその影はまるで巨大な鳥からすのようであった。

「カメラ！！」高見刑事は神田かみたに向かって叫んだ。神田はポケットから携帯電話を取り出し、「パシャツ、パシャツ、パシャツ」レンズを大男に向けて3回シャッターを切った。

大男は、巧みな操作で風に乗し、駿河湾方向へ飛んでいった。その姿も写真に撮り続けた。神田は、無言で、男の姿が黒い点になるまで見続けていた。高見刑事は警察庁の外事課の鈴木刑事に電話をかけ、状況を報告している。

「外事課はなんて言っていました？」

「中国大使館に、今回の件の報告を求める、それだけです」携帯をパチツと折畳みながらそう言った。

「あの大男のことは？」

「山頂から民間人がパラグライダーで飛び降りたぐらいではへりは出せない、とさ」ポケットに携帯を納めチヨコレートの箱を取り出した。

「ま、そうでしょうね」神田は、高見刑事が差し出した箱からチヨコレートを一粒つまんで口に放り込んだ。

「猿からかいす鳥に変身つてわけか・・・」高見刑事は大男の消えた方向を見つめながらつぶやいた。

神田かみたと高見刑事は、3時間かけて5合目まで下りた。山頂では晴れ間も見えていたが、5合目は依然ガスに覆われて、山頂の姿は見えない。観光客を乗せて来ていたタクシーに乗り、富士山本宮浅間ふじさんほんぐうせんげん大社たいしゃまで戻った。

高見刑事は、拳銃発射の件や大男が剣が峰から飛び立ったことは伏せて、何者かが、中国の新聞社の人間が着く前に、奥宮おくのみやの扉を壊して鉄の棒を盗み出し逃走したことだけを宮司に話し、被害届を出すことを勧めた。

「私どもの職員も五合目で新聞社の方々からそのように聞き、連絡をよこしましたが、本人は、体調が優れないとのことなので先ほど帰宅させました。今、ちょうど、状況確認のために職員を奥宮様に向かわせたところでございます。何とも恐れ多いことでございます。しかし、おふたりともご無事で何よりでした」宮司は、ふたりにお茶を勧めた。

「職員からの報告によりますと、昨夜、山小屋で、新聞社の方々と食事を済ませ、床に就きましたら、ぐっすり眠ってしまい、途中、新聞社の方々から早めに出発したいと、お申し出があったそうですが、なんとも体が動かないので、鍵だけお渡しして、本人は新聞社の方々が下山されるまで山小屋で休んでいた、と、まあ、こういうことでございました。いやはや、新聞社の方々には、申し訳ないことをいたしました」そういいながら、恐縮して肩をすぼめた。

「！」神田と高見刑事はお互いの目を会わせた。

「それに、神職にあるものが、軽々しく鍵を渡すなどとは・・・。何とも申しようがなく・・・」宮司は恥ずかしさと無念さで膝の上でハンカチを握った拳を握り締め、

「ただ、ただ、ご本殿に無礼なことが無かったことをお祈りするばかりでございます」そう言っ頭を下げた。

「新聞社の方々は、帰国の準備があるので、と、五合目でタクシ―に乗られて新富士宮駅に向かわれたようでございます」

「そうですか」そう言っ、神田と高見刑事は顔を見合わせた。

「ところで、昨夜の話の続きですが」高見刑事はお茶を一口すり宮司に聞いた。

「話の続き、と申しますと？」

「その、御文書には何が書かれていたのか、ということですが」高見刑事はポケットから手帳を取り出した。

「あー、それは私も直接見たり、聞いたりしたことではございませんで、おとぎ話のようなことが書かれていた、ということだけしか」宮司はハンカチを膝の上に置き、湯飲みを両手で持った。

「おとぎ話？」神田は湯飲みをテーブルに戻した。

「内容についてどなたかご存知の方はいらっしやいませんか？」高見刑事は続けて尋ねた。

「それはどうでございますか？野中様はご長寿で、確か、昭

和の30年（1985年）、89歳で天寿を全うされたとお聞きしていますが、生前、その内容については一言も触れていらつしやいませんし、また、解読した家系の方々も口外していらつしやらないということです。それに、その鉄の箱と御文書は既にあると思いませんが」と、困ったように二人を交互に見つめた。

「既にある？と言いますと？」神田と高見刑事は、宮司の顔を見

た。
「はい。その鉄の箱と御文書はその解読をした神社様から野中様のお手元に返され、しばらくは野中様がご自宅で保管され、その後、不幸なことに、戦時中の空襲で、写しや、資料は焼けてしまったと聞いております」

「はい、そうですか」高見刑事は、何度かうなずきながら背もたれに背中を倒した。

神田は、いくぶんかの期待を持って、

「野中さんのご家族の方はその鉄の箱の件は？」と尋ねたが、
「内容につきましては、まったくご存じないと思います。何しろ、野中様ご自身、その件に関しましては、その後一切口にされなかったようでございますから」と、宮司も申し訳なさそうに答えた。

神田はさらに、

「失礼ながら、こちらの先代、あるいは先々代の宮司さんは、御文書の内容をご存知では？」と、尋ねたが、

「存じてなかったと思います。仮に存じ上げておりましたも、その様なこと、軽々しく口にすべきものではありません」宮司は幾分顔を赤らめて言葉を強めた。神田はやや狼狽しながら、再び宮司に尋ねた。

「では、その鉄の箱に入っていた御文書の分析解読をされた神社さんにはその御文書の控えとか、書き写したものなどは残っていないでしょうか？」

「どうぞございましょうか、終戦後、進駐軍は多くの神社の招魂碑んひなどの施設や書き物を破壊、没収しましたが、その時に、そちらの神社様もかなり大掛かりな搜索を受けたと聞いていますので」宮司は少し腹立たしそうに言った。

「大掛かりな？」

「はい。その神社様は、こう言うては何でございますけれども、非常に小さな神社様でして、そこに大勢の進駐軍が押しかけたものですからご近所の方も驚かれたと聞いています」

「ほー」高見刑事は興味深げにその話を聞いていた。

「それで、その神社さんはどちらでしょうか？これから伺えればと思います」神田は体を前に傾けながら尋ねた。

「はい。それは富士吉田の八頭神社様はつとうじんしゃでございます」宮司は両手を膝にそろえて言った。

「その八頭神社さんのご住所は？」高見刑事は手帳とボールペン持ったまま、体を前に倒し尋ねた。

「しばらくお待ちくださいませ」そう言つと部屋を出て行った。

「神職というものはいろいろとしたりがあつて難しいですね」高見刑事は顔を伏せたまま小声で言った。

しばらくして、宮司がメモを手に戻ってきた。

「こちらがご住所でございます。少し分かりにくいと思いますので、このお近くでどなたかにお尋ねくださいませ」宮司は、メモ用紙を高見刑事に渡しながら言った。

「ありがとうございます。さつそく、お伺してみます。それと、これから、何かございましたら、ここに連絡をお願いします」高見刑事はそう言つて胸のポケットから名刺を出し、宮司に手渡した。

神田^{かみた}と高見刑事は新富士宮駅前でレンタカーを借り、東名高速を使って富士吉田の、宮司から教えられた住所に向かった。何度か迷っても辿り着けない。

「確かこの辺り^{あた}のはずですけどね」

「あ、あの人に聞いて見ましょう」高見刑事は助手席の窓を開けた。

「恐れ入りますが、この辺りに八頭神社^{はつとうじんしゃ}さんがあると聞いて来たんですけど、ご存知ありませんか？」

「あーあ、八頭社^{はつとうしゃ}さんならそこを曲がった突き当りですよ。こんもりとした森が見えますから、その中です」年配の買い物帰りといった風の女性が指を指しながら教えてくれた。

「ありがとうございます」

高見刑事は女性に頭を下げ、パワーウィンドウのスイッチをパチツと押すと、神田を見て

「どうやら地元では八頭社^{はつとうしゃ}さんと呼ばれているみたいですね」と言った。

「確かに、これでは分かりませんね」神田はハンドルを切りながら前方の背の高い木が集まっている一画を見た。道端に車を停めて石の階段を10段ほど登ると、椎^{しい}や榎^{かし}の木に覆われて薄暗い道の奥に小さな神社が見えた。小さいのは社殿だけではない、鳥居も2m足らずの高さしかないし、狛犬^{こまいぬ}もまるでミニチュアといった感じで、高さは30cm位しかない。一對の狛犬は腰の高さほどの石の台座の上に座っている。しかも、鳥居の外にあるのが普通だが、この狛犬は鳥居の内側にある。

「神社というより祠^{ほこ}といった方がいいですね」神田は高見刑事を

振り返って言った。右隣に小さな民家がある。

「ごめんください」

高見刑事は、擦りガラスのはめ込まれた木の引き違い戸を叩いたが返事はない。特に表札らしいものも出ていないが、社務所として使われている気配はある。

「留守みたいですね」高見刑事は携帯電話を取り出して、富士宮ふじのみや浅間大社の宮司に電話をかけ、連絡先を尋ねた。

「あいにくとそれは分かりかねますが、心当たりにお聞きしてみましよう。分かりましたら、ご連絡差し上げます」という宮司の返事であった。

「いろいろとご面倒をおかけしまして申し訳ございませんが、よろしく願います」

神田は、高見刑事が電話をしている間に携帯で神社の写真を撮っていた。御祭神は浅間大菩薩せんげんたいぼさつと木花之佐久夜毘売命このはなのさくやひめのみこととあった。

「今回は引き上げですね」高見刑事は右手で左肩を揉みながらそう言い、車の方へ向かって歩いて行った。神田も何度か振り返って神社を見ながら後に続いた。

鉄

2005年（平成17年）9月 宮島

富士山から帰った翌日の午後高見刑事は宮島観光推進協会の事務所に現れた。

「どうですか、神田さん。^{かみた}よくお休みになりましたか？」高見刑事はいくぶん眠そうな顔で椅子に腰掛けた。

「もう、グッスリです。それに、もう、出勤前には山を走ってきました」神田はいくぶん右足を引きずりながらコーヒーサーバーのところへ行った。

「ほう、それは大したもんです。まだ、若いですね」高見刑事も足をさすりながら神田を眺めている。

「当たり前ですよ」いく分自嘲気味に言って顔を引き締め「ところで、何か進展でも」カップにコーヒーを注ぎながら尋ねた。

「たいしたことじゃありませんが。例の中国大使館の三人組、今朝、成田から帰国したそうです」白髪頭に手をやった。

「えっ、そんな簡単に出国できるんですか？」コーヒーをテーブルの上において、高見刑事のほうに押し出した。

「ま、そんなもんですよ」高見刑事は投げやりにそう言う「今日は、ちよつと、神田さんと推理ごっこをしようと思いましたが」と、話を変えた。

「そうですね。ここまでの話をまとめておきましょう」神田もそれを考えていたところだった。

「えーと、まず、ここまでの事実から行きましょうか」高見刑事は手帳とボールペンをポケットから取り出し、話し始めた。

「宮島の鉄の棒は枕崎台風の時の土砂崩れで山頂から流されてきたという可能性もありますよね。ということは、鉄の棒は宮島の山頂、そして、もうひとつは富士山頂にあった、ということになりま
すね」高見刑事はさらに、

「そして、今は、その二つとも何者が分からない大男の手元にある」と、大きく息を吐いた。

「それを何故だか中国も狙っている」神田は付け加えた。

「宮島と富士山。この共通項は？」高見刑事はそう言って神田の顔を見た。

「両方とも信仰の山ですよ」神田は腕組みをして答えた。

「宮島にはもともと社殿はなく、島そのものが信仰の対象となつて、対岸から拜まれていましたし、富士山も山そのものが信仰の対象だったらしいですからね。今の富士山本宮浅間大社に遷座される前の神社は山宮浅間神社として現存していますし」神田はこれまでに調べたことも高見刑事に話した。

「来年がその遷座されて1200年に当たる年だと言われている
したね」高見刑事は、富士山本宮浅間大社の社務所に貼ってあったポスターを思い出した。

「そうですね。そして、単純に言って、宮島は海の神、富士山は山の神」

「御祭神は市杵島姫いちきしまひめをはじめとする宗像三神むなかたさんしんの女性の神様、そして富士山も木花咲耶姫このはなさくやひめという女神。でしょ？」高見刑事は確認するように神田に聞いた。

「それに、木花咲耶姫このはなさくやひめは富士山の噴火を鎮めるために祀まつられた水の神でもありますよ」神田は付け加えた。

「へー」高見刑事は、感心したように何度かうなづいた。

「昔、富士山が大噴火をしたため、周辺住民の生活が疲弊したのを第11代垂仁天皇が心配して、あさまのおおかみ浅間大神を祀ったところ、噴火が静まり、住民は平穏な日々が送れるようになったということです」

「その浅間大神とは？」
あさまのおおかみ
このはなさくやひめ

「木花咲耶姫と同一とみられているようですね」

「両方とも水の神様か」高見刑事は両手を頭の後ろで組んだ。
その時、宝物館の館長が入ってきた。

「ああ、刑事さんも一緒にしたか。ちょうどよかった」そういつて宝物館の館長は空いている事務椅子を引き寄せ、それに腰掛けた。

「ありましたよ」そういつて封筒からファイルを取り出した。

「何ですか？」神田は、カップにコーヒーを注ぎながら聞いた。

「例の鉄の棒のエックス線写真です」ファイルに挟まれたやや古びた写真を取り出した。

「どこにそんなものが？」高見刑事は館長の手元を覗き込んだ。

「発見者の自宅にですよ。あれはまだ、正式には調査されていないのです。当時の発見者が、戦後何年かして、あの棒が何なのか知りたくて、知り合いの医者に検査を頼んだらしいんですよ。そのときの写真です」そういつて、テーブルの上のコーヒークップを端に寄せ、

「鉄の棒には間違いはないようですが、中に、ほら、ここに、矢のような影が見えるでしょ？」

「矢？弓矢の矢？ですか？」

「そんな風に見えますね。その矢のようなものを鉄で封じ込めて、さらに表面を鉄の板で巻いてある、こういうことのようなですね。た

だの鉄の棒じゃなかったんです」

「年代とか、表面の文字だか模様だかの意味は？」

「分かりません。あるのは、この写真だけですから」

「矢を鉄で固めて棒状にした？何のために？」

神田^{かみた}、高見刑事、宝物館^{ほうもつかん}館長、三人とも腕組みをして押し黙った。

神田は、テーブルの上の写真をもう一度手に取り、

「矢というのはこんなになっているんですか？」館長に尋ねた。

「はい、正確に言うとはこれは矢尻ですね。これが矢の柄の部分に入っていて、たとえば身体に突き刺さった矢を引き抜いても、先この部分、矢尻は固定されていないので身体に残る仕組みになっているんですよ」自分の身体に、高見刑事の手から取ったボールペンを当て、身振りを交えて説明を始めた。

「この矢尻の形は、おそらく戦闘用の柳葉^{やないば}と言われるものでしょう」

「いつごろのものでしょうか？」高見刑事は神田から写真とボールペンを受け取り、写真を見ながら聞いた。

「鉄を分析すれば分かるんですが、これだけだとなんとも。

平安以降だとは思いますが」館長はコーヒークップを手にして答えた。

「平安。源平か」神田は体を起こして高見刑事の方を向いた。

「さっきの続きですが、平氏の宮島、源氏の富士山とも言えますね。頼朝は、鎌倉から富士山を見つめていたでしょうから。富士の裾野で狩を楽しんでいたし、当時は今と違って気温は何度か低かったでしょうから富士山も雪に覆われている期間も長く、雪の量も多かったでしょうからね。頼朝の頭の中には白く輝く富士山が印象深

く残っていたと思いますよ。紅葉を白く覆ってゆく雪に自らの思いを重ねたという可能性はあるんじゃないでしょうか？」

「朱^{あけ}の大鳥居と雪を被った富士山。平氏の赤に対抗して源氏は白を御旗の色にしたのかな？」高見刑事は腕を組みなおした。

「何の話ですか？」コーヒを一口のみ高見刑事の顔を見た。

高見刑事は、捜査に協力を求める必要もあると考えて、富士山の出来事を宝物館館長に話した。

「なるほど、宮島と富士山の共通項ねえ。確かに、西、東、赤、白、女神、平清盛、源頼朝、ここまでは話に繋がりがあるように思えますが、それらと鉄の棒がどうして宮島の弥山^{みせん}と富士山頂にあったのか、それと、中国との関係は？」館長は大きな目で高見刑事を見つめた。

「そこになると皆目^{かいもく}謎ですね。さらに、あの男が絡^かんでますし。あつ、ところで、神田^{かみた}さん、写真、プリントアウトしてもらってますか？」

「ああ、はい」神田は事務服のポケットから写真を数枚取り出し、テーブルの上に一枚ずつ並べていった。

「これです。画素が荒くて、おまけに、ブレてますからはっきりとは写っていませんでした」

「ちよつと拝見。何ですか？このパラグライダーは？真つ黒ではっきり分かりませんが、登山者ですか？」館長はそのうちの一枚を手にとった。

「いや、あの、どうやらこの男が宝物館の鉄の棒を奪った奴だと思われませんが」高見刑事は館長から写真を受け取り、それを見つめながら言った。

「しかし、真つ黒でまるで烏^{からす}が飛んでいるようですね」館長は、

その写真を高見刑事に渡しながらつぶやいた。

「でも、神田^{かみた}さんが奴と会った時は黒くなかったんでしょ？」高見刑事は神田に尋ねた。

「ええ、たぶん黒く塗っていたのが、あの雨で落ちたんじゃないかと・・・」

「なるほど。でも、体を黒く塗る必要がどこにあるんですか？」高見刑事は写真から神田へ目を移して聞いた。

「闇夜の烏って言うじゃないですか。目立たなくするためでしょう」神田は写真に目を落としながらコーヒーをすすった。

「それなら、裸になる必要はないんじゃないですか？」高見刑事はさらに疑問を口に出した。

「あの・・・」館長が口を挟んだ。

「はい？」高見刑事は館長を見た。

「宮島の神使^{しんし}は烏^{からす}ですよ」

「神使^{しんし}というത്？」高見刑事は館長の顔を見つめた。

「神様のお使いですよ。春日大社の鹿とか、八幡神社の鳩とか」

神田^{かみた}は、そう言いながら、富士山本宮浅間大社の神使は猿だということを出した。「烏男^{からすおとこ}と鉄の棒、宮島、富士山、どういう繋がりがあるのだろうか？」そう思いながら、神田は目を閉じて高見刑事と館長の会話を聞いていた。

「宮島は、鹿でしょ？」高見刑事は驚いたように聞いた。

「一般には鹿ということになっていますが、宮島の言い伝えでは、神社の創建には烏^{からす}が非常に大きな役割を担^{にな}っているんですよ」神田^{かみた}はテーブルの上の写真を整理しながら言った。

「といいますと」高見刑事は説明を求めるように館長を見た。館

長は、大きな目を見開いて説明を始めた。

「宮島に神社が最初に創建されたのは推古元年、593年のことです。でも、そもそも宮島に神社を創建するきっかけになったのは、この地方の豪族、佐伯氏が市杵島姫命いちきしまひめのみことから宮島に神殿を作るようご神託たたくを受けられ、そのことを推古天皇様に奏上されたのがはじまりです」そう言って、コーヒーカップを手を取った。

「天皇様に宮島に神殿を創建させて頂きたい旨を奏上そうじやうしている際に、市杵島姫命のご神託どおりかみすに烏が榊さかきをくわえて宮廷に現れ、天皇様も痛く感動され、神殿を作ることを許可された、ということですよ」

「へー」高見刑事もコーヒーカップに手を伸ばした。

「そればかりでなく、神殿を造営する場所も、烏かみすの導きによつて今の厳島神社のある場所に決められたのです」館長は、ここまで言つて、コーヒーを一口飲んだ。

「宮島では、何百年もの昔から今日まで、その故事に倣いなづお烏喰おとぐい式じきという行事が行われているんですよ」神田かみたは館長の説明に付け加えた。さらに、

「当時、神殿の造営場所をどこにするか決める際に島を船で廻つたのですが、この行事は、その時と同じように島を廻るのです。そして、途中で、弥山みせんから飛んでくる烏かみすに団子を食べてもらうのです。今でも烏は、団子を食べに飛んできます」

「へー」高見刑事には初めて聞くことばかりであった。

「言い伝えでは、佐伯氏が神社の場所を決める際にも、烏かみすが弥山みせん山頂から飛んで来て団子を食べ、そのまま船を今の厳島神社の場所へ案内したということです」

「厳島神社の入り口、東回廊の手前の灯籠には、その言い伝えに倣ならつて烏かみすがとまっていますよ。このことに気が付かれる方は少な

いのですがね」

「弥山^{みせん}から烏^{からす}が飛び立つ、・・・」

神田は、あの大男は、富士山の剣が峰から飛び立ったのと同じように弥山^{みせん}山頂からもパラグライダーで飛び立ったことは間違いないだろうと思った。

「山頂のレストハウスの主^{あるじ}が見た時は男は大きなザックを背負っていた。それが、俺が会ったときには何も持っていなかった。台風の前日、弥山山頂の岩場のどこかにザックを隠して、鉄の棒を奪った日か、その翌日には山頂から脱出したのだろう。しかし、その後はどうやって富士山まで行ったのか？誰かの協力なくしてはとも出来そうにないが・・・」そんなことを考えていた時、高見刑事は立ち上がった。内ポケットから携帯電話を取り出し、窓際に移動して話し始めた。

「はい、高見です。・・・ああ、これはどうも、昨日はお世話になりました。・・・はい、・・・あ、そうですか。それは助かります。・・・では、近日中に、またそちらへ伺い、・・・え？・・・こちらへですか？・・・それはまた、・・・で、お名前は？・・・」
「どうやら富士山^{ふじさん}山本宮浅間大社の宮司からのようであつた。

「じゃあ、私は、これで。写真はお預けしておきますから」そう言つて館長は立ち上がり、ドアの方へ向かった。

「ありがとうございます。いろいろ助かりました」神田は椅子から立ち上がり、頭を下げた。高見刑事も電話で話しながら、館長に頭を下げた。

「宮司さんからですか？」

「ええ、あの、八頭神社はつとうじんじやの宮司さんと連絡が取れたようです」高見刑事は携帯電話を閉じてポケットに納めた。

「ああ、それは良かった。で、どちらに？」

「お住まいは、あの神社の近くのマンションらしいです。宮司さんはそこから神社の社務所に通っておられるとか」

「じゃあ、近々またあちらに・・・」

「いや、それが、こちらに来ていただけるようです。旅行のついでだからということらしいです」

「それは、好都合ですね。いつ？」

「明後日の午後2時頃、この事務所を訪ねられるとかで、もう、あちらは発たれたようです。私も時間に合わせてこちらに伺います」

「ところで、神田さんかみた、ダイエット中の神田さんにピッタリの料理屋さんがあるんですが、今晚どうですか？」そう言いながら、コーヒーカップを持った手を軽く上へ上げた。

「いいですね。どこにあるんですか？」

「廿日市はつかいちの駅前通りです。広電の電車で行けばすぐですから。私は時間まで島内を観光しています。ちょっと、調べたいこともありますし。コーヒーご馳走様でした」高見刑事はそう言って立ち上がった。

「じゃあ、5時過ぎに、フェリー乗り場ということで」神田も立ち上がり、右手を上げた。

その日の夜7時前、神田と高見は広電廿日市ひろでんはつかいちで下車し、商店街をJR廿日市駅方向へ歩いていった。

「学生時代とくらべると、この通日も何だか寂しくなりましたね」神田は、時間もさほど遅くはないのに、すでに人通りのなくなっ

た商店街をきよきよと見ながら歩いた。店の様子も随分変わっている。

「学生時代って言うと、大学？」高見刑事は神田の方を振り向いて聞いた

「いえ、高校時代です」神田は商店の看板を見ながら返事をした。「じゃあ、神田さんは生まれも育ちも広島ですか？」高見刑事は歩道脇にある石の階段をいくぶん足を引きずって下りていった。

「そうです。高校も地元ですし、大学も広島ですから。大学を卒業して今の宮島観光推進協会に勤めましたからね」神田も高見刑事の後に続いた。

薄暗い小路の奥に小さな、飲み屋風の入り口が見える。濃い弁柄べんがら色に塗られた引き戸は腰から上には障子紙が貼ってあり、縄のれんを通して電球色の灯りがもれている。軒下の赤提灯には、くずした平仮名で「おとみ」と書いてあった。

「ここにはよく？」

「いや、年に一回くらいですかね」そう言って、ゴロゴロっと引き戸を開け、高見刑事は入って行った。

神田かみたも後ろに続き、後ろ手で戸を閉めた。重そうに見えた戸もそれほどでもなく、ゴロゴロ、トンツ、と閉まった。

店内はやや薄暗く、突き当たりのカウンターは6席くらいで、若い男性客が端で日本酒を飲んでいる。三和土たたきの土間には一畳ほどの大きさの木のテーブルが2枚置かれ、木の丸椅子が、それぞれ5、6脚その周りに置いてある。左奥には畳の小部屋もある。その小部屋にも一畳くらいの大さのテーブルが置いてあり、サラリーマン風の中年の男性客が三人、何やら小声で話しながら食事をしていた。

カウンターの壁には、こういう場にはそぐわない神棚が祀つてある。

「神田^{かみた}さん、こっちへ」高見刑事は神田を手招きしてカウンター席へ呼んだ。

店主が手ぬぐいの鉢巻を取り、

「こりゃ、どうも」と、挨拶にやって来て、深々と頭を下げた。

「やあ、久しぶりだね。その後どうだい？」高見刑事は右手を軽く上げて椅子に腰掛けた。

「まあ、ぼちぼちでござんすよ」店主は鉢巻をはげた頭に閉めなおした。やや長めの白髪が後頭部で垂れた独特の髪形をしている。見ようによっては注連縄^{しめなわ}にぶら下がる紙垂^{しで}のようにも見える。60を少し出たくらいであろうか。

「しかし、お久しぶりでござんすね。一年振りくらいでござんすようか？旦那もお変わりなく？」男はいくぶん前かがみになり尋ねた。

「ござんす？・・・」神田はチラツと高見の顔を見たが、高見は、「ああ、ありがとう。何とかね」と、神田の視線は無視した。

「そいつは良^よござんした」

「おい、おとみ、高見の旦那がお見えになつたぞ」暖簾^{のれん}の奥へ声をかけた。

「まあ、まあ、これは高見さん」暖簾をくぐって品のよさそうな女が前掛けで手を拭き拭き出てきた。

「奥さんもお変わりなく」

「お蔭様で、貧乏暇なしです」手ぬぐいで神田と高見刑事の前のカウンターを拭きながら答えた。

「それが一番だよ」

「ところで、今日は何か？」男は、女将から受け取ったオシボリ

をカウンターに置きながら不安そうに聞いた。

「いや、いや、ちよつと鉄さんの顔が見たくなつてね」

「へへ、こりや、面目ねえ」そう言つと、安心したかのように右手を頭にやり、軽く頭を下げた。

「で、こちらさんもやつぱり」と高見刑事を見たまま聞いた。

「いやいや、こちらはちよつとした知り合いで」高見刑事は大げさに手を顔の前で振りながら答えた。

「神田かみたといいます」神田はオシボリで手を拭きながら頭を下げた。

「へい、こりやご丁寧に、山田鉄男と申しやす」男は恐縮したように深々と頭を下げた。

「あつしゃ、また、こちらさんも高見さんと同じ業かと」高見刑事のほうへ向き直つて言つた。

「そんな風に見えますか？」神田は笑いながら言つた。

「へい、その拳こぶしや肩の張り具合は素人さんには見えやせんぜ」山田と名乗つた板前は神田の体をしげしげと見て低い声で言つた。

「おい、おい、相変わらず、深読みするねえ」高見刑事も笑いながら言つた。

「へへ、こりや、面目ねえ」山田は右手を頭にやつて再び頭を下げた。

「とりあえず、熱爛あつかんを。神田さんいいですか？」高見は神田に聞いた。

「はい。いいですね」そういいながら、改めて店内を見渡した。壁は漆喰しっくいで仕上げてあり、腰板はこれも、濃い目の弁柄仕上げた。店の真ん中には太い柱が建つており、天井には、煤すすけた梁はりが1本渡してある。古民家の材料を使った建て方のようだ。

「へい。承知いたしやした。おい、おとみ、高見の旦那に熱爛を」

山田は奥に声をかけた。

「あいよっ」奥から元気のいい声が返ってきた。

「で、今日は何をお出しいたしやしょう？」山田は包丁を拭きながら尋ねた。

「そうだな」そう言つて壁に貼られた品書きを眺めて、

「神田さんは？」と神田に声をかけた。

「えーと」と言いながら品書きを見てもそこには判読不明の漢字が並んでいた。

「高見さんのおすすめに従います」

「じゃあ、鉄さん、コースで頼むよ」

「へい、承知いたしやした」そう言つとすばやく料理にかかった。

「どういふお知り合いなんですか？」神田は顔を伏せて小さな声で尋ねた。

「あー、まだ、私が若い頃ね、彼も若くてね。いろいろあつて」と、意味の分からない返事をした。

「そうですか」と、神田もそれ以上は聞かなかった。

「お待ちせをいたしました」女将さんが徳利と杯を運んできた。やや大ぶりの徳利に、これも大きな杯だ。白和えが突き出した。

「ごゆっくりどうぞ」女将さんはそう言つて奥に引込んだ。

「ま、一杯」高見刑事は神田に徳利を向けた。

「ありがとうございます」杯を両手で持つて受けた。

「どうぞ」神田は高見刑事から徳利を受け取り、高見刑事に酌をした。

「「このお酒は出雲の酒ですよ。まるみがあつておいしいですよ」高見刑事も杯を両手で持つて酌を受けた。

「じゃあ、お疲れ様でした」杯を上へ上げ、それから、ふたりともグビツと杯半分くらいを飲んだ。

「うーん、うまい」と、神田^{かみた}は言い、杯を下ろした。

「でしよう、さばけもよくてね」高見刑事は自慢げに神田の顔を覗き込むようにして言った。

神田は突き出しに箸をつけた。さいころに切られた柿に、塩で味付けされた白和えが程よく合い上品な味だ。

「へい、お待ち」山田がカウンターの上に料理を出した。

「茄子のなめこおろしがけでござんす」

「へー、おいしそうですね。大將は、この道長いんですか？」

「へへ、面目ねえ。包丁持ったのは、随分と昔のことでござんすがね・・・へへへ。もっとも、その時分にゃ、野菜は切っちゃいませんでね」

「鉄さんは、昔は匕首^{あいくち}の鉄と呼ばれて、その筋じゃちょっとした有名人だったんですよ」料理に箸をつけながら高見刑事は言った。

「へへ、面目ねえ。若気の至りってやつでござんすよ」山田は顔を上げずに次の料理にかかっている。

「何だか訳ありですね」そう言つて高見刑事に酌をした。

「いやー、たいした訳なんぞありゃせん。その道から、お救い下すつたのが、こちらの旦那でござんすよ」

「へー」そういう繋がりだったのか、と、ふたりを見た。

「いいのかい、そんなにペラペラしゃべっても」神田に酒を勧めるように徳利を持った。

「へへ、良ござんすよ。もう、40年以上前のことになりやすかね。あつしも血気盛んな頃でしてね。その頃、広島ではちよいと知

られた一家の会長に可愛いがられていやしてね。それを好いことにあの頃は無茶したもんでござんすよ」そう言いながら、見事な包丁捌きの音を出した。神田は、山田が、時々包丁を拭う左手の小指と薬指の2本は第二間接から先がないことに先ほどから気がついていた。

「その会長は、お人の出来たお方でござんしてね。あつしらのよくな下っ端にも情の厚い、いいお方でござんした。ところが、その会長の後継者つて野郎、会長の息子でござんすがね、皆から、若、若、つて呼ばれて、調子付いて、こいつが、全くの世間知らずつて言っんですかい」話しながらも包丁の動きには淀みがない。

「若けえもんを虫けらのように扱う野郎でござんしてね。それに、もう、なんかありやあ、チャ力を持ち出し、終めえにやあ、素人衆からもみかじめ料を取つてこいだとか抜かしやがつて。会の者もついていかなくなりやしてね、あつしもついに、堪忍袋の緒が切れてつてわけでござんすよ」

「へい、野菜の焼きづけでござんす」そう小さな声で言つて料理をカウンターの上に出した。

「ちょうど、その時分は、県警の取り締まりも厳しくなつて来やして、ここいらが潮時かと・・・時代でござんしたねえ」そう言いながら顔を上げ包丁をふきんで拭^{ぬぐ}つた。

「会を抜けるときにや、こちらの旦那にや、そりやあもう、口では言えねえくれえのお世話になりやした」頭を下げた。

「もうあの頃のこたあ、思い出すのもイヤでござんすよ」山田は軽く頭を振つた。

「いや、悪いことを思い出させてしまいましたね」小さな声で神田は言つた。

「いやいや、良^よござんすよ。たまにやあ、昔のこと振るかえら

ねえと、これからの行く道も見えなくなるってもんでござんすよ」

「今となつちやあ、何にも悔やむものはござんせんがね。ひとつだけ、気になつてゐることが有りやすんで」山田は、遠くを見つめるような目をした。

「あつしも、いっぱしに子分を抱える身分になりやしてね。ある若けえ者んを会に引き釣り込んだんでござんすよ」山田は次の料理にかかった。

「その野郎は純な野郎でござんしてね。腕っ節も立つし、さつぱりしてるし。あつしが会を抜けるときにも、その野郎にも、一緒に抜けるように言つたんでござんすが、そいつも義理堅い野郎でござんして、会長への義理を果たすまでは会に留まると言い張りやしてね。どうやら、おつ母さんの薬代を会長から借りていたようなんで」再び、小気味良く包丁の音が響いた。

「あー、郷戸ごうこのことかい？」高見刑事は思い出したように言つた。

「郷戸！！」神田は思わず声を出した。

高見刑事は、杯を持ったまま、

「あー、びっくりした」と背筋を伸ばした。

「郷戸のことは鉄さんから何度か相談されたからね。憶えてるよ」

「神田かみたの旦那も郷戸のことをご存知なんで？」そう言つて、神田の拳に目をやり、一瞬にして全てを理解したようだ。

「あつ、そうでござんしたかい。あつしが会を抜けてすぐ、大木会と学生さんの大立ち回りがありやしたが、ひよつとしてその時の拳法部の・・・」

「はい。そうです」

「おや、これは初耳ですね」高見刑事はこぼれた酒で濡れた手をオシボリで拭きながら神田を見た。

「で、その郷戸ごうとって人はその後？」

「あの後、若の息子がチャカでケリをつけようとしたのを邪魔したとかで、会から、と言っても、半身不随になった若の野郎ひとりの指図ですがね、命を狙われるようになりやして姿をくらましました」

「鉄さんは、その郷戸の消息を？」高見刑事は尋ねた。

「それから、しばらくして、ありゃあ、いつ頃だったでござんしようか・・・おい、おとみ、郷戸から葉書が来たのは何年ぐれえ前だったか、お前え、覚えちゃいねえか？」山田は奥に向かって声をかけた。

「あれは、鉄太郎が小学校1、2年頃だから、昭和47年（1972年）頃の暮れだったと思います。簡単な文面で、義理を欠いて申し訳ない、とか、このご恩は一生忘れませんとか、そんな風なことが書いてありましたね。全くあの人らしくて・・・」奥の座敷の客にお酒を運びながら、思い出し、出し、言った。

「で、その葉書はどこから？」神田は山田の方に向き直って聞いた。

「消印はタイでござんした」

熱風！！バンコク

1972年（昭和47年）11月 タイ 首都バンコク

「もっつ、エエ加減にせんかいなー。ワテも終まいにや、怒るでー、あんたらあッ」

そう日本語で言いながら、中年の額が禿げ上がった男が、人混みを掻き分けて小走りでやって来た。周りのタイ人や、白人のアベックのヒッピーや観光客達は、何事が起こったのかと振り返ったり、追い越された男の後姿を目で追った。その中年男の後ろから5、6人の日本人が追いかけて来た。

「エエ加減にせえ言うとるやろ」と、少し大きな声で振り返って言った拍子に、男の体が屋台のテーブルに「ドンッ」と当り、テーブルが大きく揺れて、客が食べていたトムヤングンが鍋ごと道へ音をたてて転がり落ち、客の男達の怒声と共に白い湯気が上がった。落ちたエビはさっそく野良犬の夕食になった。

郷戸一星は、安定の悪いテーブルで、ちょっと酸っぱいタイチャーハンを食べながら生ぬるいシンハービールを飲んでいたが、テーブルが揺れる直前にフオークは口にくわえ、チャーハンの皿とビール瓶を持ち、立ち上がっていた。

先程からこのテーブルでは、郷戸と一緒に三人の男達が、トムヤングンを食べていた。でっぷりと太った男は、シャツの前をはだけ買ったばかりの黒ズボンの裾を捲り上げて、汁を飛ばさないように気をつけながら食べていた。髪の毛をきれいに刈り上げた男は黒いシャツの裾をよれのグレーのズボンの上に出し、へらへらと太った男に愛想笑いをし、遠慮しながら鍋から具を自分の皿に少しず

つ移していた。もう一人の男は前歯のない口を開け、1本だけ残っている下の歯をいじりながら、時々、郷戸の方を見ては、何やら二人に言つてはニタニタと笑っていた。三人ともシャツの袖そでからは刺青がのぞいていた。

テーブルが大きく揺れて、男達の食べていたトムヤングンが鍋ごとひっくり返し、太った男のズボンにかかった。太った男は、怒鳴りながら、新しいズボンにくつついた野菜の切れ端を払い落とし、テーブルの上に残った皿を右手で掴つかんで、ぶつかった日本人の顔めがけて投げつけた。皿は男の左頬に当たりはじき飛んだ。

「あー、堪忍かんにんしてーッ」男は両の手のひらを広げ太った男の方に向け細こまかく動かした。

髪の毛を刈り上げた男が左手で男の襟首えりくびを掴み、右手で思いつきりその男の左頬を殴った。男は、たった今飛び散ったトムヤングンのスープと具の上に、ザッ！と半回転して前のめりに倒れこんだ。その瞬間、野良犬は、さつと横へ1mほど逃げたが、犬はそこで振り向き尻尾を後ろ足の間に巻き込んだまま、再び、目の前にあるエビの魅力に負けて戻ってきた。

前歯のない男がゴムぞうりを履いた足で倒れこんだ男の背中を2、3度踏みつけた。

男の小綺麗な白いシャツにはゴムぞうりの黒い跡が残った。

追いかけてきた男達は、突然、倒れた男の写真を撮りはじめた。フラッシュが「パツ、パツ」と光ると、辺りの野次馬は余計に増えてきた。太った男は、自分の濡れたズボンが足にくつつくのを防ぐ

ように両手で両腿ふとももの部分をつまみながら倒れた男のところ近づくと、倒れた男の腹を思いつき蹴り上げた。追いかけてきた男達は、なおも写真を撮り続けている。

「ゲグツ・・勘弁してーな・・」倒れた男は、なおも日本語で力なく言った。

「ゲフツ、あんたら、・・・もう、エエ加減にしてーな・・・」そう言っただち上がるうとしたが、前歯のない男が中年男の足を払った。また、男は地面にひっくり返った。太った男は地面に転がったステンレスの鍋を拾い上げ、倒れた男の側頭部めがけて振り下ろした。

太った男は振り下ろした手が、スカツ、という感じで、手が急に軽くなり、体のバランスを崩しそうになった。そして、鍋が「カーン！」という音と共に5m向こうに飛んでいった事によろやく気がつき、空からになった右手を見た。

郷戸ごうこは、フォークを口にくわえ、左手に皿を持ち、右手はビール瓶から木の棒に持ち替えて立っていた。男達には、どうして鍋が吹っ飛んだのか分からなかった。

太った男が何やら低い声で郷戸ごうこに言った。郷戸には何を言っているのか理解できなかった。男はもう一度何かを言った。それでも郷戸は、口にフォークをくわえ、左手にはチャーハンが半分ほど載った皿を持ち、右手には1、5m程の丸棒を持って立っていた。男達は1mほどの間隔を置いて郷戸ごうこを要かなめにした扇形に三人並んで立った。太った男が刈り上げ頭の男へ顎をしゃくって何やら言っていると、刈り上げ男はニヤニヤ笑って、左手で服の裾すそをまくり、右手でスボンのベルトに挿していた黒光りする自動拳銃を引っ張り出した。

取り囲んでいる写真を撮っていた日本人達や、白人ヒッピーや観光客、野次馬のタイ人達に一瞬緊張が走り、それまで囲んでいた輪が一斉に広がった。

倒れている男は、両手を支えにして、尻をついたまま拳銃を見つけていた。その隣では野良犬が、「ペチャ、ペチャ」と音をたててこぼれた汁をなめている。真ん中に太った男、その左に歯ナシ男。右に拳銃を持った刈り上げ男。

刈り上げ男は何やら言いながら銃口を郷戸じゅうどの方に向けた。太った男は、目は郷戸に向けたまま、緊張した顔で、刈り上げ男に何やら言くと、刈り上げ男は薄っすらと額に汗を浮かべながら、左の手の平で銃把じゅうばの尻を支える様にして銃口を郷戸の顔に向け、右手の人差し指でゆっくりと引き金をしぼり始めた。

「本気で撃つつもりだろうか？」郷戸じゅうどは判断に迷ったが、両手を広げてゆっくりと上へ上げた。そして、左手のチャーハンの皿を持つ指を広げて、野良犬の頭の上に落とすと、ビックリした野良犬は「キャン」と短く鳴いて飛び上がった。辺りあたの緊張が途切れたその瞬間に、空いた左手で口にくわえたフォークを銃を持った刈り上げ男の右肩へ投げた。フォークは飛ぶ姿も見せずに狙ったところに突き刺さり、刈り上げ男の銃を持った手が、「グッ！」と言う声と共に右へ揺れた。フォークが郷戸の左手を離れると同時に右手に握られた棒は振り上げられ、太った男の鼻先をかすめた。

振り上げた棒を、左手に持ち替えてそのまま歯ナシ男の口の中に

差し込み、グイッ、と、一押ししておいて、刈り上げ男のみぞおちを右足で蹴った。刈り上げ男が倒れる寸前に郷戸はその男の右手を掴んでひねり上げ、自動拳銃を奪った。太った男は右手を振りかぶり、前に出ようとしたとき、鼻がスーッとした感覚に捉われた。男は左手で鼻を触るとあるはずの左の小鼻がないことに気が付き、左手で鼻を覆い、右手を振り上げたまま動かなくなった。

「この技はなんだ!?」男達にとっては初めて見る技だった。

郷戸は、歯ナシ男の口から棒を抜いた。その拍子に1本だけ残っていた下の歯がポトンと地面に抜け落ち、野良犬がパクツと食べた。引き抜いた棒を太った男の鼻先に突きつけ、そのままゆっくりと通りの向こうへ向けた。太った男は、郷戸の意味することを理解し、細かく頷き振り向いて、ゆっくりと歩き始めた。野良犬は、「カッ!」と、歯を吐き出した。男達が背中を見せた時、郷戸は自動拳銃の弾装を引き抜いた。そして、スライドを後ろに引っ張り、薬室内の弾を落とし、

「ヘイ!!!」と男達の背中に声をかけた。男達は、ビクツ、と肩を動かし、ゆっくりと振り返った。

郷戸は、刈り上げ男に向かって銃を放った。刈り上げ男は右肩を押さえていた手の腕と胸の間で銃を受け止め、太った男と顔を見合わせて、「どうしようか」と、迷った顔をしたが、そのまま去っていった。

男達が去ると、たちまち、先ほど追って来た日本人達が近づいて来て、カメラを構えた。郷戸は、男達に、ダツ、と近づき、3台のカメラを棒で叩き落とし、リーダー格の男の顔先に棒を向け、「ゴー」と言った。

男は、

「少しお話を・・・」と言ったが、郷戸は日本語が分からない振りをして、再び、

「ゴ―」と、強く言った。男達は、カメラを拾い上げながら、
「なんだ、日本人じゃねえのかよ。今日のところは引き上げるか。
ひでえな、このカメラ、使えるかな・・・」などと言いながら来た
方向へ帰っていった。

郷戸ごうこは倒れた男の腕を取り、椅子に座らせると、野次馬達は、もう、これ以上騒ぎが起きないことを知り、ゆつくりと散っていった。
郷戸はズボンのポケットから100バーツ紙幣を出し、テーブルの上に置いて去ろうとしたが、男は、

「ちよ、ちよっと待ってえな、兄ちゃん」そう言つて郷戸の腕を掴み、

「ほんまに、助かったわー、えらい目におおてしもたがな。おおきに、おおきに」そう言つて、頭をテーブルの上にぶつけるように何度も何度もさげた。そして、顔を上げ、上目遣いで郷戸を見、
「あんさん、日本人だっしやる？隠さんでもええがな。ワテにはわかりまつせ」

郷戸は返事をしなかった。

屋台の娘がタオルを持ってきて、男に差し出した。男は顔を上げて、

「？」と言う顔を見ると、娘は、タオルを自分の顔の口のところに持つて行き、拭く真似をした。

「あー、そうかいな、おおきに、おおきに」男はそう言つて娘からタオルを受け取り、口の端の血を拭き、

「ほんまに、やさしいなー、タイの女子おなこは」そう言いながら腕の泥をそのタオルではたき落とした。

郷戸は、テーブルの下に置いていたナップザックを掴つかんで、棒に

引っ掛け、その棒を肩に担いだ。

「待ってーなー、兄ちゃん」そう言つて、ポケットから100バツ紙幣を1枚取り出し、娘の手に握らせようとしたが、娘は受け取ろうとしない。

「なんでや、ええから、取るときーな」そう言つて無理やり娘の手に握らせた。

「兄ちゃん、どこ行きまんのや？泊るところありまんのか？」男は、早足で歩く郷戸の後ろから声をかけた。

「もうちょつと、ゆっくり歩きいな、ハア、ハア」

「ついて来るなよ。ごたごたに巻き込まれるのはごめんだ」前を見たまま答えた。

「あー、やつと喋^{しゃべ}つてくれたなー」男は、タタツ、と、郷戸のすぐ後ろにくつついた。

「あんた、何をしたんだ？さつきから、さつきの男達とは違う男がついて来てるぜ」早足で歩きながら、男に言った。

「えつ、ホンマかいなー！？」男は振り返った。

「あつ、ホンマや。ひつこいなー。タイ警察やがな」

「タイ警察？あんた何をしたんだ？」

「兄ちゃん、あんさん、もうワテに関わつてしもうたんや」そう言つて郷戸の横に並んで顔を見上げてニコツと笑った。

「ワテ、玉木言いまんのや、よろしゅうな」

「宿はどこでんのや？」

「玉木さんと言いましたかね。もう、俺には構^{かま}わんでくれ」郷戸

は、香港からの飛行機の中で若い日本人のバックパッカーから、安宿街はフアンポーン駅の近くの中環街にたくさんあると聞いていた。空港からは汽車に乗って先程駅に着いたばかりだった。腹が減ったので、まず腹ごしらえをと思い席についたところでこの騒ぎに巻き込まれてしまったのだ。

「兄ちゃん、あんさんも訳ありやなあ」玉木は郷戸の言葉には構わず、ゆつくりと言った。郷戸は、フアンポーン駅の方へ向かって曲がろうとした。

「あかん、あかん、そっち行ったら、中華街や。日本人だらけや。日本人の追っ手が来ても目立たへんから、追っ手の姿に、気いつきまへんで」

「隠れんのなら、ワテのとこ来なはれ。ワテは、こっちに部屋持つてまんのや」

「男の言うことにも一理あるな」そう思い男の手に引かれるまま大通りに出た。玉木と名乗った男は、

「今晚はほんまに助かったわー」と言いながら、人差し指を立てた右手を斜め下に突き出しトウクトウクと呼ばれるオート三輪を停めた。そして、

「マレーシア、マレーシア」と言って座席に郷戸を押し上げ、続いて乗り込んだ。トウクトウクは青白い煙と叫び声を吐き出し、熱風を切り裂いて走り始めた。

トウクトウクの座席に取り付けてある小さなサビの浮いたパイプを握った左手の甲には汗が滲んでいる。郷戸は手の甲に浮かんだ汗を見ながら、体中の汗腺から汗が出ているのを感じていた。やがて、トウクトウクは中心部へと向かい、オレンジ色の灯りが辺りを包み始めた。

街が叫んでいた。2サイクルエンジンの燃えるにおいと吐き出される咆哮、ディーゼルエンジンの甘い黒煙と唸り声が街中を覆い、絶え間なく響き渡るクラクションは街の悲鳴にも聞こえる。

「え？」

せやから、さっきからあんさんのお名前を聞いてまんのや」

「ああ、郷戸」前を見ながら答えた。

「え？」

「ご、う、ど」ゆつくりと大きい声で言った。

「どういう字を書きまんのや」玉木は右手でパイプを強く握り締めながら、郷戸の顔を覗き込んだ。

「故郷のゴウに扉のト」

「あーあ、郷戸さん。エエ名前やないか」大きくうなずいた。

「故郷の戸かあ。エエ名前や」繰り返しうなずき、それからしばらく黙った。

ふたりを乗せたトウクトウクは屋台の並ぶ道路を通り過ぎ、やがて左手に大きな公園を見ると、右へ曲がり、細い路地の中へ入って行った。

「さ、着きましたで」ヨイショという感じで玉木はトウクトウクから降りて、郷戸に聞いた。

「郷戸はん、あんた、荷物は？それだけかいな？ごつつ、身軽やな」そう言いながら、ドライバーにお金を渡した。

「この先は行き止まりになってまんのや。なんやしらん、タイの街中は行き止まりが多いてな。こっちやで」玉木は、禿げ上がった

た額に垂れた髪をかきあげながら、通りの奥へ向かつて歩き始めた。狭い通りの両側には小さな雑貨屋や食堂、ゲストハウスが並んでおり、それぞれの店の看板が無秩序に通りへ向かつて突き出している。店先のテーブルでは、アメリカやヨーロッパ系の長髪のヒッピースタイルの若者達がタバコをふかしたり、ビールを飲んでいる。彼らは、バイクや、トゥクトゥク、タクシーがクラクションを鳴らしながら行き交っている通りを慣れた足取りで歩いている。

「ほら、見てみいな。白人のヒッピーばかりやる。こんな中、日本人がうるついつとたら、すぐ目に付くで。この先曲がつたところが、マレーシアホテルや」玉木は振り返って郷戸に言った。

「逆に、俺達の方も目に付きやすいだろ？」郷戸は^{あた}辺りを見回しながら聞いた。

「心配要らん。そんなんペラペラしゃべる奴はこの辺りにはおらへん。逆に、変な奴が来たら、すぐ連絡が入るさかいにな」ははつ、と笑いながら答えた。

「ここや。おい、今帰ったでえ」階段下の鉄格子を握ってガチャ、ガチャ、と、鳴らすと、若いタイ女が「ペタ、ペタ、ペタ」と階段を下りて来て、「ガチャ」と鍵を開けた。女は郷戸を見ると恥ずかしそうにすぐに階段の上に駆け上がって言った。

「なんや。恥ずかしがつとんのかいな。しゃあないな。ま、上がり」そう言つて先になつて階段を、ヨイシヨ、ヨイシヨ、と上がつていき、階段を上がつたところにあるドアを開けた。中に入ると、10mくらいの廊下があり、その左側に3つ木のドアがある。二番目のドアを開け中に入つて、郷戸を招きいれた。

「ま、楽にしてや」そう言つて、ソファを部屋の真ん中に引き摺^ずつてきて、冷房のスイッチを入れて、部屋を出て行った。しばらくして、タイの若い女をふたり連れて戻ってきた。さっき、鍵を開

けた女もいる。

「郷戸はん、紹介しとくわ。こっちがルミ子で、そっちの若いのが沙織さおりちゅうんや」

「・・・」

「サワツ デイ カー」女達は顔の前で合掌して軽く頭を下げ、ニツコリと微笑んだ。

「ワテの女房や」

玉木はふたりの女の肩を抱き、ドサツ、とソファーに腰掛けた。ルミ子と呼ばれた女が玉木の顔の傷に気付き、沙織に何やら言うのと沙織が立ち上がりドアの方へ向かった。玉木は沙織の尻をサツと撫でると、沙織は、「キャキャ」と笑いながら部屋を出て行った。

「ほんまに、タイの女子おなこはかわいいもんや」そう言って、ルミ子に向かつてコップで飲むジェスチャーをした。ルミ子もそれを見て部屋を出て行った。

「郷戸はん、あんさん、ワテが変な男や思ってるやろ」

「普通じゃないだろ」

「せらせやなあ」そう言って立ち上がり、窓を開け、胸ポケットからマルボ口を取り出し、外に放って、窓を閉めた。

「なあに、さっきのタイ警察の兄ちゃんや。あの兄ちゃんもご苦労なこつちや」

「つけてたのか？」

「いやあ、あいつら、この場所は知つとんのや」

沙織と呼ばれた女がタオルと水の入った洗面器を持ってきた。

「故郷ふるさとのドア、か」

沙織は玉木の横に座り、タオルを濡らして固く絞り、玉木の顔を

やさしく拭き始めた。

「エエ名前やな。郷戸はんはこの生まれでんのや?」

「奈良」そう言っ立ち上がり、窓の外を見ると、若い私服警官がマルボロの封を切っているところだった。

「へー、それにしては、訛りが出まへんな」左手で沙織の肩に手を回しながら聞いた。

「で、あんさん、何でまたこないなとこまで?」

「尋問か?」

「いやいや、氣い悪うしたなら、ごめんやっしゃ」沙織の肩に回した手はずし大げさに手を振った。

ルミ子がトレーにウイスキーの壺とコップを載せて戻ってきて、トレーごとベッドの上に置いた。玉木はウイスキーの蓋を開け、琥珀色の液体を二つのコップに注いだ。

「ま、お近づきのしるしに」そう言ってグラスを郷戸に渡し、自分もグラスを持った。

「これは、タイのウイスキーのメコン言いまんのや」そう言いながら自分のグラスを郷戸のグラスに「コチッ」と当てた。そして、「グイッ」と一口飲んで、

「フーッ」と息を吐いた。

郷戸も一口飲んだ。

「どないだ?サントリーレッドみたいな味だっしやる?」そう言って、顎をドアのほうに向け、ふたりの女に出て行くように合図をした。

「飲み難いようやったら、これ足しなはれ」そう言って、トレーの上のソーダの壺を持ち上げた。

「あんさんのことばっかり聞いて悪るおましたな。ワテは今、チ

エンマイに住んでまんのや」

「チェンマイ？」

「ここからバスで10時間くらい北に行ったとこや。もうちよつと行くとラオス、ビルマの国境や。ええとこやで。ここみたいにジメジメしてへんし」

「そこで、今のふたりの奥さんと？」

「いや、女房は20人や」そう言うつと、玉木は、グイツ、とメコンを飲み干した。

「さっきの週刊誌の連中な、あの連中は、それがおもしろおてタイくんだりまでワテを追いかけてきましたのや」椅子から上半身だけ前に起こして郷戸（じょうど）に言った。

「週刊誌？ああ、さっきのカメラの連中」

「ワテのこと、チェンマイのハーレム男、とか言うてな。はははっ。お蔭さんで、大迷惑や」そう言うつて悲しげな顔をした。

「ワテの夢はあいつらのおかげでパーや」再びソファアの背もたれに向け背中を倒し目を閉じた。そして、目を開き、

「郷戸（じょうど）はん、郷戸（じょうど）はんは、こっちに何か予定でも有りまんのかいな」

「いや、別に・・・」

「せやったら、2、3日こっちで休んでから、ワテと一緒にチェンマイ、行きまへんか？」そう言うつて玉木は、ジツと郷戸の顔を見た。

「こんなところおつたら、金ばっかりかかりまっせ。あんさん、金、持ってまんのかいな」

「・・・」

「考えることなんぞ有りまっかいな」玉木は背もたれから体を起

こした。

「そうだな」それも良からう、と郷戸は思った。

「よっしゃ、そうと決まったら、ワテも、こっちの用事、早めに片付けまっさ」

「この部屋、自由に使うとくなはれ。それと、さっきのチンピラ連中な。あいつらには氣い付けなはれや」玉木は声を低くして言った。

「大丈夫だ」郷戸はメコンウイスキーにソーダを加えた。

「あの銃はな、あれは、スミス&ウェッソンのMK22や。ベトナムでアメ公の特殊部隊がベトナム暗殺用に使うてる銃や」

「アメリカの特殊部隊が？」

「せや。アメ公共がベトナム戦線の休暇にぎょうさんこっち来てまんのや。そいつらが小遣い稼ぎに武器を持ち込んで密売しとるんや」玉木は、窓際に立って外の様子を眺めながら言った。

「ちょうど1年前や、こっちの、なんとか言う首相がな、クーデター起こしよったんや。憲法廃止、議会解散、ってな訳や。本人が言うにはな、中国の文革（文化大革命）が怖い、言うところのや」

「へー」

「何でかいうとな、こっちには何百万人かの中国人があるしな、その中国人が、中国の手先になって、タイが共産主義化される言うねん。その共産主義化を防ぐには軍事政権しかない、ちゅう訳や」

「で」

「そこでや、これは、ワテの推量やがな、休暇で来てるアメ公が、こっちのヤクザに銃を密売しとんのを利用して、今の軍事政権は、タイやくざを市内監視の手先に使うとるんやないかと。ひよっとしたら、アメリカも絡んだ大掛かりな横流しルートがあるのかも知れ

へん。国絡みのな。」

「なるほど」

「せやないと、さっきのあんな特殊な暗殺用の銃があんなチンピラの手には入らへんで」玉木は、ドアのところまで行って振り返り続けた。

「せやから、郷戸はん、あんたにもしものことがあっても、闇から闇や。殺され損、ちゅうわけや。助けてもらたワテがこないなこと言つのもおかしな話やが、ゴタゴタには、手エ、出さんこつちな。あとで晩飯食い直しまひよ。それまで、ゆつくりしといてな」そう言つと部屋を出て行つた。

翌日、郷戸（郷戸）は、昼前まで眠つた。あれから玉木と向かいの屋台で食事をして、また、メコンウィスキーを飲んだ。疲れもあったのか、ぐっすりと眠つた。

ゆつくりとベッドで上半身を起こし、部屋を出て、廊下の突き当たりにあるシャワー室でシャワーを浴び、部屋に戻るとソファアの上に着替えが置いてあつた。

ペタ、ペタ、ペタと階段を上がる音がしてノックがあつた。ドアを開けると、昨夜の屋台の少年だ。少年はタイ蕎麦（そば）をトレーに載せて立っていた。玉木が玉木の女房が頼んでくれたのだらう。屋台は15の少女と12の少年が切り盛りしている。郷戸は少年を部屋に招きいれ、ベッドを指さすと、少年はそこにトレーごと置いた。

「ありがとう」そう日本語で言つと、少年は、ニコツ、と、微笑み、出て行つた。

外から姉弟で「キャハハ」と笑いあう声が行き交うバイクと車の音に混じつて聞こえて来た。俺のことでも噂しているのだらう、と、

郷戸は思つて、何か月か振りに微笑^{えみ}が漏れた。

大木会の会長の指示で修道館大学へ乗り込んだが、結局、若の仇は打つことが出来なかった。チャカで始末をつけることは簡単だが、それは道義外れだ。学生達の力に負けたのだ。それで良いではないか。

会としては、組織の県下統一の動きの前に力を誇示し、名前を売りにかかったところだろうが、逆に面目丸つぶれになってしまった。大木会の面目を潰したのは、あの学生連中ではなく、それが出来るチャンスを潰した俺だという事になってしまった。

会長なら分かってくれると思つたが、ベッドで半身不随の若の腹の虫が治まらなかつたのだらう。俺を始末しないと、一家も束ねる力もない、と全国の暴力団の笑い草になる、若はいつも世間体を気にして動く奴だった。

「若では会は束ねられない」郷戸は指を詰めるよりも姿をくらますことを選んだ。香港からバンコク、そして、マニラへ飛ぶつもりだった。

「しかし、こいつはタイに長居しそうだな」郷戸は、蕎麦^{そば}を啜^{すす}りこみながら思つた。

蕎麦の皿とトレーを返そうと思つて廊下に出て、階段のほうへ行くと隣の部屋のドアが開いていて、玉木が荷造りをしているのが見えた。すでに、白地に赤と青の縞模様の大きなバッグが3個パンパンに膨らんで部屋の隅に転がっていた。

「ああ、郷戸^{じょうど}はん、昨夜はどうもお疲れさんでしたな」玉木は額に垂れた髪をかき上げながら言つた。

「食器はそこらへんに置いときなはれ」

「まあ、入りなはれ」そう言っててバッグを横にずらした。

「ワテの用事も明日で終わるさかいに、明後日の朝、早うにこつちを発ちまひよか？どないだ？」ポケットからマルボロを取り出し郷戸にも勧めた。郷戸は手を振って断った。

「そうだな。俺には特別用もないし、今日は夕方から街をぶらつてくる」

「氣いつけなはれや。ちょうど雨期は終わったさかいにスコールはありまへんけど、その分、チンピラと不良外人は街にあふれてまっさかいにな。くれぐれもごたごたに巻き込まれんようにしてや」

「分かつてる」

「どうも、郷戸はん、あんさんには、火薬の臭いがしまっせ。導火線のついてない火薬の臭いや。火花にはすぐ反応しよる」

日も暮れかかった頃、郷戸は部屋を出た。玉木はどうやらゲストハウスの2階部分を借り切っているようだ。ゲストハウスの1階は雑貨屋になっていて、店の前には、玉木の荷物だろう、段ボール箱や、木箱、ビニールのバッグがトラック一杯分くらい積み上げられている。荷物を掻き分けるように店の中に入って、サングラスと帽子を買った。

サングラスをかけ、帽子を目深に被り、棒を杖のようにして、いくぶん足を引き摺るような格好で、ぶらぶらと歩き、大通りに向かった。大通りに近付くに従って様々な車のエンジン音やクラクションが大きくなる。角を曲がって、大通りに出た途端、バスやトウクトウク、バイクの洪水のような流れに視界が塞がれた。

昨夜来た方向にしばらく歩くと、通りの向こうにムエタイのスタジアムが見える。

郷戸はそこで2時間ほどムエタイの試合を観戦した。日本ではキックボクシングとして若者の人気を博し、郷戸も堅気かたぎの頃は、剣道仲間と一緒に見るのを楽しみにしていたが、ここの場内の熱気はすごかった。

郷戸へいどは、ボクサーの首を抱え込んだの膝蹴ひざげりの連続や、肘打ちひじうちなどにも破壊力を感じたが、それ以上に、鞭むちのようにしなる足技のスปีドに驚いた。実際に闘うと木刀では勝てないかもしれないと思った。

スタジアムを出るとすっかり日も暮れていた。外には観客目当ての屋台があちこちに出て、どの店も結構繁盛している。屋台で鶏肉焼きを2本食べ、帽子を目深まぶかに被かぶりなおし、足を引き摺るふりをしながらながらゲストハウスに帰った。出るときにあった山のような荷物はトラックに積み込んであり、2階の窓から玉木が顔を出してタバコをふかしていた。

「いま、お帰りですか。どないでした散歩は？いま、鍵、開けまっさかいにな」そう言っつて顔を引っ込め、「ドン、ドン、ドン」と階段を下りて、「ガチャン」と鉄格子のドアを開けた。

「せや、郷戸へいどはん、あんさんに受け取ってもらいたいもんがあんねん」そう言っつて玉木の部屋のドアを開き、中に入った。

「ま、おかけえな」そう言っつて、ソファの向きを郷戸の方にずらした。扉が開きっぱなしのクローゼットを手前にずらし、クローゼットの背中と壁の間から布に包まれたものを取り出した。

「これや」布に何重にも巻きつけてある紐の結び目を苦勞して解き、クルクルツ、っと、紐をはずした。包みの中から一本の杖が出てきた。郷戸には、一目でそれが仕込み杖だと分かった。

「仕込みか？」

「せや。分かりまつか」ニヤツと笑い、玉木は右手でその仕込みの中程を握って郷戸の方へ差し出した。郷戸は左の手のひらを上にしてそれを受け取り、右手でポケットからハンカチを取り出して口にくわえ、左手に持った仕込を腰の辺りに持ってきて、右手で、クツ、と、少し手前に引き、スー、と右手を引いて鞘から刃を出した。やや、細身で肉厚の直刀であつた。

「これを俺に？」

「はいな。差し上げまっさ」

「あんた、どうしてこんなものを」見事な仕込だと思った。

「買うたんや」ベッドに腰掛けて額の汗を拭いた。

「買った？」郷戸は目を切先にやつた。

「せや、ワテは月に一回、チェンマイからこつちに買出しに来てまんねん。ま、その時に、女房を交替で2、3人ずつ観光につれて来てまんのやけどな」胸ポケットからマルボ口の箱を取り出した。

郷戸は、刃が煙るのを恐れ、手で制した。

「たまに、現金が必要になつた時には、ワテの鉄砲を売ったりして、金にしてまんねん」玉木は渋々箱をポケットに納めた。

「あんたの鉄砲？」

玉木はそれには答えず、

「昨日も行ってきたとこや。ほら、郷戸はんと会つたとこの近くのチャイナタウン。あそこにはな、鉄砲横丁があつてな、そこで売って、金にしてまんのや。いつやったか、いつも行つてるとこの親

父がな、その親父は残留日本兵や」そういいながら、窓際に行き外を眺めた。

「そんでな、その親父が、そんな時は、逆にそれを買ってくれゆうてな。親父も、もう永うない、死ぬ前に一回日本の土が踏みたい、ゆうてな。そのためには金が必要、言いよつてな」

「その仕込み杖はな、辻政信の仕込み杖や」窓枠に背を預けて郷戸を見た。

「辻！」郷戸は思わず声を出して玉木の顔を見た。

「せや。辻はマレー作戦からシンガポール陥落までに関わった帝国陸軍の高級参謀や」玉木は郷戸が刀を鞘に納めるのを見て、ポケットからマルボロを取り出した。

「衆議院の国会議員やったんやけどな、つい10年ほど前にこつちで行方不明になったんや」箱から1本取り出し口にくわえ火をつけた。

「こつち言うても、ラオスやけどな。日本の現職国会議員が勝手に内戦中のラオスを歩いとった、言うんで大騒ぎになってな」そう言つて、深く息を吸い、「フーツ」と、長く吐いた。

「せやけど、その後は行方不明になつてしもてな」玉木はソファに再び腰をかけた。

「フランスの特殊部隊に暗殺されたとか、CIAに殺られたとか、共産ゲリラに殺られたとか、虎に喰われたとか、そらあ、もう、いんな噂がたつてな」ベッドの上の灰皿を左手でつまみ膝の上に置いた。

「今でも、どっかの国の軍事顧問におさまつとる、言う噂まであるんや」灰を、「ポン」と、ひとつ落とした。

「その辻はな、終戦の時には、ここ、バンコクにおつて、しばらくは潜伏するつもりで、形見分け、かたみ言うんかな、拳銃やら、軍刀やらを部下に分け与えたんや」

「そのときのひとつがこれか」郷戸は改めて仕込み杖を眺めた。

「せや。あの店の親父が、どうやってこれを手に入れたんかは、知らん。ひよつとして、直接貰うたんかもしれへん」

いづい郷戸は立ち上がり、窓際に行つてバンコクの暗い空を見上げた。

残留日本兵、旧日本軍の参謀、ベトナムから息抜きに来て羽目はずしている若い兵士、戦争反対を唱えて漂流している若いヒッピー達、そして、俺のような無頼。ぶらい

この街の叫び声は、全てを飲み込んで、また、吐き出している悲鳴かもしれない、と、郷戸は思った。

通りの向こう側から5人の白人が、大声で歌を歌いながら、危ない足取りでやって来た。その中のひとり、赤毛を短く刈り上げた男は、ビールをビンから直接飲みながら仲間の肩に手を回し、今にも倒れそうな足取りだ。ガヤガヤと、姉弟の屋台の椅子に腰をかけ、何やら注文しているようだ。同じテーブルでは、先客の白人の女がお粥をかゆ食べながら、足元の野良犬に自分の具を分け与えている。

弟はいつものようにニコニコと注文を聞き、姉に伝え、姉の方は手馴れた手つきでお粥をかゆ作り始めた。姉弟にきょうだいしてみれば今夜最後の稼ぎになるのだらう、張り切っている様子が良く分かる。

しばらくして弟は出来上がったお粥をテーブルに運んだ。男達

は、犬のようにくんくんと鼻を近づけ臭いをかぎ、大げさに顔をゆがめた。それを見ていた姉弟は、ちよつといやな顔をしたが、すぐに見ない振りをして食器を洗い始めた。

赤毛男が、お粥かゆをスプーンですくって口に運んだが、口に含んだまま、すぐに椅子から立ち上がり、道に、「ブアーッ」と、吐き出し大声で何かを叫んだ。他の男達は、その様子を見て、腹を抱えて笑い出した。吐き出した男はテーブルまで戻り、お粥を皿ごと通りにぶちまけた。それを見たほかの男達も、面白がって次々とお粥を皿ごと投げ始めた。姉弟はその様子を悲しそうな顔をしながらただ静かに見る他に手立てはなかった。周りの屋台の人間達も関わり合いを恐れて何も出来ない。

男達がそのまま椅子から立ち上がり、去ろうとした時、先ほどから忌々（いまいま）しそうにこの様子を見ていたカーリーヘアの白人の女が、男達に何か言った。赤毛男が、ギラついた目で女を見返し、女の食っているお粥に、「ペッ」と、唾つばを吐き、再びヘラヘラと下卑げびた笑いを浮かべた。女は立ち上がってその唾を吐いた赤毛男の頬を平手打ちした。その様子を見ていた男達は「ヒヤッ、ヒヤッ」と笑い始めたが、殴られた赤毛男は、女の腕を掴つかみ、ねじり上げて道に突き飛ばした。倒れた女を他の男達は卑猥ひわいな笑みを浮かべながら、女の頬を2、3度殴って抱え上げ、そのまま連れ去ろうとしている。

玉木は、

「ひどい事しよるなあ、あいつら」そう言って郷戸の方を向いた。
「あきまへんで、関わり合いになっ、・・・あ、郷戸はん・・・」
そこまで玉木が言った時には、郷戸は仕込み杖を持ったまま、窓

から飛び出し、トラックの屋根の上に、バーンツ、と、降り立っていた。

「あー、もう、あかんちゅうたやろが・・・ほんまに・・・」玉木の言葉の最後は消えていた。

男達は、女を抱えたまま郷戸を見上げた。郷戸はトラックの屋根から降り立ち、女を指差し、そのまま、指を下に向け、解放するように示した。男達はお互いの顔を見合わせ、

「ハッ、ハッ、ハッ、ハッ」と大声で体を揺すって笑い始め、赤毛男は中指を郷戸の方に向けて上へ突きたて、はくき歯茎を剥き出しにして、まるでネズミを見るような目つきをして何やら言った。

赤毛男のランニングシャツからはモジャモジャの胸毛がはみ出し、その毛は丸太のような腕にもビツシリと生えている。金髪の坊主頭の男は新しいゲームでも見つけたかのように、女を突き飛ばし、木の椅子を振りかぶった。赤毛男は、ズボンからバタフライナイフを取り出し、カシャカシャ、とナイフを開いたり、閉じたりとバタフライアクションを始めた。郷戸は、背中に隠れた女に、離れて見守っている姉弟のきょうだいところへ行くように手で示した。野良犬はテーブルの下でこぼれたお粥を食べている。

男達は、これが勝ち目のない喧嘩だということに気が付いていない。今まで、アジア人と喧嘩をして負けたことなどないのだ。

赤毛男は金髪の大男に目配せをして、ニヤニヤと笑いながら郷戸に近付いた時、郷戸は足元で、こぼれたお粥を食べている野良犬の尻尾を踏んだ。

犬が「ギャンツ!!」と一声鳴いて飛び上がるのと、赤毛男が一

歩足を踏み出してナイフを突き出すのが同時だった。赤毛男は、一筋の光が一瞬目の前を走ったように感じたが、鼻の先を切られたのにはまだ気が付いていない。金髪男は木の椅子を振り下ろそうとしたが、握っている椅子の足から上が男の頭の上に落ちてきた。その時、赤毛男の鼻の先から、「ボタ、ボタ、ボターツ」と血が垂れてきた。

それでも、男達には何が起こったのか分からない。郷戸は、男が足を踏み出そうとした時、仕込み杖から再び刃を一閃させ、赤毛男の履いているゴム草履の鼻緒を切った。赤毛男は、踏ん張りが利かなくなつて後へ大きく転んだ。

ようやく、何が身に起こったのかを理解した赤毛男と金髪男は驚愕の表情を浮かべたまま、他の男達と走り去った。

パチパチパチツ、と周りの屋台から拍手がした。姉弟も、何かを男達の背中に言つと周りの屋台からも笑い声が聞こえた。金髪女は、笑みを浮かべて郷戸に、「サンキュー」を連発している。

「無茶したらあかんがな、郷戸はん」玉木はそう言いながらも顔は笑っていた。

「それより、あの警察の兄ちゃんやがな。こないな時にこそ役に立たなあかんのに」ブツブツ言いながら部屋から出て、振り返り、

「ほな、郷戸はんはゆつくり休みなはれ。」

「あんたは？」

「ちよつと、あの警察の兄ちゃんに何ぼか渡して、あいつらが仕

返しに来ように頼んで来まっさ」

「タイ語がしゃべれるのか？」

「しゃべれへんけど、こないなこと、ようあることやさかいに、あの警察の兄ちゃんも心得てまっさ。それと、ワテは今晚、トラックの番をせなあかんさかいに、トラックで寝まっさ。ところで、どや、その仕込みの切れ味は？」そう言つて、ニコツ、と笑つた。

翌朝、トラックに郷戸と玉木は乗り込み、玉木の雇つたドライバーが運転してタイ北部の都市、チェンマイに向かつた。

「あんたの奥さん達は？」

「後ろの荷台の荷物の間に転がつてまんがな」

トラックがチェンマイに着いたのは12時間後であつた。

このはなさくやひめ

2005年（平成17年）9月 広島・宮島

高見刑事は宮島観光推進協会の事務所のドアのガラス越しに神田龍一の姿を確認し、「やあ、ようやく涼しくなってきましたね」そう言いながらドアを開けて入ってきた。

「昨夜はお疲れ様でした。鉄さんの料理もなかなかだったでしょ」高見刑事は、椅子に腰掛けながら言った。

「そうですね。おいしかったですよ。それにしても、あんな繋がりがあったとはね。驚きましたよ」神田は自分の事務椅子を、クルツ、と回転させて高見刑事の方を向いた。

「本当ですね。私もビックリしましたよ」そう言っているもののように白髪頭に手をやった。

「ところで、八頭神社の宮司さんはまだ？」高見刑事は腕時計を見た。

「まだですね。もうそろそろだと思えますが」

そう言った時、「コツコツ」とノックがあり、一人の女性が入ってきた。

「いらつしやいませ」部屋にいた渡辺が椅子から立ち上がり女性に聞いた。

「何かご用でしょうか？」

女性は、それには答えず、渡辺にお辞儀し、神田のほうを見て、

「久しぶりね。神田君」そう言った。

「え？」

「私よ、木野花よ。木野花咲姫よ」と微笑み、ニコツ、と顔を横に傾けた。

「あー、咲姫ちゃん」神田は椅子から立ち上がった。

「憶おぼえててくれた？」木野花咲姫は、再び、ニコツ、と微笑んだ。

「いやー、久しぶりだね」思わず声が大きくなった。咲姫は学生時代とあまり変わっていない。ヘアースタイルも髪を束ねたポニールのままだ。

「ほんとね。卒業以来だものね」

「でも、俺がここにいるって何故分かったんだ？」

「あら、私にご用でしょ？」咲姫は、いたずらっぽく言った。

「え？じゃあ、八頭神社はつづじんじやの宮司さんっていうのは・・・」神田は口をあけたままで言葉を止めた。

「私よ」

「これはこれは、わざわざ申し訳ございません。私は、高見と申します」高見刑事は椅子から立ち上がり身分証を出し、開いて木野花に見せた。

「初めまして木野花咲姫このはなむくひめと申します」咲姫は、高見刑事に丁寧ていねいにお辞儀をした。

「このはなさくひめ？きのはなさき、じゃないの？」

「このはなさくひめ、って読むのよ。学生時代は、面倒だから、きのはなさき、で通して来たのよ」

「まあ、かけて」神田は木野花このはなが座りやすいように椅子を動かした。

「しかし驚いたなあ。咲姫ちゃんさきが宮司だなんて」コーヒを淹れるためにサーバーの方へ向かっていたが、

「あ、失礼、木野花さんが・・・」と振り返って言った。

「咲姫でいいわよ」そう言って、椅子に座り、ハンドバッグを膝に置いた。

「私の家は代々富士吉田の八頭神社の宮司をしているの」

「へー、しかし、そんなことは全く言わなかったじゃないか」「コーヒーカップを咲姫と高見刑事の前に置きながら言った。

「いやだったのよ、そんな家が。だから、叔父おじのいる広島大学に入ったのよ。いただきます」と、軽く頭を下げながら、コーヒーカップを手に取った。

「でも結局は、宮司になって家を継ぐ格好になってしまったわ。神田君かみたとも、あの暴力団の事件がなかったら、お互い口を利くこともなかったでしょうね」そう言くと神田の顔を見てニコリと微笑んだ。

「笑顔も昔のままだ」神田は思った。

「おや、こちらの方も、あの一件に」高見刑事は、咲姫の顔を驚いたように見た。

「そりゃあ、大活躍でしたよ」神田は大げさに笑いながら高見刑事に言った。

「あらいやだ。あのお陰で一年間大会には出場できなかったのよ」
「今でもこれは？」神田は右手の人差し指を立てて前に振った。

「ええ、地元の小学校で子供達に教えているわ。大会には審判としても引つ張りだよ」冗談ばくそう言って笑った。

「失礼ですが、木野花このはなさんは、木花咲耶姫このはなさくやひめと何か関わりが？」高見刑事は聞きにくそうに尋ねた。

「分かりません。ただ、私の家系は、生まれる子供は何故か女の

子ばかりなんです。そして、代々、生まれた子の名前には咲姫さきひめと名付けることになっているんです」

「へー」高見刑事は神田かみたの顔を見た。

神田も「へー」という表情を浮かべ高見刑事の顔を見た。

「私の娘も咲姫さきひめです。娘も、それが嫌みたいですね」コーヒーカップを両手で持ってニコニコしながら続けた。神田は咲姫さきひめが結婚していることを知り少しガツカリした。

「木野花咲姫このはなさきひめなんて変でしょ。だから、娘も、きのはなさきで通しているんです。でも、そのうち分かってくれると思います」

「不思議な家系もあるもんですね。私のところなんか曾祖父ひいじいさんの時代から職業軍人でね、親父おやじは警察官。そして、私も、おまわりさん」高見刑事は、はははっ、と笑いながら頭に手をやった。

「ところで、早速で申し訳ありませんが、今回、わざわざお越しいただきましたのは、木野花このはなさんの、えーと、だから、お母様になられるんでしょうか？」

「祖母ですわ。あの鉄の箱の中の巻物を解読したのは」高見刑事のほうをしっかりと見て答えた。学生時代と変わらずはつきりした性格のままだ。

「巻物？」

「はい。巻物の体裁ていさいになっていたようです。でも、表面は熱で灰になっていたようですから解読出来たのは一部分にしかすぎません」

「巻物の表面というと前半部分ということ？」神田かみたは、頭の中で巻物の姿を想像してみた。

「そう、だから、解読できたのは、後半部分だけということになるわね」

「その解読したものは？」高見刑事はやや興奮して尋ねた。いよいよ、あの鉄の棒の謎が解明される時が来たと思った。

「解読したものはないんです」

「え？」高見刑事は、ガツカリした表情を浮かべた。

「富士文献にしても、私達の家系は解読のお手伝いをしただけで、文字としては残していないんです」

「そうなんですか」高見刑事は、背もたれに背中を預けた。

「私達の家系で解読した文章の内容は全て、口承口伝なのよ」

「ということは？」神田は体を前に傾けた。

「私の頭の中にしか残っていないのよ」

「でも、そのことは、何人にも話してはいけないのです。それが、八頭神社に仕えてきた木野花家の家訓ですよ」咲姫はきりつ、とした表情をくずさずに神田と高見刑事を見つめた。

「これは、木野花家に限ったことではございませんわ。神職に付いている者は誰でも、その仕えている神様に対しては憤みを持つて接しなければいけませんの」姿勢を正したままで続けた。

「それに、私に伝えられているのはほんの数行のことですからお役には立てないと思います」と、申し訳なさそうな顔でふたりを見た。

「頼むよ。なにしろ、何がどうなっているのか皆目分らないんだ」神田は眉を寄せてテーブルに手を乗せた。

「お願いします」高見刑事もテーブルに両手をつけて頭を下げた。

これまでの出来事を、神田^{かみた}は、咲姫^{さき}に要領よくまとめて話した。
事件は咲姫^{さき}の協力なくしては解決出来そうもないのだ。

鉄の棒が宮島の弥山^{みせん}と富士山の山頂にあつたと推測出来ること、
その2本は、台風と大雨で姿を現し、今は、その2本とも誰かの手
にあること、その鉄の棒には弓矢の「矢尻」が封印されていたこと、
そして、その鉄の棒を中国も手に入れようとしていること、など。

「それは今月（2005年9月）の最初の台風（台風14号）の
時ね」咲姫は目を閉じて鼻から大きく息を吸い、そして、ゆっくり
と長く口から吐いた。

「ああ、そうだよ」

「それだったのね」

「何が？」神田は、何のことだ、と思いながら咲姫^{さき}を見つめた。

「見えたのよ」

「だから、何が見えたんだい？」

「一瞬だけど、天狗が口に何かをくわえて飛ぶのが見えたのよ」

「天狗？」何を言っているんだろう、ふたりともそう思った。そ
して、同時に

「言ってもいないのに、あの大男が鉄の棒をくわえて、富士山頂
から飛び降りたことが、どうして分かったんだろう」神田と高見刑
事はお互いの目を合わせた。

「私の家系はね、代々、感が鋭いのよ。特に雨の日や台風の日には鋭くなるの。今回の台風は、兩台風で、あちらこちらで大雨を降らせただしょ」

「そうです。日本全国といっても過言ではないでしょう。それほどひどかったですからね。今でも復旧作業は全国で続いていますからね」高見刑事は何度かうなづきながらそれに応えた。

「わたしは、9月4日には、今年から静岡県で毎年定期開催されることになった全日本女子剣道選手権大会の審判を務める予定だったんです。でも9月に入ってからの大雨で猛烈な頭痛が襲ってきて、それも出来なかったんです」

「頭痛が5日くらい続いたかしら。最近、ようやく落ち着いてきたけど」咲姫は再び目を閉じた。

「そんな時には、必ず私に関わりのある夢を見るのよ」薄く目を開け、

「そして、その時に・・・さっきは、天狗、と言ったけど、ハッキリとは分からないわ。若いときならもっとハッキリ見えたと思うけど、だんだんと感も鈍くなってきたんでしょうね」そしてまた目を閉じ、

「それで、頭痛で精神が虚ろになったときに、どこか神聖な山から、その、天狗のようなものが口に何かをくわえて飛ぶのが見えたのよ」

「あの、それは、木花咲耶姫このはなやくあひめが水の神様だということに何か関係が・・・」高見刑事は小さな声で聞いた。

「分かりません。そうかもしれないし、単なる偶然かもしれない」

「うーん」と、神田^{かみた}と高見刑事は同時に目を閉じ、腕を組んだ。事務所にいた者も微動だにしないで咲姫^{さき}の話の聞いている。

「実はね、咲姫^{さき}ちゃん。今、咲姫^{さき}ちゃんが言った通りなんだよ」
神田^{かみた}はゆっくりそう言うつと、

「大きな男がパラグライダーで富士山の山頂から飛び降りたんだよ。口に鉄の棒をくわえてね。たぶん、ここ、宮島の頂上、弥山^{みせん}からもそうだと思う」つと、自分に言い聞かせるようにゆっくりと言った。

咲姫^{さき}は静かにうなずいた。

「あの鉄の棒の中には、矢尻が封印されていたのは、分かっているんです」高見刑事はここまで言つて、空になったコーヒーカップを持つて立ち上がった。

「それが、何故、富士山と、宮島にあったのか、あつた、と言うか、隠されていた、と言つた方がいいのかも知れませんが」そう言いながらコーヒーを淹^いれた。

「木野花^{このはな}さんもちがですか？」そう言つて咲姫の空になったカップを指さした。

「ありがとうございます。いただきます」そう言つてカップを高見刑事に渡した。

高見刑事から受け取つたコーヒーカップを両手で包むように持つて、くるくる廻るコーヒーをしばらくの間見つめていたが、

「これは、どうやら大変なことが絡^{から}んでいるような気がしてきたわ」咲姫^{さき}はそう言つと、背筋を伸ばし、コーヒーカップをテーブルに置いた。そして、両手を膝の上のハンドバッグの上で揃えて目を閉じた。

神田^{かみた}と高見刑事も、咲姫^{さき}の透き通るような顔色を見て、ただならぬ気配を感じ取り、動きを止めた。それと同時に宮島観光推進協会の事務所の中は真空状態になったかのように無音になった。

1分くらい過ぎた頃、神田は、

「咲姫ちゃん・・・」と、静かに声をかけた。咲姫はゆっくりと目を開け、

「時の流れに逆らうことは出来ないけど、お話することが、多くの人の命を救うことになるかも知れません」

「人の命を？」高見刑事は眉間^{みけん}に皺^{しわ}を寄せた。

「今がお話すべき時なのかも知れませんが」咲姫は小さな声で言った。

「ありがとうございます。で・・・」高見刑事はポケットから手帳とボールペンを出し、

「えー、何かからお尋ねしていいか・・・」と、白髪頭^{しらがあたま}をボールペンで掻^かいた。

「まず、あの巻物を書いたのは誰なんだい？」神田が、じゃあ、という感じで咲姫^{さき}に尋ねた。

「それは、わからないわ。でも書かせた人は分かっているわ」咲姫は神田の目をしっかりと見た。

「誰？」

「頼朝よ」

「頼朝って、あの源頼朝^{みなもとのよりとも}？」神田は聞き返した。思いもかけない名前が咲姫の口から出た。

「源頼朝って、源頼朝！？」高見刑事も、まさかと思いつつも、「で、あの巻物には何と書いてあったのですか？」先を急いだ。

「私が母から口承されたのは」そう言うと、再び目を閉じ、何百年も前から封印されていた言葉を諳^{そら}んじ始めた。

頼朝

「頼朝様の命を受け封じ込めるは国家安泰の基なりと見備はし坐いま ゆくさき うみのこ やそつぎ い かしゃくはえ ここと いえかどたか ひろ たちさかして今も往先も子孫の八十続五十榎八桑枝の如く家門高く広く立栄たま おんねがいたてまつへしめ給へと御願奉る」

咲姫さきは、母から口伝された言葉の封印をとき解き、ゆっくりと、しかし、よどみなく声にして発した。

「これだけなんです」咲姫さきは薄く目を開き、体力を使い果たしたかのような弱々しい声で言った。

高見刑事はメモを取ることも出来ずに聞いていたが、

「たった？ いや、失礼・・・」そう言うと、うつむき加減で白髪しらがあ頭に手をやり、

「で、その意味は？」と、咲姫の顔を見た。

「頼朝様の命令で封じ込めるのは国の安泰とお思いになられて、今後とも子孫の繁栄をよろしく願います、ってことでしょうね」神田は憔悴せうすいした咲姫の顔を見た。

「そうですね。頼朝は、国と子孫、つまり、日本の今後のためにと思って、あの鉄の棒を富士山頂に封じ込めた、つまり封印したのだと思いますわ」

「富士山頂とここ宮島の弥山山頂みせんにね」神田は付け加えた。

「でも、どうして宮島と富士山なんだろうか？ 確かに宮島と富士山は、平氏と源氏を象徴するものではあるし、朱あけの大鳥居と雪を被った富士山から、頼朝は白い雪が紅葉を埋めてゆくことを連想しても不思議はないけど」神田かみたは腕を組んで、以前、高見刑事と疑問に

思ったことを口にした。

「大事なことは、1000年近く前の人間の考え方は、今の時代の人間とは大きく違っていてことよ」咲姫は薄っすらと額に浮かんだ汗をピンクのハンカチで押さえるようにして拭った。

「それに、1000年以上前では、人間の種類も違っていたでしょうね」そう言って高見刑事を見た。

「種類だなんて」高見刑事は少し大げさに背を伸ばしてみせた。

「民族が違っ、と言ってもいいかもしれませんわ」

「民族がですか？」高見刑事は再び背を丸め、咲姫の話に聞き入った。

「そうです。今でも日本の西と東に住んでいた日本人が違っ民族だったという痕跡はたくさん残っていますでしょ」

「そう?・・・ですね」高見刑事はやや口をとがらせた。

「川の名前の分布を見ると、日本の西と東できれいに分かれるのはご存知でしょ？」咲姫は高見刑事を見た。

「え?、まあ・・・」高見刑事はゆっくりと頷いた。

「それは、川の流れの形状や、水の量などによって名前が決まるのじゃなく、その地域に暮らしていた人たちが違っていたからでしょうね」コーヒークップを手に取り、

「西日本では谷がつき、東日本ではそれが沢になっていますよね」両手で包むように持った。

「たとえば、宮島には紅葉谷がありますけど、紅葉沢じゃないでしょ。紅葉谷が東日本あれば、丹沢の悪沢や日本アルプスの涸沢の

ように紅葉沢もみじさわになるでしょうね」コーヒーを一口飲み、

「味覚もそうですね。カップうどんやカップラーメンもメーカーは出荷地域によって味を変えてるのもご存知でしょ？」再び高見刑事を見た。

「え？、まあ・・・」高見刑事は膝の上の手帳に目を落とした。

「それに、顔つきも、今でこそ、混血が進んでいますし、移動も頻繁になっていますから東西で違うってことはありませんけど、当時は一目見て分かった と思いますわ」

「そ？、そうですね・・・」高見刑事は顔を伏せたまま、ボールペンで白髪頭を掻いた。

「典型的なのは、西郷隆盛タイプ、高杉晋作や吉田松陰タイプ、そして、アイヌタイプの顔を思い浮かべれば分かりますわ」

「遺伝子や肝炎ウイルスの分析でもこうしたことは確認されますですよ？」

「そ？、そうですね・・・」そうなのか、という顔で神田を、チラツ、と見た。

「それに、その西と東を分けて日本を統治すると言う考え方は今でも皇室の行事には伝統として受け継がれていますのよ」

「皇室へ？」高見刑事は、そんなことがあるのだろうかと言う顔で咲姫さきを見た。

「そうですね。大嘗祭だいじゆさいというのをご存知でしょ？」

「ああ、確か天皇の即位の時の儀式ですね」高見刑事は、「これは聞いたことはあるな」と思った。

「はい。天皇様が一世に一度だけ即位された後に行われる国家のお祭りです」そう言って、思い出すようにゆっくりと説明し始めた。「9000平米という広大な敷地にいろいろな建物を作っていくわけですけど、その中心になる建物は東日本を意味する悠基殿ゆきでんと西日本を意味する主基殿すきでんなんです」咲姫の透き通るような顔がやや赤

みを帯びてきた。

「そして、一連の儀式をこの悠基殿^{ゆきてん}で行ない、全く同じことを主基殿^{きでん}でもおこなうのです」宮島観光推進協会の渡辺も真剣に話を聞いている。

「こうした儀式を終えて即位として認められ、正式な天皇様になられるのです」

「フーム」咲姫のこれまでの話を聞き、神田には、頼朝が富士山と宮島に鉄の棒を「祀^{まつ}り、封印した」と言うのも事実だろうと思えてきた。

「専門の立場から見ましても西と東の民族の違い、それははつきりと分かりますわ」咲姫^{さき}は高見刑事と神田^{かみた}を交互に見つめた。

「専門？」神田^{かみた}はコーヒーカップから口を離した。

「私は宮司ですけど、実は、歯科医でもあるの」

「へー」予想もしていない言葉だった。

「大学を卒業して、商社に勤めたんだけど、ほら、当時、ロッキード事件なんかで総合商社への風当たりが強くなって、私もちよつと仕事に疑問を感じ始めていた頃だったから大学に入りなおしたの」「ほー、そりゃあ、たいしたもんですね」高見刑事の声がやや大きくなった。

「そんなことはありませんけど」コーヒーカップをテーブルの上に置き、

「歯科医の私を見ると、人相で歯の形状に違いがあるのがはつきりと分かるのよ」そう言うと言を閉じしばらくの沈黙の後、額に手をやり、

「少し頭痛がしてきたわ。これくらいでよろしいでしょうか？」

と、高見刑事を見た。

「お体の具合でも？」

「ええ、少し疲れたみたいです」

「今日は？」神田は心配そうに咲姫に尋ねた。

「今夜はその聚景莊じゅけいそうを予約してあるの。荷物も、もう預けてるのよ」そう言いながら立ち上がった。

「今夜はゆっくり休むといいよ。聚景莊じゅけいそうのレストランから見るライトアップされた鳥居はとっても綺麗だよ」

「木野花さんこのはなには敵いませんが・・・」高見刑事は手帳を背広のうちポケットに入れながら言い、白髪頭に手をやった。

「まあ、ありがとうございます。では、私へのご用件はこれで？」咲姫は、笑いながらそう言って立ち上がった。

「はい。お疲れのところ、大変ありがとうございます。非常に参考になりました」高見刑事も立ち上がり、

「文書の内容はお話していただきましたし、警察としましては、もうお引止めする理由はございません。今夜はごゆっくりとお休み下さい。また今後もご協力をお願いすることもあるかと思いますが、その時にはよろしくお願いします」そう言って頭を下げた。

「いつでもご連絡下さい。じゃあ神田君」咲姫は神田のほうを向いて、

「私、明日はお昼から岩国いわくにの錦帯橋きんたいきょうに行つて、広島に帰り、市内で一泊して、明後日、平和公園を散策してそのまま失礼します」と、言いながらドアの方へ向かった。

「おひとりで？」高見刑事は2、3歩ドアの方へ歩き、咲姫の後

姿に声をかけた。

「いえ。連れがいます」咲姫はドアのところで振り返り言った。

高見刑事は、チラッと、神田を見やり、

「ご主人？」と尋ねた。

「いえ、私がアメリカで歯科医の研修していた時に知り合った友人と一緒にです」

「ほー、それはご友人もお喜びになられるでしょう。ごゆっくりとお楽しみ下さい」高見刑事は改めて深く頭を下げた。

翌朝、神田^{かみた}はいつものように博打^{ばくち}尾根から獅子岩までゆっくりと走っていた。

咲姫^{さき}から聞いた文書の内容は不思議なものだった。源頼朝^{みなもと}が日本の安泰を願ってあの鉄の棒を富士山と宮島に隠した。それだけなら、いくらそれが不思議でも、それは単に昔の人間の宗教的な儀式だ、で終わりだ。

しかし、それを奪い取ったあの大男は何者なんだ？また、なぜ、中国はそれを奪おうとしたのか？咲姫^{さき}の言った「多くの人の命が救える」とはどういうことなんだ？

獅子岩までの登山道は、途中、ロープウェイの中継地点^{かやだに}の榎谷^{かやさわ}駅の建物の下をくぐる。トンネルのようになってるが、永年積み重なった砂で埋まり、今では、うんと背を低くしないと通り抜け出来ない。

「言われてみると、ここも榎谷^{かやだに}で榎沢^{かやさわ}じゃないな」と思いながら腰を低くして建物の下に入った。くぐりながら、

「歴史の事実もこうして時が埋めていつてしまっただろうな」と、ふと思った。

ロープウェイの榎谷駅かやだにを過ぎると少しの間急登になるが、すぐに見晴らしの良い大岩に着く。ここは神田かみたのお気に入り場所だ。左手には広島市が見え、江田島をはじめとして、瀬戸内に浮かぶ島々が見渡せる。

ここを過ぎるとすぐにロープウェイの終点駅のある獅子岩ししいわに着く。ロープウェイの駅から出ると野生の猿と鹿が出迎えてくれる。こんなところは宮島以外にはないだろうと思っている。そして、宮島の最東端のピークからは、先ほどの大岩以上の絶景が迎えてくれるのだ。

「ん！？あれは・・・？」神田は汗を拭く手を止めた。

「咲姫ちゃん？」

「あら、神田君。どうしたの、こんなに朝早く」

「それはこっちの言うセリフだよ」神田は咲姫のいる岩場へ続く石段を駆け上がった。

「そうね」瀬戸内から吹き上げる風で髪がそよいでいる。

「朝、とっても気持ちがいいから、久しぶりに紅葉谷もみじだにから登ってきたの」

「へー、元気なもんだな」足元を見るとジョギングシューズだ。

「当たり前よ。鍛え方が違うわよ」そう言って、足を「ポン」と叩いた。

「お友達は？」神田は周りを見渡した。

「そこにいるわ。」そう言って名前を呼んだ。

「え？キヨシ？男？」神田にはキヨシと聞こえた。

「ハロー、こんにちは」そう言いながら一段低くなっている展望台からカールした栗色の髪の女性が駆け上がった。胸元のネックレスが揺れて光った。女性だった。神田は、何だかホツとした。

「神田君、紹介するわ。こちら、長谷川キャシーさん」咲姫は、その女性の肩を抱くように左手を大きく広げて、その女性を招いた。そして、

「キャシー、こちらは学生時代の同級生の神田さん」と、右手を神田のほうへ向けた。

「ハロー、始めましてキャシー長谷川です」そう言いながら、女性は一歩進み出て、右手を差し出した。

「始めまして、神田です」キヨシじゃなくキャシーって呼んだのか。

「え？何か言った？」

「い、いや別に」背は咲姫と同じくらいだろうか。年頃は神田達と同年代だろう。

「キャシーはお父様が日本の方で、お母様がアメリカの方なの」咲姫はふたりを交互に見ながら言った。

「ああ、そうですか。それで日本語がお上手なんですね」

「アリガトウゴザイマス。でも、っ少っ少っだけ発音、変でしょ？」キャシーは大げさに肩をすくめた。

「とんでもありませんよ。私は英語を何年勉強してもダメですよ」首筋の汗を拭いながら言った。

「彼女とはシアトルのデンタルクリニックで研修中に知り合ったの」そう言う咲姫をキャシーはニコニコと見ている。

「アメリカ滞在中に日系の子供達に剣道を教えていたのよ。彼女、剣道に関心があったみたいで、教えて欲しいっていうので、子供達と一緒に教えていたの」

「へー、そうなんですか」

「キャシー、神田さんはね日本拳法のマスターなのよ」咲姫は、いくぶん自慢げにキャシーに言った。

「オー、弁護士さんですか？」

「ふふふ、違うわよ。憲法じゃなく拳法、これよ」そう言って右手で拳を作り、「エイツ」という感じで前へ突き出した。

「オオ、分かりました。空手ですね。私はケンポーにも関心があります」キャシーも咲姫の真似をして拳を作って前へ突き出した。

「今度教えてください」突き出した右手を腰に構えながら言った。

「まあ、キャシー、本気なの？」咲姫は、やや、身をのけぞらせてキャシーの顔を見た。

「本気です。わたしは日本の武道には興味あります。特に拳法と剣道には」そう言いながら首から下げている揺れるロケットペンダントを握った。

咲姫は、ニコツ、と笑って、

「じゃあ、今度帰ったら神田さんに教えてもらいなさいよ」と、キャシーの右肩を、ポンと小さく叩いた。

「帰ったらって、どこかお出かけですか？」神田はキャシーと咲姫の顔を見た。

「キャシーは外科医なの。一週間後には海外へ一年の予定でボランティア活動に出かけるのよ。その途中、日本に寄ってくれたの」

「はい。そうです。海外ではまだまだドクター、不足しています。今回、2度目です」そう言いながら手にしたペットボトルのミネラルウォーターを一口飲んだ。

「そうですか。それは素晴らしいことをしていらっしゃいますね」そう言っ腕時計を見て、

「おっと、いけない、時間だ。遅刻してしまう」神田はそう言いながら、タオルを首筋に巻きなおした。

「神田君、今日お昼ごはん一緒にどう？」

「ああ、いいね。じゃ、携帯に電話するから。じゃあ、キャシーさん、後でまた」そう言っ、右手を軽く上げ、紅葉谷へ向かった。

神田は、昼時間に、咲姫とキャシーに、「清盛うどん」で落ち合った。

「このうどんはね、手打ちで、カルシウムいっぱいなのなんだよ。おいしいよ」そう言っ、店主に冷やしうどんを三人分注文した。

「神田君、私達、あれから弥山の頂上まで登っただけで、キャシーもとっても気に入っ、ビューティフルの連発だったわ」と、キャシーの方を向いた。

「はい。とってもきれいでした。写真たくさん撮りました」そう言っ、デジカメの映像を神田に見せた。

「私は、あの大岩のそばに立つと、いつも靈氣を感じるのよ」咲姫ならそうだろうと神田は思った。

「この宮島は昔の修験者にとっては修行の島だったでしょうし、何千年も前の人たちにとっても何か神聖な島という認識はあったで

しょうね。弥山みせんの頂上に立つと、それがよく理解できるわ」咲姫さきは言葉に力を込めて言った。

「そうだね。今は巖島神社が有名になっているから市杵島姫いちきしまひめに代表される神の島のように思っている人が多いけど、仏教や、修験道などの歴史も深いからね」

「市杵島姫は弁財天と同一視されているし、弁財天はもともとヒンズーの神様サラスバティ（サラスワティ）ですものね」

「獅子岩の岩にペトログラフ（古代文字）で太陽神を崇拝する文字が刻まれているということは、何千年も前の人たちも、この島を神が宿る島として認識していた証拠だと思うわ」キャシーはふたりの会話を興味深そうに聞いている。

「ペトログラフの刻まれている岩がよく分かったね。あれはちょっと分かりにくいんだけど」神田は驚いて咲姫を見た。

「私には、その岩だけがライトアップされたように見えたの」

「そうかぁ」神田にはもう、咲姫の言う事には何の疑いも抱けなかった。

「おまたせいしました」気の弱そうな店主がうどんを運んできた。「わぁー、おいしそうですね」キャシーはもう割り箸に手をかけている。

「そういう意味で、この宮島は学問上でも貴重な島だと思うよ。ペトログラフの古代信仰からヒンズー教、山岳信仰、仏教、神道。神社の配置からも明らかに北斗信仰、妙見信仰も取り入れられていることが分かるしね」神田は、「ありがとう」と言ったふうに店主に手を上げた。

「へー、そうなの」咲姫も割り箸を割った。

「ああ、弥山頂上みせんと厳島神社の大鳥居をつなぐ線は南北方向なんだよ」

「へー。そういえば、弥山本堂には毘沙門天が祀まつられていたわね」
「ああ、毘沙門天は北の守り神だからね」

「それでね、弥山頂上みせんと大鳥居の先に宮島を遥よう拝はいするために建立されたと思われる地御前神社があるんだよ。」

「へー」

「しかもその線を伸ばしていくと極楽寺山じくらくじやまに当るんだ」

「おそらく、極楽寺山も文字に残される以前から信仰の対象になっていたんだろうね」そう言つと、うどんを「ツルツルツ」と口に運んだ。

「そうね」咲姫はそう言つて、

「そもそも、今回の台風でも分かるように、一年に何回かは、大きな台風が来て厳島神社は被害を受けるんですものね。何年に一回かは必ず大きな被害があるし、それが分かっているながら、こここんな立派な神殿を築く必要があつたのかを考えると、これは曼陀羅まんだらの思想よね」

「対岸から臨むと、島全体が曼陀羅絵になっているしね」

「案外そんなところに、伊勢神宮が20年に一度建て替えられる式年遷宮や、出雲大社の巨大神殿と通じる考え方があるのかもしれないね」

「私もそう思うわ。出雲大社も高さが48mもあつて、何度も倒壊して、そのたびに建て替えられたらしいものね」咲姫さきも、おいしいそうにうどんをすすった。

「以前は、当時の建築技術では高さ48mなんてとても無理だから、単なる言い伝えだと思われるだろう」そう言いながら、キャシーの方を向いて、

「どうですか？このうどんは」と聞いた。

「おいしいです。大好きです」キャシーはもう半分くらい食べている。

「ところが実際に巨大柱が発見されたんだから、世間が、アツと言ったのも無理はないよ」

「たしか平成11年よね」そう言う咲姫に、そうそう、と言う感じで神田は肯いた。

「あつ、そうだ。これ見てくれるかな」神田はそう言って、紙袋から一枚の写真を取り出した。富士山本宮浅間大社の職員が富士山頂上奥宮で撮った鉄の棒の写真だ。

咲姫なら何か分かるかもしれないと思って、今朝、富士山本宮浅間大社の宮司に頼んでメールで送ってもらったものだ。

「あら、これが例の鉄の棒？」そう言って神田の手にある写真を覗きこんだ。

咲姫の顔が急に近づき、神田は思わず顔を動かした。

「・・・ああ、ちょっと見にくいけど、この表面に刻まれている模様のようなものは・・・何か分かるかい？」写真を咲姫の方へ少し動かした。

「ええ、これは烏文字よ」神田から写真を受け取り、それを見るとすぐに言った。キャシーも興味深げに覗いた。

「烏文字？」

「ええ、それかなり古いものね。今はもっと分かり易いわ」
写真をキャシーにも見えるように動かした。

「今は、熊野三山のお札に使われているものだけど、もともとは
大事な誓いの言葉を文字にするときに使われたものよ」顔を上げて
神田を見た。

「で、なんて書いてあるか分かるかい？」

「数字みたいね」咲姫はジッと見ていたが、

「これは・・・」咲姫の顔が急に困惑の表情に変わった。

「何？どうしたんだい？」そう言いながら、写真を咲姫の手から
取って改めて、そこに写っている鉄の棒を見た。

「なんていう数字なんだい？」顔を咲姫へ向けた。キャシーも咲
姫の顔を見つめている。

「三の一」咲姫は顔を上げ、神田の顔を見つめて、困ったように
言った。

「え!？」

平和公園

「三の一、つまり、三巻の中の一巻ってことみたいね」このはなさき木野花咲姫は、写真を見つめたままつぶやくように言った。

「え？、だとすると富士山と宮島と、そして、もう一か所どこかに封印、まつ祀られてることかい？」思わず声が大きくなり、店主が調理場から出てきた。神田は、なんでもない、なんでもない、と言う風に手を振った。

「の、ようだね」咲姫は、顔を上げて、面白くなってきたわね、というように、「ニコツ」と笑った。

「あー、またまた問題がややこしくなってきた」神田は箸を握ったまま天井を見た。

「どうかしましたか？ビッグプロブレムですか？」キャシーは心配そうに小声で咲姫に聞いた。

「もう、とにかく先にうどんを食べてしまおう」神田は椅子に深く座りなおして、うどんを食べ始めた。

「この件はね、かみた神田君。簡単な問題じゃないわよ。もっと腰を据えて考えなきゃ」そう言つと、「ごちそうさまでした」と、手を合わせた。

神田も、

「みたいだね」そう言いながら箸を置いた。

確かに、この件は、表面的には窃盗事件として扱われている。しかし、外務省や警察庁は何か隠しているんじゃないだろうか？鉄の棒は全部で3本あって、そのうち2本はすでに何者かの手にある。

あの大男と中国もそのことを知っているのだろうか？もし、知っているとすれば、再び、何らかの行動を起こす筈だ。3本目はどこにあるんだろう？

そう考えていた時、咲姫さきが、

「そう、そう、私、神代こうしろさんに会ったわよ」目を大きくして神田を見た。

「神代さん？ あの新聞部の部長だった？」久しぶりに聞く名前だった。

「そう、一昨年おととしの3月（2003年、平成15年）よ。学生時代にお世話になった叔父が亡くなったので葬儀に参列して、その翌日、久しぶりに平和公園に行ったの」

「そしたら、公園の雰囲気が違うのよね。朝方は少し雨が降っていたものだから、観光客は少なかったの。その割に体格がいい背広を着た男の人が目に付くのよ」

「刑事？」

「そう。しばらくすると新聞記者やテレビクルーが慰霊碑いれいひの両サイドで場所取りを始めてね。その、記者の中に神代こうしろさんがいたのよ」キャシーは表に出て鳥居の写真を撮っている。

「へー、じゃあ、今はプロの新聞記者なんだ」神田は立ち上がり、三人分の代金を払った。

「あ、ごちそうさま。フリーの記者だそうよ」咲姫さきも立ち上がった。

「で、その日は誰が平和公園に？」

「じゃあ、ごちそうさま」そう店主に手を上げて店を出た。

「ごちそうさまでした」咲姫も店主に頭を下げた。

「キューバのカストロよ」咲姫は神田が持ち上げた暖簾のれんをくぐって外に出た。

「ああ、キューバ国家評議会議長フィデル・カストロ」

「そう」

「それでね、カストロが慰霊碑の前に花を手向たむけるとき、神代さん、とんでもないことをしたのよ」ふたりは、キャシーが石の大鳥居のほうへ歩いて行くのを見て、その方向へゆつくりと歩き始めた。

「とんでもないこと？」神田かみたは並んで歩いている咲姫さきの横顔を見た。

「神代さんしんじょう、最初のうちは写真を撮っていたんだけど、カストロが献花けんかする時に、バッグから写真を取り出してカストロに向かって何か言っただのよ」咲姫さきも、神田の顔を見上げた。

「写真って？」

「ゲバラの写真よ」

「ゲバラの？」

「そう。その写真を掲げて、カストロに向かってスペイン語で何か言っただのよ」

「で、カストロは？」

「カストロは手を上げて神代さんしんじょうのほうに向かって歩き始めようとしたのよ」神田は、ホーツ、と言う顔をして、200mほど先の朱の大鳥居あけを見た。

「でも、キューバの護衛官が、カストロの前に立って止めたわ」咲姫は残念そうに言うつと、

「神代さんも日本の警官に引き止められて、離れたところに連れて行かれたの」と続けた。

しかし、咲姫はすぐに、

「その後、神代さんはすぐに解放されたわ。キューバの通信社に知り合いがいたらしくて、それに、カストロ本人が護衛官を通じて解放するように言ってくれたらしいの」と、明るく言った。

「へー、で、咲姫ちゃんも神代さんと何か話したの？」

「ええ、その後すぐに声をかけたわ」

「彼も、久しぶりだなー、て感じだったけど、カストロに密着しなきゃいけないとかでその時はアドレスを交換しただけよ」

「額の傷がなんだか大きくなってたみたいね、って言ったら、そうなんだよ、紛争地帯に行く度にここをやられるんだ、って笑ってたわ」そう言って右の人差し指を眉間にあてた。

「で、神代さんは、カストロに何を言ったんだい」神田は心配そうに聞いた。

「それがね、ゲバラと一緒に献花してくれって言って、ゲバラの写真を渡そうとしたらしいの」と、愉快そうに笑って言った。

「神代さんらしいなあ。ゲバラも広島に来た時には、自分で花を買って慰霊碑に花を手向けたらしいからな」と、神田もそれを聞いてうれしく思った。

咲姫も楽しそうに、

「カストロも本当はゲバラと一緒に献花したかった、って、あとで側近に漏らしたらしいわ」と言った。

「だろうな。で、神代さん、今は？」神田は咲姫の横顔を見た。

「それが、その後アフガニスタンからメールが来たのが最後なのよ」

「そりゃあ、心配だなア」

ふたりの声は小さくなった。

「日本拳法部の山口さんはどうしてるの？」咲姫さきは、話題を変え
るように明るい声で聞いた。

「先輩は、卒業してすぐに香港へ渡ったよ」神田かみたは再び、海上に
立つ大鳥居を見やった。

先日の台風14号の暴風雨にもびくともせずに、今は、陽の光を
浴びて朱塗りが輝いている。

「香港へ？」ビックリしたように神田の右顔を見上げた。

「ああ、山口さんが卒業した頃は、ブルース・リーのお陰でカン
フーブームの真っ最中だっただろ」神田かみたはゆっくりとした口調で話
した。

「ああ、そうね。あの頃は、あっちでも、こっちでも、オチャー、
ってやってたものね」と、咲姫も遠くを見る眼差しで鳥居のほうを
見た。

「それで、単身、飛込みで香港の映画会社へ売り込みをかけたら
しいんだ」

「そうなの」

神田は顔を上に向け、思い出し笑いをしながら、

「それがさ。ハハツ、例の、暴力団との抗争事件は、おもしろが
られて海外メディアにもちよっと取り上げられただろ」と、言った。
「そうだったわね」咲姫もうなづきながら楽しそうに笑った。

「その話は香港にも伝わって。お陰で、山口さん、エキストラに採用されてね。ほら、山口さんは、山口大河やまくちたいがだろ。だから、タイガー山口という芸名で、もっぱら悪役の日本人役だったんだ。でも、その後は腕を見込まれて武術指導の担当になったんだよ」と言つて、少し顔を引き締めて、

「だけど、山口さんの目標は自分の道場を持つことだったからね」
そう言つた。

「で、今は？」

「その後何年かして、なんでも、台湾の軍から武術教官になつてほしいって依頼が有つて台湾で拳法を教えてたらしいよ」
「そう言う神田の、声のトーンが低くなったのを咲姫は感じた。」

「そうなの」

「一度、日本に台湾要人の警護で帰つて来た時会つたけど、詳しい仕事内容は言えないらしくてね」
「フー、とため息のようなものが自然に出た。」

「12、3年前に分かれたきりだよ」

「そうなの」と、咲姫さきは寂しそつに言つた。

「どこで会つたの？」

「俺も平和公園でだよ」
ニコツ、と笑つて咲姫さきを見た。

「そうなの。偶然ね。私達つてどこかで繋がつてるのかもしれないわね」
「そうかも知れない、と神田も思つた。」

「あれは確か19回目の広島平和音楽祭があつた日だよ」

観光客は待ちきれずに遠くに見える大鳥居の写真を撮り始めている。

「音楽祭に出演する歌手が慰霊碑に献花していたから良く憶えているよ」

そう言つと、記憶をたどるようにして、

「平成4年（1992年）頃だったかなア」と言つた。

「商工会議所に用事があつて、時間調整に平和公園を歩いていたらね、山口さんから、おい、神田、つてね、声かけられて」あの時の驚きを思い出した。

「夏の暑い時だったよ、木陰こかげでほんの4、5分話しただけで、じや、行かなきゃ、つて、・・・俺の名刺は渡したんだけど、それつきり連絡がなくて」最後は少し寂しそうな声になった。

「そうなの」

咲姫さきは、神代いじよさんも山口さんも元気でいて欲しいと願つた。

キャシーは石の大鳥居のところまで行つて狛犬こまいぬの写真を撮つている。

咲姫さきは「キャシー」と呼んで手招きをするとキャシーは小走りで駆けて来た。

「キャシー、じゃあ、そろそろ行きましようか」

「OK・・・」もう、ふたりの話は終わったの、という感じで、咲姫さきを見てウィンクをした。

咲姫が、

「ばかね」と小声で言うのが聞こえた。

三人はフェリー乗り場の方へ向かつて歩き始めた。

「錦帯橋きんたいきょうまではどうやって行くんだい？」

「JRで行くわ」神田と咲姫はキャシーから数歩遅れて歩いている。

「よかつたら車貸すけど」

「ありがとう。でも、キャシーが電車に乗りたいつて言うのよ」と、キャシーに聞こえるように声を大きくした。

キャシーは振り向いて、

「はい。私はたくさん経験がしたいのです」と、笑顔で言った。

棧橋では、この時間でも宮島に上陸する観光客の数は多い。

台風の影響で観光客の減少が懸念されたが、神田たち宮島観光推進協会の各方面への働きかけもあって通常と変わらないほどであった。

キャシーがいる改札口の手前でふたりは立ち止まり、

「咲姫ちゃんも元気で。今回はいろいろと助かったよ」

「神田君も元気でね。私も、あの鉄の棒については考えてみるわ」と言葉を交わし、

「何か分かったら連絡頼むよ」神田と咲姫は自然に握手した。

「じゃあ、お気をつけて旅を続けてください」そして、キャシーにそう言って手を出した。

神田は、事務所に戻って、高見刑事に連絡を取った。

「えーっ、もう1本あるんですか？」電話口の向こうで高見刑事が白髪頭を抱えるのが見えるようであった。

「そうらしいんです。あの鉄の棒の表面には、三の一、って刻んであるらしいんですよ。・・・そうです。三の一です」

「そちらの方で新情報は？」

「そうですね。進展なしですか」

「いえ、こちらにも別に、今の、鉄の棒が3本あるらしいということとが分かった以外にはありません」

「はい、木野花^{このはな}さんも何か分かったら連絡をくれると言うことになっっていますので」

「はい。・・・はい。分かりました。じゃあ、これで」

事務椅子に腰をかけ、今回のことをはじめから考え直してみた。
頼朝が日本の安寧あんねいを願って西と東に鉄の棒を封印、祀まつった。

しかし、鉄の棒は、もう一本あるらしい。と言うことは、その一本もその頼朝の考えに相応ふさわしいどこかに封印、祀まつってなければならぬ理屈になる。それはどこだろう。それは、まだ日本にあるのだろうか？それとも、すでに、あの大男か、もしくは中国が手に入れているのか？

そもそも、頼朝が、三ヶ所みつに祀まつることが日本の安寧あんねいに繋つながると考えた鉄の棒とは何なのか？

それを何故あの大男や中国が狙ったのか？

チェンマイの剣

1972年（昭和47年） タイ チェンマイ

玉木の家は、チェンマイの市街からビルマ方向へさらに車で30分ほど山の中にあつた。もう少し行くと、ビルマとの国境に接する地域だ。

深くえぐれた轍に溜まつた泥水を跳ね上げ、トラックの車体は、さながら荒海を行く小船のように揺れた。トラックが大きく揺れるたびに、ルミ子と沙織が「きゃーっ、きゃーっ」と声を上げているのが助手席の開け放つた窓から聞こえてくる。

「郷戸はん、ほーら、着きましたで」と、指さす先にヘッドライトの明かりの中の高床式の家の集落が見えてきた。

「この村に住んどるもんは、ぜーんぶワテの親戚や」

「親戚？」郷戸は、体が跳ね上がるのを防ぐために窓枠を掴み、前を見たまま聞き返した。

「せや。ワテの女房の親やら、兄弟姉妹やら、その親戚やら、中には他人も混ざつとるかもしれへんがな」玉木は顔を上下に揺らし、楽しそうに言った。

「せやけど、かまへんねん」

「あんた、一体ここで何をしてるんだ？」

「何をて、あんた、・・・結婚生活やがな。ハッハッハッ」

玉木はトラックから飛び降りると、

「おーい、春子ーッ、今帰ったでー」と、大声を上げた。

遠くからやや小太りの女が満面の笑みを浮かべて、足早にやってきた。暗くてよく分らないが、30歳くらいであろうか、大きな口の白い歯が印象的な女であつた。

子供達が、

「きゃー、きゃー」と声を上げてトラックめがけて走ってくる。

数匹の犬がその子供達を追いかけて子供たちの足にまとわりついている。

そして、子供達はトラックの周りに集まって、タイヤに足を掛け荷台にあがろうとしているが、大人たちに引きずり下ろされた。

いつもの光景なのだろう。大人たちは手馴れた様子で荷物を降ろし、近くの高床式の家に運び込み始めた。

「どや、元気やつたか？」玉木はそう言つて、春子と呼んだ女を両手で抱きしめ、右手で尻をなでた。

他の女達も玉木の周りに集まつてきた。

「郷戸はん、こつち来なはれや。紹介しまつさ」

玉木は春子と呼んだ女の肩に右手を回したまま、

「これが春子や、最初の女房や」

そして左手で女達を指差し、

「こつちが二番目の女房の夏子、三番目の秋子は今ちよつと見えへんなあ。ほんで、あれが四番目の冬子で……」

「玉木さん、ちよつと待ってくれ、そんなに覚えきれん」

「そうか？覚え易い名前にしたんやけどなあ……」と額に垂れた髪をかきあげた。

郷戸は、

「あー、それで一番新しい女房が沙織か」と気がついた。

「ま、こつちで飯でも食おう」そう言うと、ひときわ大きい高床式の家へ向かった。

ギシギシと鳴る木の階段を上がり、木戸を開けると左手に大きな瓶が2つ置いてあった。玉木は、そばにあった柄杓ひしゃくで水をすくい、それを飲み、残った水で手を洗った。郷戸もそれに倣ならった。思いのほか冷たくて気持ちがいい。

その夜は、メコンウィスキーを飲みながら、玉木の女房達が料理した鶏のカレー煮込みと川エビを煮たもの、それにもち米を炊いたものを食べた。

郷戸ごうどと玉木が食べている間、玉木の「親戚」が十数人周りを取り囲んで郷戸の食べる様子を興味深げに眺めていた。子供達は、郷戸が一口食べることに声を上げて笑った。

翌朝は鶏けいの声と米を炊くにおいで目が覚めた。鶏の声に混じって「バシッ、バシッ」という音がどこからか聞こえてくる。

郷戸は食事の支度をしている女房達に頭を下げて、階段を降りた。昨夜は暗くて分からなかったが、かなり大きい集落になっている。あちらこちらで鶏が餌をついばんでいる。遠くに見えるのは水田であるうか。

「バシッ、バシッ」と言う音は集落の外れから聞こえてくる。なんとではなく、その音のする方へ足が向いた。

そこには、ムエタイのリングが拵ひこえてあった。少年達がムエタイの稽古けいこをしている。幼いのは10歳くらいから、その子供達を指導

をしているのが、25、6歳といったところだろうか。

練習をしている少年達の中で一際目立つ少年がいた。幼顔おさながおながらも背が高く目つきが鋭い。細い体はまるで革の鞭むちのようにしなる。

「なんや、ここに居ったんかいな」玉木が後ろから声をかけた。

「ああ」郷戸じょうどは振り向かず腕組みをしたまま返事をした。

「どや、ええ子やろ」

「ああ」

「強いでエ。ワテの息子や」玉木の自慢げな顔は声を聞けば分かった。

チエンマイに来てから2週間ほどが過ぎた。

こちらに来てからも毎朝1000回の素振りは欠かさなかった。

そして、子供達も、日課になっている山での枯れ枝拾いから帰ると郷戸のまねをして棒切れを振るようになっていた。

そのうち自然に、郷戸は子供達に剣道を教えるようになった。

そんな様子を見ていた玉木はある日、

「郷戸はん。あんさんに頼みがあるんやけどな」と、いつものように大きな声で言った。

「なんだ」汗を拭きながら玉木のいる木陰に入った。

「ワテの子にな、あんたの剣術を教えてやってもらいたいんや」「剣を？」一瞬汗を拭く腕を止めて玉木を見た。

「せや。ワテの子供はあの子だけなんや」そう言って、素振りをしている少年達のいる方を、顎あごでしゃくった。

中に一際背ひときわの高い少年がいる。玉木の息子だ。

「だからといって俺が教える理屈にはならん。それに、俺の剣は人に教えらるような高尚なものではない」汗を拭き終えてシャツを着た。

「まあ、そう言わんと。頼むがな。この通りや」と、手を顔の前で合わせ、

「オーイ、ナカッチャン」と、少年を呼んだ。

少年は玉木から呼ばれてうれしそうに走ってきて、郷戸の前で立ち止まり、

「サワツ、デイ、クラブ」と手を合わせ、ニコツ、と微笑んだ。

玉木は少年の肩を抱き寄せながら、

「ナカッチャン、この兄ちゃん^{にい}がな、お前に剣術を教えて下さんのや」と、少年にゆつくりと言った。

「ま、待て、俺はまだ教えるとは・・・」郷戸は、シャツのボタンをはめる手を止めた。

「ま、ええがな。ちよつと手ほどきしてくれるだけでええんや」玉木は郷戸の言葉を遮り、

「ナカッチャン、ようお礼言わな」と、少年の顔を覗いた。

「ボク、ナカッチャン、ジャナイ。和司^{かずし}ダヨ」少年は、玉木の顔を見上げて、唇を尖らせて言った。

「おお、せやったな。よし、もうエエ、あっち行って仕事し」と、少年の肩を押して、追いやった。

「あの子は、日本人に成りとうてな、自分で和司ゆう名前つけたんや」そう言いながら右手を頭の後ろにやって、

「まあ、ワテの血が入つとるさかいに、日本人や言うても嘘とち

やうがな」指先で首筋を搔いた。

「しかし、無理な話や・・・」玉木は寂しそうに言った。

「郷戸じょうどはん、おそらく、年明けにはワテは国外退去処分になると思う」と、いつもと違う厳しい表情で郷戸の顔を見た。

「国外退去？」シャツのボタンをはめ終えると、郷戸は玉木の顔を見た。

玉木は、

「ああ、日本じゃ、ワテのことで騒ぎ始めとるらしいからな」片手を木にあてて体を預けた。

「何の事情も知らんアホなマスコミのお陰や。ただ、ワテのことをおもしろおかしくゆう週刊誌に書きまくって、ワテはそいつらの金儲けの材料にされてしまうたんや」と吐き捨てるような口調で言った。

「おそらく日本政府がこっちの政府に圧力をかけとんのや。もうじき手続きは終了して捕まえにきよる」そう言ってタバコを足元に捨て、ゴム草履で、憎々しげに何度も踏み、2mほど先へ蹴飛ばした。

「いま、ワテが国外退去になったら、ここにおる200人近くの人間の生活の面倒を見るもんがおらんようになる」近くにあった丸椅子を2つとりに行った。

「それに、ワテの夢も中途半端なままで終わってしまう」椅子のひとつを郷戸の近くに置いた。

「何なんだ、あんたの、その夢とやらは」郷戸は椅子には座らず、立ったままで聞いた。

「ここに、こいつらの国を作ってやりたいんや」玉木は、ドッコ

イシヨ、と、椅子に腰を下ろした。

「国？」何を言い出すんだ、と郷戸（いっぴく）は思つて、玉木の顔を見た。玉木はまじめな顔で、

「せや。見てみ」そう言つて、東の空を指差した。

「あの空の下はビルマや。せやけど、タイやビルマやゆうても、この辺（あた）りに住んどるもんにとっては関係あらへん。空に線引きはでけんからな」木の幹に体を預け足を投げ出して、遠くの空を見つめながら続けた。

「いろんな部族がタイやビルマと関係無（かんけい）う、生活しとんのや。中には、中国共産党に追われて逃げて来た国民党の連中もいてる」ポケットからマルボロを取り出し郷戸にも勧めた。郷戸は、手を、イヤ、というふうに振つた。

「あの辺（あた）り一体はな、今、みんなが自分らの文化と生活を守るために命をかけとんのや」

「ワテはそれの手伝いをしてやりたいのや」

「手伝いを？」郷戸は、この男が分からなくなつてきた。

「これはワテ等の義務や」そう言いながら、マルボロを1本口にぐわえた。

「この辺りは、インパール作戦で負けてもうた日本人の兵隊さんがビルマからタイへ逃げてきた道や」

「ここのカレン族にとっては日本人は敵やつたんや、その敵やつた日本人が腹へつたり、病氣になつたりした時にはな、助けてくれたんや」いったん口を、クツ、と結んだ。そして、

「そのお陰で、今の日本があんのや。ありがたいこつちやがな」

と、続けた。

「ついこの間までは、ワテも、そないなことは考えてなかった」
マルボロの紫煙は緩やかに風に乗った。

「それがな、ある時、ここの子供らがこの先の洞窟で、日本軍の残して行つた小銃を仰山見つけたんや」そう言つて郷戸の顔を見た。

「三八式か？」

「せや。どういう経緯で鉄砲があんなとこにあつたんかは分からん」そう言つて大きく胸を膨らませて煙を吸い込み、フー、と吐き出した。

「ここいらの人間に殺されたり、病気で死んだり、山賊に襲われたりして死んだ兵隊さんのかも分からん」煙の後の言葉はため息混じりになった。

「しかし、そんなことはどうでもええんや。ワテはこの銃でカレン族に恩返しがしたいんや」自分に言い聞かせるように声が大きくなった。

「そんな時から、ワテは、日本軍が残していった銃やら、なんやらが見つかった言う話しがあつたら、飛んで行つては買つてまんのや」ニヤツ、と笑った。

「どうするつもりだ？」

「ワテはな、その銃を、食料やら他のものと一緒に、ここいら辺のカレン兵に渡してまんのや」ペツ、と唾を足元に吐き、

「武器の密売か」という郷戸の言葉に、

「密売とちゃう。タダでやってんのや」と、早口で応えた。

「しかし、これは、トップシークレット、ちゅうやつや」冗談め

かして、「トツプシークレット」と言う言葉に力を入れた。

「今、ワテが隠れたりしたら、捜査の手が入って肝心のトツプシークレットがタイ軍やビルマ軍に知れてまう」吐き出した唾で湿った砂をゴム草履でザラザラと消した。

「せやから、今は大人しゅう捕まるつもりや」顎あごを上にならげて、額に垂れた髪を後ろへやった。

「後のことはワテの女房やら親戚やらに頼むつもりや」そう言つて頭を木にもたれさせた。

「それと、俺が、あんたの息子に剣を教えることとどういふ関係があるんだ」郷戸は玉木の反対側にもたれて、顔を見ずに聞いた。

「あの子にな、ワテの夢を継いでもらいたいんや」クルツ、と振り向いて郷戸の顔を見た。

「あんたの夢を？」郷戸は、正面を向いたまま聞き返した。

「せや、いざと言う時には自分の身を、家族を、村を守らなあかん」玉木は両手を膝に当て丸椅子から立ち上がった。

「これから先、長い戦いになる。ワテがおらんようになっても、あいつには頑張ってもらいたいんや」パン、パン、と半ズボンの尻を叩いた。

「あんたの勝手な思いだ」郷戸は早口でハッキリと言った。

「そうかもしれへん。けど、それがあの子の運命や」左手を木にあて、郷戸の目を覗き込むように、

「どや、頼まれてくれへんか？」と、言った。

郷戸は返事をせずにその場を離れた。

1973年（昭和48年）1月 タイ チェンマイ

年が明けた。

郷戸は、毎朝、子供達には素振りはさせているが、玉木から頼まれたことに返事はしていない。

玉木もあれ以来そのことは口にしなくなった。

「変わった男だ」郷戸は思った。国を作ろうなんて夢のまた夢だ。玉木にもそれは分かっているはずだ。

郷戸は、最近、村の連中の荷物運びの列に加わってビルマとの国境近くの街まで行くこともある。

「郷戸はん、パスポート出しなはれ」郷戸が山から帰るなりそう言った。

「パスポート？」

「今から、あの兄ちゃんがマレーシアへ行ってビザの延長をしてくれるさかい」そう言っ、トラックの泥だらけのフロントガラスを洗っている男を指差した。

「大丈夫なのか？」いつか、トラックを運転してきた男だ。

「大丈夫や。蛇の道はヘビや」

「あの兄ちゃんは、バンコクでワテが世話しとる兄ちゃんや」そう言っ、おどけた格好で男に手を振ると、男もおどけて白い歯をむき出しにして「ハッ、ハッ、ハッ」と笑っ、敬礼の格好をした。

「一週間に一回はこっちに来よるさかいに、これからワテがおらんようになつても、あの兄ちゃんに頼み事したらええ。信用できるさかいな」そう言っ、男は理解しているのかどうか、顔の前で手を合わせてニコッ、と笑った。

タイの人間の笑顔は心を和ませるものがある、と近頃、郷戸は思

うようになつていた。

「しかし言葉が・・・」

「言葉なんか分からんでもかまへん」ハッ、ハッ、ハッ、といったように笑いながら言い、

「言葉が通じて字が読めても何にもならへん」と、手を自分の顔の前で大きく2度振った。

「見てみいな。言葉が通じて、紙切れに約束事書いても、あっちこっちで殺し合いしとるやないか」口の端を上げて言った。

「言葉は通じんでも、字は読めんでも、家族になるのが一番や。ハッ、ハッ、ハッ、せやろ、郷戸はん」

「ま、いざと言う時には、ワテの息子がちょっとだけ日本語がしゃべれるさかいに、少しは役にたつやろ」

玉木の息子は離れたところで、棒切れを持って素振りをしている。最近では様^{さま}になつてきた。棒を振り下ろすたびに「ニッポン！、ニッポン！」と、気合のつもりなのだろう、叫んでいる。

「おい、ナカツチャン」玉木はナカツチャンを呼んだ。

ナカツチャンは、玉木に呼ばれると、本当にうれしそうに飛んでくる。郷戸の前で裸足の足をそろえて、

「サワッ、デイ、クラブ」と手を合わせた。

「ええか、ナカツチャン・・・」

「和司ダヨ」

「ええか、和司、一所懸命^{いっしょけんめい}練習して、強うなれよ。強うなつて、この村を守るんや。お父ちゃんもそのうち帰ってくるからな」

「帰つてくるとは・・・？」郷戸は汗を拭きながら思った。

「ウン、ボク、ガンバツテ、強クナツテ、オトウサंगा、帰ツテ
クルマデ、コノ村ヲ守ルヨ」

「よし、よし、ナカツチャン、お前はホンマにええ子や」そう言
う玉木の目には涙が浮かんでいた。

「和司ダヨ」

「せやったな。和司」そう言つて、両手で、ナカツチャンの肩を
抱いた。

玉木は、ナカツチャンの肩に手を置いたまま、郷戸を見上げて、
「郷戸はん。いよいよ、明日、ワテは連行されることになったん
や」

「明日？」

「せや、あの兄ちゃんの情報や」と、トラックのタイヤの泥を落
としている男のほうを見た。

そういえば最近村の連中の行動がセワセワしていた。

「あの兄ちゃんの情報^{にじ}は確かやからな」

玉木のその言葉には覚悟が滲^{にじ}んでいた。

息子は静かに玉木の話^{にじ}を聞いている。

「郷戸はんはここで気の済むまでゆっくりしたらええ」玉木は息
子の肩に手を置いたまま続けた。

「飽きたら、あの兄ちゃんがバンコクから来た時に一緒に帰った
らええんや」そして、息子の顔を覗^{のぞ}き込んで、

「ええか、ナカツチャン・・・」

「和司ダヨ」

「ええか、和司、この郷戸はんの言うことをよお聞いて、強い男
になるんやで。日本の男はな、強おないとあかんねん」と、一言、
一言、噛んで含めるように言った。

息子も黒い顔を引き締めて、

「ワカツタ。ボク、強クナツテ、日本人ニナルヨ」

息子はそう言つて、さつきまで素振りをしていたところに、タタツ、と駆けて行き、再び、

「ニッポン！、ニッポン！」と声を出して、素振りを始めた。

翌朝、鶏にわとりが啼くと同時に、タイ警察の人間が玉木の家屋にやつて来た。玉木は明け方近くまで村の者と酒を飲んでいてちょうど寝入ったところであつたが、

「ちよつと支度するさかいに下で待つといてんか」そう言つて、小ざつぱりとした服に着替え、昨夜から整えてあつたカバンを１つ持ち、戸口まで歩み、

「ほな・・・」と、振り返つて部屋を見渡した。

部屋の中には２０人の女房達とその親や兄弟、姉妹達が暗い顔で立っている。春子は必死で泣くのをこらえ、夏子や秋子に脇を支えられている。

階段をギシ、ギシ、と鳴らして降りると、女房達も後に続いた。

玉木は、前後を制服警官に挟まれ、おとなしく車の停めてある集落の入り口に向かった。車は既に運転席を集落の外に向けて停めてあつた、

村の人間達は両脇に立ち並び、あるものは子供達の肩を抱き、あるものは顔を伏せて嗚咽おえつを漏らしている。犬達でさえも何事かと列の中に入り込み玉木の様子を眺めている。

ルミ子と沙織がパタパタ、とゴム草履を鳴らして、玉木達を追いついて車まで行き、車の中にいる警官に果物やら飲み物やらを

渡し、何やら頼んでいる。

階段の下に居た春子は耐え切れずに大声で泣き始め、それにつられて、他の女房や親戚達も声を上げて泣き始めた。

「オーイ、オイ、オイ・・・オーイ、オイ、オイ・・・」

玉木は車まで2mほどのところまで来て、耐え切れずに振り返り、「達者で暮らせよオー」と、振り絞るような声を上げ、タタツ、と四駆のトラックへ走りより、荷台に乗り込んだ。

四駆のトラックは、マフラーを、ブルルン、と大きく揺らしてエンジンがかかり、一塊の黒煙を吐き出し、ゆっくりと動き始めた。
ひとかたまり

加速し始めるトラックの荷台から、ふと、いつもの大木の辺り^{あた}を見ると、朝日の中で、郷戸とナカッチャンがトラックの方を向いて素振りをしているのが見えた。

ナカッチャンの「ニッポン！、ニッポン！」の掛け声は、いつもより大きく、風に乗ってトラックを追いかけてきた。

ナカッチャンの姿は玉木の瞳の中で揺れ、その掛け声は、玉木の心に刺さった。

何日かして、トラックの定期便がチェンマイへ戻ってきた時、郷^こ戸^うはドライバーから、パスポートと日本の新聞を受け取った。

その新聞には、玉木はバンコクに連行されて間もなく、タイ政府から「公序良俗を乱した」罪で永久国外追放になったことが大きく載っていた。

ここで暮らす玉木の女房達やナカッチャンはそのことを知っているのだろうか？彼らは、陽が昇る前から働き始め、普段と変わりな

い生活をしている。

玉木は村のためにトラックを1台購入していた。女達は村の男が運転するトラックに乗って、一週間に何度かチェンマイ市街に出て、自分達が織り上げた布や、野菜を売っている。

男達は何週間も村を留守にすることがある。ビルマとの国境を越えて三八銃さんぱちゅうを運び込んだり、密貿易をしたりしているのだ。

チェンマイに来てから、半年が過ぎようとしていた。

郷戸ちゅうは、女達とチェンマイ市街に行ったり、男たちと一緒に密輸ルートを使ってビルマに行ったりしてこの村の滞在を楽しんでいた。

反ビルマ政府の山岳民族同士の結束は固く、自由に国境を往き来できるルートがあり、お互いに協力し合って商品を流通させている。このルートを使えば、インドや、つい3年ほど前にパキスタンから独立したバングラデシュに入国するのも簡単のようだ。逆に村の男たちが帰ってくるときにはビルマやインドの男達が一緒の時もあった。彼らは、ビルマからヒスイ、ルビーなどの宝石から麻薬まで持ち込み、それを売った金でタイ商品やタイ国内に流通している日本製品を大量に買い込みビルマ内に流通させているのだ。

たった半年の間に、ナカツチャンは、天性の敏捷びんしょうさと感のよさでめきめき腕を上げ、いまや、年長の少年でさえもナカツチャンに敵かなうものはいない。最近では、ナカツチャンに「突き」を教えた。

ナカツチャンが、直径50cm程の木に向かって、「ニッポーンッ!」の気合と共に突きを入れる姿には鬼気迫るものがあつた。

郷戸は、ナカツチャンが剣とムエタイを同時に使いこなすように

なるまでにそう時間はかからないだろうと思った。

ナカツチャンが日本人になれる可能性はない。ナカツチャンは、いつかそれに気がつくだろう。いや、もう気がついているのかもしれない。

郷戸は、ナカツチャンが玉木の言いつけを守り、ひたすら練習に励む姿を見るのが辛^{つらい}くなってきた。

歌姫

1995年（平成7年） 5月 タイ チェンマイ（郷戸がチェンマイにいた23年後）

山口は任務に失敗した。何年にも渡り警護していた被警護者が死亡したのだ。台湾の世論をリードしている重要人物だった。ホテルからストレッチャーに載せられて搬送されている姿には生気^{せいき}はなかった。

ストレッチャーに顔を向けたまま目だけで辺り^{あた}を窺^{うかが}うと、通りの向こうの建物の陰からこちらの様子を見ている男達がいる。先月、香港からチェンマイに来る飛行機でも見かけた男達だ。

「奴らだ」山口は直感した。「奴らが殺^やつたに違いない」しかし、非警護者が死亡した時点で山口の任務は終了する。山口の任務は被警護者を中国の拉致から守ることだった。その意味では任務は「失敗」とはいえないかもしれない。

山口は身の危険を感じ、今からチェンマイを去ろうと思った。

メーピンホテルの前を左に歩き、服や民芸品などのみやげ物を売っている屋台が何百軒も続くナイトバザールの人混みに紛れた。

山口は自分の体調が悪いことに気がついていて。数ヶ月前から夕方になると時々微熱が出るようになっていた。今年に入ってから特にその頻度が上がり、ほとんど毎日のように熱と咳が出る。

今も、足元がふらつく。熱っぽい頭に左手を当てた時、

「動かないで下さい」背後から硬いものを背中に突きつけられた。

山口はすぐにそれが拳銃であることに気がついた。背後の男は、すばやく山口の腰、脇を探った。そして、ひとりが後ろからベルトを掴み、もう1人は利き腕の右腕を掴んだ。

「動かないで下さい。山口さん」男は日本語で山口の名前を呼んだ。

「全てはお見通しって訳か」軽く頭を右に回し顔を確認しようとしたが、グイツ、と銃口に力を込められて、後ろは向けなかった。

「そ、です」冷たい声だ。

「そのまま、ますぐ歩いてください」男達は3人だ。話している男は右後ろにいる。

「山口さん。この先の川に沈んでください。さよならです」

「ゴホッ、ゴホッ」山口は咳せきをした。

「大丈夫ですか、山口さん。風邪、ひきましたか？」男は笑いを含んだ声で言った。それを聞いた二人も、

「ふふっ」と笑いを漏らした。

「熱い体には、川の中、ちょうど、いいですね」

「教えてくれないか？」山口は、ゆっくりと落ち着いた声で言った。

「なんですか？山口さん」男は山口との会話を楽しむかののよう
に余裕を持った声で応えた。

「お前たちが殺やったのか？」山口の声には幾分力がこもった。

「違います。私達ではありません」と、男は、すぐさま否定した。
「ん？じゃあ、お前たちは？」山口は立ち止まった。

「私達の仕事、死んだ、の確認と証拠の隠滅です」拳銃を持った男が、グイ、と背中を押した。

「証拠？」山口は右を見て男の顔を見た。

「あなたです。山口さん。あなた、証拠です」男は髪の毛をきちつと七三しちさんに分けて整髪料で撫で付けている。

「俺が？」そう言っつて再び立ち止まろうとしたが、後ろの男に押された。

「死んだ、の確認しました。次の仕事、証拠の隠滅です」

そして、冷たい声で男は続けた。

「山口さん。あなた、隠滅したら、私達、タイのビールでカンペー（乾杯）します。ふふっ」

「あんた、日本語うまいな。どこで習った？」後ろの男は右手でベルトを握っている。ということは銃は左手にあるということか。

山口は現状を分析した。

「ありがとうございます。一所懸命勉強いっしょけんめいしました。国のためです」

「教えてやろう。こういう場合は、俺は、証拠、じゃなく、証人というべきだろうな」山口の右腕を握っている男の手は左手だ。

「ありがとうございます。山口さん。あなた日本に帰ったら、病院行きますね。熱、ありますから」

さつきからペラペラしゃべっている男は、腕を握っている男の右後ろにいる。

「そすると、あなたの体の中から証拠出てくるかもしれない。だから、山口さん。あなた、証拠です」

「？・・・」

「そうか！そういう訳か！」この時、山口は全てを理解した。

「どこでやった？」いつ感染したんだろう、山口は記憶を手繰たぐった。

「分かりません」男は、静かに言った。

「山口さん。あなた。あの人の巻き添えです。巻き添え、この言葉、正しいですか？ふたりが同じ病気だと分かること、都合良くないです」

ナイトバザールの賑わいから外れて狭いビルの隙間に入った。この路地を抜けた先がビン川だ。

男達三人が同時に動くことは出来ない狭い路地は山口にとって有利だ。山口は「今しかない」と思った。

「ゴホッ、ゴホッ」と咳き込んだふりをして体を前に倒しながら左へ体を回し、左手で男の持つている銃の弾倉れんこんを握り、銃口を上へ向けた。銃は消音器付であった。男はとっさに引き金を引いたが、レンコンが回転せず発射できない。

山口は、そのまま、体を回転させて、右にいた二人の男に銃を持った男の体を押し付け、レンガ壁に強くぶつけた。男達を壁に押さえつけると同時に、右膝を男のみぞおちにめり込ませ、前かがみになった男の後ろにいた男の鼻筋みぎけんに右拳はなを放った。

その時、右後ろにいた男の右手刀が山口の左顔面をとらえ、左拳を顔面に向けて突き出してきた。山口はかろうじてそれを右腕で払った。男は右手を左懐に手を差し入れ拳銃を抜こうとした。男の顔面に隙が出来、そこを狙って山口得意の右正拳を放った。しかし、男は右手でそれを払い、左拳を突き出した。それは他の男達の体に邪魔され距離が不足していたものの、山口の顔面をとらえ、山口は鼻から生暖かいものが、バツ、と流れ出るのを感じた。

山口は左手で掴んでいた男の手首をひねり、拳銃を奪い、右膝をもう一度拳銃を持っていた男の腹にめり込ませた。すぐに右肘を先

ほど鼻を潰した男の左顔面に見舞うと二人の男は同時にその場に崩れ落ちた。

山口が拳銃を抜こうとした男の眉間に銃口を突きつけるよりも男は一瞬速く拳銃を抜き出し、山口の腹に向かって発射した。

「プシュッ!!」

山口は後ろに倒れながらも右足で男の右腕を蹴り上げた。男の手からは拳銃が回転しながら飛び、2 m先に落ちた。

そのまま山口は反対側の壁に背を当てて座り込む格好になった。右手で腹を押さえ、左手の銃口は男に向けられている。

「山口さん。強いですね。若いときは、もっと、強かったですね」男は両手を上げ、唇の左端を吊り上げながら言った。

「ゴホッ、ゴホッ」顔が火照^{ほて}る。

「山口さん。血です。たくさんです」男は心配そうな声色^{こわいそ}を使^{つか}った。

「どしてすぐ撃たないのですか？さきも、銃口をここに当て・・・」そう言^いって、左手を自分の眉間に当て、

「・・・すぐに撃たなかったのですか。私、すぐ撃ちます」

「ふ、俺は、お前と違って、人殺しじゃないんだ」

「ありがとうございます。助かります」

「ゴホッ、ゴホッ」胸が苦しい。

「大丈夫ですか？」男はそう言いながら、先に転んでいる銃の位置を目の端で確認した。

大通りからは観光客の賑やかな声が聞こえてくる。英語、フラン

又語、日本語も聞こえてくる。遠くから客寄せのタイ音楽も風に乗って聞こえてくる。

「山口さんの右の突き、強いです」男は顎で、腹を押さえている山口の右手を指した。

「山口さん。右利きです。あなた、今、銃を左手で持てます」そう言つと、顔を大きく左右に揺らし、悲しそうな顔をして、

「撃ても、当りません」

「どうかな、ゴホッ・・・」

山口は、背中を壁に押し当てたまま立ち上がろうとした。男は、男の足元で気絶している男を左足で蹴り上げ、蹴られた男が「ウーッ」と声をあげ、山口がほんの一瞬それに気をとられた時、男は右側方に頭から飛び、地面で1回転して落ちた拳銃を拾い上げた。

山口は男に向け拳銃を発射した。「バン」、「チンッ」弾は壁に当って跳ね返った。

山口は倒れこんでいるふたりの男の体の陰に飛び込んだ。

「プシュ」「プシュ」

男は仲間には構うことなく2発撃った。一発は倒れた男の腹に当たり、男は「ウッ」と低い声を上げ、苦痛で目を覚ました。

もう一発が山口の左肩を貫通した。

「山口さん。も終わりです」銃口を山口に向けたままゆっくりと立ち上がった。

「そうだな。終わりにしよう」山口も銃口は男に向け、右腕を腹を撃たれて苦しんでいる男の首に回しこんで一緒に立ち上がった。

「だめです。あなた、撃ても当りません。ほら、手、揺れています」

「この男の頭なら飛ばせるぜ」銃口を立ち上がらせた男の頭に、ゴリツ、と、突きつけ、そのままの体勢で、倒れているもう1人の男顔面を右足で蹴り、悶絶もんぜつさせた。

「ダメです。山口さん。あなた、さき、言った。人殺しじゃない、と」男は、ふふっ、と笑った。

「私、撃てます」そう言うと、「プシュッ」と、山口が楯たてにして抱えている男の腹に弾を撃ち込んだ。男の体重がズッシリと山口の右腕にかかってきた。

山口は銃口を男に向けたまま、男に向かって、抱えていた男を突き飛ばし、建物の陰の中で前転しながら路地を抜けた。脇を「チンッ」「チンッ」と弾が跳ねる音と共に火花が飛んだ。

山口は振り返って一発発射した。「バンッ」

男は一発撃ち返した。「プシュッ」その一発が山口の左太腿を貫通した。左手を腹に当てるとべつとりとシャワーを浴びたように濡れていた。鼻から口に入った血を「ペッ」と吐き出したがすぐに流れ込んでくる。呼吸が苦しいのは、熱のせいだけではなかった。

男も壁に身を同化させ陰の中でこちらを窺うかがっている。

川の流れる大通りから一台のトウクトウクのエンジン音が近づいてきた。トウクトウクのライトが男の顔を照らした瞬間山口は大通りに転がり出て、脚を引き摺りながら走った。突然、右肩に激痛が走った。男の撃った弾が当たったのだ。そして、拳銃を川に落として

しまった。

「しまった」

「タタタツ」男が山口のすぐ後ろにまで迫ってきた。覚悟を決めた。山口は立ち止まり振り返った。山口の足元には夥しい血が滴り落ちていた。

男はゆつくりと近づいてきた。右手に持った銃のスライドは開いたままだ。

「山口さん。私、8発も撃ってしまいました」そう言っ、拳銃を川に向かって放った。闇の中で「ポチャン」と音がした。

「水はジューブンですね。首を絞めて、沈めます」そう言っ「ふっ」と笑った。

男は上着を脱いで後ろに、スルツ、と、落とし、山口を睨みながら、両肩を回し、膝の屈伸運動を始めた。やがて、トン、トン、と軽く飛び跳ねながら山口に近づいてきた。

山口も上着を脱ぎ、そのポケットからいつも持ち歩いている黒帯を取り出し、その黒帯で上着を胴体に巻きつけた。

山口の両肩、左太腿には激痛が走り、腹からの血は止まらない。足元には血溜まりが出来つつあった。遠のいて行く意識の中で、「今までで最強の奴だ」と思った。山口は中段の構えを取った。

男は軽く跳ねながら徐々に距離をつめ、右の回し蹴りを山口の左足に放った。山口が大きく左に傾いたところで、そのまま回転した

男は左後ろ回し蹴りを山口の左頭部に打ち込んだ。かろうじて左手で防ぎ、左肩の激痛に耐えながら男の顔面めがけて右正面打ちを放った。しかし、男はそれを軽くかわしながら、左足を山口の腹にめり込ませた。「ゴフツッ!!」山口は堪らず前かがみに倒れこんだ。

男は、ポーン、と、山口を跳び越し、山口の背後から右腕を首に絡ませてきた。

「グッ」しまった、山口は思った。

「山口さん。あなたには、恨みありません」そう言いながら、山口の首に回した腕に力を込めた。

「さ・よ・う・な・ら、山口さん」

山口は息が出来るように両手を首に巻きつけられた男の腕と首の間に差し込んだ。しかし、男の力はさらに強まり、山口の意識は遠くなった。

山口は、首と腕の間から左手を抜き、ググッ、と拳こぶしを握にぎって、親指を立て、渾身こんしんの力を込めて自分の頭の後にある男の顔めがけて裏拳うらけんの要領で打ち込んだ。

男は、「ギャッ!!」と、悲鳴を上げて山口の首に巻きつけていた腕を外し、左目に手を当て立ち上がった。目に当てた手の指の隙間からポタポタと血が垂れ始めた。

路地から気絶していた男がふらつきながら出てきた。手には拳銃を握っている。山口の後に立ち、目を押さえていた男がなにやら中国語で言つと、その男は、拳銃を構え、通りに出てきた。

その時、荷物を満載したトラックが「ビッ、ビー」、とクラクシヨンシを鳴らしながらその男の前で急停車した。運転席からタイ人が

飛び出してきて、なにやら男に怒鳴っている。男はそのタイ人を殴りつけた。殴られたタイ人は地面に倒れこんだが、すぐに起き上がり、なにやら言いながら、ムエタイの構えを取った。

同時に運転していた男も助手席から降りたが、目を押さえていた男が中国語で何か言っていると、拳銃を持っていた男は躊躇なく、ムエタイの構えを取っていた男の腹に拳銃を発射し、そのまま、山口の方へ歩み寄り、銃口を山口の眉間に向け、引き金を引いた。

「プシュッ」サイレンサーで消された発射音が山口の耳に聞こえた。

発射音は山口の足元から聞こえた。

助手席から降りてきた男が持っていた棒で腕を打ちつけたのだ。

山口の意識はすでに朦朧とし、瞼は半分まで閉じている。

その山口の耳にタイ語と中国語が聞こえてきた。その会話はやがて日本語に変わった。

「邪魔をしないで下さい。その友達を早く病院へ連れて行きなさい」男は左目に手を当て、苦痛でギリギリと歯をかみ締めながら言った。

「お前は日本人か？」^{はっそつ}八双の構えを取っている痩せぎすの長身の男は落ち着いた声で言った。

「あなたにいう必要はありません」顔を下に向けながらも右目で男を睨み付けた。

「その男は日本人か？」そう言ってトラックから降りた男は顔を山口に向けた。

「あなたには関係のないことです」青白くなった顔がヘッドライ

トの中に浮かび上がった。

腕を打ちつけられた男が左回し蹴りを放ったが、男がヒラリと身かわすとその足は空を切った。空を切った足の脛すねは棒で打ち据えられ、体重の乗った右足が払われると、そのまま倒れ込み、隙だらけになったみぞおちに棒を持った男の右膝が落ちて来た。男は「グッ」という声と泡を吐いて動かなくなった。

左目を山口に潰された男は、ころがっている拳銃を拾いに左へ飛んだ。男は棒を持った男は地面を蹴った。

「ザッ」、「バシッ」

山口はついに気を失った。闇の中で、

「ニッポーン！！」と言う声を聞いた様な気がした。

片目の男は拳銃を掴もうと伸ばした腕を引っ込め、投げ出した体を2回転させ立ち上がった。そのまま腕を伸ばしたら拳銃を掴んだ腕は、鋭い一撃を受けていただろう。

男達は3mの間まを保たもった。

やがて車やトウクトウクが異変に気がつき1台、2台と停まり始めた。

片目の男は左目から血を滴したたらせながら低く腰をおろして左手を前突き出し、右手は腰に構えてジリジリと足を横に滑らせ間合いを計っている。棒を手にしている男は、再び八双の構えを取り、左足を半歩前に進めた。その瞬間、片目の男の左足が空気を切り裂く音を発すると同時にその左足をすくった。

それは「ニッポーン！！」という気合で片目の男の左肩に棒が振

り下ろされたのと同時であった。片目の男はそのまま棒を持った男の腕を抱え込み体をひねって腰を潜り込ませ、右腕を男の脇の下に差し込んで一本背負いをかけた。棒を持ったまま男は宙で回転して地面に蹲踞そんぎょの姿勢で降り立った。

野次馬が増えてきた。

「この勝負はまたにしましょう」片目の男は2、3歩下がり、地面に転がっている男を起こし、暗い路地裏へ姿を消した。

黒い泥の中で手足を動かしているような感覚が山口を支配していた。

「このまま闇の中に吸い込まれていくのだろうか？」薄く残っている意識の中で山口は泥と光の間でもがいていた。

「山口さん、私は悲しいです」テレサはそう言った。ここはどこだ？ そうだ、平和公園だ。テレサは慰霊碑の前で祈りをささげる老婦人の腕のケロイドをなでながら涙を流した。そしてテレサは闇の中に消えていった。そうだ。俺も彼女の後を追っていかなきゃいけない。足を闇の中に差し入れた。ん？ あれは？ 神田かみたじゃないか？ 「おい、神田」思わず声をかけた。

激痛が右肩を襲った。

「大丈夫ですか？」

「ん？ここは？」

「大分うなされてたね。でも大丈夫だよ。あなた頑丈がんじょうだからね」

「気がつきましたか？」白髪の老人が入ってきた。

「あなたは？」そう言いながら起き上がろうとしたが、体中に痛みが走り、力も入らない。

「そのままです」と手で制し、

「まだ無理をはいけません」老人は山口の体を支えながら寝かした。そして、両肩、左太腿、腹、と順番に包帯を取って、傷口を確認し、塗り薬を塗った布を交換した。

「さ、これを飲みなさい」そう言いながら、緑色の液体が入った湯飲みを口元に持ってきた。

「和司君」そう言っていると、和司と呼ばれた男は液体を飲みやすいように山口の頭を支えて少し起こした。

「ここは？」山口は液体を飲み干し、体を支えている男に聞いた。
「ここは山の中だよ。あいつらもここまでは追ってこないと思うよ」そう言いながら山口の体をやさしく横にさせた。

「あなたが私を助けてくれたのですか？」横になったまま、座っている男に聞いた。

細身だが鍛え抜かれた鞭のような体はシャツの上からでも分かった。

「助けたんじゃないよ。あいつらは、ボクの友達を殺したんだ」和司と呼ばれた男はつらそうに顔を伏せた。

「じゃあ、あの時撃たれた人は・・・」

「死んだよ」

「すまない。私のせいだ」山口は顔を伏せた。

「それは違うよ」男は顔を上げ、山口の目を見つめて言った。

山口は急に眠くなってきた。

「ゆっくり眠りなさい」白髪の老人の声が聞こえた。

山口は、1カ月ぐらいしてようやく歩けるようになった。そして、だんだん様子が分かってきた。

山口のいる町は、中国人町であつた。1949年の中華人民共和国の誕生に伴い、蒋介石率いる国民党は政府を南京から台湾に移した。その際、多くの国民党支持者も台湾に移つたが、同時に、ミヤンマーやタイへ移動した者も多く、彼らは国境近辺に町を形成したのだ。

今、山口のいる町はそのいくつもある町のひとつだ。住民達の容貌は他の町の住民とは明らかに違い、会話は中国語だ。

そして、山口の傷の手当をしてくれている男は江下寛一えげかんいちという日本人であつた。彼もまた数奇な運命を受け入れて生きていた。

「山口さん。私はもとも移民でね。アメリカのシアトルで育つたんですよ」山口の傷の手当をしながら江下は身の上話を時々するようになった。

「20歳前の頃、東京でオリンピックが開かれると言つのでね、日本へ帰ったら、戦争が始まつてね。アメリカにも帰れなくなつて、兵隊にとられて、朝鮮からビルマに回されたんです」

「インパール作戦で負けて、ビルマ軍やイギリス軍に追つかかれて、やっとタイに逃げてきて、そのままここに落ち着いてしまつたんです」

「いまじゃ、こっちに女房も子供もいます」

「実家が漢方屋だったもんで、見よう見まねで覚えた薬草の使い方がこのあたりの中国人に気に入られて重宝ちゆうほうがられているんですよ」

江下から途切れ途切れに聞いた話は、激動する歴史の中で過酷な運命を受け入れざるを得なかつた若者の人生だった。

傷の状態は大分良くなり、咳と微熱も江下^{えげ}の調合してくれる飲み薬で治まり^{おさ}つつあった。

この町並みには記憶があった。以前テレサと来た町だ。彼女がこの中国人町の存在を知り、どうしても訪ねたいと言い出し、いつも食事をしていたレストランのオーナーの案内で訪れたことがある。そして、彼女は、この辺境の地でたくましく生きている同胞を見て感動し、この町の学校にいくらかの寄付をした。

山口は、彼女ほど感情の豊かな女性には会った事がなかった。歌っている時も感情が高ぶると大粒の涙を流した。そして、天安門広場の血の弾圧事件直前の香港でも、広島の平和公園でも。

「起きていて大丈夫ですか？」山口の後から江下^{えげ}の声がした。

「ノックもせず失礼しました。お休みかと思ひまして」ドアの前にトレーに薬を載せた江下が立っていた。

「ありがとうございます。大分良くなりました。江下^{えげ}さんのお陰です。命の恩人です」山口は椅子から立ち上がり深く頭を下げた。

「いえ、いえ、命の恩人は私でなく、和司ですよ」そう言いながら、トレーをそばのテーブルの上に置いた。

「そう言えば、最近見かけませんね」山口は、頭を下げながら、聞いた。

「いま、彼には頼み事をしているんですよ」江下は、窓際に行き、カーテンを少し引いて光を遮^{さへぎ}った。

「頼み事？」

「はい。調合した薬を届けに行ってもらっています」

「少し遠くですから、まだしばらくは帰ってこないと思います」

「熱はどうか」そう言って江下^{えげ}は山口の額に手をやって、
「大分いいようですね。でも、もうしばらくは安静にしてください」

山口は、

「はい。何から何までありがとうございます」と、深く頭を下げた。

「じゃあ、お邪魔しました」江下^{えげ}はそう言うと、中国語の新聞をベッドの上にさりげなく置いて部屋を出て行った。

その新聞は、テレサの葬儀は5月28日に政府要人も列席して国葬並みの扱いで行われたことを報じていた。山口にはその報道は台湾が大陸の中国人に対して呼びかけたもののように思えた。

「彼女の純真な心は最後まで政治の駆け引きに利用されてしまったのではないだろうか?」「時の流れに身を任せ」が追悼式^{ついでしき}に流されたという記事に、山口は、彼女の運命を感じた。

いつもより長めのスコールが止んだある日、江下^{えげ}が慌てた様子で部屋に入ってきた。

「山口さん。大変なことが起こりました」真っ青な顔をしている。
「何ですか?どうしました?」山口はちょうど中国茶を飲んでるところだった。

「和司が殺されました」江下はそう言うと、頭を抱えてヘナヘナと椅子に座り込んだ。

「えっ!?!」手に持っていた湯飲みのお茶がこぼれた。

「どう言う事ですか？」山口大河は、こぼれたお茶で濡れた湯飲みをテーブルの上に置いた。やまぐちたいが

「和司と一緒にいったメオがたった今ふらふらになって帰ってきて、和司が殺されたと言うのです」青い顔のまま山口を見上げた。

「和司とメオには、薬を届けるように頼んでいたのです」そう言っ
て白髪の頭を抱え込んだ。

「その途中で生まれ故郷の村に寄ったところ、誰かに撃ち殺されたと言うのです」

「何故？一体何が起こったのですか？」あの和司は、ちょっとやそつとのことでは殺される男ではない。

「メオも取り乱してよく分からないのですが、中国人に襲われたらしいのです」

「中国人？」

「片目の中国人です」

「！！」山口にはすぐに和司を殺した男の顔が浮かんだ。

死闘！！チェンマイ

和司は江下^{えげ}から頼まれた薬を届けるためミャンマー国境の手前にある、幼い頃に家族と共に過ごした村に立ち寄った。

今回はいつもより少しだけ長い旅になる筈だった。

和司は旅の途中、近くを通る時は、時々、この廃村へ立ち寄って一晩を過ごす。かろうじて和司達が寝起きしていた家屋だけが何とか夜露をしのげるのだ。今は、家族はチェンマイ郊外に独立した家を持ち、暮らしている。当時一緒に暮らしていた親戚の者もそれぞれが独立した家を持ち、畑^{たがや}を耕したり、商売をしながら幸せな生活を送っている。

一方で、玉木が和司に託した夢の実現のため、山岳民族の独立運動にも力を貸し、今は医薬品と食料の提供が主な仕事になっている。和司には難しい^{むずか}ことは分らないが、日本人の江下に力を貸し、共に働くことだけが自分自身の存在を確認する唯一の方法のように思えた。

今回も仲間のメオと一緒にこの村に立ち寄った。

トラックを村の入り口に停め、そこから、大きく枝を広げた木を見つめた。ここに立つと和司は、その大きく広げた枝の下で、郷戸^{じょうこ}と共に素振りをしていたことをいつも懐かしく思い出す。郷戸が村を去ってから和司は「日本人」になるために、来る日も来る日もその木に向かって「突き」を繰り返した。

その穴はやがて貫通し、穴は和司の成長と共に縦に広がっていった。そしてその木は今もこうして大きく枝を張り、青々とした葉は太陽に輝いている。

和司はここで、今では大木となった木を見るのが楽しみだった。

メオは下の川へ水を汲みに行った。和司はその間に夕食の準備をするつもりで、トラックの荷台から野菜と米の入った袋と鍋を取り出した。

その時、トラックのエンジン音が道の向こうから聞こえてきた。

空が急速に曇ってきた。

「誰だろう？」米袋と鍋を荷台に戻した。

「こんなところまで来る人間はいないはずだ。道にでも迷ったのだろうか」と和司は思い、エンジン音のする方角を見つめ、郷戸（ごうど）が和司に残っていた仕込み杖を、助手席から荷台に移した。

トラックは、車体を大きくバウンドさせ、埃を舞い上げてこちらに向かってきた。そして、和司のトラックの後につけると「ブルルン」と大きく車体を揺らして停まった。

舞い上がる薄茶色の埃（ほこり）の中から小太りの男が現れ、タイ語で「今晚ここに停めてもらえないだろうか？」と尋ねた。和司は、「いいよ」と言った時、助手席から左目に黒革の眼帯をした男が降りてきた。

「これは偶然ですね。あなた方を捜していました」嬉しそうにそう言っ、辺りを見回し、

「山口さんは？」と言いながら、懷ふところから拳銃を抜き出した。

「山口さんは・・・死んだよ」和司は目の端で、最初に話しかけてきた男も腰のベルトから拳銃を抜き出すのを見た。荷台からも男が降りてきた。

「死んだ？いつですか？」男は、怪訝けげんそうに眼帯の上の眉毛を動かした。

「あの2日後だよ」和司はトラックのタイヤにさりげなく片足をかけた。

「もし、のなら、私は幸せですが、証拠はありますか？」片目男は左手を、銃把じゅうはを握っている右手を包むようにして、胸元に構えた。

「お墓もあるよ」
「どこに？」

和司は視線を左に向け、

「この先の中国人村だよ」と言った。

山の向こうから雲が近づいて来た。

片目男は、和司から視線を逸そらさなかった。

「ふふつ、私は、そんな国民党の村には行きたくありません」

「あなたは、タイ人ですか、日本人ですか？」片目男は不思議そうな顔をして聞いた。

「・・・ボクはニッポン人だ」和司は銃を握る男の人差し指をじっと見詰めた。

「残念です。私は日本鬼子リーベンクイズが嫌いですから」そう言うと片目男は銃口を和司に向け躊躇ためらいもなく引き金を絞った。

「バーン！！」

和司は片目男の指が動く直前にトラックの荷台の中に転がり込みそのまま仕込み杖つかを掴んで反対側に飛び出た。まさに風の動きであ

った。

突然、凄まじいスコールがやってきた。

肌をも射抜くほどの勢いで無数の雨槍は景色を縦に切り裂き、一瞬にして1m先も見えなくなった。村の道は見る間に泥川と化し、つい先ほどまで舞い上がっていた赤い砂埃は粘土の様に足に絡まり始めた。

男達は拳銃を発射し始めたが、天空から泥川に激しく水しぶきを上げて突き刺さる雨槍の中では狙いの定めようがなく、ただ、影に向かって闇雲に弾丸を発射した。

和司は泥の中を前転しながら、以前は倉庫に使っていた家の裏に廻り込み、家畜の柵の補修用に保管されていた竹を仕込み杖でスパと斜めに切り、あっという間に数十本になった竹やりを小脇に抱え屋根の上に登った。

スコールは長くは続かない。和司は、仕込み杖をベルトの背中側に差込み、竹槍をまとめて屋根の上に突き立てた。そして、雨でベッタリと体に張り付いた薄い木綿のシャツを引き裂き体の自由を確保した。

男達はトラックの陰に身を伏せ、目の上に手をかざして和司の消えた方向を凝視した。雨はますます激しさを増して来た。鋭い刺激が体中に突き刺さる。その時ひとりの男が「ギャーツ」と悲鳴を上げて銃を放り投げその場に立ち尽くした。

他の男には何が起こったのかわからなかったが、すぐに、降り注

ぐ雨に混じって空から竹槍が降っているのに気付き、男たちの顔は恐怖にゆがんだ。最初に悲鳴をあげた男の足は竹槍で地面と縫い合わされていた。

「ザーッ」という雨音あまおしの中で男たちの周りには次々と槍が突き刺さった。激しい雨音で男たちの怒声はかき消され、再び「ギャーッ！」「と言う悲鳴と共に、竹槍が肩に刺さった男が片目男の目の前に雨の幕を破って突き出てきた。

片目男は、その男を突き飛ばし、トラックの車体の下に潜り込んだ。もぐ

車体の下で伏せている男の体は半分ほど泥水に埋まっている。「ババババ」と絶え間なく叩きつける雨音に混じって、時折、「バシ、バシ」と荷台をも貫くような音が体に伝わって来る。

和司は屋根から飛び降り、泥の川に身を伏せ、そのまま泥の塊かたまりになってゆつくりとトラックに近づいた。「ズル、ビシャ・・・」

片目男は全身で周囲の音を聞いていた。連続して泥に突き刺さる雨音の中から「ビシヤ、ビシヤ」と生き物が泥の中で進む音が聞こえた。やがてその音は5m先で止まった。

和司の前を覆う白い滝を通してトラックの影が見える。「ザーッ」全身を泥にしてジッとその影を見つめ、背中 of 仕込み杖に手をかけた。

トラックのタイヤの陰から1つの目が1つの方向を見つめていた。

その1本の視線の先には、白い雨飛沫あめしぶきで浮き上がった人間の体があった。

片目男は銃口を白く浮かび上がる輪郭に向けた。

和司は、トラックの荷台の下の片目を確認した。そして、さらに深く泥の中に沈みこみ、右手で背中の仕込み杖を握り、左肘ひだりひじと両膝りょうひざで泥をかいた。「ビシャッ」

一年に一度の猛烈なスコールであつた。風もなく、ただ、ただ、一直線に空から地面に突き刺さる雨槍あまやりは地上の全ての音を掻き消し泥と共に流し去っている。

しかし、片目男は、目の前の生き物が動く音を全身で捉えていた。「よし、もう少し来い」泥に浸ひたかった唇の中の、硬く喰いしばった歯の中は渴ききっていた。

和司は仕込みを、「シュラッ」と、抜いた。雨粒が光となって刃やいばを浮き上がらせた。

片目男には、豪雨の中に浮かび上がった刃やいばはコブラが跳躍した時に見せる白い腹に見えた。

引き金を絞った。

「バンッ！！」スコールの中に乾いた音は飲み込まれた。

右耳が一瞬にして吹き飛ばされると、和司が泥の中から立ち上がり、トラックに向かって走り始めたのが同時であった。

「バンッ」 2発目は和司の右膝を撃ち抜き、和司は体勢を崩した。
「バンッ」 3発目は和司の右脇腹を貫通した。

倒れながらも両手で握った仕込みを荷台下へ突っ込んだ。「バシユッ」、タイヤを突き抜け、切先は片目男の頬をかすった。片目男は泥の塊になって反対側から転がり出て体勢を整え、4発目を発射した。「バンッ」

「キーン」高い音と共に弾丸は和司が振り上げた刃に当たり跳ね返った。片目男の一瞬の怯み^{ひる}を捉え、和司はタイヤを蹴って雨に向かって飛び上がった。

「ニッポーンッ!!」

気合と共に振り下ろした刃を、「ギンッ!!」、片目男はトカレフで受け止めた。雲の切れ間から差し込む夕陽が雨粒に濡れた仕込に映り込んだ。

和司は上からギリギリとトカレフごと押し付け、左肘^{ひだりひじ}を眼帯の左目に打ちこんだ。

「グッ!!」片目男の力が一瞬抜けた時、片目男の手首をひねってトカレフを奪い、前蹴りをみぞおちに放ち、男を突き飛ばした。

片目男は、泥の中を「ザザーッ」と3m先へ、泥の幕を払げながら滑っていった。

全身から泥水を滴らせ、片目男はゆつくりと立ち上がり、「ペツ」と、口の中の泥を吐き出し、ひだりしゅとう左手刀を前に、みぎこぶし右拳を腰に構えた。

「素手で闘ろうということか」和司は奪い取ったトカレフを投げ捨て、仕込みを鞘に納め、かつて、突きの練習に励んだ大木に立掛けた。

雨は突然止み、薄日が差し始めたが、男達の足は依然として泥流でいりゅうの中にある。泥の流れは大地の切れ目を幾筋もの帯となり、時折り小枝や口の欠けた食器を運んでくる。

「バーンッ」

一発の銃声が夕陽の中に響き渡った。

和司の放った竹槍で足を刺された男が両手でトカレフを握り締め、和司の後に立っていた。弾は背後から和司の胸を貫通した。

和司はゆつくりと振り向き、大木に立掛けてあった仕込に手を伸ばした。再び、

「バーンッ」非情な銃声が鳴り響き、弾はじき出された薬莖くすりこぎが泥の中に沈んだ。

伸ばした手が仕込みに届く前に和司は大きく体をくねらせ泥の中に大の字に倒れた。バsshャーン。

片目男は和司に近づき、無言のまましばらく見下ろし、つたかた跪いて首筋に手を当て死を確認した。足を刺された男が、竹槍で体を支え、泥の中で足を引き摺りながら和司に近づき、「ペッ」と、和司の顔に唾を吐きかけた。「パンッ!!」片目男は男の顔を平手で殴り、和司の見開いた目を閉じさせた。

薄茶けた無数の泡を浮かべた泥流は、ところどころで淀みながら赤い大地の表面を洗い流し終わると、いつものように消え去り、男達もトラックを大きく揺らせ去って行った。トラックが跳ね上げた泥水が斜面の下に身を隠していたメオにかかった。

メオは恐怖で身動きが出来なかったが、ようやく和司のもとに駆け寄った。

風が東から吹き、立て掛けてあった仕込杖が和司の体の上に倒れ、夕陽は、大木の裂け目から倒れている和司の体に射し込んだ。

その赤い一筋の光は和司の眉間から胸を通り、まるで和司の体をふたつに分けているかのようにであった。

金塊

町は悲しみに覆われていた。

和司^{かずし}の盛大な葬儀から一ヶ月が過ぎた頃、江下寛一^{えげかんいち}は旅支度を始めた。江下は和司が届ける予定だった薬品を自らが届けようとしていた。

「江下さん^{えげ}、その仕事、私にやらせて下さい」山口大河^{やまぐちたいが}は江下に言った。

「え、しかし・・・」机で薬品のリストをチェックしていた江下^{えげ}は顔を上げ、困惑の表情を浮かべた。

「このままでは私の気持ち^{おこ}が治まりません。ぜひやらせて下さい。それに、江下さんが不在になると何かと不都合が起きるんじゃないですか？」

山口にとって和司は命の恩人である。しかも、その命の恩人を殺したのが、何ヶ月か前に山口の命を奪おうとしていた男である。和司がいなければ間違いなく今の山口はいない。それに、テレサの死にも関わっている男だ。このままにしてはおけない。

「・・・」江下^{えげ}は、椅子に座ったまま、目を閉じて腕組みをした。

しばらくの後、江下^{えげ}は山口の目を見つめながら立ち上がり、「分かりました。お願いします。ありがとうございます」山口の手を右手を取り、両手で覆^{おお}うように握り締め、頭を下げた。

山口もうれしそうに頭を下げ、左手を江下の手の上から握り締め力をこめた。

江下は、山口に、そばにあった椅子に座るように促し^{うなが}、自らも椅子に腰掛けた。そして、

「ここで少し、私がやっていることをお話ししなければなりません」と、改まった声で言った。

「辻政信という男をご存知ですか？」

「はい、確か旧陸軍の参謀でノモンハン事件やインパール作戦の立案者のひとりだと・・・」

そして、さらに

「戦後は国会議員になり、その後、ラオスで行方不明になったという噂ですが、・・・その辻のことですか？」と続けた。山口には江下^{えげ}が話そうとしていたこととどういふ関係があるのだろうかと思いつた。いながらも、部屋の隅にあったパイプ椅子を持ち、江下の近くに戻った。

「そうです。実は、私が彼をラオスへ入国させる手筈^{てはす}を整えたのです」江下は丸いすの上で背筋を伸ばしたまま言った。

「えっ!？」山口はパイプ椅子に座りかけたまま江下の顔を見た。

「彼が、国会議員の身分でありながら、その身分を隠し再びタイからラオスへ訪問した目的は、ベトナムに隠した金塊を手に入れることだったのですよ」江下は淡々と話し始めた。

「それは・・・」山口の質問を遮^{さへぎ}って江下はさらに続けた。

「しかし、スパイ容疑で捕らえられ、その際には、ホーチミンと取引でもしようと画策したようですが・・・」そう言う腕組みをして天井を見上げ、

「その後は行方不明・・・ということになっています」そう言うて再び山口の目を見つめた。

「そのことと今回の私の仕事が何か関わりが・・・」

「あります」

「え？」

「その金塊は私が持っています」江下は顔を山口に近づけ、押し殺した声で言った。

「えっ！？何ですって！？」思わず山口は身を仰け反らせた。

「全部かどうかは分かりませんが、しかし、それでも相当な金額になります」江下は両肘を両膝に寄せ、体をかがめて重い声で言った。

「まさか金塊を運ぶのが仕事というわけじゃあ・・・」山口のうろたえは声に出た。

「ははは、今回、山口さんをお願いするのは、私が調合した薬や医薬品です」そう言うと、山口の膝を「ポン、ポン」と軽く叩いた。

「私はこの金塊で山岳民族を救いたいです。アジアには虐げられた山岳民族がたくさんいます。大国の陰で少数民族はいつも犠牲になっています」いつものように穏やかな口調に戻って話を続けた。

「シッキムは独立に失敗しインドに併合されましたが、中国はチベットに侵攻し、何百万人ものチベット人を殺戮しています。その後もシッキムに手を出そうとしましたが、これには失敗しました」

江下は眉間に皺を寄せ、再び強い口調で言った。

「しかし、彼らは狙っていますよ。様々の方法で」

「山口さんが私のやっていることに手を貸してくださいださるのは大変ありがたいことです。和司も喜ぶと思います。でも、私のやっていることは、アジアのある国々にとっては都合の悪いことです。ひよつとすると山口さん・・・」江下はここで言葉を切り、

「あなたの命に関わることになるかもしれません」再び、江下は山口の目をジッと見つめて言った。

山口には、江下の言う意味が分かるような気がした。国家にとって都合の悪い動きをする人間や組織は、たとえ自国民であろうとも国家内の組織であろうとも潰つぶされるのが歴史だ。歴史の光には常に陰が付きまとう。そして、いつも犠牲になるのは無垢むくの民衆だ。

山口自身も、これまで陰の中を歩いてきた。いまさら、陰を怖がるよりも、陰の中に一撃でも拳こぶしを打ち込むことが出来れば良いではないか。そう思い右の拳をギリギリと握り締めた。

やまぐちたいが
山口大河は覚悟を決めた。

「で、その薬品をどこへ届ければ？」

「私のシアトル時代の幼馴染のお嬢さんに届けてもらいたいのです」

「幼馴染の娘さんに？」

「はい、長谷川喜代治という男の娘さんに、これらの医薬品と、そして、薬草の種類やその調合方法、処方箋などを書き留めた・・・」
「そう言つて、鍵のかかった引き出しの鍵穴に鍵を挿し込み、回すと、「ガチャッ」とロックが外れる音がした。引き出しをゆつくりと手前に引き、中から黒い革の表紙のノートを取り出した。

「この冊子ノートを届けてもらいたいのです」江下えげは両手で大事そうにそのノートを持った。

「これがあれば、どんな植物が薬草として役に立つか、どんな時にどんな風に処方すればいいかが分かります。」そう言つて山口に手渡した。

山口は、そのノートのページをめくった。

「これは・・・」そのノートには植物の絵が細かく描かれ、その処方も絵入りで丁寧ていねいに書かれていた。そして、

「インドのアーユルベエダ、チベット医学、漢方。これらを私な

りに融合したものです」江下は自信のある声で言った。

「この説明は英語と平仮名ですね」山口はページを繰りながら呟つぶやいた。

「はい。娘さんにも分かるように書き換えたものです」

「と言うと？」顔を上げ江下を見た。

「娘さんは2世で、漢字がまだ苦手なようです」

「ああ、それで」山口はノートを閉じ、両手で膝の上に置いた。

「で、その娘さんはどこに？」

「ネパールです」江下は窓の外に広がる青い空の向こうを見るように目を細めた。

宿命

2005年（平成17年）9月 広島・宮島

この台風14号は多くの被害を残した。美しい弥山みせんの山肌には無残な傷を残し、今日も、県や国の調査団が現地調査に入っている。
麓ふもとにある宮島最古の寺院である大聖院だいしょういんも大きな被害を受けた。

しかし、その自然の猛威は歴史の皮を剥はぎ取りつつあるのではないだろうか？

錦帯橋きんたいきょうも今回の台風14号で橋脚を流されてしまい、渡ることは出来ないが、

「せっかく、宮島まで来たのだから、一部でもその美しいブリッジが見たい」というキャシーの希望で、先姫さききとキャシーはJRで岩国へ向かった。

「しかし、どうだろうか、橋脚のない錦帯橋を見てかえって、ガツカリするんじゃないだろうか」と思いながら事務机に向かった。

宮島で発見された鉄の棒は何者かに奪われ、そしてまた、同じものが富士山頂でも、神田達かみたの目の前で、ここ、宮島に現れた同じ男に奪われた。一体、何が起こっているのだろうか？それに、その鉄の棒を中国が欲しがっているのは何故なんだろう。

しかも、咲姫さきによると、同じものがもう1つどこかにあるというではないか。あるとすればどこにあるんだろう？

テレビや、新聞などのマスコミの取材は落ち着いてきたが、依然

として旅行会社や観光客からの問い合わせが多い。

午後からは電話の応対や、報告書の作成に追われ、気がつくとも6時をまわっていた。

「ふーっ」と大きく背伸びをして椅子から立ち上がり、コーヒーを飲もうとコーヒーマーバーに向かったとき、机の上においていた携帯が「カタカタカタ」と机を鳴らした。携帯を開くと、咲姫さきからであった。

「やあ、錦帯橋はどうだった？」

「ええ、見るのが辛つらいくなったわ。それよりも神田君、キャシーが変なことを言うのよ」

「変なこと？」

「そう、電車が県境に流れる小瀬川おせがわをわたる時、さあ、これから山口よ、と言ったら、キャシーが不思議そうな顔をするのよ」咲姫は押し殺したような声で言った。

「不思議そうな顔？　どういうことだい」携帯に応えながらコーヒーマーバーへ向かった。

「錦帯橋は岩国シティーにあるんじゃないの？　って聞くのよ」

「あー、俺たちは、岩国の錦帯橋、って言うからね。山口の錦帯橋とは言わないよね」コーヒーマーをカップに注いだ。

「そう。それで、岩国は山口県の1つのシティーなのよ、って言うと、山口というシティーは他にもあるのかって」咲姫さきの声は、ますます低くなった。

「へー、それで？」来客用の椅子に腰掛け背中を背もたれに預けた。

「だから、私は、あるかも知れないけど、あまり聞かないわね、って言ったら、じゃあ、人の名前の山口も珍しいか、って聞くのよ」

「山口!？」神田はカップから口を離した。

「そう。だから、山口という名前の人はたくさんいるわ、って言ったんだけど、そしたら、山口という日本人を知っている、って言うのよ。それが、・・・」

「・・・それが?」

「それが、神田さんと同じように拳法のマスターだ、って言うのよ」

「ええっ!?!・・・そ、それで?」神田は椅子から立ち上がった。

「それが、それっきり、ふさぎこんで何も言わなくなってる」

「まさか、山口さんのことじゃ?」声が震えた。

「私、嫌な予感がして、それ以上聞くのが怖くて・・・」

「嫌な予感って・・・」神田は咲姫の感の鋭さが怖かった。

「で、今どこなんだい?」一体どうということなんだろう?神田は、かみた心臓の鼓動が早まるのを感じた。

「今、広島駅のホテルでチェックインを済ませたところよ」

「キャシーの様子は?」神田は恐る恐る聞いた。

「今は普段のように陽気よ。だけど、今度は私のほうが、山口って人のことが気になって・・・」咲姫の声は沈んでいる。

「そうだね。俺も気になるな」

「ねえ、どこか落ち着いた日本料理屋さんで今夜、食事一緒に出来ないかしら?」はっかいち

神田の頭に廿日市の「おとみ」が浮かんだ。料理もおいしいし、あそこなら落ち着いて話しが出来る。

「じゃあ、JRの廿日市駅はっかいちえきで待ち合わせしよう。広島駅からだと

20分くらいだから」

「分かったわ。廿日市なら知ってるし」

廿日市の駅前商店街を海のほうへ向かって少し歩き、左の暗い小路にはいると、薄明かりが縄のれんを通して漏れていた。

「へー、ちよつと雰囲気があるわね」と言いながら、咲姫は、

「そこ、階段があるから気をつけてね」とキャシーの手をとった。

神田は、縄のれんを上げ、「ゴロゴロッ」と引き戸を開けて咲姫とキャシーを先に店内に入れ、神田もふたりに続いて入った。

「いらつしやいませ、神田さん。どうぞ、奥の座敷がとつてありますから」女将が先にたつて案内してくれた。

咲姫とキャシーは珍しそうに店内を眺めている。咲姫はカウンターの神棚をチラッと見た。

「こりゃー、神田のだんな。引き続きでありがとうござんす」

「ござんす？」咲姫は「？」という顔をして神田を見たが、神田は、それには気付かない振りをして、

「急をお願いしてすみませんでした」と、左手を軽く上げて挨拶した。

「とんでもねえ。ありがとうござんす」カウンターのなかで、鉄は深く頭を下げた。

「キャシーさんは椅子の方がよかったかな？」神田は座敷に上がりかけて、キャシーを見た。

「大丈夫です。問題ありません。私、こういうジャパニーズスタイル大好きです」そう言いながら、さつ、と座敷に上がり、座布団の上に胡坐あぐらをかいた。

「そうですか。それは良かった」神田も座布団に座り、咲姫のほうを向いて、

「咲姫ちゃん、ビール？お酒？」

「そうね。キャシー、お酒飲む？」咲姫はキャシーに聞いた。キャシーはうれしそうに、

「はい。お酒、ロックでいただきます」と、ニコツと笑って咲姫の顔を見た。

「じゃあ、俺も久しぶりにロックでいただく」

「出雲のお酒があるんじゃない？」咲姫は、壁に貼られた品書きを見ながら言った。

「え？どうして出雲の酒があるって？」神田は驚いて咲姫の顔を見た。

「ふふふ。忘れたの？私は宮司なのよ。神棚を見れば分かるわよ」

「そうかあ、そうだったね」神田はそう言つと、座ったまま振り返って神棚のほうを見た。

「ここのご主人は出雲のご出身じゃないかしら」咲姫はそう言いながらカウンターの中にいる鉄を見た。

「女将さんおかみ、お酒、ロックをお願いします」神田はオシボリを持ってきた女将に注文した。

「はい。承知いたしました」

「何を食べる？」

「そうねえ・・・」そう言いながら、壁に貼られた読めない漢字で書かれた品書きを眺^{なが}めていたが、

「キャシーと私は・・・青菜の煮浸し、湯葉の納豆包み揚げ、と、海老いもの煮物、それに、しめじと長いもの和え物もおいしそうですね。あとで、なすとみょうがのすまし汁と炊き込みご飯も頂こうかしら」そう言つと、神田を見て、

「神田君は？」と、咲姫から聞かれ、「え？読めるのか」と少し慌^{あわ}てて、

「あ、お、俺？・・・俺は・・・俺はここではいつもコースで頂くんた」

「あら、そうなの。じゃあ、私たちもそうするわ」そう言つて、キャシーに「それでいいわね」という風に小首を傾げて見せた。キャシーは両手を広げ、首をすくめ、

「もちろん、OKです」と笑いながら言つた。

「キャシーさん、錦帯橋^{きんたいきょう}はどうでしたか？」神田^{かみた}はオシボリで手を拭きながらキャシーに聞いた。

「オー、ベリービューティフルでした。でも、少し壊れていたのは残念です」キャシーはとても残念そうに表情を曇らせた。

「そうね。ちよつと悲惨だったわね。でも、激流の中で必死に耐えている姿は、ある意味見る者の心に訴えるものがあつたわ。ね、キャシー？」そう言いながら、キャシーの手を軽く握つた。

「はい。見る人に勇気与えていると思います」

「そうですか。そういう見方もありますね。ところで、キャシーさん・・・」そう言つて、咲姫^{さき}をチラツ、と見た。咲姫はその言葉を継いで、

「キャシー、キャシーは神田さんのような拳法のマスターを知っているって言つたわね」やさしくキャシーの右手の上に手を重ねて

尋ねた。

「・・・はい」キャシーは少しうつむき加減になった。

「その山口さんってどんな人だったの？実は、その人は、私たちの学生時代のフレンドかもしれないのよ」咲姫がやさしく、ゆつくりと言つと、キャシーは顔を上げた。その青い瞳には既に涙が浮かんでいた。

「お友達？」キャシーは首に下げたロケットを握り締め、咲姫と神田の顔を交互に見た。

「そう。だから、辛いかもしれないけど、話してくれないかしら？」

しばらくの沈黙の後、キャシーは握り締めていたロケットのフタを開け、中から白い小石のようなものを取り出し、右手のひらに載せ、再び強く握り締め、嗚咽おえうを漏らし始めた。

「ごめんなさいね、キャシー。辛いことを思い出させて」咲姫はキャシーの肩に手を回し、神田と咲姫は顔を見合わせた。

しばらくして、落ち着きを取り戻したキャシーは、その握り締めた手のひらを開き、

「これは、山口さんの小指の骨です」そう言ってその白い小石のようなものをテーブルの上に置いた。

「小指の骨？」神田は、それをそつとつまんで持ち、

「どういうことなのでしょう？」と、キャシーに恐るおそる尋ねた。

キャシーはそれには答えず、バッグの中から黒いものを取り出した。

「！！」神田はすぐにそれが山口の黒帯だと気がついた。帯の端には「広島修道館大学 山口」と刺繍されていた。

「こ、これは？」神田は震える手でその黒帯を受け取った。

「山口さんの黒帯です」キャシーの瞳から大粒の涙がひと粒、ぽたり、とテーブルに落ちた。

「どうしてこれを？」黒帯には血の跡が大きく残っていた。

「山口さんが大切にしていた持ち物です」

「これは咲姫のお友達のものですか？」キャシーは顔を咲姫に向けた。咲姫は目を閉じ、静かにうなづいた。

そして、神田も、

「間違いない」両手で黒帯を握り締めながらキャシーを見た。

「山口さんのものだ」そう言つと再び黒帯を見つめた。

「じゃあ、さっきの骨は？」咲姫は神田を見た。

「山口さんの！？」

神田の顔は動揺で紅潮していた。

「山口さんはどうしたの？」咲姫はキャシーの肩に手をかけたまま聞いた。

「山口さんは亡くなりました」

「えっ、どこで？」神田にはとても信じられなかった。悪夢ではないのだろうか。

神田の問いにキャシーは答えた。

「ネパールです」キャシーの瞳には、ネパールの青い空が映っているようだった。

陰謀

「どうして？どうしてネパールなんかで！？」

「あの、何か・・・？」女将おかみが酒と突き出しの和え物あをテーブルの上に置きながら神田かみたに聞いた。

「いや、昔の友人のことです。すみません。大きな声を出して」神田はおしぼりで額の汗を拭ぬぐいながら言った。

「いいえ。それはよろしいんですけど。お料理はお運びしてもよろしいのでしょうか？」

「もちろんです。お願いします」神田は頭を下げた。

咲姫さきはキャシーの手を握り、

「いつ頃のお話なの？」とやさしく尋ねた。

「前回のボランティアの医療活動のときです。ちょうど10年前です」

「ああ、今回は2度目だと言ってたわね」咲姫はキャシーの言っていたことを思い出した。

「はい、そうです。山口さんが亡くなって10年です」

「ごめんなさい。今日はこれ以上話すこと出来ません」

キャシーはそう言っていると、うな垂れて、両手でグラスを包むように持ち、コトン、とテーブルの上に置いた。

咲姫は再びキャシーの肩に手を回し軽く抱きしめた。

「いいのよ。ありがとう。あなたの知っている山口さんが私たちの友達だっということが分かっただけでもよかったわ」そう言いながら神田のほうを向いて小さく一度うなずいた。

「そうだね。今日はこの話はやめておこう」神田は小さな声で咲姫に言った。しかし、一体何が山口さんの身に起こったのだろう。山口さんは一体どうしてネパールで亡くなったんだろう。神田はそ

の真相を今にでも聞きだしたかったが、それも、今のキャシーには到底耐えられないことだろう。たとえその真実が聞けたとしても、今の神田にはどうしようもない。自分の思いだけでキャシーを苦しめるわけにもいかない。

「お待ちどうさまでした」女将が料理を運んできた。

「蕪^{かぶ}のクリーム煮と水菜と椎茸のみぞれ豆腐でございます」と、やや遠慮がちにテーブルの上に並べた。

「ワオー、おいしそうですね」キャシーは無理に陽気そうな声を上げたが、それが逆に神田と咲姫^{さき}には辛^{つら}かった。

「咲姫、あれは何ですか？」キャシーは、カウンターの中にある神棚を指差した。

「ああ、あれはね、神棚と言って、言ってみれば、そうねえ宮島でたくさん神社を見たでしょ。そうした神社の支店のようなものよ」

「はははっ、支店とはうまいこと言うね。ま、御札が入っているんだから、確かにファミリーのための支店とか出張所みたいなものだね」神田もつとめて明るく振舞った。

「ああ、分かりました」キャシーも「なるほど」と言う感じで大きく頷^{うなづ}いた。

「へへっ、なるほどねえ。そういうことも言えまさあね」鉄も力ウンターの中から雰囲気を察したのか話に入ってきた。

「ご主人は出雲^{いずも}のご出身なんですか？」咲姫^{さき}は鉄に声をかけた。話題をどこかに持っていかなければこの場の雰囲気は変わりそうもないし、鉄の人柄にはこの場を和ませてくれる何かがあると思ったのだ。

「いいえー、あっしは信州長野でござんすよ」

「あら、じゃあ、あの神棚は？」

「あつしの遠いご先祖さんが出雲の出身でござんしてね、あつしらの一族は信州に移り住んだんでござんすよ。今となっちゃあ、どいう訳だか分かりやしやせんがね」そう言いながらも俎板まないたで小気味の良い音を立てている。

「しかし、あつしが極道ごくどう・・・へつ、こりや面目ねえ」

「あつしが人様の道を踏み外してからは信州には帰っちゃいやせん」

「ここの店の材料だけは出雲や大山だいせんの麓ふもとの農家から取り寄せているんですよ」女将おかみが土間にあるテーブルを拭きながら言った。

「そりゃ、おとみ、ご先祖さんと繋つながりを持ちてえってのが人情じゃござんせんか。ね、神田かみたの旦那」そう言つて、照れながら、神田に同意を求めた。

神田は、ニコリと笑い、

「そうだね。今でも、出雲へは？」と振り返つて鉄の顔を見た。

「へい、暇がありや、行つておりやす」鉄は大きな声で答えた。

「何だか、古事記のお話みたいね」咲姫は興味深げに言った。

「古事記？」神田は突然の言葉に少し驚いて、先のほうを向いた。

「そう、もともとは大国主命おおくにぬしのみことが治めていた出雲の国が奪たわれたのは、天照大御神から命令された建御雷之男神たけみかづちのおかみが、力較ちからべて健御名方たけみなかたの神かみを打ち負かしたからでしょ」

「そうだったね。それで、健御名方神たけみなかたのかみは信州まで逃げて、もう一生ここから出ません、と誓ちかつたんだよね」

キャシーはグラスを傾けながら、神田かみたと咲姫さきの話はなしを聞いていたが、

「咲姫、日本は侵略されたことがあるのですか？」と怪訝けげんそうな顔をして聞いた。

「そうねえ。難しい質問ね。もともと住んでいた民族のところへ違う民族が流れ込んできて、その結果として今の日本人がいるのだから・・・」ここまで言っただけでしばらく考えて、

「その民族同士が初めて接する最前線、フロントでは、元から住んでいた人達にとっては侵略に思えたかもしれないわね」咲姫は考えながら言った。

そして、神田も、

「そうだなあ。キャシーさん、このお話は、紀元、A・D・8世紀頃に作られた本に書かれていることですからね。当時の支配者にとっての権威付けや、国を奪い取った言い訳の要素が多く入っているんです。だから、国を奪い取った、とは言えないから、国譲り、と言っているんですよ」と、説明を加えた。

「その国を奪われた人の大宮殿がああ、神棚の本家、本店、ヘッドクォーター、出雲大社なのよ」咲姫はカウンターの神棚にグラスを向けた。

キャシーは、神棚のほうを見ていたが、不思議そうな顔をして、
「じゃあ、国を奪った人が、奪われた人のために、宮殿を建てたのですか？」と、咲姫の顔を見た。

咲姫は、

「そう。言ってみれば、豪華な牢屋みたいなものね」と、やや顔を上に向け空を見るようにして言った。そして、キャシーの方を見て、

「だから、今でも、出雲大社をお参りするときは、他の神社と違って、拍手は4回するのよ。それは、日本人は、言葉の発音を重視するから、4回の、シ、は、死、とか、古代では、ヨン、は黄泉のイメージがあるからなのよ」と続けた。「黄泉って言うのは、つまり、そのオ、亡くなった人が埋葬されている地面の下ってことね」

咲姫の説明に、キャシーは興味深そうに頷いた。

「だから、拍手を4回して、あなたはもう死んでいるんですよ。」

出てこないでね、ってことを伝えているのよ」

神田もそれに付け加えて、

「そう。だから、注連縄しめなわも他の神社とは逆方向になっているんですよ。それは、亡くなった人の着物の襟えりの重ねを、生きている人の重ねとは逆にする、左前、と同じ意味で、死んだ人に対する作法そのものなんです」

キャシーは興味深そうに神田と咲姫の話を聞いている。

咲姫は、

「そもそも、本殿はそつぽを向いている構造になっているものね」
神田の顔を見てそう言った。

「え、そうなのかい？」神田はそのことは初めて聞いた。

「そうよ。拝殿で一所懸命に、結婚できますように、とか、家内安全とかのお願いをしても、肝心の神様は横を向いているのよ。それは、本殿の配置を見れば一目瞭然よ」そう言って、テーブルの上に指で簡単な配置を描きはじめた。

神田は咲姫の剣道をやっているにしては細い指先の動きに見とれてしまった。

「ね。こういうふうになっているのよ」そう言って顔を上げた。

「あ、・・・ああ、なるほど・・・」咲姫の顔が思いのほか近づいたので、神田は、思わず体を起こした。

「神社の起源にはいろいろな説があるけど、私は、お墓と同じ考え方があるんじゃないかと思っているのよ」咲姫さきは、そう言いながら神田かみたを見た。

「と、言つと？」神田は、よく冷えた出雲のお酒を、グツ、と一口飲んだ。

「今でも古い神社は本殿ほんでんを持たない神社があるでしょ。奈良の大おお神神社みわじんじやや、石上神宮いそのかみじんぐうのような」咲姫もグラスをカラカラと回し、一

口飲み、

「それとか、村の鎮守様とか、こんもりした山に小さな神社があるでしょ。そのこんもりした山は古墳、つまりお墓だと思うのよ」

「なるほど」

「私のお仕えつかしている八頭神社様はつごんじやもそうよ」

神田は、高見と訪れた八頭神社のこんもりとした杜もりを思い出した。

「だから神社を参拝してお願いをすることと、お墓参りをして、ご先祖様に、おじいちゃん、おばあちゃん、私たち家族を見守ってくださいね、って言うのは同じことなのよね」

「お墓から出てこないで下さい。そこから私たちを見守っていてください、と言うのと同じことだと思うのよ。ほら、最近、テレビで話題の細木数子さんなんかも、相談者に、ご先祖様のお墓参りをなさいつて、しきりに言うのは、そういう意味もあると思うわ」

神田はキャシーのグラスが空になったのを見て、女将にお酒の追加を頼んだ。

「だから、あの件も、頼朝は日本を支配すると同時に、何かを恐れて封じ込めようとしたのかもしれないわ。日本の東の象徴、源氏の白を表す富士山、そして、西の象徴、平氏の赤を表す宮島」咲姫は自分に言い聞かせるようにゆっくりと話した。

「と、同時に、山と海」神田は咲姫の言葉を受けて言った。

「頼朝は、あの鉄の棒に関わりのある何かを非常に恐れていたってことだね」

「そう。あの鉄の棒に埋め込まれている矢尻に関わりのあるものが何かが分かれば、この話は意外と早く解決するんじゃない？」

「三本の鉄の棒、三本の矢尻かあ・・・」神田は、カラン、と氷の音をさせて、酒を飲み干した。

「折湯葉の煮物あがりやした」鉄の音がカウンターの中から聞こえた。そして、

「神田の旦那、毛利様のお話ですかい？」と、鉄は聞いた。

「え？」神田は鉄のほうを向いた。

「へへ、こりや面目ねえ。つい、余計なことを。へへっ。いえね、三本の矢って、いやあ、毛利元就様のことだと思いやしてね」

「お前さんも、学のないくせに余計なことを」と女将が冗談っぽく鉄に言った。

神田と咲姫は顔を見合わせてしばらく沈黙した。

三本の矢

「ああ、そうだね。広島で三本の矢、サンフレッチェ、っていえば、毛利元就もつりもとなりよね。ご主人のおっしゃる通りだね。ご主人、ありがとうございます」咲姫さきはカウンターのの中の鉄に向かつて、にこりと微笑ほほえみお辞儀をした。

「へへ、こりゃ、面目ねえ。おい、おとみ、聞いたか。ちつたー、亭主つやまを敬えつてこつた」鉄は冗談じやうだんぽく腕組みをして胸をそらした。
「まあ、あんたもすぐ調子に乗ってホホホ」と、女将は咲姫に向かつて笑った。

キャシーもその様子を見て笑顔を浮かべてた。

「毛利元就もつりもとなり、三本の矢、源頼朝みなもとのとりと、・・・」咲姫さきにはこれらを繋つなぐ細い線が見えてきた。

「お待ちせをいたしました」女将おかみが料理と酒を運んできた。
「ワオー、これもおいしそうですね」キャシーは目を丸くしてさっそく料理に箸はしをつけようとしている。

「神田君かみた、分かってきたわ。頼朝が何を怖がっていたのか」咲姫は、ずっと遠くを見つめるような目をして考えをまとめようとしている。

毛利元就がどう関係してくるというのだろうか？神田には絡からんだ系にもう1本の新しい糸が絡まり始めたと思えなかった。

「神田君、頼朝の敵は誰だった？」
「そりゃあ、平清盛たいらのきよもりだろう」神田は料理に箸をつけながら言った。

「そうね。それと、頼朝が恐れた人物がもう一人いるわ」

「え、誰？」

「義経よ」

神田の頭の中で、糸はますます絡まり始めていた。

「義経？しかし・・・」神田の言葉を遮^{さへぎ}って咲姫は続けた。

「そう。義経よ。それと、もうひとつ聞いてもいい？東の富士山と西の宮島に三本の矢のうち二本が隠されていたわね」咲姫は膝を少しくずし、神田の顔を見た。

「ああ、東と西、山と海の支配を目的としたと言うのが俺たちの今までの推理だったけど」そこから先がわからないんだ、と神田は思った。

「じゃあ、もう簡単じゃない？ 残りの一本の隠し場所はどこか」咲姫は、にこり、と笑った。

「何言ってるんだよ。簡単じゃないから悩^{なや}んでるんだよ」神田は口をいくぶん尖^{とが}らせて言った。

「山、海、そして肝心なものが抜けていたわ」

「肝心なもの？なんだい、それは？」

キャシーが山や海という言葉聞いて話に入ってきた。

「日本の海はきれいですね。瀬戸内海のインランドシーは、小さな島がたくさんあって、本当に綺麗^{きれい}です。それに飛行機から見えた富士山は本当に美しかったです。緑に覆^{おお}われた陸地に、スツ、と立つ・・・」神田^{かみた}は、キャシーの言った「陸」と言う言葉を聞くと、

「陸！！　そうか、里だ。山、海、里。この3つを支配してこそ日本の完全な支配になる」神田は目を見開いた。一挙に、目の前のボールが開かれた感じがした。

咲姫は、「当たり前」、というように右手の人差し指をたてて竹刀を振る格好をした。

「そうよ。山、海、里、これらを支配することが日本を支配することになるのよ」

神田は咲姫の推理は真実に近付いていることを感じた。そして、

「山の民を支配する象徴が富士山、海の民を支配する象徴が宮島、じゃあ、里の民を支配するには・・・」うーん、と神田は唸った。

「どこを押さえればいいだろう・・・」そこまで言った時、

「あつ、京都御所だ。天皇の住まいを押さえれば、これは間違いなく日本を支配することになる」神田はさらに目を見開いて咲姫を見た。

「そうね。でもちょっと待って。源氏も平氏もルーツをたどれば天皇家へつながるでしょ」咲姫は頼杖について横目で神田を見た。そして、

「頼朝にとって、京都御所は天皇家の住まい、単なる殻にしか思えなかったのじゃないかしら。中身はもつと違うところにあると考えたと思うわ。」咲姫は箸を取って、折湯葉の煮物をつまんだ。

それを聞いていたキャシーが、

「源氏も平氏もサムライではないのですか？」と、不思議そうな顔をして、咲姫に尋ねた。

「そう、サムライよ。でもね、もともとは皇族の一員だったのよ。天皇は、その家系を未来永劫存続させるために、妻をたくさん持っていたの。そのほうが、家系の断絶を防ぐことが出来るでしょ」咲姫はキャシーの顔を覗き込むようにして言った。

「おー、それは良くないですね」キャシーは眉をひそめて、首を

何度も振った。

「そうね。でも、そうしなければ天皇家は続かなかったでしょうね。で、そうするうちに、皇族の人数がどんどん増えて、逆に、財政を圧迫し始めたの。それで、皇族のうちから、しんせきこうか臣籍降下、といって、皇族の身分から離れた一族が発生したのよ」

「それが源氏と平氏なのですね」キャシーは大きく頷いた。うなづ

「だから、頼朝自身、自分のルーツは天皇にあると思っていたでしょうから、御所はそれほど重要な場所としては思ってたなかったんじゃないかしら」

「なるほど」神田は咲姫の次の言葉を待った。

「だから、頼朝は、京都御所は天皇家の住まい、単なる殻にすぎず、本当に大切なものは、もっと違うところにあると考えたんじゃないかしら」咲姫は折湯葉の煮物を一口に入れ、「まあ、おいしい」と、小さく言った。

「というത്？」神田は咲姫の口元を見つめた。

「だって、富士山は木花咲耶姫、宮島は、いちぎしまひめ市杵島姫、この二柱の神が関わっているのよ。残るもう一か所も、もっと天皇家のルーツに関わるところだと思っわ」咲姫のこの言葉に、

「ルーツ？天皇の祖先ということ？」神田は手にグラスを持ったまま動きを止めた。

神田は、ルーツと言う言葉で新聞記事を思い出した。

「そう言えば、この前の日韓共催のワールドカップを控えて、天皇ご自身が、朝鮮半島出身だったことを、ついに、言ってしまったね」

「そう、あれは、かなり大きなご発言だと思うわ。ご自身の先祖

が朝鮮半島にあることをはつきりおっしゃったんですものね」咲姫も大きく頷いた。

「そのことにも後で関係してくると思うけど、とりあえずはもう一か所はどこか、の問題よ。それは、天皇家は万世一系ばんせいいつけいとして連綿として続いてることを国中に知らしめることが出来る、その大元、ルーツに関わりがあるところよ」

「国中の人達が、ここは天皇の祖先と深い関わりがあるところだと、知っているいるところ、ということになるな」そうすると、一か所しかないな、と神田は思い、女将のほうに向かって、グラスを持ち上げて指を3本立てた。

「はい、おかわりですね」女将は頷いた。

「天皇様の祖先に深く関わっているところね。鉄の棒の、残された一本はそこにあると思うわ」咲姫も、グイツ、とグラスを空けた。「そうになると、意外と簡単だね。もうひとつしかないよ」神田の声は自然と大きくなった。

「どこだと思っているの？」

「伊勢神宮だ」神田はそう言うと、蕪かぶのクリーム煮を口に放り込んだ。そして、

「何しろ、天皇の祖先の天照大御神を祀まつっている古いにしえからの神社だし、天皇の祖先と深く関わっている神社と言いえば神宮じんぐう、一般には、伊勢神宮いせいじんぐうと呼ばれているけど、そこしかないだろ」と、自信をこめて言った。

「それに、富士山の木花咲耶姫このはなさくやひめ、宮島の、市杵嶋姫いちきしまひめ、そして、同じく女性の神様の天照大御神あまてるおおみのかみ、この三柱の神様は、古代史の中でも女神トッポ3といってもいいんじゃないかな。だとすると、例の鉄の棒はここに隠されているとしか考えられないだろう」と一気に考えを述べた。

「お待たせいたしました」女将が新しいグラスを運んできた。女将はグラスを置きながら、

「あの、神田さん。私たち、次に出雲へ行ったときは八重垣神社をお参りしたいと思っているんですけどね、八重垣神社には、壁画があるらしいですよ」と、言った。

「壁画？」神田は聞き返した。

「ええ。八重垣神社には、天照大御神と市杵嶋姫、が一緒に描かれている壁画があるらしいですよ」女将は空になったグラスを片付けながらそう言った。

「ああ、そうだったわ。確か国の重要文化財に指定されているわ」咲姫も思い出したように言った。

「市杵嶋姫は天照大御神の姪っ子だし、木花咲耶姫は天照大御神の孫のお嫁さんだよ」神田も、自分で、そうだ、そうだ、というようにうなづきながらグラスを持ち上げ一口飲んだ。

「そう、この三柱の女神は非常に近い間柄になるわ」

「そうすると、宮島、富士山、伊勢神宮。これらの間にはなんらかの関係があつて、これらの神々に頼朝は日本支配の願をかけたということだね」神田は膝を組みなおした。

「女将さん、ありがとうございます。問題が解決しそうですよ」神田は両手を膝頭に置き、頭を下げた。

「あら、そうですか。お力になれてよかったです」女将もうれしそうに笑った。しかし、咲姫は、

「ありがとうございます。でも、神田君、私の考えは違つたのよ」と、神田を見た。

「え？違つ？」

そこへキャシーが、

「あの・・・」と、遠慮がちに話しに入ってきた。

「日本人は、天皇の祖先が神様だと本当に思っているのですか？」

「それは微妙な質問ね」と、咲姫はちよつと困った顔をした。

「日本人にとっては神^{カミ}」（いくおーる）GODではないのよ」と、神田を、同意を求めるように見た。

「そうだね。日本人にとって、神様はどこにでもいるからね。木に宿^{みくまりのかみ}つたり、山だつたり。火を使う台所には「荒神様」、田や畑には「水分神」、トイレにも神様はいるんですよ。GODという觀念とは違うと思いますね。神様をGODと訳すのはやめた方がいいよね」と、今度は神田が咲姫を見た。咲姫も、そう、そう、という感じであつた。

キャシーは、ますます混乱した、という顔になった。

「そして、日本人の宗教観では、神様は神であると同時に人間なんですよ」

「神で人間？」キャシーは不思議そうな顔をした。

「分かりにくいと思うけど、日本人にとっては亡くなった人は神様になるという考えがあるんですよ」神田は、なるべく分かり易いように話さなければ、と思った。

「日本には、実在の人物をお祀^{まつ}りした神社がたくさんあつてね、吉田松陰^{よしだしよん}をお祀^{まつ}りした松蔭神社^{しょういんじんじや}とか、菅原道真をお祀^{まつ}りした防府天満宮とかね」

「はい。宮島の清盛神社。私もお参りしました」キャシーは、なるほど、という顔をした。

「でも、その神と人間の境が曖昧あいまいなところがよその国の人にとつては極めて理解しにくいんだと思いますね。同じ顔や肌の色をし、一部では文化を共有しているアジアの国々の人でさえ理解するのは難しいんですから」と、いくぶん声を落として言った。

神田のその言葉を説明するように、咲姫は、

「そのために、いまだに問題が起きているでしょ。神社に参拝するのはけしからんとか。これはある意味、今までの日本は経済中心の輸出に偏りかたよすぎたからだと思うわ。これからは、日本の伝統や文化、芸術の広報がいかに大事かって事ね。もちろん日本人の宗教観の広報も含めてね」と、キャシーの顔を見て言った。

「咲姫さき、ありがとう。日本の文化は難しいですね。ごめんなさい。お話の途中で」キャシーは咲姫の肩に手を置いた。

「いいのよ。ひとりでも多くの人に日本のことを理解してもらわなきゃ、これからの世界で日本は孤立してしまうわ。それに、キャシーの今の質問は、私の考えの基本なのよ」そう言うと、改めて神田を見た。

咲姫は一体何を言おうとしているのだろうか、と神田は思った。

「神宮（伊勢神宮）には確かに、天照大御神あまてるおおみのかみがお祭りしてあるし、天皇様のご先祖をお祀りまつしてあるということ、昔から多くの人達の崇拜をあつめているわね」神田は、残った蕪かぶのクリーム煮を口に入れた。

「でもね、私の考えは、前にも言ったように、神社信仰の基本は、お墓参りにあるということなの」

「ああ、咲姫ちゃんさきの考え方を聞いて、なるほどと思ったよ。確かに、普段は仏壇や神棚に手を合わせていても、肝心な時、お盆とか、お正月とかにはお墓参りをするものなあ」グラスの酒を一口飲んで、椎茸のみぞれ豆腐に箸をつけた。

「でしょ？伊勢神宮はお墓じゃなくて天皇様にとっては神棚なのよ」咲姫はグラスを手にしたまま話を続けた。

「キャシーの言うように、天照大御神を神としてお祀りしてあるのが伊勢神宮じゃないかと思うの」そして、

「天皇様の人間としてのご先祖様が祀られてはいないのじゃないかしら？」と、神田がビックリするようなことを口にした。

「じゃあ、咲姫ちゃん咲姫ちゃんは、伊勢神宮は、その・・・単なる神棚で、本当のお墓は他にあるって言いたいのかい？」

「そう」咲姫は瞳を輝かせた。

「ほら、最近の研究では、エジプトのピラミッドはお墓じゃないってことが分かってきたでしょ」

神田かみたは、そういう説が主流になりつつあることは聞いていたが、すでに定説になっていることをこの時初めて知った。

「それと同じことよ。ピラミッドもお墓じゃなくて神棚だと思うわ」咲姫は瞳を輝かせ確信に満ちた口調で、

「王のお墓は別のところにあるはずよ。その発見はそんなに遠くのことじゃないと思うわ」と言った。

神田はそんな突拍子もないことは、これまで考えたこともなかった。それに、伊勢神宮とピラミッドを結びつけることなどは思いも寄らなかった。

伊勢神宮には、毎年、何十万人もの人たちが初詣はつせいでに訪れる。咲姫の説だと、彼らは、単なる神棚にお参りしていることになる。しかし、咲姫の口調からは確信に満ちたものが感じられた。

「うーん・・・で、それは、その、天皇のお墓はどこに？」神田には思い浮かばなかった。

「宇佐神宮よ」咲姫は少し口元に笑みを浮かべて言った。

「大分県の宇佐神宮？」

「そう。今も、皇太子様の跡を継ぐ皇位継承問題で、国会でも、もめているけど、八世紀にも、時の天皇、称徳女帝が皇位を弓削道鏡よしかげに譲ろうとした時、それが正しいかどうか神のお言葉を聞くために、わざわざ、大分県の宇佐八幡神宮に和氣清麻呂わけのきよまろが出向いたっていう話、知ってる？」咲姫はやや首を傾げて神田を見た。

「ああ、宇佐八幡神託事件うさはちまんしんたくしけん、とか、道鏡事件どうきやうしけん、とか言われているやつだね」歴史上有名な事件だ。

「おかしいと思わない？伊勢神宮に行かずに、わざわざ遠くの宇佐神宮に行ったのよ」

「そういえば、確かに変だな。当時の天皇は奈良に居たんだから、それこそ目と鼻の先の伊勢神宮にお伺いうかがを立てるのが普通だなあ」と、神田は首をひねった。

「そうでしょ。それなのに何故、宇佐神宮へ和氣清麻呂わけのきよまろを向かわせたか。それは、宇佐神宮が天皇家にとってのお墓だからだと思うわ」

「宇佐神宮のご祭神は、一之御殿いちのしんに八幡大神（はちまんおおかみ）、応神天皇おうじんてんのう、二之御殿に比売大神ひめおおかみ、三之御殿に神功皇后じんくうこうごうがお祀りしてあるのよ」

神田は、さすがに咲姫は神社に関して詳しいな、と思った。

「そして、ここで問題なのは、参拝の方法なの」咲姫はここでグラスの酒を一口飲んだ。

「宇佐神宮の参拝方法は、出雲大社と同じなのよ」

「え？じゃあ、例の四拍手、ってことかい？」神田は咲姫の言った四拍手は「死」を知らしめるためのものだと言った言葉を思い

出した。

「そうなの。全国でも、出雲大社と宇佐神宮だけなのよ」

「では、誰を閉じ込めているのですか？」ふたりの話を聞いていたキャシーは興味深そうに尋ねた。

「おそらく、比売大神ひめおおかみだと思うわ。だって、二之御殿と言って順位は二番目のように見せかけているけど、実質は真ん中で、中心になっているものね」咲姫は左手の指を三本たて、右手の人差し指で、三本の指の真ん中を指した。

「つまり、比売大神ひめおおかみの霊を閉じ込めてるってことかい？」神田の眉間には自然と皺が寄った。

「そうとしか考えられないわね。宇佐神宮と出雲大社に共通して言えることは、比売大神ひめおおかみと大国主命おおくにぬしのみことは二人とも殺されて祀まつられた、ということだから」咲姫はサラリと言つてのけた。

「殺された？」神田は持ち上げたグラスを途中で止めテーブルにおろした。

「そう。大国主命ひめおおかみも比売大神ひめおおかみも、新しく日本にやってきた天照大御神あまてるおおみのかみの系列の民族に殺されたと思うの」咲姫はグラスに軽く唇をあてた。

「いや、しかし、比売大神ひめおおかみは卑弥呼ひみこ、すなわち天照大御神と同じだというのが現在、一般的な説だろ？そうするとおかしくないかい？卑弥呼を神に仕える神聖な巫女みことして尊敬こそすれ、殺すなんてことは・・・」

「天照大御神あまてるおおみのかみの岩戸隠れの伝説は比売大神ひめおおかみつまり卑弥呼の灵力の衰えによって、暗闇のごとくに国が乱れた、ということを示しているのだと思うわ。実際に天文学者の計算では、同時期に皆既日食が起こっていると言う事実もあるし」ここまで言つて、神田の顔を

見て、さらに続けた。

「何人かの学者や小説家も、同じようなことを発表しているわ。私の考えと少し違うけど」

「つまり、国が乱れ、そこへもってきて、日蝕という、今まで経験したこともない天変地異が起こり、当時の人たちは、これは卑弥呼^{ひみこ}の力の衰えが原因だ、と考えたということかい？」神田も軽く一口酒を飲んだ。

「そう。当時の人たちにとって、日蝕なんていうのは、それこそ、この世の終わりほどに感じたのじゃないかしら」咲姫はキャシーの方を向いて、でしょ？という顔をした。

「そして、卑弥呼に代わる、あらたな靈力を備えた人物を求めた、ということか」そういう解釈もできるな、と、神田は思った。

「だから、当時の人たちは、卑弥呼に再び復活してもらいたくないと思ったでしょうね。卑弥呼が、混乱や天変地異の原因だと思ったのだから」と、今度は神田の顔を覗き込んだ。

「だから、もう出てこないでください、と、四拍手をするという訳か」そう言つて神田はグツ、と酒を空けた。

「卑弥呼の後継者のことは、中国の歴史書、魏志倭人伝にも書かれていてしょ」

「ああ、確か、卑弥呼の後継は台与^{とよ}だったね」神田も何度目かの邪馬台国ブームの学生時代に呼んだ記憶がある。

「それよ」咲姫^{さき}は、グラスを持った右手の人差し指を立て、神田に向けた。

「ん？それって？」

「台与とよよ。伊勢神宮の内宮のご祭神は天照大御神、外宮のご祭神は豊受神とようけのかみなの」
「トヨー！」

「つまり、伊勢神宮には卑弥呼と、その後継者である台与とよが、記念碑的にお祀りまつしてあるだけじゃないかと思うのよ。だってお墓だったら、いわばライバル関係にある二人と一緒に祀りはしないと思うのよ」

神田は、

「あー、だから、皇室のご先祖のお墓は伊勢神宮じゃなく、宇佐神宮、と、こういうわけか」と、ここまで言って、

「じゃあ、あの鉄の棒の最後の一本は宇佐神宮に隠されているということか」と、自分自身、納得したように言った。

「待つて。違うのよ」咲姫は、神田のその言葉をすぐに否定した。
「え？違うのかい？」神田の肩が、がっくりと揺れた。

「私は、三本目の鉄の棒の隠し場所としては、御所ごしよや伊勢神宮よりも宇佐神宮の方が可能性がある、と言いたいだけなの」

「で・・・」ここで、咲姫は、一口酒を口飲み、

「問題は頼朝がどうしてわざわざ鉄の棒に封印された矢尻を三本に分けたかって言うところなの」グラスを置いて、左手の指を三本立てた。

「確かに、宇佐神宮に隠されている可能性はあるわ。でも、宇佐神宮よりも、もっと可能性の高いところがあるのよ。それに、頼朝の時代に、さっき言った日蝕や魏志倭人伝ぎしわじんでんの分析が出来ていたとは思えないわ。どっちにしても、宇佐神宮が皇室のご先祖様のお墓であるってことが定説になるよりもエジプトの王家の墓の発見のほうためいきが先でしょうね」咲姫はそう言うと、口をすばめて長い溜息を吐いた。

海の民、山の民、これらを支配下に治めるために、宮島、富士山、そして、里の神を治めるために、皇室の、いわば本家の墓である宇佐神宮以上に重要な場所が他にあるのだろうか？

頼朝は海の宮島、山の富士山、そして、里のどこが重要な場所だと考えたのだろうか？

三種の神器

「天皇様が天皇様であるための証^{あかし}で最も大事なものは・・・」咲^さ姫^きがここまで言^いつと、神田^{かみた}は、

「三種の神器^{さんしゅのじんぎ}だろ」と、先に口にした。

「そう。天孫降臨^{てんそんこうりん}、つまり、ご皇室のご祖先様が朝鮮半島から日本へ来るときに、天照大御神が孫の邇邇芸命^{ににぎのみこと}に与えた身分証明書みたいなものね」

「八咫鏡^{やたのががみ}、草薙の剣^{くさなぎ つるぎ}、八坂瓊曲玉^{やさかのまがたま}だ・・・ね」神田は膝を組みなおした。

「この鏡、剣、玉、って聞いて、何か思いつかない？」咲姫が再び神田に問いかけた。

「ん？・・・」咲姫^{さき}の問いかけに右肘^{みぎひじ}をテーブルの上に置き、体を咲姫^{さき}のほうへ向けた。

咲姫^{さき}は続けて、
「天皇様のご先祖様が朝鮮半島からこの日本へやって来る最初の難関はなんだと思う？」と神田に微笑みながら尋ねた。

「最初の難関？・・・それは、玄界灘^{げんかいなだ}だろうな。俺も何年か前に韓国へフェリーで渡ったことがあるけど、それは、穏やかな瀬戸内海とは大きな違いがあるよ」と、地理的なことしか思い浮かばず、それを口にした。

「でしょ。おそらく、彼らが初めて瀬戸内海を見たときには、鏡のようだ、と思ったでしょうね」

咲姫の考えもまた、意外にも、神田と同じ考えであった。

咲姫は間合いをおかずに、

「そして、山から取れる石を材料にした勾玉まがたま」と、続けた。

「！」

「草薙の剣は日本武尊が焼津の草原で敵に火を放たれ危機に陥った時に、草を薙なぎ払ってその危機を脱したお話があるでしょ。その時の剣が草薙の剣」

「薙なぎ払う、つまり、平定っていうことが」

「三種の神器さんしゅのじんぎの、鏡は海、勾玉まがたまは山、剣つるぎは里、と、ぴったり重なり合うのよ」

咲姫は、

「三種の神器さんしゅのじんぎは、日本の支配者の証明書であると同時にそこには海、山、里を支配下おさに治めようとする強い思いが込められていると思うの」と、もはや、推測ではなく、事実であるかのようにはっきりとした口調で言った。

「うーん、すると、鏡の宮島、勾玉まがたまの富士山、そして剣つるぎは・・・」

と、神田が口にした疑問に咲姫は、

「草薙の剣は熱田神宮くさなぎのじんぐうにご神体しんたいとして祀まつられているわ」と、幾分緊張した顔で言った。

「あっ！！」思わず声が出た。そうだった、神田は、その剣つるぎは、終戦後、占領軍による没収を恐れて、一時、密かに別の場所に移されていた時期があった、という噂を聞いたことがある。

咲姫さきは、テーブルの上のグラスに手をかけ、

「そして、これらの神社に共通することは、厳島神社いつくしまじんじや、富士山本宮浅間大社ふじさんほんぐうせんげんたいしや、そして、熱田神宮あつたじんぐうの宮司は、日本の神社の三大宮司なの」と、そのグラスを持ち上げた。

「なんだって！」

「しかも、頼朝の母親は熱田神宮の宮司の娘なのよ」と、神田の

ほうに向け、乾杯の仕草をした。

「あつ、そういえば、熱田神宮の大宮司は藤原季範ふじわらのすえのりだったね」そうだった、神田は組んだ膝頭を、ポン、と叩いた。

確かに、頼朝は父、源義朝みなもとのよしともと、藤原季範ふじわらのすえのりの娘の由良御前ゆらいぜんに生まれただ子だ。しかも、義経とは違い、母親は頼朝の正室、いわば、正真正銘の源氏の直系になる。

「日本の、いわばトップ3のひとりの宮司の娘が頼朝の母親かあ。しかも、海と山に加えて里を平定する意味のある草薙くさなぎの劔まづが祀まつられている、となると、なるほど、咲姫さきちゃんの言う通り、三本目の鉄の棒は、熱田神宮に隠されている可能性が高いね」神田は、咲姫の推理の鋭さに驚いた。

「それと、今思い出したわ」咲姫は背中をそらせ、

「頼朝が源氏の再興さいこうを願って足しげく通った三嶋大社の中には、頼朝の妻の北条政子が深く信仰していた厳島神社があるのよ」と、以前、剣道大会が開かれた時に立ち寄った大社の姿を思い浮かべながら言った。

「これはもう決まりだな」神田は、富士山本宮浅間大社ふじさんほんぐうせんげんたいしゃにも厳島神社があつたことを思い出した。

神田かみたが、グラスを持ち、咲姫さきとキャシーの方にささげ、乾杯の仕草を取ると、咲姫も再びグラスを持ちグラスを上げた。

キャシーも、よくは分からないまま、にこりと微笑み、グラスを上げ、三人は、コチ、コチ、と、グラスを鳴らした。

三人はカラン、と、氷を鳴らし、それぞれのグラスを空にした。

女将が、

「問題解決ですか？」と声をかけた。

神田は、苦笑いをしながら、

「そう願いたいところですが、次の問題が・・・」と言うと、咲姫のほうを向いて、

「咲姫ちゃん、最初に言った、頼朝が恐れていたのが義経だって件を聞かせてくれよ」そう言つと、女将に向かつて、

「あ、女将さん、茄子と茗荷なす みょうがのすまし汁と炊き込みご飯を」と、最初に咲姫が注文しようとしたメニューを頼んだ。

「はい、承知いたしました」女将は、空になった器を盆に載せ下がった。

神田は、「次々と疑問が浮かび上がってくるが、咲姫は、神田の考えのはるか先が見えているのだろっ」と思った。

そして、次の疑問を口にした。

「頼朝、義経兄弟の確執は確かにあったと思う。頼朝は義経の人氣に嫉妬しつとし、義経の天才的な知略を恐れたのは確かだろう。頼朝にしてみれば、自分は正室の長男、義経は妾めかけの子。その妾の子が自分よりも人氣が出てきたのは面白くないだろう、とは想像できる。でもそれが今回の三本の鉄の棒にどう関わってくるんだい？」

「さあ、ここからがこの問題の核心ね」咲姫は正座をしたままテーブルの方へ少しにじり寄った。

「さつき、ご主人が、三本の矢、たとえば、毛利元就様もつりもととなりだ、と言われたでしょ。それを聞いて、ぱっ、と、ひらめいたの」そう、やや大きな声で首を伸ばし、カウンターの鉄に聞こえるように言った。

「へへ、そりゃ、面目ねえ」鉄は背筋を伸ばし、座敷のほうを向

いて、笑顔で頭を下げた。

「神田君かみたが言ったように、義経は、次々と平家軍を打ち負かし、民衆の人気もうなぎのぼりになり、後白河法皇ごしらかわほうおうも義経びいきになっ
てしまったでしょ」

確かに、法皇は義経に次々と官職を与えている。

「法皇の、義経と頼朝の仲を裂く作戦だったようだけどね」

「そうね。頼朝の義経に対するライバル心をうまく利用した法皇
の作戦勝ちってとこね」

「法皇は頼朝を牽制けんせいするために純な義経をうまく利用したのだろ
うな」

「それはともかく、義経が最終的に壇ノ浦の戦いで平氏一門を滅
ぼすと、頼朝は考えたのよね。このまま義経が力を蓄えたまま、法
皇の後ろ盾を元に奥州の藤原一門と手を組んだら、自分自身が危な
い、と」

「そして、義経が壇ノ浦の戦いで捕虜にした平宗盛たいらのむねもりを連れて鎌倉
に入ろうとした時には、頼朝は義経に鎌倉入りを許さなかったのよ
ね」咲姫はほんの一瞬まぶたを閉じた。

「ああ、義経にしてみれば、兄の頼朝からどうして嫌われるのか
分からず悩んだらうね」神田はそう言うと、唇を一字に結んだ。
「そこで、義経は、頼朝に対する忠誠心や、弟として兄に対する
心情を文書にして、頼朝の参謀に、頼朝との仲のとりなしを頼んだ
わけね」咲姫は右手でペンを持つ格好をした。

「それが有名な腰越状こしえじょうだね。今も下書きが残ってて、それを読む
と、義経の純真な心が伝わってくるよ。もし、頼朝がそれを読んで

いたら、歴史は変わっていたかもしれないね」神田は咲姫の同意を求めるように咲姫の顔を見た。

咲姫は神田の視線を頼で受けながら軽くうなづいた。

「ところが、その文書は、握りつぶされ、頼朝に義経の気持ちは伝わらなかったんだからね。かわいそうなもんだよ」神田は首を振った。

「その文書を握りつぶしたのが大江広元、毛利元就のご先祖様よ」

咲姫は、やや強い口調でそう言うのと神田の顔を見た。

「そうか！そうだったね」

神田は、この店の主人、鉄が言った、三本の矢といえは毛利元就様だ、という言葉から、一挙にここまで推理の枠を広げ、絡んだ糸をほどこいていく咲姫の推理に驚いた。

そして、咲姫が、三本の鉄の棒をめぐって、謎の大男と中国との関わり等、複雑に絡み合った糸を、一本一本ほどこしていることを感じていた。

神田は、今回の事件により、今までは見過ごされてきた、日本の陰の歴史の一部に光をあてること出来るのではないか。また、その一方で、このまま行くと、現在の国際政治の闇の中で蠢いている得体の知れない何かに、自分達が巻き込まれるのではないかという漠然とした不安が湧き起こってきた。

「もう、このあたりで手を引いた方が無難かもしれない」神田はそう思い始めていた。

しかし、歴史の系はすでに神田や咲姫、キャシーまでも絡まり始めていた。

義経の首

「大江広元は頼朝の懐刀、頭脳でもあったといわれているでしょ。彼がいなかったら頼朝の存在はなかったと思うわ」咲姫は、キャシのほうを向いて、

「ごめんね。ちょっと退屈でしょ」と言うと、キャシーは、

「大丈夫です。日本の歴史は興味あります」と、膝を組みなおした。

「確かに、頼朝の重要な政策には広元の意見がかなりの部分で取り入れられているよね。守護地頭の設置とかさ」歴史の授業で、何度も繰り返し聞いた言葉だ。

「おそらく、この三本の鉄の棒の件も広元の意向だと思うわ」咲姫は少し首を傾けて、

「今の腰越状の件以降、義経は結局逃亡生活に入り、最後には自刃してしまうわけだけど、頼朝は、義経の死を最後まで確信できなかったのじゃないかしら」と、続けると、神田の顔を見た。

「確かに。頼朝は疑り深い性格だったらしいからね。だから、最後まで義経を信用できなかっただろうね」

神田は、昔、本で読んだ記憶を呼び起こし、

「岩手県の高館から頼朝のいる鎌倉まで義経の首を運んだけど、43日もかかったらしいからね。しかも夏場の暑い盛りだから、義経の首実験をするところではなくて、海辺に捨てられ、頼朝自身は、実際には義経の首は見えていないと言う説が主流らしいね」昔聞いた義経にまつわる諸説を思い出した。

「そういった話から義経は蒙古に渡ってジングスカンになった、などという説となえる人まで出て来たんだろな」神田はつぶやくように言い、確認するかのように、

「ともかくも、頼朝自身は義経本人の首を確認出していないんだ」と繰り返した。

「そうなると思う？ 疑り深い頼朝は、不安で仕方なかったと思うわ」咲姫は顔を神田のほうに向けた。

「いつ、義経が現れて、頼朝に反旗を翻すか。そればかり気になったのじゃないかしら？」

神田は腕組みをし、

「大江広元は、その様子を見て、んーん、・・・」と、しばらく考えて、

「そうだな・・・このままではいけない。このままだと奥州を攻めるどころか、後白河法皇が再び策を巡らし頼朝の権勢を削ぎにかかるかもしれない、・・・と、考えただろうな」と、やや、自信無げに言った。

「そこで、どうやって、頼朝を安心させるか」咲姫は、神田の推理の次を推測した。

「義経の首は、本物であろうと偽物であろうと、頼朝自身が疑いを持っているのだからどうしようもない。でしょ？」と、神田に同意を求めた。

「そうすると、頼朝に安心させるには、どうしたか・・・だな」神田は膝を組み、腕を組んで小首をかしげた。

「義経は自害して果てました、もうこの世にはいません。頼朝様の前に現れることは二度とありませんからご安心下さい、と、安心させるためには」と、ここまで言って、神田の頭の中で、ぼんやりとはあるが、何かと何かが繋がってきたような気がした。

鎌倉の鶴岡八幡宮も保元、平治の乱以来頼朝によって滅ぼされた怨霊を鎮める役割を担っている。

「そして、頼朝自身も義経の影に怯えることなく政に専念するた
めには、おそらく、頼朝が深く信仰していた修験道の助けを借りた
のじゃないかしら？そもそも、頼朝の母も役の行者の信者で、霊
鬼を胎して、生まれた子が頼朝で、鬼武者と名付けたくらいですも
の。」

「咲姫は、さすがに、宗教関係のことについては詳しいな」と神
田は改めて思った。

「お待ちをいたしました」女将が、茄子と茗荷のすまし汁と炊
き込みご飯を運んできた。

キャシーは、

「んーん。いい香りですね」と背筋を伸ばして、盆の上にある料
理を覗き込んだ。

「野菜と米は、大山の麓の契約農家の有機でござんす」カウンタ
ーの中から、主人の鉄が声をかけた。

女将が、

「お待ちをいたしました」と湯気の立っている、茄子と茗荷のす
まし汁と炊き込みご飯を運んできた。

キャシーは、

「私、炊き込みご飯、大好きです」と声を上げ、テーブルの上の
空になった器を脇によせた。

女将は、

「お口に合いますかどうか」と言いながら、テーブルの上に並べ
た。

「日本の料理は健康的でいいですね。私は、咲姫がスマートな理
由が日本に来て分かりました」と、笑いながら言った。

「それと、剣道ね」咲姫は言った。

「あら、こちらさんは剣道をやってらっしゃるんですか？」女将

は、驚いた顔をして咲姫を見た。

「ああ、女将さん^{おかみ}、この人は学生時代から剣の達人で、面を打たせたら、ちよつと敵う者^{かな}はいないよ」神田は少し自慢げに言った。そして、

「あつ、そつだ。あの時の郷戸^{ごうこ}は、ここの親父さんがしばらく面倒を見ていたんだよ」と、カウンターの中にいる鉄を見た。

「あらつ、そんなんですか」咲姫も、驚いた様子で鉄のほうを向いた。

「あの郷戸さんが・・・」咲姫の脳裏に、郷戸の刃のように鋭い印象の顔が浮かんだ。

キャシーは、一瞬、郷戸^{ごうこ}と言う言葉に反応して顔を上げたが、両手で、茄子^{なす}と茗荷^{みょうが}のすまし汁の椀を包むようにもって香りをかぎ、「うーん、いいにおいですね」と瞳を閉じて、満足そうな顔をした。神田は、そのキャシーの様子に少し違和感を感じたが、

「あいつも、今頃どうしているんでござんしょうかね」と言う鉄の言葉と

「不思議なものね。いろいろな目に見えない繋がり^{つな}がりが私たちにはあるのね」と言う咲姫^{さき}の言葉に神田は黙って軽くうなずいた。

「そつでござんすね。あいつもにも、こつして噂^{うわさ}をしてくださる御仁^{ごにん}がいらつしやるつてえのに・・・全く、生きているのか死んでいるのか、人様に迷惑でもかけていやがるんじゃないかねかと、あつしらは心配でござんしてねエ。なあ、おとみ」と女将の顔を見た。

「おつと、いけねエ。湿つぱい話はナシにしやしよう」鉄はそういうと、くるりと背を向けて、鉄瓶^{てつびん}の湯を急須に入れた。

神田はカウンターのの中の鉄から咲姫に目を移して、

「咲姫ちゃん、さっきの続きだけど・・・」と、話の続きを促した。うなが

「ええ、それでね、私は、おおえのひろもと大江広元のことだから、義経の首を鎌倉に運ばせたのと同時に、別のもも運ばせたのじゃないかと思うの」「そう言いながら、咲姫も、すまし汁の椀から立ち上がる湯気に少し顔を倒して鼻をよせた。

「別のもの?」神田も箸を取り、すまし汁の椀を左手で持った。

「そう、夏の盛りに首実検をするのは難しいことを見越して、いわば、予備の証拠品を別ルートで運ばせたんじゃないかと思うの」「ここまで言って、すまし汁を一口すすった。

そして、椀を置き、

「あるいは、最初から、義経の首とセットで頼朝宛てに届ける予定になっていたとも考えられるわ」「右手で箸を取り上げて、左手と共に、それを揃え直した。そろ

そして、

「これは、かなりの部分で、私の推測が入るけど、状況から見ると、そういうふうを考えるのが理にかなっていると思うの」「そう言う」と、

「つまり、義経の首と、もうひとつ、これさえあれば、義経の死は確実に証明できる、そんなものよ」と続けた。

「何だい?その別のものっていうのは?」神田はすまし汁から立ち上がる湯気を通して咲姫を見つめた。

咲姫は、すまし汁を一口すすり、椀をテーブルに置くと、

「義経と頼朝、そして修験道と矢、どう?何か思いつかない?」

「矢、義経の死・・・」神田は、しばらく考えて、

「あ！それはひょっとして・・・」神田が次の言葉を言う前に、
「弁慶の立ち往生^{おしこじ}」咲姫は言い切った。

「あーッ！！　じゃあ、あの、鉄の棒に封印されている矢は・・・」

「おそらく、弁慶の命を奪った矢よ」

鉄の棒に閉じ込められた三本の矢は、宮島、富士山、熱田神宮、それらは海の民、山の民、里の民の支配、すなわち、日本の国土を支配することを意味していた。

しかも、その三本の矢は、日本国の支配者であることの証明書とでも言うべき、三種の神器^{さんしゅのじんぎ}、すなわち、八咫鏡^{やたのかがみ}、八坂瓊曲玉^{やさかのまがたま}、草薙^{くさなぎ}の剣と関連がある。

そしてそれは、源頼朝と義経の確執^{つな}にも繋がり、さらには、大江^{おおえ}広元^{ひろもと}へ、そして、毛利元就の三本の矢の説話もここから生まれたのではないかとも考えられるのだ。

そして今、咲姫は、その三本の矢は弁慶の命を奪った矢ではないかと言うのだ。

「弁慶は、義経が持仏堂^{じぶつどう}の中で自らの命を絶つのを邪魔させまいとして、持仏堂の前で無数の矢を体に受けながらも薙刀^{なぎなた}を地に突き立て、仁王立ちのまま絶命したといわれているわね」咲姫は姿勢を正して話を続けた。

「五条の橋の一件以来、常に義経の身を守り、支えてきた弁慶の最期^{さいご}に相応^{ふさわ}しい立ち往生^{おしこじ}だったろうな」神田も感慨深げに言った。
そして、

「弁慶は修験道のネットワークを駆使して、義経の逃避行の先導

役を務め、義経を支えてきたのは事実だろう」そう言うと、神田は、炊き込みご飯を瞬きもせずに顔を前に向けたまま、一口食べた。

「でも、逆にそのネットワークを伝わる情報が逆流して頼朝サイドへも流れてしまったということも十分に考えられると思わない？」

「そもそも、弁慶自身は修験道グループのアウトローだったじゃないの」

「あー、たしかに、比叡山を追い出され、各地を転々とした後に、修行中の書写山しよしゃさんの圓教寺えんぎょうじの堂塔に火を放って大騒動を巻き起こしたりした、まさに、暴れん坊だよな」そう言って、神田はNHKの「義経」で弁慶を演じている松平健の顔を思い出し、笑みがこぼれた。「牛若丸と出合ったのも、その償いつぐなのために、千本の刀を得て、お寺再建の釘代を工面しようとしたためだったんだからね」と、弁慶が京の五条の橋の上で牛若丸と闘うシーンを思い浮かべた。

「反弁慶派の存在があってもおかしくはないわ。修験道の反弁慶派のグループが、来るべき頼朝の天下で優位な位置を得ようとする目論見と、頼朝と大江広元おおえのひろもとの目論見が一致したのじゃないかしら」と言つと、

「つまり、義経と弁慶の排除、という点で一致したって言うことか」と、神田が繰り返した。

咲姫がさらに、

「そして、義経の首と、弁慶の命を絶った三本の矢が頼朝の元へ届けられる予定だったけど・・・」と言つと、

「頼朝の首は腐敗してしまい、首実検に耐えられる状態ではなくなり、三本の矢だけが頼朝の元へ届けられた」神田はその後を続け、「なるほど」十分に考えられるな、と思った。

「頼朝は自分自身で義経の死を確認できなかったために不安で慄おののき、政に支障せいしょうを来たすことを危惧きくした大江広元は、弁慶と義経の怨おん霊りようを封じ込めるために三本の矢を鉄の棒に閉じ込めて、海、山、里

の象徴である宮島、富士山、熱田神宮のそれぞれに閉じ込めた」神田は一気にここまでしゃべり、息を吸い込み、

「これでご安心召されよ、天孫降臨てんそんこうりんの古いにしえよりの要かなめの地に三本の矢をお祀りまつすれば、頼朝様の天下掌握は磐石ばんじやくのものとあります、と、こつという訳か」うーん、と神田は目を閉じ腕を組んだ。

咲姫は炊き込みご飯を一口に運び、じつくりと味わうと、

「その実際の作業は、修験道の役小角えんのおづぬの末裔達まつえいたちが手を貸したのだと思うわ」と、続けた。

神田かみたは、腕組みをして息を吸い込み、

「ふーっ」と、息を長く吐き出した。

咲姫さきも炊き込みご飯の椀を左手に持ち、右手には箸を持ったまま、ぼんやりと壁を見つめていた。

そんな様子を見て、キャシーが、

「ふたりとも疲れましたか？」と顔に笑みを浮かべて、下から咲姫の顔を覗き、そして、神田の方に向かって、片目を閉じてウィンクした。

「い、いや、・・・これから先のことを思うと、体に鉄のよろいを着けているようですよ」と言いながら、右手で左肩を揉んだ。そして、

「鉄の棒が宮島、富士山、熱田神宮に隠され、いや、祀まつられていた、と言っべきかな。その理由は咲姫ちゃんの推理通り、頼朝にとつて邪魔になった義経と弁慶の怨霊おんりようを封じ込めるため、そして、そうすることが頼朝の日本支配を磐石ばんじやくにするためだとしても、・・・そもそも、どうして、その三本の矢を必要とする人間がいるんだ？」天井を見上げて、首をコキ、コキ、と鳴らした。

咲姫^{さき}も、口の中で、

「何のために・・・」とつぶやいた。

神田も

「どうして、中国はそれを狙ったんだ」と自分に問いかけた。

弁慶

「神田のだんな」鉄が遠慮がちに言いながら、手を拭き拭き、カウンターの出てきた。

「何ですか？」神田^{かみた}は、鉄がカウンターから出てくるのを初めて見た。

「さつきから、弁慶さんのお話をされていらつしやるようですが」そう言つて、木の丸椅子をテーブルの下から出して座つた。

「ああ、どうやら、鉄さんがさつき言つた、毛利元就^{もつりもとなり}の三本の矢の教えの、その三本の矢は、どうやら弁慶の命を奪つた矢じゃないかつてことになつたんですよ」と今度は左手で右肩を揉んだ。

「へー、弁慶さんのねー。いやね、弁慶さんと言やー、出雲^{いづみ}の出身でござんすからね、あつしもちよいと関わり^{かか}がござんしてね」と頭に巻いた手拭^{てぬぐい}を外した。

「あんた、もう、止めときなさいよ」笑いながら、奥から女将が出てきた。

「いえ、女将さん、面白いじゃないですか。関わりがあるだなんて。聞かせて欲しいな」咲姫も興味津津^{きょうみしんしん}の顔をして振り返つた。

女将はテーブルを拭きながら、

「関わりなんて大袈裟^{おおげさ}なんもんじゃないですよ。ただ名前が山田鉄男^{てつお}というだけなんですよ」と、軽く言つた。

「山田鉄男という名前が関わりがあるんですか？」神田は、鉄の話に興味^{きょうみ}がわいてきた。

「いえね、あつしの親父は実は、山田一鉄^{やまだいつてつ}つていいやして、爺^やさんは山田鉄心^{てつしん}つていいやすんで」

「皆さん鉄の字が入るんですね」

それを聞いていた咲姫の顔が、ぱつ、と赤みを帯びた。

「でも鉄さん、弁慶は紀州の出身じゃあ・・・」と神田が言いかけると、

「とんでもねえ。まあ、そいつぁー、よく言われるこつてござんすがね、弁慶さんは、真正正銘、出雲のご出身でござんすよ」鉄は、両手を膝について、肩を張り上げて、言った。

「弁慶さんのお生まれになった場所もハッキリしてやすし、母上のお墓もござえやす」顔色もやや赤くなっている。

「もう、神田さん、すいませんね。弁慶さんの話になるとこの人ったら、いつもこうなんです」女将は苦笑いしながら言った。

「いやね、あつしの遠いご先祖さんは出雲の出身でしてね、出雲って言やー、はがね鋼、鉄でござんすからね。それで、山田家の男共の名前には、みーんな、鉄、の字が入っているでござんすよ」

「弁慶と鉄と関係があるんですか？」

「そいつぁー、おありでござんすよ、神田の旦那」鉄は体を前に倒し始めた。

キャシーは、笑みを浮かべて鉄の話を聞いている。

しかし、咲姫の顔は赤みを帯び、真剣な表情のままだ。

「弁慶さんのお袋さんは弁吉さんべんきちと言いやしてね、このお袋さんが紀州のご出身でござんすよ。で、弁慶さんを身ごもった時に、あんまりつわりがひどくてね、それで、鉄の^{くわ}鍬を食べて、十本目の^{くわ}鍬を半分食べたときに弁慶さんをお生みになられたんでござんすよ」鉄の目は真剣そのもので、神田も笑いをさしはさむ余地などなかった。

「鉄さん、その話は聞いたことがあるよ」と、神田が応えると、
「そうでござんすかい」と、鉄は喜びを顔に表し、
「おい、おとみ、さすがに、神田のだんなはご存知だぜ。こいつ
あー間違えねえーぜ」と大声を上げた。

「何しろ、弁慶さんは、お袋さんが身ごもってから十三ヶ月目の
仁平元年三月三日にお生まれになり、そのお姿は髪も長く、齒が二
重に生えて、すでに二、三歳児のようだったってんですから驚くじ
やありやせんか」と、腕組みをして、しきりにうなずいた。

鉄は、右手で左肩をさわり、

「さらに左肩には、摩利支天、右肩には、大天狗、の文字があつ
たんでござんすからねえ。立派なもんでござえやすよ」とますます
声が大きくなった。

「鉄さんは弁慶のことに詳しいんですね」神田は笑いながらも、
鉄の意外な面を見て驚いた。

「へへ、こりや、面目ねえ。あつしは、小せえ時分に、爺さんか
ら、弁慶さんについてちゃあ、さんざん聞かされていやしたからね。
それで、あつしも弁慶さんのように薙刀なぎなたを背負って歩きたかったん
でござんすよ」

それを聞いた女将が、

「ぷっ」と吹きだしたが、鉄はそれには構わずに、
「それが、へっ、どこでどう間違っあいくちちまったか、ヒ首あいくちを持って、
・へっ、こりや、面目ねえ」と、話を続け、右手を頭にやった。

神田は、鉄の話を聞いて、

「うーん、確かに、弁慶の周りには、鉄にまつわる言い伝えが多
いですね。さっきの、お袋さんが十丁のくわ鍬を食べて弁慶を生んだと

か、全身は鉄で覆われていたけど、のどぶえの四寸四方だけはむき出しだったとか」

「弁慶さんの泣き所ってやつでござんすね」

「今では、七つ道具って言えば選挙の七つ道具なんかによく使われる言葉だけど、もともとは、弁慶が背負っていた……」神田は弁慶の姿を頭に描きながら指を折って道具を数えた。

「薙刀や鉄熊手、鉞大槌、のこぎり、なんかを言ったんでしょ？ それらは全部、鉄を使って作られた道具ですからね。あと、さすまた、と……何だったかな……」と考えていた時、

「源平の合戦の後、弁慶さんが義経さんと一緒に、出雲へいらした時にやあ、大山寺の釣鐘を、昔、弁慶さんが修行をなすつた鰐淵寺まで担いで帰られたんですからね。立派なもんでござんしょ！？」と、鉄が自慢げに言った。

「エ、ええ、まあ。それに、出雲は砂鉄発祥の地ですし、鉄にまつわる話は古事記の昔からありますからね」確かに、鉄の話になると弁慶の周りにはたくさんある。

「へい。八岐大蛇のお話も、そうでござんしょ？」と、鉄は神田に聞いた。

キャシーが、

「オロチ、って何ですか？」と鉄の顔を見た。

「大きな蛇でござんすよ。ドラゴンって言うんですかい？ 英語では？」

女将が、テーブルを拭きながら、またもや「ぶつ」と吹いたが、鉄は、それには構わず、

「そいつは、こう、頭が八つ、尻尾も八本ござんしてね」と身振り手振りで話し始めた。

「目はホウズキのように赤く、体には苔や桧、杉なんぞが生えて

いやしてね、腹はただれていつも真っ赤な血が流れていやして・・・
「ここまで言うとな鉄は立ち上がり、

「その体は、八つの谷と八つの峰にまたがるほど大きかったと言われているんでござんすよ」と、両手をいっぱいに広げた。

その話を聞きながら、神田は先日さきの宮島の山津波を思い出した。

そして、昭和20年の枕崎台風まくしで発生した山津波は、先日、神田達たちが経験した山津波の数倍の規模であったことを思うと、まさに、大きな岩をゴロゴロと転がし、流れてくる途中でなぎ倒した大木を泥流でいりゅうに突き立て、大きく波打って谷を流れる様子は、八岐大蛇やまたのおろちが獲物を追いかけている様さまそのものであったことだろうと思った。

そして、その時発生した、山津波は、何百トンもの土砂で紅葉谷もみじだにを埋め尽し、その土砂の中から、鉄の棒が発見されたのだ。

「そのドラゴンの尻尾から鉄てつの剣けんが発見されたんでござんすよ」
鉄は、剣を抜くまねをした。

「とてもおもしろい御伽噺おとぎばなしですね」とキャシーが言うのを聞いて、鉄は、
「御伽噺おとぎばなしなんかじゃござんせんぜ。現に、その時の剣けんが三種の神器さんしゅのじんぎのうちのひとつの草薙くさなぎの剣けんとして名古屋なごやの熱田神宮ねつだじんぐうさんにお祀りまつりしてござえやすから」と、眉を寄せていった。

神田かみたは、「待てよ、ひょっとして、斐伊川ひいがわの氾濫はんらんか、山津波で、上流から鉄剣が流されて来て、その発見がこの古事記の話の元になっっているのかもしれないな」と思った。

現実に1984年（昭和59）には、谷間の急斜面から358本という大量の銅剣が発見され、日本中を驚かせたではないか。

神田はキャシーのほうを向いて、「その、八岐大蛇やまたのおろちの赤い腹は、砂鉄で赤く染まった川を表し、さらに、大蛇おろちの尻尾から鉄剣が発見されたという、このお話は、出雲の地方が古代から製鉄が盛んだったことを伝えていると言われているんですよ」と、鉄の話を捕捉するように言った。

「今でも安来市やすきしの日立金属は世界最高の鋼はがね、ヤスキハガネを製造していますからね」と、神田が言うと、キャシーは、「そうですね。以前、咲姫さきに日本刀を見せてもらったことがあります、とてもきれいでした。西洋の刀とはまるでちがいますね」「でしょ？中国山地の砂鉄を使ってタタラという日本独特の製鉄法で作られたものですからね」と言いながら、キャシーの日本に対する関心の高さを改めて感じた。

鉄は、

「あつしのヒ首あいくちも・・・」

「あんた!!」

「おっと、こりや、面目ねえ」と頭に手をやり頭を下げた。

「鉄を制するものは国を制するって言いますが、昔の出雲も力を持っていたでしょうね」キャシーは、神田の意見を求めるように顔を見て、

「日本だけでなく、世界の歴史を見てもそうですね」と、付け加えた。

神田は、

「そうですね。出雲の勢力圏は今の新潟や信州、紀伊半島、さらには北部九州にまで及んでいたと言う説もありますからね」と、言うて、

「女将さん、お茶を」と湯飲みを持つ格好をした。

「新潟には出雲崎いすもだきと言うところがありますし、鉄さんの田舎の信州は、さっきの国譲り神話の話に出てきたように、天照大御神あまてるおおみのかみから命令された建御雷之男神たけみかつちのおかみに力較べて負けた健御名方神たけみなかたのかみの亡命先になっっているし・・・」ここまで言うと、キャシーは、

「そうでした。それで、逃げて来たその出雲の神様を閉じ込めているのが諏訪大社でしたね」言った。

神田は

「キャシーさん、よく覚えていますね」と驚いた。

「頼朝の居た伊豆いずも出雲いずもと関係がありそうですね」と言い、鉄には聞こえないように、

「それに、一般には弁慶の出身は和歌山だと言われていますから」と、付け加えた。

鉄は、

「え？何ですかい？」と、耳を神田のほうに向けた。

「咲姫さき、どうかしましたか？」キャシーは、咲姫が先程から黙っているのが気になって尋ねた。

咲姫は、

「いえ、なんでもないのよ。ただ・・・」と、言葉を濁にごした。

「ただ・・・、何ですか？少しお酒飲み過ぎましたか？」キャシーはそう言っ、咲姫の前にある空になったグラスを見た。

咲姫は、

「キャシー、私は、キャシーも知っているようにウワバミなのよ」と言っ、笑った。

「ウワバミ？」キャシーは眉を寄せて、首をかしげた。

「ふふ、大酒飲み、お酒には強いってことよ。これくらいでは・・・」

神田も笑って、

「ははは、学生時代から八岐大蛇やまたのおろちなみだったからな、咲姫ちゃん
は」

「あら、そんな風に思っていたの？」と、咲姫は、怒ったふりをした。

「いや、いや」神田は目の前で手を振り、

「で、どうしたんだい？」神田も、咲姫が急に黙ったのが気になっ
っていたのだ。

「さっき、ご主人が、出雲の鉄から、そして、弁慶と鉄の関わり
についてお話されたでしょ」そう言っ
て主人の鉄の顔を見た。

「それで、頭の中が急に熱くなってきて、いろんな考えがクルク
ル廻ってね・・・」と、右手の人差し指をクルクル回した。

神田は咲姫が何を言い出すのだろうか
と怖くなった。

猿

女将^{おかみ}がお茶を運んできた。鉄が居る土間のテーブルの上に盆を置き、湯飲みを一つずつ座敷のテーブルに置いた。

「神田君は、弁慶、と聞いて、何を思い浮かべる？」と、再び、咲姫の謎かけが始まった。

「そうだなー。まず、体が大きいことかなあ」と腕組みをした。咲姫はさらに、

「顔つきとか、たとえば、色のイメージでいうと何色？」とたずねた。

「顔は、色黒で、髭^{ひげ}が濃くて、どちらかと言うと日本人離れた彫りの深い顔かな。色のイメージだと、やはり黒、だろうな。衣^{ころも}の黒のイメージがあるしね」と腕組みをほだいてお茶を一口飲んだ。

「そうね。源平盛衰記^{げんぺいせいすいき}にも、弁慶の姿は黒の鎧^{よろい}に黒の冑^{かぶと}、黒漆の刀に黒羽の矢を背負っていたというふうに書かれているのよ」と、お茶の入った湯飲みを両手で包んだ。

「へー、そうなんだ」神田は、湯のみに手を副えたまま咲姫^{さき}の話に聞き入った。

「私は、弁慶とカラスのイメージが重なってしまふのよ。どう？」

「んーん」神田は、湯飲みから手を離し、腕組みをして、

「確かに、そうだな」と言った。

「常に義経の先鋒として道案内、ナビゲーターの役割を担っているのは、神武天皇^{じんむてんのう}の東征の時の八咫鳥^{やたがらす}と同じじゃない？」咲姫はさらに説明を加えた。

「なるほど。八咫鳥^{やたがらす}の八咫^{やた}って大きいって言う意味だから、弁慶とピッタリ重なるな」そう言って、神田は突然、あの大男が富士山

の山頂から飛び立った姿を思い出し、愕然がくぜんとした。

「まさか・・・そんなことは・・・」

宮島の弥山みせんからも同じようにして飛び立ったあの大男が、八咫鳥やたがらすのイメージと、そして、弁慶のイメージと重なったのだ。

キャシーは座敷を下りて、カウンターへ行き、鉄となにやら楽しげに話している。

「どうしたの？」咲姫は神田のやや血の気の失せた顔を覗き込んでニコツと笑った。

「当ててみましょうか。神田君は今、富士山頂から、中国人に追われて飛び立ったあの大男のことを思い出しているんでしょ」ズバリであった。

考えてみると、今回の件は、あの謎の大男の出現から始まったのだ。全身を黒く塗ったあの大男は、八咫鳥やたがらすを表わそうとしていたのだろうか？まさかそんなことはないだろう。単なる偶然の一致だろう。

しかし、厳島神社の神殿を造営する場所も、鳥からすの導みちびきによって今の場所に決められたという言い伝えは何を伝えようとしているのだろうか。今に残るお鳥喰式おとくいじきの行事は俺たちに何を伝えようとしているのか？

厳島神社の神使しんしが鳥からすであるのには深い理由があるのではないだろうか。

おとくいじき からす
お烏喰式の烏は紀州の熊野へ帰って行くという言い伝えは、弁慶と宮島の関わりを暗に示しているとも考えられるではないか。

「それに、弁慶にはもうひとつ、天狗のイメージもつきまといっているのよね」咲姫はさらに話を続けた。

確かに、弁慶の大柄な体に纏まとった修験道の衣装や、日本人離れした顔は、鼻の高い天狗のイメージがある。

神田は小学生のころには廿日市はつかいちの秋祭りを楽しみにしていた。祭りになると、同級生と連れ立って廿日市の商店街に出かけたものだ。その祭りの神輿みこしの先頭には必ず天狗の面をかぶった若者が歩いていった。そして、その天狗は、時折走り回って、周囲の見物客を金剛棒で蹴散らしていたのを覚えている。子供達は、その天狗をからかうのを楽しみにしていたものだ。

義経の案内役として先導者の役割を担になっていた弁慶はまさに天狗の役割を演じていたことになる。

宮島には、その天狗てんぐにまつわる言い伝えが多く残っている。神田は何年か前、「宮島町史」に載せるために、宮島の伝説の調査をしたことがある。50人を越える島の古老達から昔の行事や、わらべ歌とともに、言い伝えられてきた伝説の聞き取り調査をした。

そして、天狗にまつわる多くの言い伝えがあることに驚いた。雪の日には、厳島神社の本殿の屋根には天狗の足跡が現れるとか、天狗は、年末になると、弥山みせんの頂上に松明たいまつを点し、頂上からカーン、カーン、と、拍子木ひょうしきを打つというのだ。

古老達は、幼い頃には、実際に何度もその音を聞いたことがあるという。また、ある古老は、天狗が打ち鳴らす太鼓に誘われて山に入り込んだ人を助けたことがある、と、自慢げに語ってくれた。

今年（平成17年）の5月5日に消失した霊火堂の裏の岩に、天狗の顔が影になって現れているのはよく知られている。

咲姫は、神田かみたの考えていることを見通したかのように、

「キャシーと一緒に弥山みせんに登ったときに、三鬼堂の中にお邪魔したけど、お堂には天狗のお面がたくさん飾ってあるでしょ。あれって、宮島の象徴じゃないの？」と言った。

「なぜ？」神田は、咲姫に自分の考えていることを覗かれているような気がした。

「だって、さっきの弁慶と鳥からすの話。そして、神田君も思ったでしょ？その、神田君が見たっていう大男のこと」と、強い口調で言い、さらに、

「キャシーとJRで宮島口に着いて、棧橋に向かって歩いて、最初に気がついたのは棧橋前にある像よ」と言った。

「像？ああ、あの棧橋前に建てられている、舞楽ぶがくを舞っている形の像のこと？」神田は、宮島口のロータリーにある像を思い浮かべた。

「ええ、あの面はまるで天狗の顔じゃないの」

「確かに、舞楽の面は昔の日本人が出会ったシルクロードの西の人間の顔を模したものだろうね」神田も常々そう思っていた。

「そして、大聖院の参道入り口で参拝者を迎えるように立っているあの像」

「え？」

宮島の大聖院の入り口では烏天狗からすてんぐの石像が参拝者を迎えている。
「大聖院の入り口に立つ烏天狗からすてんぐの像と宮島の入り口に立つ舞楽の像。同じじゃない？」咲姫は言った。

弁慶からす、烏、天狗これらのイメージが見事にひとつに収束していた。

「神田君、もうひとつあるのよ」と咲姫さきはいたずらっぽく言った。
「天狗はね、猿田彦さるたひこだってことよ」咲姫がそう言うと、神田も大きくうなづいて、

「そうだね。俺もそれは感じていたよ。猿田彦は天照大御神あまてるおおみのかみが孫の邇邇芸命ににぎのみことを日本へ派遣した時に邇邇芸命ににぎのみことの案内役を務めた神様だろ」

「身長すこぶる高く、顔赤くして鼻高く、目は大きく、その輝くさまは鬼灯ほおずきの如くであった、というんだからね」と昔読んだ古事記の一節を思い出し、言った。そう言いながら、富士山本宮浅間神社ふじさんほんぐうせんげんじんじゃの神使は猿しんしだったことを思い出し、これらは本当に偶然として片付けていいものだろうかと思い始めていた。

「その功績さるたひこのみこともあつて、道祖神みちのそとじんとして交通安全の神様として今でも猿田彦命を祀まつっている神社はたくさんあるからね」神田はそう言って、「あっ」と小さな声を上げた。

「どうしたの？」咲姫は、おどろいて神田を見た。

「いや、少し前に宮島の神社の由来や祭神をまとめるために島内の神社を調べただけ」と、神田は5年前のことを思い出した。

「あら、そうなの」咲姫は湯飲みを両手で包んだまま顔を上げた。

「でね、天照大御神あまてるおおみのかみの子供や、宗像三女神むなかたさんじょしんの市杵嶋姫いちきしまひめや、田心姫たこりひめ、
湍津姫たぎつひめがお祀りしてある神社が多いのは分かるんだけど、猿田彦命さるたひこのみこと
が祀られている神社がやたら多いのには驚いたんだよ」
咲姫はじつと神田の話を聞いている。

「それにね、宮島七浦の神社に祀られている神はどの神も予言や
道案内に関する神だったんだ」

咲姫は、

「ああ、それはそうでしょうね。鳥かとりずが厳島神社の創建場所を捜す
ために皆の先頭で案内をしたわけでしょうからね」と、当然のよう
な顔をして言った。

「綿津見三神わたつみさんしんや住吉三神すみよしさんしんの神様でしょ？」

「よく分かるね」と、言いながらも、咲姫さきがこうしたことに詳し
いにはもう驚かなくなっていた。

「どの神様も航海の安全や無事を祈るための神様、つまり海の水
先案内人、パイロット、でしょ。猿田彦命さるたひこのみことと同一の神と考えてもい
いんじゃないの」と言い、

「塩土老翁しおつちのろうおきながお祀りされている神社もあるのじゃない？」と、神
田に聞いた。

神田は、咲姫の知識の豊富さに呆れながら、

「確かに、塩土老翁しおつちのろうおきなも包みが浦神社にお祀りされているよ」と言
った。

「でしょうね。塩土老翁しおつちのろうおきなは、シオツチ、つまり塩の道ちを知ってい
る神様ということだし、船の先頭を飛ぶかもめ鷗かもめでもあるのよ」

「その鷗の白と、塩の色、海、というイメージから塩土老翁しおつちのろうおきなが生
まれたのだと思うわ」と言って、

「つまり、白い鳥なら鷺さぎでもいいのよ」と付け加えた。

「知ってる？熱田神宮の神使は鷲ささぎだつてこと？」と、神田の反応を見るように小首をかしげて神田の顔を見た。

「えっ！？」神田はやはり驚かざるを得なかった。

「鳥からすだという説もあるけど、どちらにしても同じ事ね。御鳥喰おつくいじき式の行事も行われているようだし、鳥と関係があるのは間違いないわ」と神田を見つめた。

「どう？厳島神社の神使しんしが鳥からす、富士山本宮浅間神社の神使が猿。熱田神宮の神使しんしが鷲ささぎ。どの神使も、道を案内する先導者だつてことに気がついた？」と、咲姫はゆっくりと、しかし、はつきりとした口調で言った。

「これは・・・、やはり偶然とは思えないな」神田はその咲姫の問いかけには直接答えず、自分自身に言い聞かせるかのようにつぶやき、

「毛利元就もうりもととなりの祖先、大江広元おおえのひろもとつて男は相当な知患者だね」と咲姫の同意を求めた。

しかし、咲姫は、
「広元だけの策じゃないかもしれないわよ。それに、これだけの仕掛けを実行するには闇の勢力も絡んでいるかも」と、含みを持たせた言い方で返した。

「闇の勢力？」神田は聞き返した。

「そう、修験者しゆげんじやもそうだけど、忍者集団の風魔ふうまとか、非人の頭領の弾左衛門だんざえもんとかね。どっちも北条氏と関わりが深いものね」とニコツと笑って付け加えた。

「おい、おい、そこまで行くと話しがややこしくなるよ」神田は苦笑いをしながらて口元をゆがめた。

「そうね。まずは猿田彦命さるたひこのみことね」と、咲姫さきも肩をすくめた。

神田は、

「猿田彦命さるたひこのみことほどのその容貌について詳しく書かれている神様も少ないよね」と言い、頭の中でいろいろな神様についての記述を思い出した。

そして、

「たぶん、最初の印象が強烈だったんだろうな」と言うと、

「朝鮮半島から渡ってきた弥生人やよいじんがそれまで会ったことのない、つまり、彼らとは違う容姿だったんでしょね」と、咲姫はうなずいた。

神田は、その咲姫の言葉に、

「でもそのこと自体は、邇邇芸命ににぎのみことが、つまり、朝鮮半島から今の天皇の祖先が渡ってきた時には、彼らとはかけ離れた容貌をしている人間が、既に日本に居たってことになるよね」と言つと、

咲姫は、すぐに、

「そう、弁慶の祖先がね」と応えた。

「弁慶の祖先？」

「これからが大事なところよ。神田君」

毘沙門天

「咲姫ちゃん、この話、どう繋が^{つな}っていくんだ？もう、これ以上の詮^{せん}索は高見刑事に任せたほうが良くはないか？」神田は目に見えない何かに絡^{から}みつかれていた様な気がしてきた。

咲姫は、両手で包んでいた湯飲みを口元にもって行き一呼吸おいて、一口飲んだ。そして、

「私も少し怖くなってきたわ。でも、もう、だめね」と、きつぱりと言つて、唇を横一文字に結んだ。

「だめ？どうして？」

「山口さんよ」

「山口さん？どういうことだい」日本拳法部の山口さんが何の關係があるというのだろう。一体、咲姫は、何を言い出すんだろうと思つた。

「山口さんが私たちを呼んでいるのかもしれないわ」と、目を細めて、小さくつぶやくように言つた。

「何を言っているんだい、咲姫ちゃん。山口さんが俺たちをどこへ呼んでるっていうんだい？」神田は困惑した。

「ネパールよ」そう言つて、キャシーをチラッと見、そして、神田のほうを向いた。

「私たちは、ネパールへ行かなきゃ行けないのよ」咲姫が、言葉に力を込めたのが分かつた。

咲姫は、カウンターで鉄と話し込んでいるキャシーのほうを見て、
「キャシーは来週には医療ボランティアの一員としてネパールに
向かう予定になってるの」と、やや小さめの声で言った。

神田もカウンターで話し込んでいるキャシーのほうを見た。

「ああ、そう言ってたね」

「キャシーは、まだ山口さんの身に何が起こったのか言ってくれ
ていないわ。けど、10年前に何かが山口さんの身に起こったのよ。
そして今も山口さんの亡骸はネパールの地にあるのよ」咲姫は声を
落として言った。

「待ってくれよ、咲姫ちゃん。その・・・今まで話していた弁
慶や義経、毛利元就の三本の矢の教え、それに八岐大蛇の話・・・」
神田はここまで言って、大きく息を吸い込み、

「それに、もともとの三本の鉄の棒の窃盗事件がどうして山口さ
んやネパールと関係があるんだい？」と、言うところ、

「それと、さっき言いかけた弁慶の祖先って、咲姫ちゃんは何を
見つけたんだい？」神田は不安に駆られながらも、これまでのモヤ
モヤとした霧を晴らしたいという好奇心と苛立ちでだんだんと、咲
姫を問い詰める口調になるのが自分でも分かった。

咲姫は、神田の問いかけに静かに答えた。

「それは私の頭の中で整理して、追々説明できると思っけど・・・」

「

神田は、咲姫の頭の中で、何かと何かを繋げようとしているの
を感じた。いや、もう繋ぎ終わっているのかもしれない。

「今回の件はね、神田君。私のお仕えしている八頭神社様が私に

与えられた使命だと思ふのよ。私の運命だとつくづく感じるのよ」

咲姫は、ジツと正面の壁を見つめた。そして、神田のほうを向いて、
「八頭神社様は、八つの頭って書くでしょ？私は昔から思っていたの。どうして八頭神社はつとうじんじやって名前なのか。ひょっとして八岐大蛇やまたのおろちと関係があるのじゃないかと、ずーっと思っていたの」咲姫はこういうと、思い切ったように、

「八頭神社はつとうじんじやではなく、八頭蛇はつとうじやじゃないかってね」

神田は、咲姫さきのやや青白くなった顔を静かに見つめた。

咲姫は腕時計に目をやり、

「あら、大変、もうこんな時間。すっかり話し込んで、この続きはまたね」

「また、って、いつだい？」神田の口調は自然に不服げになった。

「連絡するわ。ちよつと熱田神宮の鉄の棒の件を調べて、その報告もしなきゃいけないでしょ？」と、にこり、と白い歯を見せて言った。

「え！？やってくれるかい？助かるよ。咲姫ちゃんが調べてくれるなら万々歳ばんばんさいだよ」

「あら、神田君はさっき、もう手をひいたほうがいい、とか言わなかった？」

「しかし、まあ、ここまできたら・・・」神田は苦笑いをした。

長く深い夜であつた。廿日市駅前の精進料理屋「おとみ」で、主人の山田鉄男の祖先が出雲いずもの出身だと分かつてから三本の矢にまつわる秘密が歴史の闇の中から浮かび上がってきた。

いや、歴史の闇の中からその秘密をすくい上げたのは、八頭神社はつとうじんじやの女性宮司の木野花咲姫であつた。このはなさくひめ

咲姫さきは、鉄の棒の封印は、源頼朝と、その懐刀であつた大江広元みなもとよりともが日本を支配するための策略であることを見抜いた。ふところがたな

そのことが、後の毛利元就の三本の矢の教えの元になっていることまでもが明らかになった。

さらに、咲姫は、宮島の赤、富士山の白から秘密の糸を手繰り寄せ、ついに、三本目の鉄の棒は名古屋の熱田神宮に隠されているところまで解明してみせた。たく

しかも、咲姫は、その鉄の棒には、出雲にまつわる様々な歴史が関係していることまで証明してみせたではないか。

そして、今は、咲姫さきによると、咲姫が宮司をしている八頭神社と八岐大蛇やまたのおろち、弁慶と天狗からす、鳥、猿の関係、これらの間には何らかの関係があると言っているのだ。

居酒屋「おとみ」で咲姫とキャシーに会った翌朝も、神田かみたは、宮島の東の尾根、博打尾ばくちおの尾根筋を弥山に向かって登った。

早朝の太陽はまだ低く、海面に反射して、江田島に濃い陰影を与えている。

ここを登るたびに、あの大男のことを思い出す。猛烈な風と雨の中であの男に対峙した時、神田は何十年ぶりかで闘争心が蘇よみがえった。しかし、一方では、神田にはあの時、あの男に勝つ自信はなかった。それを見透かしたかのようにあの男は唇の端を上げて嗤わらった。

それが神田には許せなかった。その男がでなく、自分自身が許せなかった。

出来ることなら、もう一度あの男に会って闘ってみたい。神田の中にメラメラと武道家の炎が燃え上がってきた。その日のために、あれ以来、こうして博打尾尾根ばくちおびを登っているのだ。

獅子岩から弥山けいだいに向かうならかな登山道を走った。若い僧が、弥山本堂の境内を掃き清めていた。

神田は本堂の中に何気なく目をやり、そして、

「あつ」と小さく声を上げ、すーっ、と、汗がひくのを感じた。

「どうかされましたか？」境内を清めていた若い僧が不思議そうな顔をして神田を見た。

「いや、なんでもありません」そう言いながら、昨日の昼、「清盛うどん」で咲姫さきと交わした会話を思い出した。

「宮島は学問上、貴重な島だと思うよ。ペトログラフの古代信仰からヒンズー教、山岳信仰、仏教、神道。神社の配置からも明らかに北斗信仰ほくとしんこう、妙見信仰みょうけんしんこうも取り入れられていることが分かるしね。弥山みせん頂上と厳島神社の大鳥居をつなぐ線は南北方向なんだよ」という神田の意見に咲姫は、「弥山本堂には毘沙門天びしゃもんてんが祀まつられていたわね」と応こたえた。

それに対して、「ああ、毘沙門天は北の守り神だからね」と、その時は、簡単に応じたのだ。

しかし、今、神田は、弥山の本堂に毘沙門天が祀られているのはさらに深い意味があることに気が付いた。

神田は、弥山頂上から吹き降ろす朝の冷たい風に、体をすくい上げられた感覚に捉われた。

自宅に帰って、シャワーを浴びながら、神田は、宮島の長い歴史に思いを巡らせた。

そして、改めて、ここ宮島は、天孫降臨以前から人々の崇拜と畏敬の念を集めた聖なる島であることを実感した。

神田は思った。

須弥山に喩えられ、ヒマラヤの北方を守護する毘沙門天が宮島に祀られているのはどういう意味があるのだろうか？

咲姫は「私たちはネパールへ行かなければならない」と言った。

そのネパールこそは、天空に聳えるヒマラヤ山脈を擁する王国ではないか。そのヒマラヤの北を守護する毘沙門天は、何から守護しようとしているのか。ヒマラヤの北といえばチベットを自治区としている中国だ。中国？・・・あの謎の中国人たちは何のために鉄の棒を手に入れようとしているのか？

神田は、迷い込んではいけない深い闇の中に入り込んで行く気がしてきた。

怨霊

神田は、頭から熱いシャワーを浴びながら、足元の排水口へ流れ去る湯の流れを見つめていた。その先の暗い闇の中に体ごと吸い込まれるような錯覚にとらわれ背中が冷たくなるのを感じた。

シャワーを浴び終えて、宮島観光推進協会の事務所へ行く途中、高見刑事から電話があった。

「おはようございます。高見さん、早いですね」

「ええ、木野花このはなさんたちは今は広島このはなの平和資料館だと思いますよ・・・はい、祈念館きねんかんは木野花さんも見学したことがないって言っていましたから、そちらも見学して、午後から静岡に帰る予定みたいです」

「はい？お昼前ですか？いますよ。ちょうど良かった。私も高見さんに報告しなきゃいけないことがあるんですよ・・・それは・・・ちよつとややこしい話なので、こちらでゆつくりと・・・で、何か？・・・はい。じゃあ、お待ちしています」

高見刑事の声は何だか沈んでいた。どうしたんだろう？

11時を過ぎた頃、高見刑事が事務所に姿を現した。

白髪頭に手をやりながら、

「いや、いや、参りましたよ」そう言って、ソファアのいつもの場所に腰掛けた。

「なんですか？」神田は事務椅子に腰掛けたままクルツと向きを変えた。

高見刑事は

「いやあ、警察庁から今回の件は手を出すなって、お達しですよ」

と、頭を2、3度掻いた。

「へー、いったいどうして？」

「さあ。もつともこの一件は例の中国大使館が口を出してからは私たちの手からは離れているんですがね」高見刑事はそう言いながら上着のボタンを外した。

「まあ、そうですが、警察庁から、再度言ってきたことは何かありますね、これは」神田は回転椅子を、ギイ、ギイと左右に回しながら言った。

「だから、神田さん。神田さんも、もうこの件からは手を引いてください。お願いしますね」高見刑事は背を起こし、神田の顔を覗き込むように言った。

神田はニコリと笑って、

「分かっていますよ。私も別に犯人探しをしているわけじゃありませんからね」と、椅子を揺らしながら言った。そして、
「ただ、三本目の鉄の棒の隠し場所が分かったんですけど、どうしましょう？」と、高見刑事の反応を窺うように言った。

高見刑事は、

「え？分かった？」そう言っ、目を見開いた。

「どこですか、それは？」高見刑事は身を乗り出した。

「熱田神宮あつたじんぐうに隠されている可能性が非常に高いんです」神田も体を前へ倒し、両肘りょうひじを両膝りょうひざの上に乗せて前かがみになった。

高見刑事は、背広のポケットから手帳とボールペンを取り出し、

「熱田神宮あつたじんぐうって、あの名古屋の？」と確認した。

「ええ、どうやら、鉄の棒そのものの意味は、源頼朝の日本支配を確立するためだったようなんです」ここまで言っ、

「高見さん、もうメモの必要はないでしょう」と言っ、

「いやいや、これは習慣でしてね」と、ボールペンの芯を、カチ

ッ、と引つ込め、苦笑いを浮かべた。

高見刑事は、

「なんだかよく分かりませんが・・・」と怪訝けげんそうな表情を浮かべ、

「で、どうして三本目の鉄の棒が熱田神宮にあると?」

「頼朝は、日本を支配するためには、山、海、そして里、これらを支配下に治めることが必要になると考えたわけです」神田は咲姫さきの推理であることをこわつてから説明を始めた。

「なるほど」

「で、富士山と宮島に鉄の棒を封印し、もう一か所、最も頼朝に関わりのあるのが熱田神宮なんです。なにしろ、頼朝の母親は熱田神宮の神官の娘ですから」

「へー」

「それに、日本三大宮司は富士山本宮浅間大社ふじさんほんぐせんげんたいしゃの宮司と厳島神社の宮司、そして熱田神宮の宮司なんですよ」

「へー」

「そして、日本の支配者の証である三種の神器さんしゆのじんぎの・・・」ここまで言つと、高見は顔を上げ、

「銅鏡どうきやう・・・勾玉まがたま・・・草薙の剣くさなぎのつるぎですね」とゆっくりと言つた。

「そう。良くご存知ですね」

「これくらいはね」高見は右手のボールペンで白髪頭を掻いた。

「鏡は海の支配、勾玉まがたまは山の支配、そして草薙の剣くさなぎは里の支配を象徴するものだ、と言うのが木野花このはなさんの推理です」

「そして、草薙の剣は現在、熱田神宮の祭神になっているんです」

「うーん。なるほどねえ」

「さらに、この三つの神社の神使は・・・」

高見はその言葉を継いで、

「たしか宮島の神使は鳥からすでしたね」と言うと、神田は、

「そうです。そして、富士山本宮浅間大社の神使は猿、熱田神宮

の神使は鷲さき。これらは皆、水先案内人の役目を果たす動物なんですよ」と言いながら、改めて咲姫の推理に感心した。

「こいつは驚いたな」高見刑事は腕組みをして目を閉じた。

「高見さん、驚くのはまだ早いですよ」神田はにこりと笑った。

「え？まだ何かあるんですか？」高見刑事は腕組みをほどいて神田を見た。

「三本の鉄の棒の中には矢尻が封印されていたでしょ？」

「ええ」

「あれは、毛利元就の三本の矢の教えの元になった矢なんですよ」

「まさか」高見は、信じられないと言う表情を浮かべ、小さな声でつぶやいた。

おおえのひろもと

「源頼朝の腹心に大江広元と言う人物がいて、この人がそもそもこの三本の矢を鉄の棒に封じ込めて宮島、富士山、熱田神宮まつに祀ることを進言した張本人なんです」神田は回転椅子の背もたれに背中を預けた。

「へー、それが三本の矢の教えと何か関わりが？」高見刑事は、さらに不思議そうな顔をした。

「彼は毛利元就の祖先になる人物です。そのことが形を変え毛利家代々へ伝わったものだと思います」

「へー」高見刑事は語尾を長く伸ばし、

「しかし、一体何のためにそんなことを？その矢についていうのに何か因縁いんねんでも？」と、尋ねた。

「その矢は、弁慶の体を射た矢なんです」神田は、高見刑事の反

応を楽しむかのようにニコリと笑いながら言った。

「あの弁慶の立ち往生の・・・時の？」

「そうです。義経の首と、弁慶の命を奪った矢の2点セットを頼朝に見せる予定だったのですが、義経の首は腐敗が激しくて、頼朝が首実検をする前に処分されてしまつて・・・」神田はそう言いながら立ち上がり、

「コーヒー？」と聞いた。高見刑事は軽く頭を下げ、

「あーあ、それは聞いたことがありますよ」と応えた。

「それで、まだ義経が生きているんじゃないかと不安におののき政に専念できない頼朝を見て心配した大江広元が、義経に常に付き添い、分身ともいえる弁慶の命を奪った矢を封じ込めることによって義経と弁慶の怨霊を閉じ込めようとした、というのが、あの三本の鉄の棒に込められた秘密ではないかと・・・」サーバーのところ
で振り返つて高見刑事を見た。

「うーん・・・」高見刑事は目を閉じて両手を頭の後で組んだ。

神田は、

「で、その弁慶は義経のいわば水先案内人だった訳でしょ？」と
念を押し、さらに続けた。

「つまり、弁慶は、天孫降臨の時の猿田彦命と同じ役目を果たしているんですよ」こう言つて、サーバーからポットを引き出してコーヒーをカップに注いだ。

「ここ宮島には猿田彦命をお祀りしている神社が多くて、さらに、水先案内人の役目を担った神様を祀った神社も多いんです」こう言
いながら、カップを高見刑事の前のテーブルに置いた。

「今朝、弥山の本堂で気がついたんですが、像はないものの、弥
山の本堂に祀られている毘沙門天こそは猿田彦命じゃないかってね」

「毘沙門天が猿田彦と同一だってことですか？」と、高見刑事はいくぶん声を低め、確認するように言った。

神田は自信を込めた声で、

「そうです。もともと毘沙門天は北からの侵入者を防ぐという役割があるんですが、そこから北斗七星や北極星との関わりも深いんです」

「ほう」

「北斗七星や北極星を大事にしている人達の代表的な職業の人は誰かという・・・」

「船乗りかな」高見刑事は神田の言葉を遮さへぎって言った。

「そうです。大海原おおうなばらで唯一目標となるのは北斗七星や北極星なわけ、水先案内人にとっての神様は毘沙門天じゃないかと思いついたんです」

「なるほどねえ」

神田は、コーヒーを一口飲み、

「上杉謙信は自分を毘沙門天の生まれ変わりだと言っていたらしいけど、まさかそこまでは思わなかったでしょうね」と、言い、さらに、

「イラクに派遣されている自衛隊の装甲車の車体に毘沙門天の、毘いの字が書いてあるのは北を守る北海道の部隊だとか、謙信のよいうに戦の神様だからという理由でしょうけど、その毘沙門天が深いところで、アイヌ民族のような先住日本人の代表である猿田彦に繋がっている、というのは北海道の部隊の装甲車だけに面白いですね」と続けた。

「つまり、ここ宮島は、猿田彦だらけってことになるわけか」高見刑事は、ボールペンで白髪頭を、ポリポリと掻いた。

「そういうことになりますね」

神田かみたは、今こうして高見刑事に話しながら、先人の深い情念にあ

る種の感動を覚えた。

「ま、宮島つていえば鹿と猿だからね」と高見刑事は冗談めかし
て言つて、思い出したように、

「だけど、宮島の猿は小豆島しよとうしまから連れてきたつて聞きましたけど
？」と、付け加えた。

「そうです。よくご存知ですね。明治の頃は野生の猿がいたらし
いですけど、それは楊枝屋ようじやさんのペットだったようです。でも、も
つと昔には野生の猿がいてもおかしくはないでしょうけど」神田は、
以前、宮島町史を編集する時に調べたことを思い出した。

「それに、日本には猿信仰というのがありましてね、猿は神様だ
として信仰されて・・・」とここまで言つて神田は、

「そうかー」と、あることを思い出して、椅子の背もたれに体を
預けた。

「どうしました？」高見刑事はびっくりして神田の顔を見た。

「猿が水先案内人ぎしわじんたつてことは、魏志倭人伝にも書いてあつた
ことを思い出したんです」と、神田は目を見開き、声高に言つた

「魏志倭人伝に？」高見刑事は、また、難しい話になってきたな
という表情を浮かべた。

「ええ。中国に船で行く時に縁起をかついで、髪はボサボサ、体
は垢あかだらけ、肉も食べない、そんな人間をひとりだけ連れて行つた
ようなんです」

「へー、何のために？」

「海が荒れないようにということ、その男を祀まつつたようです。
持衰じさいというんですがね」

「へー。そりゃ、まるで猿だな」

「でしょ！私も、その表現から猿を想像しましたよ」

「猿は海の神様でもあつたんじゃないかなあ」と神田は腕組みを

した。この考えを咲姫さきならどう思うだろうか、と、ふと思った。

高見刑事は、

「そうすると、確かに話がスムーズに繋がりますね」と、今まで
の話を頭の中で思い浮かべ、

「宮島には猿が居て、猿田彦が居て、天狗が居て、鳥が居て、それらは全てが水先案内人だということになる」と、自分自身に言い聞かせるようにつぶやいた。

「それらは、弁慶に繋がってくる。つまり、宮島には弥生人以前の先住日本人の痕跡が色濃く残っているわけですよ」神田も、咲姫さきの考えが正しいことを改めて感じた。

「うーん」と高見刑事は、唸りうな、

「で、それと、例の鉄の棒はどういう関係が？」と、神田に尋ねた。

「弁慶は、その先住民族の末裔まつえいだったんでしょう。その弁慶が無念のうちにこの世を去ったわけですから、頼朝が恐れていた弁慶の魂を封じ込めるには、弁慶の先祖が祀まつられている宮島が相応ふさわしい、と大江広元は考えたんですよ」神田は、咲姫さきが言った、出雲大社や宇佐神宮の四拍手（しくはしゅ、よはくしゅ）の件を思い出した。

「木野花このはなさんの考えだと、お墓や、神社は、亡くなった人に、あなたは亡くなったんですよ、だからもうこの世に出ないでくださいね、とその魂を閉じ込めるという意味がある、ということですよ」そう言っ、コーヒークップに口をつけた。

「なるほど。それには同感しますね。確かに、崇り^{たた}なんていうのは、だいたいのところ、お墓参りをしたり、神社にお参りすると解決しますからね」高見刑事は意外に真面目な表情でそう応えた。

「へー、高見さんから、崇り、なんていう言葉が出てくるとは思いませんでしたよ」

神田がそう言うと、高見刑事はいくぶん照れながら、

「いや、いや、私はこう見えても、結構信心深いんですよ。ははは」と笑った。

「ところで、その後、中国大使館の動きはどうなんですか？何か情報は？」神田は声を低めて聞いた。

「いや、例の、ここにも来た、例の三人組は富士山頂から下りてすぐに中国へ帰ったようですが、そこまでは警察庁から聞きました、その後の動きは何も聞いていません」高見刑事はそう言うとおいしそうにコーヒーを一口飲んだ。

神田は、

「と言うことは、連中、三本目の鉄の棒はあきらめたのか、それとも必要ないのか」と言うと、ふと思いついたように、

「あるいは、三本目は、もう日本にはなく、そのことを知っているので、さつさと引き上げたのか」と、ひよつとすると、そうなのかもしれないな、という気がした。

「しかし、木野花さんの推理では、三本目の鉄の棒は熱田神宮にあるんでしょ？・・・」と、高見刑事は言うと、

「おーっと、だめですよ、神田さん。さつきも言ったばかりですよ。この一件にはもう手を出さないで下さいよ」と、手帳を背広のうちポケットに納めながら、左手の人差し指を神田に向けた。

神田は苦笑いしながら、

「わかっています。ただ、この件には、なんだか、個人的にも関わりが出てきたようなので」と、天井を見上げた。

「個人的な関わり？何ですか、それは？」眉を寄せて高見刑事は聞いた。

「いや、まだはつきりとは分らないんですが、このはな木野花さんが言うには、この鉄の棒の一件と、私の学生時代の先輩が何らかの形で関わっているんじゃないかと言うんですよ」そう言いながら頭の後ろで両手を組んだ。

「まさか、そんなことは・・・」ないでしょう、という言葉を、高見刑事は、飲み込んだ。

「とは思いますがね。なにしろ、彼女の言うことは・・・」と神田が言い終わらないうちに、高見刑事は、

「結構当たってますからね」そう言うと、真剣な顔になった。

そして、2005年も終わりがけた頃、咲姫から驚くべき報告がもたらされた

八頭社

12月に入って、年末、年始の行事の打ち合わせの会議などで忙しく過ごしていたある日、咲姫さきからメールが届いた。

宮島観光推進協会 神田様

木野花咲姫です。

ご無沙汰をしています。今年もあとわずかとなりましたが、お元氣ですか？

神田君も観光地の観光協会に勤務しておられると、これからが忙しい時期になると思いますが、お体ご自愛下さい。

私も、八頭神社はつとうじんじやの宮司として、これからは忙しい時期に入ります。

ところで、熱田神宮に「鉄の棒」の三本目が隠されているのではないかという、私たちの推理を確認するために、私のルートたぐを手繰って調べました。

「鉄の棒」の存在は、ごく限られた人達しか知らず、その存在の確認に時間がかかってしまいました。結論から言うと、「あつた」という過去形でご報告しなければなりません。

その存在は国家機密で、草薙くさなぎの剣と同等の取り扱いを受け、禁足きんそく地に祀まつられていたようです。

でも、明治に入って、ある国と友好条約を締結するにあたって、その鉄の棒は国外へ持ち出されたようです。時の内閣総理大臣の山やまがたありとも

縣有朋の奏上そうじょうによつて、明治天皇様も、この持ち出しをお許しになられたということです。

「今はもうない、ということは、三本あつた鉄の棒は、全てなくなつてしまったということになるのか」

「ある国とはどこなんだ？」

明治20年（1887年）に、小松宮彰仁親王様こまつのみやあきひとしんのうがその国を訪問され、大変な厚遇こうぐをお受けになられ、明治天皇様は、それに対し、礼状、漆器しじき、勲章を贈呈されました。

これに対して、その国も明治天皇様に親書と勲章を贈呈されるために日本に使節団を派遣し、明治天皇様に謁見を求められました。最終的には条約の締結には時間の猶予が必要だったのですが、この時の両国の相互訪問が、お互いの信賴關係の樹立に大きく役立ったようです。

その、信賴關係の樹立を確固たるものにしたのが、「鉄の棒」だったのです。

「その国」とは当時のオスマン・トルコ、今のトルコ共和国です。

「トルコ？」

どうして、トルコが、という神田君の顔が思い浮かびます。

「ふふ、図星だな」神田は苦笑いした。

その理由を説明する前に、私がご奉仕させて頂いている八頭神社はつとうじんじや様についてお話しておきます。

「八頭神社はつとうじんじやが何の関係があるんだろう」と神田は思った。

しかし、この数分後には、神田は、八頭神社はつとうじんじやこそは鉄の棒とトルコを結びつける重要な神社であることを知り、そして、今までの、全ての謎を解く手掛かりは、この八頭神社はつとうじんじやにあることに歴史の因縁を感じ、体が震えることになる。

この前、廿日市駅前の「おとみ」でいろいろと推理をした中で、このことを言いかけたままになっていました。確信が持てなかったのです。でも、今は、確信を持つてお話できます。

私は、八頭神社はつとうじんじやの起源は、その字から、八つの頭、つまり、八岐やまた大蛇のおろちにあるのではないかと考えていました。つまり、「八頭蛇はつとうじんじや」ではないかと。

神田は、高見刑事と八頭神社を捜している時、地元の人には「はつとうしゃさん」と呼んでいたことを思い出した。

実は、逆だったのです。

まず最初に「はつとうしゃ」があつて、それが「八頭蛇はつとうじんじや」になり、やがて「八岐大蛇やまたのおろち」伝説が生まれたのです。

「はつとうしゃ」と「八岐大蛇やまたのおろち」の間に共通するものに気が付いた時、私は、真空の暗闇に吸い込まれていくような、そんな感覚に捉とらわれました。

八頭神社を親しみを込めて「はつとうしゃ」と呼んだのではなく、

最初から「はつとうしゃ」だったのです。

神田は、

「どういう意味だろう」と思った。

熱田神宮に祀^{まつ}られていた鉄の棒が、明治になって、オスマン・トルコに贈られることになった経緯^{いきさつ}には数千年の歴史の因縁があったのです。

私は、トルコと聞いて、喉につかえていたものがスツキリと取れました。

「はつとうしゃ」は「ハットウシャ」だったのです。「ハットウシャ」は古代ヒットイト帝国の首都の名前です。

ご存知でしょうか？ヒットイト帝国は人類で最初に鉄を作り出した国です。

「鉄！！」

現代の日本人の祖先がこの日本列島にやって来る以前に、縄文人と言われる集団を筆頭に、何度かに分けて民族の集団がやってきましたが、それらの中に、製鉄技術を持った民族の一団がいました。私は、その集団こそは、何千年もかけてこの日本にやって来たヒットイト人の末裔^{まつえい}だと思います。こんなことを言うと、神田君は、御伽噺^{おとぎばなし}のように思いかもしれませんね。

でも、その証拠は中国にも朝鮮半島にも、そしてこの日本にもあるのです。詳しいことは、今度お会いした時にお話しますが、今日は簡単にそのことをお話します。

日本の歴史を陰で支えてきた渡来人の一団に秦氏^{はた}がいます。今では、秦^{はた}、羽田^{はた}、畑^{はた}、波田^{はた}、八田^{はつた}、服部^{はつとり}などという名前に変わってい

ますが、この人達のご先祖様は秦氏はたの末裔まつえいだといえます。

元首相はたつとむの羽田孜ひたちきさんや、筆策ひつさくの奏者そうしやの東儀秀樹とうぎひできさんも秦氏の子孫はうとりはんそふです。服部半蔵はうとりはんぞう率いる伊賀の忍者集団もそうです。

羽田さんは、日本徐福会にほんじよふかいの名誉会長でもあります。ご存知かどうか、私の住んでいる地域は、昔、徐福さんが数千人を引き連れて中国からやってきて居を構えた所でもあるんですよ。

神田は、富士山本宮浅間大社ふじさんほんぐうせんげんたいしやの宮司が言っていた富士文献のことを思い出した。

徐福さんのことは、中国の『史記』にも書かれています。1982年、中国の江蘇省連雲港市じやうそしやうれんゆんこうしで徐福村が発見され、徐福が実在の人物として学術研究会で発表されるようになりました。徐福村には祠ほも再建され、その内部には東方を向いた、りりしい徐福の座像がまつられているそうです。

私は、秦氏一族と徐福さん一族は同じ一族だと考えています。その違いは、日本へ渡ってきた経路によるものではないかと思っています。秦氏一族は朝鮮半島経由で、徐福さん一族は船で中国から直接この日本へ渡ってきたのだらうと思います。

秦氏と徐福さんが連れてきた集団は、先端技術を持ったハイテク集団でした。

その先端技術の中のひとつが、製鉄技術や、製糸技術です。機織はたおりのハタから秦氏はたと呼ばれるようになったとも言われるくらいです。

ちなみに、富士山頂の富士山本宮浅間大社奥宮の御祭神の木花之佐久夜毘売命このはな のさくやひめのみことは火の神、水の神であると共に、機織はたおりの神でもあります。

ここで疑問が残ります。秦しんと書いて何故秦はたと読ませるのか。

ところで、神田君にはご親戚はたくさんいらっしゃいますか？

神田は、

「また、何を言い出すんだろう」と思った。

叔父さんや、叔母さんから電話がかかってきて、その電話を取り次ぐのに、「神田から電話」とは言わないでしょう。それだと、どの叔父さんか、どの叔母さんか分からないですからね。

おそらく、その叔父さんが住んでいらっしゃる地名を言うのじゃないかしら。例えば「神戸から電話」と言えば、それだけでどの叔父かわかるでしょう。それは昔からそうです。

ここに、秦しんを秦はたと読ませる秘密が隠されているのです。

神田君はご存知だと思いますが、中国の歴史書の中で日本について書かれたものが、魏志倭人伝ぎしわじんでんと呼ばれている書物で、それと同じように、古代朝鮮について書かれたものが、魏志韓伝ぎしかんでんです。

その韓伝の中に、朝鮮の古老の話として、秦国しんこくから多くの秦人しんじんが戦乱を逃れて朝鮮半島に流れ込んで来た、ということが書かれています。

やがて彼らは、朝鮮半島に国を作りますが、彼らの一部はそのまま朝鮮半島に残り、そして、一部は玄界灘を渡って、この日本にやって来ました。

もともと彼らを秦人しんじんと呼んでいたのは漢民族です。秦人しんじんと呼ばれていた彼らは、自らを秦人しんじんとは呼んでいませんでした。

では、何と読んでいたのでしょうか？

彼らは、自らを「ハタ」と呼んでいました。自らの出自に誇りを持って、遠い先祖の出身の地の名前を彼ら自身の呼び名としていた

のです。

もう、お分かりでしょう。3000年近く前に衰亡し始めた古代のヒッタイト帝国の首都ハットウシャが彼らの出身地です。

彼らは、何千年もの間にわたって移動を続け、ある時は何百年もある地域に留まり、そしてまた移動し、最終的には、この日本にやってきたのです。

話が混乱するのは、中国人、つまり、漢人は、朝鮮半島へ逃げ込んだ人達は、自分たちと同じ秦^{しん}国の人間ではないと知っていた事。それにもかかわらず、朝鮮半島では、秦国から逃れてきた秦^{しん}人だと認識され、そのルーツまでは認識されていなかったこと。

そして、逃げ込んだ人達自身は、自らの出自は秦^{しん}ではなくハットウシャ、ハタだと分かっていたこと。

これらのことが、今現在も様々な混乱を招いているのだと思います。

そして、朝鮮半島から、最先端の技術を携えてこの日本に渡ってきた彼らは、中国から直接海を渡ってやって来た徐福さんの一団と自らを判別し、独自性を保つために秦^{しん}と書いて秦^{はた}と呼ぶようになったのだらうと思います。

中国でローマ帝国を表す文字は「大秦」です。つまり、中国では異民族のことを秦人と呼んでいたのです。当時、中国人つまり漢人は、中国以外の地域、長城の外からやって来た人達のことを秦^{しんじん}人と呼んでいたのです。

漢字のないハットウシャから何千年もかけて移動してきたヒッタイトの人達は、自らを漢字文明圏に入ってきた時、秦^{しん}と呼ばれているのを知り、その漢字に彼らの呼び名、ハットウシャをあて、それはやがて、ハットウ、ハット、ハタ、と変遷したのです。

彼らは、この日本にやって来る途中、ある地域に何百年もとどまり、その地に都市や国を築きました。

彼らの移動してきた経路にはそうした痕跡が地名に色濃く残っています。朝鮮半島の慶尚北道にはかつて波旦はたんと呼ばれた地域がありました。今の蔚珍郡うるちんぐんです。

さらに遼さかのほると、現在の中国、新疆ウイグル自治区にはホータンという地域があります。

ごめんなさい。話がどんどん逸それていっているようです。

先ほども言ったように、オスマン・トルコは親書と勲章を明治天皇様にお贈くりするために日本に使節団を派遣したのですが、使節団にはもうひとつ、大きな使命があったのです。

当時、鉄の棒の存在場所は熱田神宮のものしか確認されていませんでした。後の二本の鉄の棒の封印場所の特定は出来ていなかったのです。

大きな使命とは、その存在の分かっている鉄の棒を入手することだったのです。

すでに、内々にはその鉄の棒はオスマン・トルコに贈呈されることになっていましたので、親書と勲章の贈呈は、そのお礼と考えてもいいと思います。

それは、もうじき来る、オスマン・トルコ建国600年を盛大に迎えるために、また、民族の更なる統一と諸外国との友好を図るために最も必要なものでした。

なぜなら、オスマン・トルコの偉大なる最後の末裔まつえい、弁慶の命が

封印されている鉄の矢だからです。

「弁慶がヒツタイト人の末裔だつてことか!？」

先日もお話したように、弁慶の祖先は、今の日本人の原型である弥生人^{やよいじん}がやって来る前に、既に日本で鉄を製造する技術を持つ一団として生活圏を築いていたのです。

彼らは後に「正史」の中では、猿田彦命^{さるたひこのみこと}と呼ばれ、やがて、毘沙門天^{びしゃもんてん}としても祀^{まつ}られるようになり、伝説の中では、烏や天狗^{からす}として今に伝えられているのです。

「咲姫ちゃんは、やはり毘沙門天^{びしゃもんてん}のことに気がついていたのか」

神田は、今、宮島に烏や天狗にまつわる話が多く伝えられ、そして毘沙門天が弥山頂上に祀られている理由が分かった。

トルコは、ヒツタイト時代から格闘技の盛んなところですよ。そして、格闘技に強い男こそが尊敬され、男として認められるといつても過言ではないでしょう。現代でもトルコで伝統的なスポーツといえば、体中にオリブオイルを塗って闘うオイルレスリングですよ。

「オイルレスリング!」

神田はその文字を見て、瞬間的に、あの嵐の日の大男の体の、又ルツ、とした感触を思い出した。

「あの大男はトルコ人だったのか!」神田は思わず口に出した。

神田は、去年のアテネオリンピックを前に、浜口京子や吉田沙保里の女子選手が来日中のオイルレスリングの競技を観戦した、とい

う新聞記事を読んだことを思い出した。

「しかし、あんな窃盗を働く必要は全くないじゃないか。中国人のように、それこそ外交ルートを通じて話を持ってくれば済むことだし、日本政府としても、おそらく、鉄の棒にさしたる重要性は感じていないだろう。ひよつとすると、残り二本の存在さえ知らないかもしれない。なのに、何故……」

神田は、モニターの画面をスクロールさせて、咲姫さきの文章を追った。

どうして忍び込んでまでしてその鉄の棒を手に入れようとしたのか。それは、日本とは外交ルートのない組織だからです。

「すると、奴は、あの大男はトルコ人ではないということか！ いったいどこの？」

1889年（明治22年）7月、使節団を乗せた軍艦エルトゥール号はイスタンブールを出航しました。乗組員は600名を越えていました。

スエズ、ボンベイ、シンガポール、香港を経由して、およそ11ヶ月の大航海でした。木造の古い軍艦のため、途中トラブルもあつたようです。そのため日数がかかってしまったのです。

このことは、やがてエルトゥール号に襲いかかる悲劇を暗示していたのかもしれませんが。

神田は、

「ああ、あのエルトゥール号か」と今、分かった。

無事に任務を果たした使節団は、台風時期に無理を押しして帰路に着き、途中和歌山県串本沖で岩礁に衝突、特使を含む518名が死亡という大惨事となりました。

しかし、その時の地元民の救護活動で69名は死を免れ、手厚い看護の後、明治天皇様の命でトルコに送られたのです。

皮肉なことに、この惨事が、その後の日本とトルコの友好関係をますます固いものにしましたのです。

神田^{かみた}は、1985年の湾岸戦争のとき、イランのテヘラン空港で、国外脱出のために救援機を待つ日本人215名を迎えに来たのは、日本の飛行機ではなく、2機のトルコ航空の飛行機だったと言う話を聞いたことがある。それは、エルトゥールル号の事故に際しての日本人の献身的な救助活動への「恩返し」として当然のことだと、トルコ大使が語っていたのを思い出した。そして、トルコでは、小学生でもこの悲劇的な事故のことは知っていると聞いたことがある。

咲姫のメールはさらに続いた。

しかしこの時、大きな問題が起きました。明治天皇様が、前言^{ひるがえ}を翻され、鉄の棒は日本に留め置きたいと仰^{おお}せになられたのです。

「この日本の安泰が何百年もの間保たれてきたのは、鉄の棒を封印していたからこそである。鉄の棒は再び熱田神宮^{まつ}にお祀りせよ」と、勅命が下されたのです。

「この嵐は、天照大御神様の御心^{みこころ}の表れである」と。

しかし、オスマン・トルコの皇帝アブドウルハミド2世は、再び親書を天皇様にお贈りになり、何度かの交渉の結果、妥協案が生み出されたのです。ここに至までには、皇室の儀式、しきたりの一切

を取り仕切る、八咫鳥（やたがらす、やたのからす）と呼ばれる一族のとりなしがあったのですが、今日は、これには触れません。

「妥協案？」神田は、さらに先に目を移した。

その妥協案とは、ヒツタイト民族と日本民族の分水嶺ぶんすいれいでもあり、また、日本民族、日本文化の源流と言われる、ヒマラヤを中心にした地にその鉄の棒をお祀りすることだったのです。

「ヒマラヤ！」

そして、エルトゥールル号の悲劇を免れた乗組員をオスマントルコへ送り届けるために、当時の日本の主力軍艦の「比叡」ひえいと「金剛」こんこうを派遣することが閣議決定されました。

その戦艦「比叡」に、総理大臣、山縣有朋の密命により、ひとりの人物が乗船しました。彼は、イスタンブールへ向かう途中、インドのボンベイで下船し、ヒマラヤを目指したのです。オスマントルコから派遣され、辛くも悲劇から免れた軍人の一人も一緒でした。

彼らの任務とは、ヒマラヤ山地奥深くの寺院に「鉄の棒」まつをお祀りすることにあつたのです。

まず、彼らが目指したのは、ネパール王国のパタンです。パタンは、今でも、金属製品製造の盛んな街です。

「パタン！ネパールにもパタンが・・・」

パタン

2005年（平成17年）12月 ネパール王国・パタン

パタンの中心部から少し外れた路地裏には、昼を少しまわった頃だというのに、喧騒けんそうも聞こえてこない。

時折り、子供達が走り回り、「キヤー、キヤー」という声が聞こえてくるくらいだ。

よく踏み固められた道は、リキシャ1台がようやく通れる幅しかない。その道の両側は、3階建ての、今にも崩れそうな赤レンガ造りの建物が長い壁のように並び、青い空がカーペットのように見える。

そのレンガ壁には、青いペンキが塗られた分厚い木の扉が一定間隔で並んでいる。

両手に黒いビニール袋を提げた、ひとりの男が、その中のひとつの扉を、器用に肩と足を使って、ゴトゴトツ、と開け、さりげなくあたりを見回して中に入り、再び、ゴトン、と扉を閉めた。

狭く、急な木の階段を、ギシギシと鳴らし、4度ほど折り返して3階の部屋の前まで来ると、ビニール袋を持ったままの右手で、木の扉を暗号のようなりズムでノックした。

しばらくして、中から、ガチャ、と、鍵を開ける音がして、扉が外向きに開いた。

中から肩幅の広い男が白熱灯の逆光の中から顔を出した。

両手にビニール袋を持った男は、

「ナマステェー！多良さん」と、薄暗い階段の踊り場で、白い歯を浮かべた。

多良月男は、部屋から顔だけ覗かせ、

「おお、ジテン、久しぶりじゃのお。元気かあ？」小さな声でそう言つと、男の肩に右手を回して、部屋の中へ招き入れた。

「ナマステ、多良さん」ジテンと呼ばれた男は部屋に入ると、ビニール袋を床に下ろし、顔の前で合掌をした。

多良も、改めて、

「ナマステ」と合掌をし、すぐに男の手を両手で握った。ふたりの男達は、握り合つた拳を何度か揺すつた。

「大丈夫じゃったか？」多良は、窓のほうへ歩み、窓枠の錆びた釘に引つ掛けられたカーテンを少し開いて外を覗いた。

「大丈夫だよ。途中、見かけないチベツタンが付いて来たから、ゴールデンテンプルの中を抜けてきたよ」ジテンと呼ばれた男も、多良の側に行き、薄汚れたガラス越しに通りを見下ろした。

「そうか」

「あいつら、チャイニーズか、メイビ、マオイストかもしれないね」

「私、ゴム草履だから、テンプルの中、スツ、と、抜けたよ。あいつら、革靴履いてたからね。入り口で靴を脱ぐように言われて、脱いでいる間に裏口から出て、巻いて来たよ」

ふたりは、そう会話しながら、窓から離れ、部屋の反対側にある、テーブルの横に置いてある座面のビニールが破れたパイプ椅子に座った。

「そうか。しかし、警察の密偵かもしれんのお……」多良は眉間に皺を寄せた。

「多良さん、それ……」ジテンは、言いにくそうにそう言うとき、多良の頭を指差したまま、口を開けっ放しにして言葉を止めた。

「ん？何？」多良は、怪訝な表情を浮かべてジテンの顔を見た。

「多良さん、それ……」ジテンは再び多良の頭を指差した右手をさらに突き出した。

「ああ、これが」多良はそう言うとき自分の頭に手をやって、

「これはな。朝、目を覚ましたら、毛が生えてたんだ」そう言うとき、両手で髪の毛をかき混ぜた。

ジテンは、ポカン、と口をあけたまま固まった。

「ははは。冗談、冗談」多良はそう言うとき、

「ほら」と言って、髪の毛を剥がした。

その途端、ジテンは、

「オー、ノー！！」と、目を剥いて、のけぞった。

「ははは、そんなに、ビックリするなよ！髪じゃ、髪じゃ」多良は愉快そうに笑った。

「オー、多良さん、ビックリしました。一体、どうしたのですか？」ジテンはそう言うとき恐る恐る多良の持っている髪に手を伸ばした。

「はは、これから寒くなるからな。それに、これは変装じゃあ」そう言うとき、薄くなった頭を、クルクルツ、と手で撫でた。

そして、

「ほら、ここに付け髭もあるぞ」そう言うとき、木の机の引出しを、カタカタツ、と鳴らして長い口ひげを出した。

「ビックリしました。でも、それ、いい考えだね。チャイニーズの目をくらすには」ジテンはそう言うとき、多良から受け取った髪

と付け髭をしげしげと眺めた。

「で、手筈は？」多良は、真面目な顔になって、体を前に倒し、ジテンの顔を覗き込んだ。

ジテンは、笑顔で、

「OKだよ、多良さん。10日後には迎えの車が来ることになってるよ」と言った。

「そうか。ありがとう。いつも世話をかけるな」多良は、ホッ、とした表情を浮かべた。

ジテンは両手を前に出し左右に何度も振って、

「何を言いますか。私のほうこそ感謝します。ダンニヤバード」と、両手を顔の前で合わせ、頭を下げた。

「多良さんがいなかったら、私は今でもハツパを観光客に売りつける商売してるよ。こうして、子供達を救う仕事を手伝うことが出来て、私、幸せね」と、手を合わせたまま言った。

「こっちこそ、ありがとう。しかし、最近、マオイストの行動は過激になってるからな。国軍との衝突もしょっちゅう起こるし、俺たちの仕事にも支障が出てきたな」多良は再び、暗い影を額に浮かべ、鬘を手に取った。

ジテンは、瞼を半ば閉じ、

「そうですね。いつになったらネパールは日本のように平和な国になるのでしょうか？多良さん」と言う口を一文字に結んだ。

「そりゃあ、俺にも分からんよ。国王は、ネパール共産党毛沢東主義派が続いている武装闘争が治安の乱れの原因だというし、毛沢東派は毛沢東派で、国王の独裁体制が原因だ、と、言うとするしな」多良はそう言いながら鬘を頭にかぶり、鏡を見ながら右に、左に動かして調整した。

「困るのはいつも貧乏人ね。だから、私は、多良さんに私たちの

仲間になつてもらいたいのです」ジテンは、多良が鏡の前に立っているのを後ろから眺めながら言った。

「またその話かい？だめだよ。俺は、そんな新しい国とかいうユートピアは信用せんもんじゃ」多良は鏡の中に映ったジテンを見て言った。

「多良さん。頑固ね。ハハハ」汚れた鏡の中でジテンの白い歯が見えた。

多良は振り返ると、

「ジテン。お前、気をつけろよ。お前は国王からも、マオイストからも狙われているんだからな」と、声をひそめて言った。

「大丈夫だよ。多良さん。多良さんこそ、チャイニーズには気をつけてくださいよ」

ジテンのその言葉を聞くと、多良は思いついたように、

「そうだ、お前、その髪の毛を刈って、キキヤ・と同じように坊主にしたらどうじゃ！」と言った。

「ノー！！」ジテンは即座に否定した。

「ところで、そのキキヤは？」多良は、本気になって嫌がるジテンに笑いながら尋ねた。

「はい。何とか無事に手に入れたようです。そろそろ帰ってくると思いますが、まだ連絡はありません」ジテンはそう言いながら、ビニール袋から新聞紙の包みを大事そうに取り出した。

「そうか。それは良かった」多良はその包みを両手で受け取った。温かさが、湿った新聞紙を通じて伝わってきた。

多良は新聞紙の包みをゆっくりと開いた。

ジテンは、

「あの寺院にお供えしてある物と同じものが日本にあるらしいとは聞いていたよ。でも多良さんが偶然、あの、ミヤ、ミヤ・・・」

と言うと、多良は、

「宮島。ああ、これはうまそうなモモだな」と、目を新聞紙の上のモモに注いだ。

新聞紙の包みの中には、まだ湯気の立っているチベット餃子のモモが20個くらい山になっていた。

「そう、その宮島で、多良さんが偶然見なかったら、三本が揃うことは、今後、何千年もなかったと思うよ」

多良はひとつつまむと口に放り込み、窓のほうへ歩み、木枠の窓を、ガタツ、と少し開け、「ピュイツ！」と短く口笛を鳴らした。

通りの向こうの廃屋から10歳くらいの少年が顔を出した。多良は、少年に向かって2本の指を立てると、少年は、頷いて再び廃屋の暗闇の中に入っていった。

「そうだな。日本に帰って、たまたま足慣らしに弥山に登ったついでに宝物館を見学して、そこで同じものを見た時は驚いたよ」

多良はギシギシと床を鳴らしながら蟹股で戻ってきてパイプ椅子に再び座り、またひとつモモを口に放り込んだ。

「モグモグ、しかし、あんなに強引にしないで……モグモグ」
多良は新聞紙の端で指先を拭った。

ジテンも口を動かしながら、

「だめだよ。まさか、ニマがチャイナのスパイだとは思わなかったからね」と強い口調で言い、さらに、

「そのことを聞いてから姿を消したんだから、チャイナもあれを手に入れるために動き始めるのは分かっていたから。チャイナには政治力があるけど、私たちにはそんな力はないからね」と、早口で言った。

「今回の仕事ができるのは、多良さんから日本語を教わって、日本語が使えて、しかも腕が立つキキヤーしかいなかったからね」ジ

テンは指を口に持っていていき、指にくっついたモモの皮を下の歯でがし、指をなめた。

「確かに、あいつは、こっちへ来て育った村で伝統武道も身につけ、それに、あの体、まるでガルーダだからな」多良は厳いかつい肩をさらに広げ、自分の胸を張った。

「ははは、ガルーダね。そう、力もあるし、走るのも速いし、まさに、ガルーダだね」ジテンは、多良の格好を見て愉快そうに笑った。

「だろ？日本で言えば、さしずめ、天狗、ってところだ」

「キキヤーも多良さんに背負われてヒマラヤを越えた子の1人だよね」ジテンは、またひとつモモをつまんで多良を見た。

「そうだなー。もう20年以上、いや、30年近く前になるのお」多良は、ちよつと、遠くを見るように目を細めた。

「あの時も大きい子じやったが、あんなに大きな男になるとはな」と、いかにも感慨深そうにつぶやいた。

そして、

「しかし、俺は、キキヤーがお前たちの仕事を手伝うのは、あんまり感心せんもんじゃ」と、ジテンの目を見た。

「どうしてですか？」ジテンは、多良の咎とがめるような目を見つめ返した。

「せつかく助かった命を何でまた危険にさらすのか」多良はやや口を尖とがらせて言った。

ジテンは、

「多良さん。多良さんは何故平和な日本から来てわざわざあんな仕事を？」と、柔らかい光を湛たたええた目で多良を見つめて言った。

「わからん。わからんが、植村さんのサポート隊の一員としてここに来た時に見た光景が忘れられなくてな」多良は、モモをつまんだまま窓のほうを向き、

「俺たちは、ごつい登山靴、暖かいダウンジャケット、酸素ボンベ、暖かい食べ物をわんさと持つてるのに、国境を越えてきた子供達は破れた靴を履き、一枚の毛布を纏まとい、そして、髪の毛は凍っていた」と、まぶたを閉じた。

「その時の多良さんと今のキキヤーは同じ気持ちだよ」ジテンは優しく言った。

「ふふん、ふーん」という鼻歌が階段のほうから聞こえてきた。そして、「トン、トン、トン」とノックの音がした。

多良はギシギシと床を鳴らしながら、ドアのところへ行き、鉄の門かんぬきを、カッチャツ、と、音を鳴らしてはずし、ドアを開けた。

ネパールミルクティーがなみなみと注がれたガラスコップを2個のせたコップホルダーを持った少年が、開かれたドアを避けて立っていた。

鼻歌は、少年が、「ティーを持ってきたよ」という合図なのだ。

少年は、「ふふん、ふーん」と鼻歌を歌いながらテーブルの上にガラスコップを置こうとしたが、手を止めた。

多良は、

「おっと、ごめん」と言いながら。引き出しから2枚のコースターを取り出し、テーブルの上に置いた。

少年は無表情のままコースターの上に、ゆっくりとコップを置いた。多良は10ルピーコインを3枚渡すと、少年は再び鼻歌を歌いながら、足音を立てずに帰って行った。裸足であった。

ジテンは、右手の親指と人差し指で、チア（ネパールミルクティー）がなみなみと注がれたガラスコップの縁ふちをつまみ、口元に持つてゆくと、「フー」と、一息かけて、「チュツ」と一口飲み、突然、

「んー！」と言うと、

「オー、大切な物を忘れるところでした」とチヤのコップをコースターの上に置いた。

「なんだ？大切なこと、ゆうのは？」多良もガラスコップをつまみ上げて、「チュッ」と一口だけ啜り込み、テーブルの上に、コンツ、とコップを置いた。

それを見たジテンは、多良のコップをコースターの上に移した。テーブルの上にはコップの底の丸い焦げ跡がところどころに残っている。

「ああ、ごめん」多良はそう言うと、両手で鬘かつらの両端を持ってグツ、と左右に動かした。

「で、なんだい？その大切な物ゆうのは？」多良は再び聞いた。

「これです。これです」ジテンはそう言うと、テーブルの上の二つのコップを脇に寄せ、持って来たもうひとつの黒いビニール袋をテーブルの上に置いた。

そして、

「多良さんに頼みがあるんですよ」と、ビニール袋の固く括くられた結び目を解いた。

ジテンは、ビニール袋の中から新聞紙の包みを取り出し、テーブルの上に置き、包みを広げた。

新聞に包まれていたものは、ビニールの小袋に入った木の根っこや乾燥した葉であった。

「薬草か？」

「そうです。特に、この根っこは滅多に手に入れることが出来ないですよ」と、赤茶けた木の根の入ったビニール袋を多良に手渡した。

「へー、どこで手に入れたんじゃ？」多良はジテンから受け取り、ビニール袋の中の根っこをしげしげと見た。

それは、素人目にもかなりの年月を生き抜いてきた木の根であることが分かった。

ジテンは、多良からその袋を受け取りながら、

「それは、多良さんにも言えないですよ。ファミリーの財産ですからね」と言うと、再び、大事そうに新聞紙に包んだ。

「ははは、まあ、いいさ。で、これをどうしたらいいんだ？」そう言いながら、ビニール袋に小分けされた他の葉や木のチップを興味深げにひとつずつ手にとって眺めた。

「多良^{たら}さんは、明日タメールに行くんですね？」ジテンは、確認するように身を乗り出した。

「ああ、頼んでいた登山靴の修理がそろそろ出来上がっている頃だからな」多良はそう言うと、

「それに、久し振りに風呂にも入りたいし」と、首筋を手で撫^なでた。

ジテンは、笑いながら、

「蕎麦^{そば}もね」と言った。

「そうだ。よく分かるのお。ははは」多良はチャのコップを手にとつて、

「で、それをどうしたら？」と、テーブルの上のビニール袋を見た。

「これを、ホテル・スオニガに泊まっている人に渡してもらいたいんですよ」

「いいよ。誰に？」そう言うと、チャ（ネパールティー）のコップを口元に持っていた。

「アメリカ人の・・・」

それを聞いて、

「アメリカ人？俺は英語は苦手だなあ」と、コップを口から離し

た。

「大丈夫ですよ。日本語ペラペラですから」

ジテンは笑いながら言った。

「ペラペラ？」多良は不思議そうな顔をしてジテンを見た。

ジテンは、

「そうです。アメリカ人と日本人、半分、半分、ハーフですね」と、楽しそうに言った。

「へー、なんでまた、そんな野郎に？」そう言いながら、チアをグビツ、と一口飲んだ。

ジテンは、笑顔で、

「野郎じゃないです。女の人ですよ」と、多良の様子を窺^{うかが}うように言った。

「女？名前は？」多良はそっけなく聞いた。

ジテンは少し拍子抜けしたように、

「キャシー・ハセガワといいます」と言うと、モモをひとつ摘んで口に放り込んだ。

多良もモモをひとつ摘むと、

「誰なんだ、そのキャシー長谷川いうのは？」と、聞いた。

「ドクターです」

「ドクター？」多良は顔を少し傾けた。

「そうです。10年前にも私の村に半年滞在して、私の村の人はもちろん、私の村から、近くの村へ出かけて病人や、けが人の治療をしてくれたことがあります。たくさんの方の村人の命を救ってくれた人です」ジテンの言葉には力が込められている。

「へー、それで、彼女はこの薬草をどうしよう？」と言うと、テーブルの上に置かれた黒いビニール袋の中を覗き込んだ。

ジテンは、真剣な顔をして、

「村人にも手に入れられる植物や木を使って治療する方法を広め

ているのですよ」と言った。

「なるほど。薬品を手に入れるのは難しいからなあ」多良は、2、3度うなづきながら、壁に背中をすがらせた。

そして、壁から背を離すと、

「よし、まかせておけ。彼女にわたしてやるから」と、ビニール袋を手前に引き寄せ、袋の口を結び始めた。

ジテンは、喜びを顔に浮かべ、多良の手から袋を取り、自ら、袋の口を固く結び、

「ありがとうございます。私は今夜にはここを出発しないと明日になるとバンダで動きが取れなくなりますからね」と言うと、左腕を動かし、ジャンパーの袖口をずらして時計を見た。

「ああ、また、外出禁止令が出るらしいな」多良は、うんざりだ、と言う顔をして窓のほうを向いた。

クーデター

2001年6月1日、ネパールの首都カトマンズの中心にある王宮でロシア革命以来とも言われる大惨事が起きた。

当日は、月に1度の、王族が集まるパーティーの日であった。この日集まった王族のうち、当時の国王を含む王妃、皇女などの王族一門が全員射殺され死亡した。

惨劇から数日後、犯人は、こともあろうに、国王の息子である皇太子である、と発表された。

泥酔した皇太子が銃を乱射、父親の国王や母親の王妃、妹の王女ら9人を殺戮^{さつりく}し、その後、自らも命を絶った、という発表であった。今の国王はその場にいず、また、その場に同席していた、今の王妃、皇太子は無事であった。すなわち、当時の国王一家全員が死亡し、現国王一家は無傷で生き残ったのだ。

ここから、いろいろな憶測が飛び交った。

ネパールの情勢は、さらに混乱の度合いを深め始めた。ネパール共産党から分裂していた、武装闘争を掲げる毛沢東派は地方で武装蜂起し、ことあるごとにバンダと呼ばれる「活動禁止令」を発令し、国民に労働放棄を呼びかけ、逆^{さか}らう者の射殺さえ躊躇^{いと}わず、営業する店舗には火を放ち、客を乗せたタクシーには爆弾を仕掛けた。

国軍、警察の手の届かない地方は、毛沢東主義者、マオイストの勢力下に治められ、再教育と称して、学校、村単位で100人規模の誘拐、監禁事件が各地で頻発していた。

マオイスト達は、市民の中に入り込み民衆の動静を監視し、一般民衆達は疑心暗鬼に陥^{おちい}っていた。

2005年2月、現国王は、その混乱を鎮^{しず}めるために強権を発動し、国王によるクーデターともいえる、国家非常事態宣言を発令した。

これにより、政党活動は禁止され、空港の一時閉鎖、電話、通信の禁止、民権の制限、等が実施された。

しかし、このことがさらに学生を中心とした民衆の、反国王運動の頻発を招き、マオイストの活動に免罪符を与えた格好になった。

混乱に乗じた強盗事件や、マオイストの名を騙^{かた}る恐喝事件も頻発し、国内の状況はさらに混迷を深めつつあった。

翌朝、多良^{たら}はパタンの宿泊先からカトマンズの中心部に向かって出発した。普段は、テンプーと呼ばれる乗り合いの小型オート三輪で移動するのだが、この日は、マオイストの活動禁止令が発令されているため、移動の手段は徒歩しかない。

いつもなら、早朝からタクシーやバス、テンプー、オートバイ、自転車で大混乱している道路も今朝は数えるほどの歩行者しか歩いていない。

その誰からも話し声は聞こえず、皆、肩をすばめるようにして歩いている。

時たま、今が稼ぎ時とばかりに走っているタクシーも、身元が分からないようにナンバープレートを外している。

もつとも、マオイストからの報復のとはっちりを恐れて、そんなタクシーに乗り込む客もない。

パタンから、カトマンズの中心部、タメル地域までは、多良の足で1時間少しかかる。

カトマンズ市街は、王宮を中心に、環状に走っている道路に囲まれている。その道路はリングロードと呼ばれ、何事かがあると、「リングロード外への移動禁止」、「リングロード内の活動禁止」などというように、地理上の目安として使われている。

多良が、そのリングロードへ近づくにつれ、ゴムの焼ける臭いが強くなってきた。

多良は、

「こりゃあ、いつもより規模が大きいな・・・」と、感じ始めた。

やがて、黒煙が立ち上っているのが見え始めた。この辺りまで来ると、歩いている人の数が増えだした。その多くは若い男達だ。彼らがマオイストなのか、マオイストの支援者なのか、あるいは、時間をもてあまし、何かが起きるのを待っている男達なのかは分からない。

「どうやら、活動禁止令とストの同時開催のようだな」多良は、いつもと違う雰囲気を感じた。

道路の真ん中に置かれた古タイヤがブチブチと燃え上がり、黒煙はもうもつと天に上っている。4〜500mくらい離れた場所からも、さらにその4〜500m先でも黒煙が上っているのが見える。

多良の後から、ギッシ、ギッシと古くなったスプリングをきしませる音と共に、古タイヤを満載した大型トラックがやって来た。古タイヤの上には若い男達が10人くらい座り込んでいる。その後からは何百人もの集団が、赤い旗をなびかせながら徒歩でやってくるのが見える。

トラックは、砂埃を巻き上げながら、道路の端に避けた多良の側をゆつくりと通り過ぎると、燃え上がる古タイヤの横で、ギーツ、と大きな音を出して止まった。燃え盛る古タイヤの周りを囲んでいた男達は一斉に歓声を上げた。

リングロードの内側から、重厚なエンジン音が響いてきた。男達は一斉に音のする方向を見た。

迷彩色の制服に身を固めた警官達を満載したトラックが、停止している信号機の角から姿を現した。引き続いて1台、さらに1台と、溝の深いタイヤを履いたカーキ色のトラックが合計5台、1列縦隊でやってきた。

古タイヤを囲んでいる男達の顔に緊張が走った。単なる好奇心でその場にいた男達は後退りあとすざを始めた。

「まずい。衝突が起きる」多良は足を速めた。

多良が、リングロードを横断しようとする、その様子を遠くから見ていた三人の男達が大声で何やら叫び、駆け寄ってきた。

近づいてくる男達は、痩せぎすではあるが、骨太で精悍な顔つきをしている。見るからにマオイストの顔だ。

多良は立ち止まると、ニコリと笑い、

「ジャパニ、ジャパニ」と言いながら、ポケットから日本語の名刺を出して男達に見せた。日本に帰ったときにエアーチケットを手配した旅行会社の担当者の名刺だ。

三人の男達は、その名刺を覗き込んで、

「オー、ジャパニ。OK。OK」と言いながら、多良の肩を、ポンポン、と軽くたたいた。

多良は、

「サンキュー、サンキュー。バイバイ」と手を振りながら、早足で道路を横断した。男達の賑やかな笑い声が後から聞こえた。

「やれやれ」多良は、ほっとして、歩みを緩めた。
すぐに1台目の警察のトラックとすれ違った。

横目で、トラックの荷台に乗っている警官達を見ると、彼らの顔は緊張で眼がつりあがり、警棒を固く握り締めているのが離れて歩く多良からもハッキリと見て取れた。

突然、「ワーツ」という喚声が聞こえ、足元にレンガが飛んできた。

足元に転がった赤レンガは数個に割れて飛び散ったが、砕けたレンガが歩道を転がる音は、「ガツ、ガガガツ」という、警官達がトラックから飛び降りた編み上げ靴の音にかき消された。

警官達は、トラックから飛び降りると、警棒を振り上げてデモ隊に向かって突進を始めた。

リングロードより内側の建物の前で遠巻きに事態を見守っていた若い野次馬達は、一斉に建物の陰に隠れたり、さらに遠くへ走り去り、投石の届かない距離を保って立ち止まり、様子を窺っている。

多良は、鬘をかぶった頭を両手で覆いながら、市の中心へ向かって走り出した。石や、こぶし大に砕かれた赤レンガがその頭を飛び越し、行く先の道路で跳ね返っている。背中に背負ったザックが上下に揺れた。

ようやく、建物の陰に入り込み、振り返って見ると、既に警官隊とデモ隊の衝突が始まっていた。

多良は、

「巻き添えでも喰ったら元も子もない」と、建物の陰から、陰へと移動しながらだんだんとその場を離れた。

500 mも離れて、市街地の中心に近付くと、道路の真ん中を、まるで散歩を楽しむかのようにゆっくりと歩いている市民の姿が見え始めた。

いつもなら車やバイク、リキシャで洪水のようになっている道路がバンドの日は歩行者天国のようになるのだ。

辺りを見廻すと、ビルの屋根越しに黒い煙が立ち上っている。街の周囲を走っているリングロードの要所要所で古タイヤが燃されているのだ。

カトマンズの青い空に幾本もの黒煙が立ち上っている。その黒煙は、清流に墨を流したかのようにユラユラと広がり、もうじき空一面を多いそうな勢いであった。

先ほどとは違う方向から、時折、喚声が聞こえてくる。どうやら、同時多発的に衝突が始まっているらしい。

カトマンズを取り囲む2000 m級の山並みはすでに雪を被りかぶ白くなっているが、黒煙はその姿を隠し始めていた。

やがて、「パーン、パーン」という音が聞こえ始めた。

「撃ち始めたか」

催涙弾の発射音である。

多良はさらに歩足を早めた。

王宮正門に繋つながる道路には装甲車が配備されていた。

正門手前の交差点の両側には土囊どのおうが1 m50 cm程の高さに積み上げられ、国軍の兵士達が土囊の内側に身を潜め、自動小銃を構えている。

市民達は、その銃口の前を悠然と歩いている。

道路端には、年老いたリキシャマンが所在なげに座り込み、通

り過ぎる家族連れや、たまに通りがかる観光客から声がかかるのを待っている。

いつもなら必死の思いで横断する道路も、今日は悠々と渡ることが出来た。出歩いている市民達も自分たちの行きたい方向に向かって道路を横断している。

彼等には目的地があるわけでなく、ただ、こうして道路の真ん中を歩いてみたいだけなのであろう。商店や会社はどこも営業していないのだから行き先などあるはずはないのだ。

多良は、王宮正門へ続く表通りを通り過ぎ、細い脇道に入ってタメールへ向かった。タメールは観光客向けの土産物屋やホテル、安宿、ネットカフェなどが狭い通りの両側を埋め尽くす繁華街だ。

いつもなら観光客と客引きで狭い通りが満員電車なみに混み合うが、今日は若い白人観光客が、あてもなく歩いているのが見えるだけだ。

どこの店もマオイストの報復を恐れて営業していないのだ。土産物屋はもちろん、カフェや食堂もシャッターを下ろしている。

観光客達はホテルへ缶詰状態になっているのだ。

気晴らしにホテルから出ても、ただ、歩く以外に時間を潰す方法はない。

商店はシャッターを下ろし、店の主は入り口の階段に腰掛けている。あるじ

主は、留守狙いの泥棒を恐れての店番と、店を開けて営業できるタイミングを探っているのだ。

多良は、

「今日は、営業は無理だろうな」と、さっき遭遇した状況から推測した。

「さてと、今日は、やってるかな」多良は、タメールへ出ると利用している日本食レストランを目指した。

登山靴の修理が出来上がったら、その食堂へ預けるように頼んであるのだ。

その日本食レストランのある雑居ビルが見えてきた。

しかし、遠くから見ると、そのビルの出入り口の蛇腹式のシャッターが閉じられている様に見える。

「あれ？閉まつてる」と思いながら近づくと、シャッターは、人がようやくは入れるくらいの隙間が開いていた。その奥に、この雑居ビルのオーナーがパイプ椅子に座っている。

「ナマステー」と声をかけるが、「ブスッ」とした表情で返事もしない。

「どうしたんだろう？」と思いながら、二階を指差し、「オープン？」と聞いたが、黙りこくったままだ。

「どうしたんだ？休みかな」と思いながら、外から二階の窓を見上げると、「おやじの味」と、統一性のない形の日本語で書かれた突き出し看板の取付金具に多良の登山靴がぶら下がっていた。

「おー、やってるんだな」そう思い、ガシャ、ガシャと蛇腹式のシャッターを少し広げて、中に入った。

日本食レストラン「おやじの味」は、この雑居ビルの二階にある。日本人はもとより、カレーに飽きた白人旅行者もよく利用している。安くて旨いという評判は口コミで広がり、結構繁盛している。多良は、人目につきたくはないが、その料金と味の魅力に負けてもう30年近くの常連だ。何よりも、店主の人柄が気に入っているのだ。

ビルのオーナーの前を通る時、

「ナマステー」と、再び声をかけたが、オーナーは、ジロリと横目で睨^{にら}んだきり何も言わない。

多良は、階段を、ノツシ、ノツシ、と上がった。踊り場まで来ると、いい臭いがしてきた。

「ナマステー」と言いながら、「おやじの味」と染め抜かれた暖^の簾^{れん}をくぐり、ガラガラツ、と、縦格子の日本式の引き違い戸を開けた。

「おー、多良^{たら}さん。久し振りだね。元気だったか？」店の主^{あるじ}のビクシンがレジの前に座っていた。

「ああ、なんとかね。店、結構、はやってるじゃないか」と、店の中を見渡した。

奥のテーブル席には、旅行者らしい白人の女性が1人と、男性が5人ほど食事の出来上がるのを待って、地図を見ながら、なにやら談笑している。

さすがに、この時期、日本人観光客はいない。

「ボチボチだよ。こうして、開けていないと、旅行者は困るからね」ビクシンは椅子から立ち上がって右手を差し出した。

多良も右手を差し出し、再び、

「元気だった？」と、握手した。

「日本人観光客が減って、ビッグプロBLEMだよ」ビクシンは、口をへの字にゆがめ、両手を広げて首をすくめた。

「そうだろうな」

国王への権限集中は反対運動の激化を招き、観光客の数は激減していた。特に、お得意さんである日本人観光客の数が大幅に減り、観光産業は、大打撃を蒙^{うづむ}っている。

「ところで、ビルのオーナー、機嫌悪そうじゃないか？」と、顎^{あご}で階下を指した。

「ああ、オーナーは、ここが営業してるの、気に入らないんだよ。マオイストの標的になって、火でもつけられたら大変だってね」ビクシンはへへッ、と笑って椅子に腰掛けた。

「それで、あそこで見張ってるのか。ご苦労なことじゃ」多良はそう言いながら、近くのテーブル席に着き、

「しかし、ビクシン、今日の衝突は、結構大きいぞ。警官隊のバリケードを破って、こっちまで流れてこなきゃいいんだが・・・」と、ビクシンの顔を見た。

「そんなにか？」ビクシンの顔に緊張が走った。
若い男性従業員がふたり、

「お待たせいたしましたー」そう言いながら、奥の白人客へ料理を運んで行くために多良の横を通った。

多良は、それを眺めながら、

「俺も、カツどんと天ぷら蕎麦そばを」と、ビクシンに向かって言った。

ビクシンは、申し訳なさそうに、

「多良さん。ごめんなさい。蕎麦、売り切れたよ」と太い首を縮めた。

多良は、それを聞くと、

「エーッ!!、楽しみにしてきたのにおー」と、思わず大きな声を出し、

「ガッカリじゃのー」と、テーブルに顔を伏せた。

「ソーリー、ソーリー、多良さん。材料が入ってこないんだよ」と、ビクシンは申し訳なさそうに頭を下げた。

多良は、

「ま、しょうがないか。こんなに交通機関が寸断されてちゃ、入るものも入らんからな」と、自分自身に言い聞かせるようにつぶやいた。

その時、奥に座っていた金髪の女性が、

「あの、よろしかったら、これ、どうぞ」と、テーブルの上の天ぷら蕎麦を指さした。
日本語であった。

雪男

女性の申し出に、

「え？しかし・・・」多良は躊躇った。

女性は、すぐに、

「いいです。このカツどんのボリュームを見たら、私には天ぷら蕎麦は、ちょっと無理だと思います」と、ニコリと白い歯を見せて笑った。

多良は、

「本当にいいんですか？」と腰を浮かせた。

「どうぞ、どうぞ」女性は、天ぷら蕎麦の器を動かした。

「いやー、じゃあ、お言葉に甘えて」多良は席を立ち、彼女達の隣のテーブルに席を替えた。

先ほどから、話を聞いていたビクシンが、女性から天ぷら蕎麦の器を受け取り、多良のテーブルの上に置き、

「多良さん、ラッキーね」と、右手の親指を立て、片目をつぶった。

女性も、それを見て、再び、にこりと笑った。

「しかし、日本語が上手ですね」

「ええ。私の父は日本人ですから」女性は多良のほうを向いて言った。

多良は、割り箸を割る手を止めて、

「え！じゃあ、ひよつとすると、あなたが、キャシー長谷川さん？」と聞いた。

女性も、割り箸を割る手を止め、

「そうです。あ、じゃあ、あなたはジテンのお友達ですか？」と、

体の向きも変えた。

「そうです。多良^{たら}といいます。ああ良かった。ここで会えて」
ふたりは軽く握手をした。

連れの男達も、カツどんを食べながら、ふたりの顔を見ている。
多良は、

「でも、どうしてここへ？」と聞きながら、パチン、と箸を割った。

キャシーも、箸を割り、

「10年前にもこの食堂へはよく通っていましたから」と、そばに立っているビクシンの顔を見た。

「そうなんですか」多良はそう言いながら、ズルズルツ、と音をたてて、蕎麦を啜^{すす}り込み、

「いやー、ビクシン、やっぱり旨^{うま}いよ、この天ぷら蕎麦は」とビクシンを見た。

そして、

「皆さん、お友達ですか？」と、聞いた。

「いえ、ホテルが一緒に、皆さん、開いてる食堂もないし、お腹を空かせていたものですから。じゃあ、一緒に、ということになったのです」

キャシーは、左手を男達のほうへ向け、

「この方々は、オーストラリアのテレビクルーの皆さんです」と言った。

男達は、

「ハイ」という感じで、手を振った。

多良はそれに応えながら、

「テレビの？じゃあ、やっぱり、ネパールの政治状況の報道のため？」

「いえ。それが、違っんです」

「違う？」多良は、井いんぱいから顔を上げた。

「この方達は、イエティのドキュメント番組制作のためにネパールに来られたのです」

「イエティ？って、雪男？」

「しかし、雪男なんて・・・なあ」と、振り返って、テーブルから去ってゆくビクシンの背中に声をかけた。

ビクシンは、両手を広げて、肩をすばめた。その肩は、震えていた。笑いを堪こらえているのだ。

「あら、雪男はいるのですよ」キャシーは、真面目な顔になって言った。

多良は、

「いや、それは・・・」と、蕎麦の丼に顔を向けて、エビの天ぷらを箸でつまんだ。

キャシーは、

「私もハッキリとこの目で見ました」と、声を大きくした。

男達は、「イエティ」という言葉に、雪男のことを話しているのを察して、食事の手を止め、ふたりの顔を見ている。

「見た？」多良はキャシーの顔を見ずに、

「いつ？」と聞きながら、エビの天ぷらを頭から半分ほど食べた。

「10年前です。医療ボランティアで、ナムチエから奥に入った村で見ました」

「それは、ヤクとか熊の見間違いでは・・・」と、小さな声でつぶやいた。

「ノー！！間違いありません。二本足歩行していました」キャシーは、さらに大きな声を出した。

「いや、しかし・・・」と、さらに、多良が言いかけると、「お待たせしました」と、ビクシンが、カツ丼を多良のテーブルの上に、コンツ、と音を立てて置き、多良の足を踏んだ。

「痛ッ」多良は、ビクシンの顔を見ると、ビクシンは、片目をつぶっていた。

「あ、ああ・・・、ビクシン、お茶を・・・」多良は「分かったよ」と目で合図した。

ビクシンは、
「あ、お茶ね」と、調理場へ戻って行った。

キャシーは、多良との会話を、男達に通訳している。
男達のひとりが、キャシーに何か言っている。

多良は、勢い良く、蕎麦を啜り込^{すす}んだ。

キャシーは、

「写真を撮ろうと、ザックからカメラを出している間に見失いました」と、さも残念そうに、首を大きく左右に振った。

そして、多良を見て、

「でも・・・村人達は驚かないのです」と、やや不思議そうな表情をして言った。そして、

「何度も見ているから、珍しくないのだと思います」と付け加えた。

「だろうな」多良は、小さくつぶやいた。

「え？」

「いや、なるほど」と言いながら、ザックの中から黒いビニール袋を取り出し、

「忘れてはいけけないので、これを先にお渡しておきます」と、キャシーの隣の椅子の上に置いた。

「ありがとうございました。これで、何人もの人達が助かります」
キャシーは、袋の口の結び目を解き、中を覗いた。

「その薬草類で薬を？」多良は天ぷら蕎麦の空になった器を脇に寄せ、カツどんを手前に置いた。

キャシーは、袋の口を結びなおしながら、

「そうです。10年前、こちらに來た時に勉強しました」と言い、大事そうにその袋を、ザックの中に納めた。

「へー。独学で？」

「ドクガク？」キャシーは、首をかしげた。

多良は、

「あ、おひとりで勉強されたのですか？」と、言葉を替えた。

「いえ、私の父のお友達からテキストをもらって」

「お父様のお友達？」

「はい、その方はタイのチェンマイに住んでいます」

「へー」

「その方の知り合いがテキストをここまで届けてくれたのです」
と、胸で揺れる銀のロケットを左手で握りしめた。

当時チェンマイに住んでいた江下寛一えげかんいちから、薬草の調合方法を書きとめたノートを預かり、キャシーに届けたのが、修道館大学の日本拳法部部長だった山口であったことなど、このときの多良には知る由もよしなかった。

そして、今、目の前にいるキャシーの友人が、剣道部の木野花咲きののはな姫さきであり、さらには、神田かみたとも知己ちぎとなったことなどは想像出来るはずもなかった。

しかし、やがて、彼らは、運命あやつに操られるように、この神々の座す国、ネパールで再会することになる。

その再会は、彼らが、燃え滾^{たぎ}っていた70年代にぶつけていた怒りが、どこからともなく吹いた風に流されたのと同じように、敵^{あがな}うことの出来ない歴史の流れに再び巻き込まれてゆく序章になる。

深く、暗い、時代の闇がそこまで迫っていた。

暴動！！カトマンズ

「あ、ビクシン、俺の登山靴をもらって行くよ」多良^{たら}はお茶を飲み干して、窓の方へ移動した。

ビクシンは、

「はい。あそこにぶら下げておけば、多良^{たら}さん、気がつくと思つてね」と、笑いながら言った。

「ははは、確かにな」多良は、そう言いながら、外から営業していることが分からないように閉めてあったカーテンを少しだけ開き、ガラス越しに外の様子を見た。

そして、木枠の窓を、ギシギシ、と、横に滑らせて開け、手を伸ばして、看板の取り付け金具に結び付けられている登山靴を取り入れた。

その時、通りの向こうから、「ワーツ」という喚声が聞こえてきた。

警官隊との小競り^{こぎり}合いから抜け出たデモ隊がタメール地区になだれ込んで来たのだ。

多良は、すぐに窓を閉め、カーテンを引いた。

「ビクシン、デモ隊だ」多良は振り返って、レジのところにいるビクシンに言った。

「えっ」ビクシンは、窓際にやってきて、カーテンの隙間から外を覗いた。

その時、ガシャン、と、ビルの入り口の蛇腹シャッターが閉じられる音がして、オーナーが、逃げて行くのが見えた。

キャシーや、オーストラリアのテレビクルー達は、不安そうな顔をしてお互いの顔を見つめている。

ビクシンは、彼らの不安を消すように、

「大丈夫ですよ。もうじき、彼ら、通り過ぎると思うよ」「そう言いながら、レジのところへ戻って、調理場にいた従業員に電気を消すように言った。

従業員達は、てきばきと動いて店内の全ての電気を消したが、彼らの顔には不安と緊張が浮かんでいた。

数台のオートバイに乗ったマオイスト達が赤旗を振りながらデモ隊の先導をしている。

その後から、毛沢東主義のシンパや学生達が続き、さらにその後からは、野次馬が続いている。

仕事もなく、収入の道のない男達は、日頃の鬱憤^{うつげん}を、マオイストの騒ぎに乗じて晴らすと、何かが起きることを願いつつこのデモに加わっているのだ。

彼らの中には、マオイストから何ルピー^{ルピー}かもらって、参加している者たちもいる。

それぞれの店舗の前で、開店の機会を窺^{うかが}いながら座っていた店主達は、シャッターに握り拳^{こぶし}ほどもあるの大きさの南京錠を掛け、一目散に去っていった。

通りを、歩いていた観光客もデモ隊とは反対方向に駆け足で去っていった。マオイストやデモ参加者が観光客に危害を加えることはない。

しかし、運が悪いと、マオイストから寄付金を求められることもある。

「ワーツ」という叫び声が上がリ、シャッターを閉めるのが間に合わなかった雑貨屋へデモ隊が乱入し、「ガシャン、ガシャン、バ

ーン」、商品を通りに投げ出し始めた。

カーテンの隙間から覗くと、同じ建物の一階の雑貨屋にデモ隊の一部が乱入し始めたようだ。彼らはもはや暴徒と化していた。

オーストラリアのテレビクルーはビデオカメラをザックから取り出し、窓のカーテンを開いて、ガラス窓を開いた。

「ノーッ！！、ストップッ！！」多良は叫んだが、その時にはもう遅かった。暴徒のひとりが、それに気付き、指をさして大声で叫び始めた。

暴徒となった群集は、食堂の窓に向かって石を投げ始めた。

「ガッシャーン！！」、暴徒の投げた石はガラス窓を破り、床にガラスの破片が飛び散った。幸いにも、カーテンに遮られ、ガラスの破片の大部分は多良達に届く前にカーテンと窓の間に落ちた。

しかし、次から次へと飛んでくる石やレンガは次第にカーテンを引き裂き始め、奥のほうまで飛んでくるようになった。

多良達は、奥のテーブルの下に身を伏せていたが、身の危険を感じ始めていた。

その時、向かいのテーブルの下に潜っていたキャシーが、「あれは？」と、入り口の引き違い戸の方を指差した。

戸の隙間から黒い煙が入り込んでいた。

ビクシンが、

「ファイヤー！！多良さん、火事だよ！！」と、叫んだ。

一階の雑貨屋に放たれた火が燃え広がっているのだ。

「ガッシャーン！！ガッシャーン！！」窓ガラスを破って石が飛んでくる。カーテンは引き裂かれて、カーテンレールと共にぶら下

がっている。

若い従業員が、身を伏せながら、出入り口の引き戸を開いた。火は見えない。黒煙が、鼻に突き刺さるような臭いと共に店の中に入ってきた。

オーストラリア人のテレビクルー達は、カメラをザックを抱え込んで飛び出す機会をうかがっている。

「多良さん、逃げるよ！！」ビクシンはそう叫ぶと、キャシーやテレビクルー達へ右腕を振って合図した。従業員達が引き戸を全開にして階段の下に向かって下り始めた。階下から熱を帯びた黒煙が勢いよく店内に流れ込んできた。

全員、手で、鼻と口を覆^{おお}って従業員の後に続いた。多良は、キャシーやオーストラリア人が出たのを確認して最後尾についた。

一階と二階の踊り場まで来ると、チラチラとオレンジ色のほのうが見えてきた。従業員達が最初に突っ走って、出口に向かった。

しかし、その直後、「ガシャ、ガシャ」という音と共に、従業員のひとつりが大声で叫ぶのが聞こえた。

「何だ！？」多良が叫んだ。

「ダメだ、多良さん！！あの馬鹿オーナーがシャッターに鍵をかけてる！！」ビクシンが悲痛な声で叫んだ。

「屋上だ！！」多良が叫ぶのと、向かいのドアが爆発で勢いよく開くのと同時であった。

「バーンッ！！」

「キャーッ！！」キャシーが叫び声を上げた。

火が何かに引火したのだ。

多良はキャシーの手をとって階段を駆け上がった。

全員が多良の後に続いた。

炎が渦を巻きながら、蝶番一つでぶら下がっているドアを乗り越えて、追いかけてきた。

「ゴホッ、ゴホッ」

全員が黒煙に咽びながら身を低くして階段を駆け上がった。

屋上へとつながる出入り口の、青く塗られた鉄パイプの扉が見えた。

その扉のカンヌキには南京錠がかけられていた。

オーストラリアのテレビクルーの一人が、その南京錠をつかみ、

「ガチャ、ガチャ」と揺らし、

「シットツ！！」と、吐き捨てるように言った。

若い従業員が、中庭を見下ろす位置にある窓を、そばにあった丸椅子を投げつけて壊した。その腰ほどの高さにある窓から覗くと隣の建物の屋上が見える。

黒煙が熱風と共に勢いよく上がってくる。炎はまだ見えないが、凄まじい熱気が上がってくる。

従業員のひとりが、窓枠に足をかけ隣の屋上めがけて飛び降りた。飛び降りた従業員は、屋上にあった植木鉢を「ガチャン、ガチャン」と蹴飛ばし、続く者たちが飛び降りやすいように足場を広げた。その広がった場所めがけて、残りの従業員達も次々と飛び降りた。

オーストラリアのテレビクルー達も、ザックを背中に背負いなお

し、飛び降り始めた。ビクシンはカメラマンから預かったビデオカメラを先に降りたカメラマンに放って、自分も体に似合わない身軽さで飛び降りた。

「さあ、キャシーさん!!」多良は、キャシーの煤で黒くなった顔を見た。

「ノー、出来ません」キャシーは弱々しくそういうと、窓から離れて壁に背をつけた。

「何を言っているんですかッ!!さあ、はやく」そういうと、多良は、キャシーを窓際まで引っ張って行き、

「サア!!」そういうと、ザックを背中からおろして腹ばいになり、

「私のうえに乗って、早くッ!!」と叫んだ。

隣の建物の屋上からはオーストラリア人達が、

「カモン、キャシー、ハリーアップ!!」と叫んでいる。

「さあ、早く」多良は大声で叫んだ。

キャシーはようやく多良の背中に足をのせ、片足を窓枠にかけて下を覗き込み、

「ノー、出来ません」と半泣き状態になった。

多良は、

「ええいッ」と叫ぶと、背中に乗った左足を掴み上げ、キャシー

の尻に両手を添えると、

「エクスキューズミー」と言いながら、尻をポンと押した。

キャシーは、

「キャーッ!!」と叫びながら飛び降り、隣の建物の屋上で待ち構えていたオーストラリアのテレビクルー達に受け止められた。

多良もすぐにその隣に飛び降り、クルー達に向かって、

「ゴー、ホテル!!」と叫んだ。

屋上から飛び降りた従業員達が、どこからか、木の梯子はしを持って

きて、立掛けた。

ビクシンやオーストラリアのテレビクルー達はその梯子を伝って建物の裏側に降り立った。

多良は、先に梯子段に足をかけ、キャシーの体をサポートしながらゆっくりと下り始めた。見上げると、先ほど飛び降りた窓からはもくもくと黒煙が舞い上がっている。

表通りから、「パン、パン」という催涙弾を発射する音と共に、悲鳴が聞こえてきた。

ビクシンが、

「多良さん、ホテルで会おう!!」と、梯子の中ほどにいる多良を見上げて言うと、

「ジス ウエイ!!」と叫んで、裏口へテレビクルー達を誘導した。

梯子の中段から塀越しに、群集が警官隊に追われて「ワーツ」と叫びながら、逃げまどう姿が見えた。

多良が、

「ゆっくりでいいですから、もう少しです」と、キャシーに声をかけた。

キャシーは、

「さっき飛び降りたとき、足首を痛めたみたいです」と言った途端、

「キヤーツ!!」ダダダダン!!

キャシーが足を踏み外し、多良の上に覆い被おおさかぶったまま、二人とも地面に叩きつけられるように落下した。

多良もキャシーを支えきれなかった。

キャシーは、座り込んだまま、

「オー、アームソーリー、多良さん」と、言い、多良の顔を見て、驚いた。

多良の黒々とした頭の毛がなくなっているのだ。そして、キャシーの右手には、その黒々とした物が握られていた。

多良は、

「痛タタツ」と腰に手をやりながら、キャシーが、目を丸くして自分を見ているのに気がつき、サツ、と頭に手をやり同時にキャシーを見た。その時には、キャシーは、多良の頭と、右手に握っている髪の毛を交互に見やり、起こった事態を理解しようとしていた。

キャシーの白い肌は、さーっ、と紅潮し、

「アームソーリー、多良さん、アームソーリー」と言いながら、

多良の頭に鬘かつらを被せて、ギュギュツ、と押さえつけた。

「痛い、痛いよ、キャシーさん。逆だツ、逆」

キャシーは、鬘かつらを前後ろ逆につけようとしていた。

「アームソーリー、多良さん。このことは誰にも言いません。約束します」

キャシーは、顔を赤らめたまま、鬘かつらの向きを、懸命に直そうとしていた。

「あ、ああ。・・・そうしてくれよ・・・」そう言いながら、口をグツ、と結んで、笑いをこらえた。

「ところで、キャシーさん」

「はい。何ですか？」

「俺の腹の上から退いてくれるかな」と、多良は言った。

「パーン、パーン」という催涙弾を発射する音とともに、ガスが流れ込んできた。

多良とキャシーは鼻と口を手で覆ったが、たちまち目を刺すような痛みが襲ってきた。

「ゴホッ、ゴホッ」という咽び声と共に6人の男達が裏戸から飛び込んできた。男達は、手に手にパソコンやテレビ、衣類や食料品などを抱えていた。混乱に乗じて店舗から品物を盗む火事場泥棒だ。

彼らは、多良とキャシーを見ると、一様に驚き、足を止めた。催涙ガスが、男達の足元で渦を巻いた。

多良は、キャシーの手を取り、立ち上がらせて、彼らと3mほどの距離を保ったまま、円を描くようにゆっくりと裏戸側へ移動した。

彼らは、多良達に危害を加える気持ちはないことは、多良には分かった。彼らの顔は、皆、怯えた猫のよう^{おひ}に警戒心を露^{あらわ}にしているのだ。

その時、ドカドカツ、とレンガ貼りの路地を踏みつける音と共に、10人ほどの警官達が入り込んできた。

男達は、警官の姿を見ると、羊の群れがひとつの塊^{かたまり}になるように肩を寄せ合った。

それを見た警官達は、目を血走らせ、警棒を振りかざし、頬を引きつらせながら、男達ににじり寄った。

「正義」と「邪心」。警官達の屈折した心理は、暴力となって現れる。そのことを、男達も知っていた。権力に庇護された暴力ほど激しく、そして恐ろしいものはないのだ。男達は肌で何度も経験し

ていた。

警官達は、一斉に男達に殴りかかった。男達は、略奪した商品を抱えた腕でおのれの身を守るために、それらの商品を投げ捨てた。

男達は、抵抗すればするだけ打ち据えられる回数と、その力が増すことを知っていた。

「バシッ、バシッ」、肉の避けるような音と、男たちの悲鳴が裏庭に響き渡った。

「ストップ！！ストップ・イット」キャシーは叫びながら男達と警官たちの間に入り込もうとした。しかし、多良の手はキャシーの手を握り締め、引きとめた。

キャシーは、顔を赤らめ、必死に、彼らの間に入り込もうとしている。

多良にもキャシーの気持ちはよく理解できる。しかし、この場はどうしようもないのだ。キャシーの目は催涙ガスのせいだけでなく、赤く充血していた。

男たちの退路を絶ちながら、警官達は絶え間なく警棒を振り下ろした。男達の悲鳴はやがて泣き声に変わった。

男達が、顔を防ぐようにかざした腕に向かって数本の警棒が振り下ろされた。

男達は、打たれる前に、腕の骨の折れる音を聞くかのような悲鳴を上げた。

その時、風と共に、振り上げられた警棒の先、50cmの部分が催涙ガスと黒煙の漂う宙に舞い、警官達の頭の上に「パラパラ」と落ちてきた。

警官達は、警棒に込めた力の行く先を失ってバランスを崩し、地

面に落ちた切り離された警棒の先を、何が起こったのか理解できない表情を浮かべたまま見つめた。

警官達の背後に、髪を肩まで垂らした長身の男が立っていた。

キャシーは、一瞬にして、30数年前、バンコクで遭遇した出来事を思い出した。あの時も、暴漢が振り上げた木の椅子を、一瞬にして切り、男の手には振り上げた椅子の足しか握られていなかった。

暴漢達に連れ去られようとしていたキャシーを救ってくれた男。

「今、ここに立っている男はあの時の日本人ではないか！！」

キャシーの記憶の一片は、催涙ガスの滲むフィルターを拭い去り、鮮やかな色を伴って蘇った。

G O D

「G O D ー！」

確かにあの時、「G O D」と名乗った。

キャシーが、屋台を切り盛りしていたタイ人の幼い姉弟の肩を抱きながら、まだ拙つたなかった日本語で男の名前を聞いた時、男は確かに

「G O D」と名乗った。

日本人の父親を持ちながらも、家庭内の会話では日本語を使うことのなかったキャシーは、当時は片言の日本語しか使えなかった。

自らを、G O D（神）と名乗った男を、その時のキャシーは、「なんと不遜ふそんな日本人なんだろう」と、強く思った。

「郷戸いっぴー！」多良たひらは、鼻と口を被おおった右手の下で叫んだ。

確かに、あの時、多良が修道館大学の学生だった時、学校に乗り込んできた暴力団の指揮を取っていた男だ。30数年を経ても、あの時の凄みのある姿に変わりはなかった。「男の名前は郷戸ごうどだ」と、日本拳法部主将の山口から聞いた。

あの時、抗争が学生たちの勝利に終わり、最後に暴力団員達に引き上げの号令をかけ、夕陽の中で、ダンプカーの屋根に木刀を握って立っていた姿は、多良の脳裏に強く焼きついている。

「ゴウド？」キャシーは小さく声に出し、多良の顔を見た。

「G O Dではなく、あの時、彼は、ゴウドと名乗ったのか」キャ

シーは、30数年を経て、何故か胸のつかえが取れた気がした。

その男が今、着古したグレーの上着の上から白いコートを羽織り、刀を右手に持って立っていた。

警官達は振り返って男の顔を見るなり、凍^いて付いた表情を浮かべ、おどおどと裏口へ向かった。

長髪の男は、警官達が裏口から出てゆくのを見届けると、「日本刀」を腰に挿した鞘^{さや}に収めた。そして、略奪品を抱え始めている男のひとりに、

「タワーのところにトラックが停めてある」と、抑揚のない声で言った。言われた男は、パソコンを抱え、

「ワカッタ」と片言の日本語で応え、他の男達に伝えた。

多良^{たら}は、

「あんた、郷戸^{ごうこ}じゃないか？」とキャシーの手を離し、去ってゆくこうとする男の背中に声をかけた。

男は、一瞬足を止めたが、そのまま裏口から去っていった。

すぐ近くで、「パーン、パーン」と催涙弾の発射される音が、キャシーを現実に戻した。

「彼は・・・」

多良^{たら}はキャシーの言葉を遮^{さへぎ}って、

「キャシーさん、その件は後だ」と言うと、再びキャシーの手をとって裏口へ向かい、外の様子を窺^{うかが}った。

催涙ガスの充満する狭い通りを、郷戸^{ごうこ}が白いコートを翻^{ひるがえ}し、悠然と歩いて行くのが見えた。警官達も、郷戸の前を空けた。

「強盗団のボスは日本人だという噂は聞いたことがある。しかし、そいつが、あの郷戸^{ごうこ}だとは・・・」

キャシーも、バンコクで、危険から救ってくれた男とカトマンズでこんなかたちで会おうとは夢にも思っていなかった。

「ゴッドと名乗ったと思っていた男が、強盗団のボスとは・・・彼の身には何が起こったのだろうか？」

郷戸、多良、咲姫、神田、そして・・・山口。

この時のキャシーは、彼らが、お互いに引き合うかのように、このネパールに集まってくることなど、夢にも思わなかった。

「キャシーさん、足は大丈夫？」多良はキャシーの手を取り、足首を見ながら尋ねた。

「少し痛みますが、大丈夫です。ホテルまではOKです」

「そうですか。じゃあ、ゆっくり行きましょう」そう言うと、多良は左手でキャシーの手を握り、右手にキャシーのバッグをつかんで裏通りへ出た。

キャシーは、建物のレンガ壁に手を沿わせながら、ゆっくりと歩いた。大通りからは、警官隊のブーツの固い靴音が踏み固められた通りを走る音と、警棒が何かを叩く乾いた音が聞こえている。

数人の若い男達が大通りから多良のいる方に向かって逃げてきた。彼らは、多良達には目もくれず反対方向に向かって走っていった。

大通りに出ると、警官隊とデモ隊の衝突はますます激しくなっていた。

「このままで行くと警官隊は実弾を使うかも知れんのオ」と口の中でつぶやいた。

「え？何か言いましたか？」キャシーは、立ち止まって多良の顔を覗き込んだ。

「いや、何も」と、多良は応えながら、「暴動鎮圧には、催涙弾より実弾の方が安いから、場合によっては実弾を使うようにと指示が出ているんだ」と、ジテンが言っていたことを思い出した。

「単なる噂だとは思うが・・・」多良は、キャシーをかばいながら、飛んでくるブロック片や石に注意しながら建物の壁沿いにホテルへ向かった。

ホテルスオニガの前で、日本料理屋の主人のビクシンや、オーストラリアのテレビ局のクルー達が心配そうな顔をして立っていた。

通りの角から、多良^{たら}とキャシーの姿が見えると、全員がふたりに走り寄り、足を痛めているキャシーに手を貸し、多良の手からバッグを受け取った。

「多良さん、心配したよ。どうしたのかと思って」ビクシンが多良の方に手をおいて言った。

「いや、ごめん、ごめん。キャシーさんがちょっと足をくじいたみたいで」

「さあ、中へ」ビクシンはそう言うと、ホテルの入り口の格子のシャッターを、人が通れるほど横に引いた。

細い通路の左手にカウンターがあり、ネパール人のホテルスタッフも、ほっとした表情を浮かべてふたりを迎えてくれた。通路の先には長いすが置かれ、数人の白人観光客達がそれに腰掛け、小さな声で会話している。

ロビーには照明が点けられ、外部とは別の世界のような。観光客の笑い声も聞こえる。

「さ、ここへ」ビクシンは、座り心地のよさそうなソファを奥から滑らせながら持ってきて、キャシーに手を貸しているオーストラリア人に言った。

「サンキュー、ありがとうございます」キャシーはそう言うと、体を投げ出すようにそのソファに腰掛けた。

「ビクシン、ちょっと」多良は、そう言うと、多良^{たら}の座った隣の席を、ポン、ポンとたたいて、座るように促した^{うなが}。

「なんですか？」ビクシンは怪訝そうな顔をして隣に座った。

多良は、やや、声を潜^{ひそ}めて、

「さつき、強盗団が、一階の雑貨屋から商品を盗み出しているのを見たんだが、そいつらのボスについてだが、何か知らないか？」

ビクシンは、口元をゆがめて、

「ああ、多良さん、見たんだね」と、訳ありげな言い方をした。

多良は、

「噂どおり、日本人だったよ」と、いつそう声を潜め、

「そいつのことを何か知ってるかい？」と聞いた。

「私は見たことないね。ただ、最近、よく噂は聞くね」と、ビクシンは辺りを見回しながら言った。

「一体何者なんだ？あいつは？」ふたりは前かがみに体を低くして顔を付き合わせた。

「警察も軍も、手出しできない男だよ」ビクシンは、即座に答えた。

「え？どういうことだ？」

「それだけじゃないよ。マオイストさえ手を出さないんだ」ビクシンは、目だけを多良に向けて、囁^{ささや}くような声で言った。

多良は、^{たら}

「へー、よく分からんなー」と、息を吐き出しながら言った。

「噂では、マオイストのビッグボス、プラチャンドもあの男を捜しているらしいよ」ビクシンは、体を倒したまま、目を左右に動かしながら言った。

「捜す？」

「そうだよ。自分たちの仲間に引き込みたいらしいんだよ」

「どうして？」

「たぶん、例の一件を利用しようとしているんだと思うよ」

「例の一件？」

「・・・」ビクシンは、人差し指を口の前に立てた。

「ああ、あの王宮内の・・・」

「シッ!」ビクシンは、立てた指はそのまま、短く息を吐いた。
「あの件とあの男とどういう関係が?」

「あの男は、前の国王の親衛隊の先生だったんだよ」

「先生?」

「そう。カタナのね」と、口の前に立てた指を立てに振り下ろした。

多良は、「武術教官だったということか。それで、警官達は手出ししなかったのか」と、警官達の引きつった顔を思い浮かべた。

ビクシンは、

「たぶんあの男は何か重大なことを知っているんだ」

「重大なこと?」

「そう。あの現場にいたとか・・・」

「あいつは、金持ちの家や、アク、アク・・・」と、顔を上に向けて、目をつぶり言葉を思い出そうとしている。

「アク?」多良には何のことだか分からなかったが、

「悪い商売人の店からしか盗んだりしないんだ。それも、最低限だけね」とビクシンが言っていると、

「ああ、悪徳商人?」と、聞いた。

ビクシンは、右の人差し指で多良の顔を指し、

「そう、悪徳商人から盗むのさ。あの一階の雑貨屋のオーナーは、あちこちに店を持つてるけど、オーナーからお金を借りて返せなくなった親から子供達を連れてきてタダで使っているんだよ」そう言うのと、

「まあ、マオイストにも、ゴッドにも狙われて当然さ」と、言つて、ソファアの背もたれに体を預けた。

「ゴッド?」多良は驚いた。

ビクシンは、

「ああ、皆、あいつのことはゴッドって呼んでるよ」と、当たり

前のように言った。

キャシーは、足首に自分で調合した湿布薬を塗りこみ、サポータ
ーをはめながら、「ゴウド、ゴウド」と頭の中で繰り返していた。
最近、どこかで聞いた名前なのだ。

「具合はどうですか？」多良がキャシーの足元で片膝をついて尋
ねた。

「ありがとうございます。大丈夫です。この薬はよく効きますか
ら」と、言いながら、トレッキングパンツの裾すそを下ろした。

「さっきの人、ゴウドというのですか？」

多良は、キャシーの問いかけに、

「え？うーん、．．．だと思います」と、少し驚き、

「なにか？」と、聞き返した。

キャシーから、

「私、あの人に会ったことがあります」と、思いがけない返事が
返ってきた。

「へー、それはまた．．．」多良は目を見開いて、キャシーの隣
に腰掛け、

「どちらで？」と、尋ねた。

キャシーは、優しい声で、

「バンコクです」と言った。

「バンコク？」

「はい。もう、ずーっと昔のことです。30年以上前のことです」
キャシーは、顔を上げ、遠くを見るような目で、目の前の少し陰に
なっている壁を見つめた。

「よく分かりましたね。人違いでは？」と、聞きながら、「30

年以上前？俺が修道館大学での抗争の時見た頃だな」と、多良は思った。

「いえ、あの刀の使い方は、あの時と一緒にです」

「刀の使い方？」

「はい。私が暴漢に絡からまれているところを、彼が助けてくれたのです」

キャシーは、膝の上で両手を重ねながら、

「その時、名前を尋ねたら、ゴッドだと言いました」と続けた。

「ゴッド・・・」ビクシンもそう言った。

キャシーは、多良の顔を見て、

「ゴウドなのですね」確認するかのように聞いた。

「そう・・・だと思います」多良は、キャシーのいくぶん強い言葉に気圧けおされながら答えた。

キャシーは、さらに、

「どんな字を書くのですか？」と聞いてきた。

多良は、キャシーに見えるように左の手のひらを広げて、右の人差し指で、ゆっくりと、

「故郷こきょうの郷きょうにドアの戸かどです」と言いながら、書いた。

キャシーには難しくてよく分からなかったが、

「故郷こきょうの郷きょうに、ドアの戸・・・」と、口の中で繰り返して、そして、

「ふるさとのドア、ですね」と、再び、確認するかのように、多良の顔を見た。

「そうです」と、多良は返事しながら、自らも、

「ふるさとのドア、・・・か」とつぶやいた。

古傷

「アー・ユ・オーライ？」そう言いながら、テレビ局のクルーのひとりが多良達に近付いてきた。

「サンキュー、アイム・オーライ」キャシーは、その男に微笑みながら言った。

「多良さん、こちらはジョンさんです」

「ハロー、ジョンさん。マイ・ネーム・イズ・タラ」多良は右手を差し出した。

「ハロー、マイト」男も右手を差し出し多良の手を握った。

いかにもオージラしい気さくな感じの、体も手も大きい男だった。

「多良さん、ちょっと失礼します。この方たちは、イエティの取材に行かれるのですが、私が、イエティを見たことを話したら、非常に関心を持たれて、話を聞きたいということなので・・・」と、立ち上がった。

「ああ、そうなんですか」多良もキャシーを支えようと手を手を出した。

キャシーは、

「それで、さっき、食堂で地図を見ながら話をしていたのです」と言いながら、多良の左手に右手を乗せ、

「ありがとうございます」と言った。

「しかし、雪男は、実際におるのかのお」と、左側でキャシーを支えているジョンを見た。

キャシーは、立ち止まり、

「います。私はこの目で見ました」と、多良を見た。

多良は、

「いたとしても、雪男だって移動するじゃろうし、同じ場所にはおらんのじゃあ・・・」と、言うと、キャシーは、

「村人は、イエティのことを話したがないのですが、どうも、同じ場所に現れるみたいです」と、歩き、オーストラリアのテレビクルー達の集まっているソファアへ腰掛けた。

「しかし・・・」と、多良が言おうとすると、キャシーは、

「多良^{たら}さんは、イエティの存在を否定されていますが、どうしてそんなに？」と、眉を寄せて多良の顔を見上げた。

多良は、鬘^{かつら}のゆがみを直しながら、

「うーん、見たことないし・・・」と、言って、

「ところで」と、ジョンのほうを見ながら、

「なんだか、メンバーが少なくなっているようだが、他の人はどうしたんじやる？」とキャシーに聞いた。

キャシーが、ジョンに尋ねる前に、ジョンは

「フタリハ、スト、シュザイ、イキマシタ」と日本語で答えた。

「えー！？、ジョンさん、日本語話せるんですか？」多良はびっくりして、ジョンを見上げた。

「スコシ。ハイスクールデ、ベンキョウシマシタ。イマデモ、スコシ、ベンキョウシテイマス」

「へー、なんだかありがたいのー」多良は、ニコニコと笑うキャシーの顔を見て言った。

テーブルには、ネパールの大きな地図が広げられていた。そのテーブルを囲むようにして椅子が置かれ、キャシーとジョンも他のスタッフの間に入って座った。

多良は、

「じゃあ、キャシーさん、私はこれで」と、軽く手を上げて、出口へ向かおうとした。

「オウ、どこへいくのですか？」キャシーは驚いて多良に聞いた。多良は、

「いや、ちよつと、風呂へ入りたいので・・・」と、胸の辺りのシャツを摘まんでにおいを嗅ぐ仕草をした。

それを見たジョンは、立ち上がって、

「ミスター・タラ、ワタシノヘヤノ、バスルームヲ、ツカッテクダサイ」と、ジーンズの尻ポケットに差し込んだルームキーを取り出した。

「いや、しかし、それは・・・」と、手を振る多良に、ジョンは、「ダイジョウブデス。ノー・ワリーズ」そう言つと、多良の肩に手を回して階段の方へ向かった。

多良も、

「いやあ、悪いですねえ。じゃあ、お言葉に甘えて」と言いながら、ジョンの後に続いて階段を上がった。

ジョンは、何度かガチャガチャと鍵を鳴らして、ギーツ、と音の鳴る木のドアを開き、

「ドウゾ、ドウゾ」と、部屋に入った。

多良は、「しまった」と思った。「風呂はないな」と、部屋の様子を見て思った。

しかし、ジョンは、ニコニコと多良の顔を見て、

「ドウゾ、ドウゾ」と親切にバスルームの戸を開いた。

広いバスルームではあったが、やはりバスタブはなく、シャワーだけだ。固定式のシャワーヘッドが高い位置に取り付けられている。

「ジョンさん、ありがとうございます。これでさっぱり出来ます」と、多良は喜びを顔に表わした。

「ヨカッタデス、ヨカッタデス。ワタシ、シタニイキマス」とうれしそうに出て行った。

「あゝ、まあ、いいか」と、多良は、溜息をついて鬘を取った。

「俺はどうもこの便器とシャワーが一緒ゆうのは苦手なんじゃ」と独り言を言いながら、鬘の裏に隠した米ドルとパスポートを確認して、便器のフタの上に置いた。

シャワーとはいえ、久し振りだったので、たつぷり時間をかけた。そして、辺りに飛び散った水しぶきをきれいに拭き取り、部屋から出ると、「オー、マイガツ」「ウォー」と、賑やかな声が階下から聞こえてきた。

ドアに鍵をかけ、

「何事じやろうか？」と思いながら、階段を下りて、

「ジョンさん、サンキュー」と、テレビに見入っているジョンの肩をたたいた。

ジョンは振り向いて、

「ド、イタシマシテ」と、微笑を浮かべながら鍵を受け取った。

「何の番組ですか？」多良が尋ねると、

「ビデオです」キャシーが、多良を見上げて言い、すぐにまた目を画面に移した。

画面を見ると、どうやらネパールの暴動のビデオらしい。国際郵便局の前の通りだ。

「これは？」

「さつき、街で取材していたクルーが戻ってきたのです」と、キャシーがテレビの下に座り込んで、テレビにつないだビデオカメラを操作している男の方を向いた。

「あー、じゃあ、今日の暴動ですか？」

「そうです」キャシーは、画面を見ながら答えた。多良にはさして珍しくもなく、関心もなかった。

多良は、

「ジョンさん、ありがとうございます。キャシーさん、私はこれで」と、右手を上げた。

キャシーは立ち上がって、

「ありがとうございます。ジテンにもよろしく言ってください」と右手を差し出した。

多良は、その手を軽く握って、

「じゃあ」と言っただまま、動きを止めた。

キャシーは、

「多良さん？・・・多良さん。痛いです。手が」と、右手を振って、多良の手を振りほどこうとしたが、多良の目はテレビに向けられたままだ。

「多良さん？」キャシーは、多良の顔を下から覗き込むように見上げた。

「多良さん、どうしましたか？」キャシーは、左手で多良の右腕をつかんで揺すった。

「あ、失礼しました。ほら、郷戸いっぴです」と、画面を指差した。

「え！？」キャシーはそう言っていると、振り返って、

「本当です。ゴッドです」そう言って、多良から手を振り解いてテレビの前に向かった。

黒煙と催涙ガスの混じり合う大通りの中を、ゆっくりと緑色のトラックが走っている。トラックの屋根に、赤いタオルで鉢巻をして、足を広げて立つ男が見える。

「郷戸・・・」

郷戸の着た白いコートが風を受け翼のように広がっている。

多良には、その姿が30数年前に見た郷戸の姿とダブった。あの

時も、暴力団員と荒くれ男共の指揮を取って、トラックの屋根に立っていた。

画面は、郷戸の姿から、警官隊とデモ隊の衝突画面に移った。デモ隊と警官隊が激しくぶつかり合っている。中に、「PRESS」という腕章をつけ、ヘルメットをかぶった人間も混じっている。

警官の警棒が、はずみでその男のヘルメットをはじき飛ばした。「PRESS」という腕章をつけたその男が、かがんで、そのヘルメットを拾おうとした時、どこからともなく飛んできたブロック片が男の眉間に当たった。

男の眉間からは、夥^{おびただ}しい血が流れ始めた。男は、それでもビデオカメラを回し続けようとしているが、血が目に入ったのだろう、ヨロヨロとふらつき、その場に前かがみに倒れ込んでしまった。

ここで、画面が大きく揺れた。この光景を撮っていたオーストラリア人カメラマンが助けに行こうとしたのだろう。しかし、その時再びカメラは固定され、倒れた男の姿をとらえている画面の端に白いコートが入り込んできた。

多良は、

「郷戸だ」と、声に出した。

倒れた男は、気配を感じて顔を上げたが、流れ込んだ血で目を開けることが出来ないようだ。ビデオカメラが男の顔をアップでとらえようとした時、その男の顔に赤いタオルが投げかけられた。

「バーン、バーン!!」すぐ近くで催涙弾を発射する音が入り込んできた。

カメラは、向きを変え、その音のした方角に向けられた。

その一瞬前に、倒れた男の口から何か言葉が発せられたようだが、催涙弾の発射音にかき消されて、何を言ったのかは分からなかった。

カメラは、再び郷戸がトラックの屋根に飛び乗るところをとらえ、そして、倒れた男のほうへ向けられた。ビデオカメラは男の顔をアップで映しだした。

「アッ！！神代！！」多良は叫んだ。

「神代だ！！」

「え！？」キャシーは、多良の大きな声にびっくりして振り返り、多良を見た。

「神代だ！！」多良は再び叫ぶと、テレビに向かって足を進めた。

「多良さん、この人知っている人ですか？」キャシーは、多良の背中に向かって声をかけた。

「間違いない。この額の傷はあいつのものだ」多良は思い出した。あの時も暴力団の投げた石で額を割って血を流したことを。修道館大学の誰もが神代の額の傷を尊敬の眼差しで見つめたものだ。彼はいつも学生運動の最前線にいた。そして、デモに参加するたびに額に傷をつけて帰ってきた。

間違いない。修道館大学新聞部部长だった神代だ。

「大学時代の友人です」多良は画面を食い入るように見つめたまま答えた。そして、振り返って、猛然と出口へ向かった。

「どこへ！？」キャシーは大声で多良の背中に向かって声をかけた。

「彼を助けなきゃ！！」多良は振り返りもせずにドアのノブに手をかけた。

ジョンが、大声で、

「ミスター・タラ！！カレハ、ココニイマス！！」と、多良の背中に向けて叫んだ。

黒石楠花（くろしやくなげ）

「なんだって！？」多良^{たら}は、ドアノブを握ったまま、振り返った。
「多良^{たら}さん、彼はここにいます」キャシーも、多良の方へ2、3歩、歩み寄り、嬉しそうに叫んだ。

「ど、どこに？」多良は、やや震えながらも強い口調で言いながら、ドカドカと登山靴を鳴らしながらキャシーのいるところへ戻って来た。

キャシーは、多良の左腕に手を当てながら、

「2階の部屋です。多良さんがシャワーを浴びている間に、テレビクルーが怪我をしている彼を連れ帰って、彼は今、部屋で横になっています」と言い、そして、

「さつき、薬を塗って、安定剤を飲んでもらいましたから、今は眠っていると思います」と続けた。

「そうですか・・・良かった・・・」多良は、全身の筋肉の緊張が一瞬にして解きほどこかれ、肩の力が床にぱらぱらと落ちていく感触を味わった。再び、

「よかったー」と言うと、ソファアに座り込んだ。

キャシーもジョンも、他のクルー達も嬉しそうにその姿を眺めている。

ビクシンが外から帰ってきた。両手にはチャ（ミルク紅茶）のポップホルダーを持ち、

「さあ、ティータイムだよ」とそのポップホルダーを掲げた。
オーストラリアのテレビクルー達は、それぞれ、

「サンキュー」と言いながら、ビクシンに近づき、チアのポップ

を受け取った。

「どうしたんだね。多良さん。疲れているようだね」と、多良の前のテーブルにチャのコップを置いた。

「いやー、疲れたよ。はははっ」と、ビクシンとキャシーの顔を見て、多良は嬉しそうに笑った。

多良はビクシンに向かって、

「それより、こんなところにいていいのか？店の方は？」と、聞いた。

ビクシンは、

「今見てきたところだよ。もう火は消えてるよ。雑貨屋の悪徳オーナーも頭を抱えていたよ」と、やや疲れた表情を見せた。しかし、気を取り直して、

「火が移らなかったのは、ラッキーだったよ。後片付けは、騒ぎが収まってからにするよ」と、多良の隣に座った。

「そうか。手伝うよ」多良は、ビクシンの肩に手を回した。

ビクシンは、

「ありがとう、多良さん。でも大丈夫だよ」と、多良の膝を「ポン」と、一回叩いた。

多良は、目の前に置かれたチャのコップの縁を、右手の親指と人差し指で挟んで口元まで持っていき、「フーッ」とため息と共に息を吹きかけた。

そして、

「会えるかな？」と、キャシーに尋ねた。

キャシーは、フリースの左袖をめくり、時計を見た。

「もう少し眠らせてあげてください」と、優しく首を振った。

「分かりました。まあ、とにかく無事でよかった」多良はそう言うのと、チャを一口飲んで、コップをテーブルに置いた。そして、両手を頭の後に組んで、目を閉じた。口いっぱいに残ったチャの甘さ

を満喫した。

ビクシンが、

「多良さん」と、再び多良の膝に手を置き言った。

「ん？」目を開けて、体を起こしチャのコップを持った。

ビクシンが、声を落として、

「表にカロ・ラリグラス（黒いシャクナゲ）の男達が来てるよ」と、チャを持ったコップを出入り口のほうに向けた。

「カロ・ラリグラスが？」多良は、頭の後ろで組んでいた手を解ほどいて、

「誰が目当てなんじゃ？」と小さく言った。

ビクシンは、

「さあ、ここにいる誰かだね」と、目だけでホテルのロビーを見廻した。

多良は、

「一番候補は、俺つてとこかな」と言うと、再びチャを一口飲み、

「二番は、ビクシン、お前だな」と、ビクシンをいたずらっぽく

見た。

ビクシンは、慌あわてた様子で、

「やめてくれよ。私は何も悪いことしていないよ」と、左手を大きく振った。

それを見た多良は、笑いながら、

「俺だつて悪いことはしてないよ。しかし、まあ、ブラックリストに載せられてるってのは、ありがたいことじゃが」と言った。

キャシーが、

「カロ・ラリグラスって何ですか？」と、多良たらとビクシンを交互に見た。

多良は、

「秘密警察ですよ」と、チラツ、とキャシーを見て言った。

キャシーは、

「ヒミツケイサツ？」と、多良の言葉を繰り返した。

「そう。どこの国にもある組織ですよ」多良はそう言つと、背もたれに背中をあずけた。そして、

「市民の中に紛れ込んで情報を収集して、政府の方針に反対する組織や人間を見張ったり、捕らえたり、時には葬^{ほうむ}つたり・・・ね」と、天井を見上げながらゆっくりと言った。

ビクシンは、多良の

「公式にはそんな組織は存在しないことになってますが、皆、知つてることです」と言つのに続けて、

「マオイストの中にも紛れ^{まぎ}込んでるよ」と、小さな声で言った。

ビクシンが「マオイスト」という言葉を使う時は、自然と声が小さくなるようだ。

多良は、

「当面の敵はマオイストだからな」と、紛れ込むのは当然だ、というような口調で言った。

キャシーは、首を傾^{かし}げながら、

「そんな人達がどうしてこのホテルを？」と、再び、多良とビクシンの顔を交互に見た。

「さあ・・・」多良は、頭の後に両手を回し、「どうしてだろう」と頭の中で呟^{つぶや}いた。

「もし・・・」多良は目を閉じて考えた。「俺を見張っているんだつたら、まずいな・・・、中国から見張られるのなら分かるが、この国では公然の秘密だったはずだが・・・、方針を変えたか・・・、それとも、マオイストとの交渉の札の一枚にするつもりか・・・」

キャシーが、

「多良さん、何を考えているのですか？」

「え？いや」そう言うと、バツ、と、立ち上がり、鬢かつらに手をやり、かたちを整えた。

「ちよつと出かけてくる」ビクシンにそう言うと、ドカドカ、と、早足で出入り口に向かった。

「多良さん、どこへ行くのですか？」キャシーが多良の背中に声をかけると、

多良は、振り返らずに、

「すぐ帰ります」と、ドアを開けて出て行った。

多良は、「俺が目的なら、奴らは俺について来る筈だ」と、考えた。

多良は、「バーン」とドアを勢いよく開き、一度、ドアの前で立ち止まって、空を見上げ、右へ向かって歩き始めた。

男は三人いた。さりげなく車座くるまどになつてしゃがみ込んでいる姿は、その辺にいる暇な男達の姿にしか見えない。

催涙ガスとゴムの焼ける臭いが、まだ、辺りに立ち込め、道にはブロックのかけらや、石が散乱している。

通りに面した土産物屋や雑貨店のオーナーがぼちぼち片付けに帰ってきているようだ。通路が交差するところまで来て右へ曲がる時、チラッ、と後を確認した。男がひとり、ポケットに手をつ込んでトピー帽をかぶった頭を下げ、顔が見えないようにして付いてくるのが見えた。さっきの三人の中のひとりだ。

「ひとりだけ？」多良は、不審に思った。

「とりあえず、付いて来たゆう感じじゃのお」

多良は、そのままゆっくりと歩き、ちょうど、シャッターを上げていた雑貨屋でトイレットペーパーを一巻買い、それを持ってホテルへ引き返した。

トピー帽の男は、顔を伏せたまま、多良とすれ違い王宮方向へ歩いて行った。

「俺が目的でないとすると、誰なんじゃ？」

ホテルの前にしゃがみこんでいたふたりの男は、多良が意外に早く帰ってきたので、一瞬、驚いた様子を見せたが、そのまましゃがみこんだまま何やらボソボソ会話しているふりをしている。

「おや、早かったね」ビクシンは、多良が入って来ると椅子から立ち上がった。

「で、どうだったね？」ビクシンは、いくぶん声を落として聞いた。

「うーん。分からんね。一人は付いて来たけどね。俺がメインじゃないな」と、多良は皆の集まっているホールの中央に向かった。

ビクシンは、不安げな表情を浮かべて、

「じゃあ、誰を？」と、自分自身に問いかえるように呟いた。

多良も、

「さー・・・」と、自分に返事をした。

ゴトツ、と音がして階段の踊り場に神代が姿を現した。

「神代!!」多良は、階段を駆け上がった。

神代陽平は、カーキ色のベストを着て、壁に右手をつき、左手で頭の包帯に手をやって、佇んでいた。

「ん!？」神代は、顔を上げ、微笑む多良の顔を見た。
多良は、

「ワシじゃ――多良^{たら}じゃあ――！」と、神代の両肩に手を置いた。神代も、

「おー、多良ア――！」と、多良の両肩を掴んだ。そして、「何してんだ、お前、こんなところで」と、不思議そうな顔をして多良の顔をまじまじと見つめた。

「お前こそ何しとるんじゃ!?」多良は、神代の肩に置いた手を軽く揺すった。

「いやあ、暴動のビデオを撮ってたら、また、石がここんとこへと、額に手をやった。」

多良は、心配そうな表情で、包帯を見た。

「もう、大丈夫か?」

神代は、

「いや、まだ、ちょっとズキズキする」と、再び、左手を包帯の上に乗せた。

キャシーが、

「まだ、静かにしててください」と言いながら、階段を上がってきた。

多良は、

「あ、神代、こちらはキャシーさん。手当をしてくれた人だ」と、キャシーを紹介した。

神代は、

「あ、ありがとうございます。あなたが私を?」と、尋ねた。

キャシーは、階段下を見て、

「いえ、あそこから連れ帰ったのは」と、ホールでビデオ機材をケースに収めている男達のほうを向いた。

その中のひとりが、

「ハロー、マイト。アーユーOK?」と、明るく手を上げた。

「たまたま、現場に居合わせたオーストラリアのテレビクルーの

皆さんがお前を連れ帰ってくれたんじゃ」

多良は、神代の体を支えながら、階段を下りた。

「しかし、久し振りじゃのお」多良はすっかり学生時代の言葉遣いになっていた。

「おお、何年ぶりかなあ」神代は、そう言いながら、オーストラリアのテレビ局のクルー達が集まっているテーブルのところに行き、「サンキュー・ベリーマッチ。アイ・アプリシエイトウ・ユー。ユー・セイブドウ・マイライフ。ありがとうございます。お陰さまで命拾いしました」と、頭を下げた。

ジョンが、

「オナジ、ジャーナリスト、オタガイサマデス」と、男達に代わって言った。男達も、神代の元気な姿を見て、うれしそうに笑っている。

キャシーは、

「塗り薬を調合してきます」と、ふたりに言うと、階段を上がっていった。

神代は、立ち上がって、

「ありがとうございます。あの、あなたは？」と、問いかけた。

キャシーは、階段の途中で振り返り、

「後からお話します。まず、多良さんとお話してください」と、にこりと笑ってウィンクした。

神代は、

「ありがとうございます」と、深くお辞儀をした。

キャシーは、

「じゃあ、後で、薬を替えましょうね」と、少し、右足を引きずりながら階段を上がっていった。

神代は、振り返って、

「あの人は？」と、多良に尋ねた。

「キャシー長谷川さんといって、医療ボランティアとして、これから田舎の村へ行くそうだ」多良は、神代が近くの椅子に腰掛ける時、神代の腕に手を添えた。

「村？どこの？」

「さー、それは聞いてないが」多良はそう言つと、神代が、テーブルの上に広げられた地図に目をやるのを見て、

「そして、この人達は、オーストラリアのテレビ局の人達で、雪男の番組制作のためにネパールに来とられるんじゃない」と言った。

神代は、

「へー、雪男。面白そうだな」と、地図を覗き込んだ。

「それより、卒業以来じゃが、相変わらずじゃのお」多良は神代の肩に手を回した。

そして、

「一体こんなところで何をしとるんじゃない？」と、神代に聞いた。

「俺か？俺は、ある事件を追っかけてるんだ」神代は、声を潜めた。

「事件？」多良は、すぐに、2001年に王宮内で起きた血なまぐさい事件を思い出した。

「ああ、例の王宮の事件さ」

この時多良は、カロ・ラリグラスが見張っている人物は神代だと確信した。

神代は、

「あの事件の真相が知りたいんだ」と、昔のままの眼をして多良を見つめた。

多良は、眼を落として、

「知ってどうするつもりじゃー？」と、溜息と共^{ためいき}に言葉を吐き出

した。

「場合によっては独裁体制をひっくり返せるだろ」神代は、そう言っと、口を一字に結んだ。

多良は、

「それは、マオイストに手を貸すようなもんじゃ」と、神代の顔を見た。

「そうかも知れない。しかし、それもひとつの過程だ」多良は断定的に言った。

「そうかのお」と、多良が言ったのが聞こえなかったかのように、神代は続けた。

「どうやら、あの事件を目撃した人物がいるらしい。その人物にインタビューをしたいんだ」

「あいつに？」多良は眉を動かして再び神代の顔を見た。

神代は、

「ん？知っているのか？」と、多良の膝に手を置いた。

「ああ」多良は、躊躇しながら答えた。

神代は、それを聞いて、パツ、と顔を赤らめた。

「紹介してくれ。彼女を」

「彼女？誰のことじゃ？」多良は、首をひねって神代を見た。

神代も、

「誰って、・・・王宮内で働いていた召使の女のこと・・・じゃないのか？」と、途切れ途切れに言った。

多良は、顔の前で大きく手を振り、

「違う、違う」と言った。

「じゃあ、誰なんだ？」神代は空振りしたバツターが肩を落とすように右肘を右膝の上に落とした。

「神代、お前、さっき会ったじゃないか」多良は、神代は気が付かなかったのかと思った。

「会った？俺が？」神代には、多良が誰のことを言っているのか

分からなかった。

「誰のことを言ってるんだ」

「郷戸ごうこのことじゃ」

「ゴウド・・・」神代は口の中で呟つぶやいた。そして、

「アッ、思い出した。そうか、あいつだったのか。あいつ、さっき俺の顔にタオルを投げつけて、お前か、って言ったんだ」と、右膝を叩いた。

「郷戸ごうこはお前のこと覚えてたのか」多良は驚いた。

神代は、右の掌てのひらを広げて、親指、人差し指、中指、と順番に折った。

「3回目だぜ。あいつに会ったのは。1回目は新宿の時。2回目は、あの修道館での抗争の時。そして、今日だ」そう言つと右手を握った。

神代は多良の顔を見た。

「あいつ、なんだってこんなところにいるんだ？」

多良は右手で髪の毛をなで、

「さあ、ワシにもわからんが」と言つと、その手を神代の顔の前にやり、親指を立て、

「今じゃ盗賊の親玉らしい」と、言った。

神代は、眉間にシワを寄せながら、

「しかし、郷戸がなぜあの時の目撃者だと・・・」と、首をひねった。

それを見た多良は、

「郷戸は、国王の親衛隊の武術教官だったらしいんじゃない」と、ビクシンからの情報を伝えた。

「何でまた武術教官なんかに」神代は首をひねった。

「そこまではワシにも分からん。どこから流れてきたのか」それは、多良も知りたかった。

「あの剣の天才といわれ、三島に誘われて楯の会に入つたあの男がな」

神代は眼を閉じて腕組みをした。

「東部方面総監部突入に参加できなかったことが堪え、暴力団の用心棒に身を落とし・・・」そのことは修道館での抗争後、学生たちの間で、しばらくの間話題になっていた。そして、感慨深そうな口調で、

「そしてまた再び、今日、強盗団のボスとして俺の前に現れたつてことか」と、誰に言うでもなく呟いた。

「噂では、政府は郷戸には手出ししないらしい。毛沢東派は逆に抱き込もうとしているらしいが」多良がそう言うと、神代は、

「おもしろいな」と、閉じていた眼を開いた。

「国王派にとっては邪魔な男つてことだろう？」神代は椅子の背に体を預けたまま多良を見た。

多良も、

「ああ、そして、同時に反国王派にとっての隠弾でもある」と、同じように体を背もたれに預けた。

神代は、

「なるほど。こいつは、召使の女より郷戸に接触した方がおもしろいな」そう言うと、両手を頭の後で組んだ。

老人

神代こうしろがそう言うのを聞くと、多良たらは、

「神代、お前、他人の身を案じるより自分のことを考えろ」と、体を起こして言った。

神代は、

「どういうことだ？」と、腕を下ろして多良の顔を見た。

「表にカロ・ラリグラスの男達が張つとる。あいつらはお前をみ見張つとるんじゃ」多良は顔を神代に近づけて言った。

「俺を？」

「そうじゃ。こそこそ聞き廻つとるんで目をつけられたんじゃ」と、神代の行動を見ていたかのように言うのと、

「危ないぞ」と、付け加えた。それを聞いた神代は、いくぶん顔を強張こわばらせ、

「ほんとかよ」と額の包帯に手を当てた。

多良は真剣な顔をして神代を見た。

「慎重に行動せえよ」

神代も、顔を引き締めた。

「分かった。ありがとう」

「ところで多良。お前はこんなところで何してるんだ？」

「見りゃわかるじやろ」多良は、右足を上げて登山靴を見せた。

「山登りじゃ」そう言うのと、左足も上げて、両足首から先をクルクルと回して履いている傷だらけの登山靴を見せた。

それを見た神代は、

「相変わらずだな、お前も。ハハハッ」と笑い声を上げた。

「ところで、誰かに会うか？」多良は学生時代の友人達のことを聞いた。

「ああ、いつだったかな、もうずいぶん前だ。咲姫ちゃんに会ったよ」神代は、広島のパ和公園で咲姫に会ったことを思い出した。「なんでも、学生時代に下宿していた叔父おじさんの葬儀があったとかで広島に行つてたんだ」神代は、傷がまだ痛むのか、再び右手を包帯の巻かれた額に当てた。

「へー。で、お前はそこで何を？」

多良の問いかけに、

「俺は、平和公園の慰霊碑にカストロが献花するつて言うんで、待つてたんだ」と、多良を見た。そして、微笑を浮かべて、

「ゲバラの写真を持つてな」と続けた。

多良は不思議そうな顔をした。

「ゲバラの写真を持つて？」

「そうさ。俺は、カストロはゲバラと一緒に献花したいだろうと思つてな」

多良は、興味深そうに、

「へー、で？」と、話の続きを促した。うなが

神代は愉快そうに、

「ひつ捕つかまつちまつた」と、笑つた。

「ははは。お前らしいのお」多良も、神代の笑い声にあわせて声を出して笑つた。

「しかし、カストロは、実際、ゲバラと一緒に献花したかつたんじゃないかな。俺がゲバラの写真を掲げて声をかけたら、こっちに向かつて来ようとしたからな」

「ほー」

神代は、背中を伸ばして、

「しかし、カストロは元気だな。こう、背筋がピンと伸びて。あれなら、もう十年くらいはキューバは安泰だな」と言った。

「資本家どもと共に私は地獄に落ち、マルクスやエンゲルス、レニンに相まみえるだろう。地獄の熱さなど、実現することのない

理想を持ち続けた苦痛に較べれば何でもない」神代は、眼を閉じたまま一気に言った。

「何じゃ、そりゃ？」多良は熱があるのか、神代の赤い顔を見た。「いや、熱のせいではないかもしれない。この男は、俺たちがどこかに置いてきたものを、今も持っているのかもしれない」多良はそう思った。

「カストロの言葉だ。詩人だよな彼は。革命家は詩人であるべきだと俺は思うよ。詩心のない革命家は単なる独裁者だよな」神代はそう言う就多良の目を見つめた。その眼は充血して赤くなっていた。

「何のお話ですか」キャシーが階段を下りてきた。

「いやあ、昔話ですよ」神代はそう言ってニコリと笑った。

キャシーは、テーブルの上に樹脂製のコップと救急セットを置いた。コップの中には、緑色のペースト状のものが入っている。

「さあ、薬を塗り替えましょう」キャシーはそう言う、神代の包帯をほどき始めた。

キャシーは、神代の傷口に薬を塗りながら、

「私は、来週から、彼らとナムチェに行きます」と、多良に話しかけた。

多良は、

「彼らと？」と、地図を前に打ち合わせをしているオーストラリアのテレビクルー達のほうを見た。

「はい。１０年前にイエティを見た現場を案内して欲しいって頼まれたのです」と、多良を見てニコリと微笑んだ。

多良は、髪に手をやって、眼を伏せた。

そして、キャシーは、

「ちょうど私も、ナムチェの近くの村に行く予定でしたから」と

新しい包帯を巻きながら言った。

多良は、鬘かつらの頭を搔きながら、

「実は、・・・私もそっち方面に行きます」と、言った。

「オウ、いつですか？」キャシーは包帯を巻く手を止めて多良を見た。

多良は、

「えーと」と、一呼吸置いて、

「来週はパタンで用事があるので、それを片付けてから向かいます」と言った。

「じゃあ、ナムチエで会えますね」そう言うキャシーの声は本当に嬉しそうだった。

多良は、

「その村にはいつ頃まで？」と、キャシーが鮮やかな手つきで包帯を巻く手を見ながら聞いた。

キャシーは、

「クリスマスには一度、ここに帰ってきます。一ヶ月ほどカトマンズの病院でネパール人医師の研修をする予定です。それに、来年には、友達が日本からやってくるのです」と、嬉しそうに言った。

そのキャシーの友人が修道館大学時代の友人であった木野花咲姫このはなさくひめ

と神田龍一かみたちゅういちであることなど 多良も神代も、この時、思いもよらなかった。

神代しんしろは、ふたりの会話を聞きながら、眼を閉じて、「どうしたら、郷戸ごうこに会えるだろうか」と考えていた。

「さあ、これで大丈夫です」キャシーは神代の肩に手を置いて優しく言った。

神代は、両手を両膝ひざの上で揃え、

「ありがとうございます」と、頭を下げた。

キャシーは、

「包帯はしばらく取らないでください。それと、しばらくは激しい運動は控えてください」と念を押すように言った。

「分かりました。ありがとうございます」神代はそう言うとうなずいた。

そして、キャシーは、多良に、

「多良さん、ゴッドはどこに住んでいるのでしょうか?」と、言いながら、テーブルを挟んだ多良達の前の椅子に座った。

「さー、分かりませんね」多良は首をひねった。そして、カウンターの中で受付のネパール人と会話しているビクシンを手招きして呼んだ。

「なんだね多良さん」ビクシンは多良の左横に座った。

「さっきの郷戸、いや、ゴッドはどこに住んでいるんだ?」

ビクシンは、

「私も知らないよ。ただ、・・・」と、一呼吸置いた。

「ただ?」多良は先を促した。

「今日みたいな日に現れるから、カトマンズ盆地の中のどこかにいるのは確かだね」

多良は、

「あんな目立つ奴の居場所が分からないってのも妙だな」と腕を組んだ。

それを聞いたビクシンは、笑みを浮かべながら、

「ふふ、誰もしゃべったりしないよ」と言った。

「なぜ?」神代は、身を乗り出して多良の左に座っているビクシンに尋ねた。

「ゴッドだからね」ビクシンの言い方は自慢げだった。

「さてと」多良たらはそう言つと、立ち上がり、

「ワシはちよつと片付けなきゃいけない用があるんじゃ」そう言つてテーブルの横に置いていたザックを手に取つた。

神代かんだいも立ち上がり、

「そうか」と、残念そうな表情を浮かべた。

多良は、

「お前の宿はどこなんじゃ？」と、神代に尋ねた。

「カトマンズゲストハウスだが、今日からこつちに引越すよ」

神代は上の階を指差した。

「じゃあ、当然？」

「ああ、そのつもりだ」神代はそう答えると、

「お前は？」と聞いた。

「ワシはパタンの・・・知り合いのところにいる。連絡は取れんから、こつちから連絡を入れる」多良はそう言つと右手を差し出し、

「じゃあ、またな」と、学生時代と同じように言つと、神代はその手を握り、

「じゃあ、気をつけて」と応えた。

ふたりの会話を聞いて、キャシーとジョンが近づいてきた。

キャシーは、

「ありがとうございます。ナムチェで会えるといいですね」と、名残惜なごりおしそうな顔をした。

多良も、

「そうですね」と言いながら、ふたりと握手を交わした。

キャシーは、小さな声で、

「あの件は誰にも言いませんから」と、真面目な顔で言つと、サ

ラッ、と、自分の髪を指で梳いた。

多良は、苦笑いしながら、

「お願いします」と、小さな声で言った。

キャシーと神代は、多良と一緒にドアに向かった。彼らの後から、ジヨンとビクシンも続いた。

多良がドアを開くと、ちょうど外から誰かが、ドアハンドルに手をかけようとしているところだった。

そこには、白髪の老人が杖を手に立っていた。老人は、80を過ぎていたのだろうか。

「ワオウ、おじ様!!!」キャシーは大きな声を出し、杖を持った老人の手に自分の両手を重ねた。

「おお、キャシー。お出かけかね？」年のわりには、大きな、しっかりとした口調であった。

多良は、その深い年輪を刻んだ顔に惹き付けられた。

キャシーは、

「いえ、こちらの方のお見送りです」そう多良を見て言った。

白髪の老人は、

「日本の方ですか？」と、多良の顔を見て聞いた。

多良は、

「はい」短く答えた。

キャシーが、

「こちらは多良さんです。ジテンから薬草を預かって、届けて下さったのです」と言うのを聞くと、老人は、嬉しそうに、

「おお、ジテンから。それはそれは、ありがとうございました」と、頭を下げた。

キャシーが、

「多良さん、こちらは・・・」と、紹介しようとする前に、老人は、自ら、

「江下^{えげ}です。江下寛^{えげかんいち}と申します」と名乗った。

「私の父の友人です」キャシーは付け加えた。

「お会いしてすぐに失礼ですが、私はこれから行くところがありますので、これで失礼させていただきます」多良は、江下^{えげ}に軽く頭を下げた。

江下も、持っている杖の頭に両手を被せて、

「ああ、これはお引止めしました。ではお氣をつけて」と、頭を下げた。

多良は、振り返って、神代^{いづしろ}に、

「じゃあ、ここで」と手を上げた。

神代も、

「氣をつけてな」と手を上げた。

キャシーは、

「シー・ユー多良さん」と、再び手を差し出し握手を求めた。

ジョンも、オーストラリア訛りの英語で、

「セ、ヤ、マイト（SEE YOU MATE）」と言いながら手を差し出した。

ビクシンは、名残惜^{なごりお}しそうに、

「ナマステ、多良さん。また、食べに来てよ」と言った。

多良は、ザックを背中では一回揺すって整え、まだ、ゴムの焼ける匂いの漂う道を早足で歩き始めた。「ザッ、ザッ」と、いつもより荒い砂利を踏む音が登山靴の下から聞こえてくる。

行く先を見上げると、赤レンガの建物と建物の間から見える空には黒煙が漂っていた。

バグマティ川

この年（2005年）の2月、ギャネンドラ国王は、王室ネパール軍（国軍）、ネパール警察、武装警察隊などの武力機構を掌握し、全国に「国家非常事態宣言」を発令した。

インターネットを含む通信回線は切断され、同時に主要政党のリーダー達は国軍の監視下におかれた。発言、集会、移動の自由は停止され、国王はネパール全土を監獄にした。

多良と神代、そしてキャシーがカトマンズの安宿で出会ったこの頃には、各政党のリーダーとマオイストのリーダー、プラチャンダはインドのニューデリーで秘密会合を開いた。そして、その会合で、彼らは、国王から政権奪取することで合意した。

国王の強権支配は、国王の目論見に反して、議会政党と共産党毛沢東派の接近を促し、王制崩壊へと進むきっかけとなったのだ。

今日の、国王側と一般民衆を含むマオイストとそのシンパ（同調者）の大規模な衝突は久しぶりのものだった。多良には政治活動に関わりあう気持ちは無かったが、時代の大きなうねりは山津波のようにつきすすんで迫っていた。

いつもなら多くのネパール人でごった返すアサンの市場も今日は閑散としている。商店の立ち並ぶ通りでは、店主達が店の状況を確認に来て、淡々と開店の準備をしている。庶民の生活は太陽の動きと同じように止まることはない。

その通りを抜けて旧王宮広場へ出た。その一角にはガルーダ神の石像がある。ガルーダは顔はカラスで体は人間。その背中には大きな翼がある。ヒンズーの3大神様のひとつ、ヴィシュヌ神の乗り物だ。多良はその巨大な石像を見るとキキヤを思い出す。

「そういえばキキヤの帰りがおそいな」多良は目の端でガルーダの石造を見ながら狭い商店街に入った。道の両側にギッシリと詰まった建物に挟まれた上空の黒煙は風になびいている。鼻をつくゴムの焼けた臭いは先ほどよりも弱くなっていたが、やや下り坂の道を30分も歩くと今度はドブ川の臭いが多良の鼻についてきた。バグマティ川だ。

ヒンズー教徒の聖なる河、ガンジス河の支流だ。そのバグマティ川は、^{よど}澱みながら、1000年先にも大地に還らぬ人間社会の残滓^{ざんし}を浮かべながら流れている。上空に浮かぶ黒煙もまた、バグマティ川の影であるかのようにゆっくりと流れている。

バグマティ川に架かる橋を渡りきった時、後方からトラックのエンジン音と共にいつもの合図と同じリズムでクラクションがなった。多良が振り向くと、トラックの荷台の四方を囲った蔽い^{おほい}から頭ひとつ覗^{のぞ}かした男が多良を見て微笑^{ほほえ}んだ。

「キキヤー!!」

トラックは「ギッ、ギーッ」という大きな音と白い砂塵を舞い上げて多良のそばで停まった。同時に、トラックの男は荷台を囲んだ蔽いに上半身を乗せて多良に向かって手を差し伸べた。多良がその手を掴むとトラックは発車し、同時に多良の体も舞い上がって覆いの内側に引き込まれ、荷台の中で白いシャツを着た巨大な男が多良

を抱きとめた。

「おーっと。キキヤ、久し振りじゃのう。元気か？」

そう言つと大男の体を点検するかのようになから下まで見た。

「ナマスカル。おとうさん。ただいま帰りました」

大男は多良の前にひざまずき合掌して頭を下げた。

「そうか。そうか。元気でよかった。遅いので心配しとつたんじや」

多良は大男の盛り上がった左肩に手を置いて2、3度、軽く叩いた。

「申し訳ありません、おとうさん」

大男は優しい表情を浮かべて多良の顔を見上げた。

「お父さんは止めい、キキヤ。多良でいいといつも言つとるじやろつが」

「そうでした。おとう・・・、多良さん」

キキヤと呼ばれたその大男は、につこりと笑いながら、大きな右手を、そり上げた頭に置いた。

「で、どうだった？大変じゃつたらう？」

多良も「どつこいしょ」と声に出し荷台に座り込みあぐら胡坐をかき、キキヤの顔を見た。

「はい、少し苦労しました」

キキヤも多良の前で胡坐をかいた。

多良は、腕組みをして、うなづ頷きながら

「じやろつう。その連絡は来てはいたが」と、キキヤの苦労の大きさが分かるだけに、自分にも言い聞かせるようにつぶやいた。

キキヤは、

「宮島ではチャイナの連中とホームツカン（宝物館）で鉢合わせしました」と、笑みを浮かべながら言った。

多良は驚いた表情を浮かべ、

「おお、そうじゃったか。まさに危機一髪じゃのう」と、さらに大きく頷き、すぐに、

「宝物館からは邪魔も入らずすんなりと手に入れることができたのか？」と続けた。

「はい。ポリスの邪魔はありましたが」キキヤは落ち着いた声色で答えた。

多良は眉を寄せながら、

「まさか、その警官を・・・」と、そこまで言うと言葉を切った。キキヤは、

「大丈夫です。誰も傷つけてはいません」と、多良の心配を見越したように優しく言った。そして、その時のことを思い出し、

「ポリスともうひとり武術家がいまして」と付け加えた。

「武術家？」多良は小首をかしげた。

「ちょうど、おとうさん・・・多良さんくらいの年の人でしたが、あいつは、若い時は強かったと思います」キキヤは顔を上げ、上空の青い空のむこうを見るような目をした。

「へへえ」

多良には、その男が、修道館大学で暴力団と闘った神田かみただとは思いつかなかった。

キキヤはすぐに顔を多良の方に向け、

「でも、台風にまぎれて逃げる事が出来ました」と言った。多良は、

「そうか、そうか」と、この大男、キキヤがこの仕事にふさわし

い男であつたことを、改めて思った。

「それで、宮島からは？」

多良は予定通りに事態が進んだのか気になった。

キキヤは、順を追って説明を始めた。

「予定通りエタジマ（江田島）沖で柏木^{かしわぎ}さんが船を出してくれていました」

多良はそれを聞くと安心したように、

「そうか。彼女の船は速いからな。ありがたいことじゃ。それに彼女は村上水軍の末裔だし、彼女のネットワークにのれば海の道はノンストップだからな」と、ここでも彼女に全ての状況を話した自分の判断が正しかったと思った。

キキヤはさらに、

「で、その後も、キキ IPPATSU（危機一髪）でマウント・フジから2本目を手に入れることが出来ました。その時も彼女が私を駿河湾で拾ってくれました」と続けた。

多良は、

「そうか。彼女にも感謝せんといけんな」

そう言つと、

「しかし、鉄の棒の一本は富士山の頂上にあることは分かつておつたが、台風で姿を現すとはのう・・・これも神様のお蔭^{かげ}じやろうのう」と感慨深げに続けた。

「そう思います。マウント・フジの頂上でもキキ IPPATSU（危機一髪）でした。もう少し遅ければ、チャイナの連中に先を越される^{ほこ}ところでした」

キキヤはそう言いながら、腰に巻いた布を解き始めた。

多良は、キキヤの手元を見ながら、

「ははは、危機一髪という言葉覚えてのう」と笑った。

キキヤは、

「はい」と返事しながら、大きな両手の上の布に乗せたままの2本の鉄の棒を多良の方へ差し出した。

多良は、

「うーん。これか」と言いながら、両手でそれぞれの鉄の棒を持ち、目の前で向きを変えながら繁々と眺めた。

そして、

「これが多くの人間の力を集結させる力を持っているというのは本当だろうか？」と心の中で思い、

「分かんない」と、口に出した。

キキヤは、

「え？」と不思議そうな顔をしたが、多良はそれには答えず、

「様々な民族の力をひとつにまとめるには共通の何かが必要なのは確かだが・・・しかし逆に、民族の集結が都合の悪い奴等がいることも事実だしな」と再び心の中で思った。

そして、

「キキヤ。これはお前が大事に持っておけよ」と、その2本の鉄の棒をキキヤの両手の上に広げられた布の上に戻した。

キキヤは、その2本の鉄の棒を布で大事そうにくるみながら、

「はい。命に代えて守ります」と、その多良の言葉にはつきりとした口調で応えた。

多良は、話題を変えるように、

「しかし、このトラックへはどうして？」とやや大きい声で尋ねた。

「ちょうど国境を抜けたところで彼に」と、キキヤはそう言うと言った。運転席のほうを見た。

多良もキキヤの視線の先の薄汚れたガラスの向こうの運転手に視線をやった。

そして、再びキキヤの方へ向き直り、

「そうか。それはちょうど良かったのう」とうれしそうに言った。
キキヤも、

「はい。このトラックも予定より早く国境を抜けることができた
ようです」と多良の笑顔に応えた。

「そうじゃろう。ワシも、もう一週間はかかると思ってた。ま、
これも危機一髪じゃったのお」

多良はそう言うときキヤの大きなひざに手を置いて「ははは」と
声に出して笑った。

トラックは、ギヤをガツシンと鳴らしてシフトダウンし、ブォン
！！と一塊の黒煙を吐き出して、唸りながらパタンの街に入ってい
った。

メール

12月の半ばを過ぎた頃、かみた神田は木野花咲姫きのはなさきから再びメールを受け取った。

宮島観光推進協会 神田様

大晦日や初詣の準備は順調に進んでいますか？ 宮島は、わたしがお仕えしている八頭神社様はつとうじんじやと違って、多くの観光客をお迎えになるのでいろいろとご苦労もおありだと思います。でも、秋の台風以来の疲れもたまっていると思いますので、あまり無理はされませんように。

「確かに最近ちょっと疲れ気味かな」神田は頭をグリ、グリと左右に傾けた。

宮島の大晦日おおみそかには鎮火祭という大きなイベントがあるようですが、富士吉田にも「吉田の火祭り」と呼ばれる鎮火祭があります。八頭はつとう神社様近くの北口本宮富士浅間神社様の秋祭りです。お祭りでは街中が炎で被い尽されるほどの松明たいまつが焚たかれます。

ところで、ネパールのキャシーからメールが来ました。驚かないで下さい。キャシーは、郷戸さんごうこと会ったようです。

「エッ！！ 郷戸！！」神田は「郷戸」という文字が目飛び込んだ瞬間、顔をモニターに近づけた。

キャシーは、若い頃、バンコクでトラブルに巻き込まれ、その時郷戸さんに助けられたことがあるのだそうです。郷戸さんは「ゴウ

ド」と名乗ったようですが、その頃のキャシーは日本語がまだ十分理解出来ず、「ゴッド」と聞き間違え、自らを「神」^{ゴッド}と名乗る不遜な日本人として強く印象に残ったようです。そして、ネパールでも再び郷戸さんに救われたというのです。

「救われた？　どういうことだろう？　何故、郷戸がネパールに？」

これで分かりました。キャシーが剣道や拳法、空手に関心を持つ理由が。郷戸や山口さんの影響です。

そして、まだあるのです。その時、キャシーと一緒にいた人が、日本人で、ミスター・タラという人だそうです。ミスター・タラ、どう思いますか？

「タラ？　タラ！　まさか修道館大学山岳部の？」

「ミスター・タラ」ってひょっとしてあの時の多良さんではないでしょうか。そんな気がします。

「多良さんは確かにヒマラヤに縁のある人だが・・・拳法部の山口さんもネパールにいた。どうして彼らがネパールで次々と・・・」
神田は「出会うのだろう」という言葉を飲み込んだ。

この時、神田も咲姫^{さき}も、新聞部部长だった神代^{かみしろ}までもがネパールにいて、キャシーや多良と知己になっていることなど想像だにできなかった。

わたしは来年にはネパールへ行くつもりです。行かなければならないと強く感じるのです。木野花咲姫^{きののはなさき}としてでなく、木野花咲姫^{きののはなさくひめ}として。

神田君も一緒に出来たら、と思います。山口さんもきっと喜ばれると思います。

咲姫のこの言葉を聞くと、神田は右手でみぞおちあたりのシャツを掴んだ。^{つか}「山口さん、ネパールのどこに眠っているのか・・・。それに、何故ネパールで？ 宝物館に保管されていた「鉄の棒」を、大男が盗み出して以来、俺の周りには次々とおかしなことが起きる」

以前お話したように、熱田神宮様にお祀り^{まつ}されていた「鉄の棒」は明治天皇様の勅命^{ちよくめい}を受けた、時の内閣総理大臣、山県有朋^{やまがたありとも}の蜜命により、エルトゥール号の乗組員をオスマントルコへ送り返す途中、寄港地のインドからネパールへと持ち込まれました。

私は、残りの2本の鉄の棒は、神田君が出会った大男によって、すでにネパール国内に持ち込まれているものと思います。

でも、これまでの経緯から推測しても、中国は三本の鉄の棒が揃うことを望んでいないようです。

「確かに、彼らは日本にある鉄の棒を力づくで奪おうとした。明らかに中国という国家が絡んでいるとは思えない。どうして？」

宮島には、観光客で賑わう表参道の1本内側に「町屋通り」と呼ばれる通りがある。土産物屋^{みやげものや}が建ち並ぶ「表参道」と違って、「町屋通り」は、昔ながらの風情^{ふうせい}が残る旧家が並び、今は宮島の下町散策コースとして人気がある。今でこそ、観光客の姿も見かけられるようになったが、以前は、食料品店や衣料品店などが並ぶ宮島島民の生活通りであった。

神田の家は、その通りの中ほどにある。通りに面した1階は、以前は父親の作業場になっていた。父親は宮島細工みやじまざいくの職人であったが、数年前に亡くなり、今では作業場の半分は普段使わない日用品を保管する納戸なんどになっている。隅のシートの下には父親の使っていた木を削るけず「ろくろ」と年季の入った木製の道具箱が3箱積み上げられている。その道具箱の中には何十種類ものカンナやノミが入っている。

父親は生真面目きまじめな性格で、1日の終りには必ずその日使った道具の刃を研といでいた。

神田は幼い頃、父親の仕事が「刃研ぎ」で終わることが分かるようになる、父親のそばに行き座り込んでその作業をじっと見ていた。

「この刃はのー、出雲いずもの鋼はがねじゃ。出雲の鉄は日本一じゃけえのー」と、神田が父親の近くに座る度たびに自慢げに言っていたことを今日はふと思い出した。

作業場を通り抜けると奥にある台所に声をかけて二階に上がった。そして、書斎の机の上のパソコンのスイッチを入れ、そのまま窓に向かい、窓越しにライトアップされた朱あけの大鳥居を見、窓を10cmほど開けて冷たい風を部屋に入れた。ジャージの上下に着替え、綿入りの半纏はんてんを羽織るとパソコンの前のチェアに座った。

神田は事務所から転送したメールを開き、窓からの風で顔を冷やしながら、咲姫からのメールを読み返した。

「一体どうということなんだろう？」神田の顔の火照りほては大野灘の潮気を含んだ冷たい風でも治まらなかった。

「大男や中国、彼らは何の目的で鉄の棒を手に入れようとしてい

るのだろうか?」

咲姫のメールの最後はこう結んであった。

「神田君、このままで行くと、ネパールで大変なことが起きる気がします」

神田は、これまでの咲姫の予感はずべて当たっていることを思った。顔の火照りは一気に引いた。

隠家（あじと）

カトマンズ盆地の北の外れの畑の中を龍が這うように伸びる道の先に十数戸のレンガ造りの家が固まって建っている。どの家も廃屋のように見えるが、屋上には洗濯物が干してあるのでかうじて人が住んでいるのが分かる。

郷戸一星の隠家は、その肩を寄せ合うようにして建ち並ぶレンガ造りの家と家の狭い路地を鍵型に何度か曲がり、さらに鉄の門扉で囲まれた家の庭先を通り抜けた先にある。

3階建てのそのレンガ造りの建物の屋上には小さな小屋が建ち、その小屋の中で3人の若い男達が暮らしている。彼らの仕事は、日が一週間に目を配ることだけだ。

その建物を取り囲むようにして建っている家には郷戸の部下達の家族や親戚が住んでいる。30年前、郷戸がタイのチェンマイに暮らした時もそうだった。玉木は「血のつながったもんしか信用出来まへんで、郷戸はん」と、メコンウィスキーを飲みながら何度も口にしていた。

郷戸はソファアに腰をかけ、テーブルの上に置いてあるエベレストウィスキーのビンを右手で持ち上げ、左手に持ったコップに半分ほど注ぎ、グビツ、と一気に喉に注ぎ込んだ。郷戸の前では、5人の男達が薄汚れたカーペットに座り込んでダルバート（カレー）を手でつまんでは口に運んでいたが、その様子を見て、お互いに顔を見合わせた。男達は最近の郷戸は何かおかしいと感じていた。

「俺はあの時のままなのか。メコンウィスキーがエベレストウイ

スキーに変わっただけか」そう思うとなんだか可笑しくなり、「フッ」と、熱い息と一緒に小さな笑いがこぼれた。

「ゴッド、どうかしたのでですか？」男達の一人が右手の指先についている米粒を舐めるのをやめて聞いた。

「いや、なんでもない」郷戸はそう言うと、再びコップにヒマラヤウイスキーを注ぎ、ソファアから立ち上がった。そのまま、男達の間を通り抜け、屋上へ向かった。郷戸の後姿を見送ると男達は再び顔を見合わせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3641d/>

蒼き神々の行方

2011年6月6日20時59分発行